
スフィンクスゲーム～クルディスタンから来たニート～

YOUKAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スフィングスゲーム〜クルディスタンから来た二ト〜

【Nコード】

N2104R

【作者名】

YOKKAN

【あらすじ】

某新人賞1次通過の作品です。

この戦争はまさしく、口撃力と攻撃力の戦いであった。念願の京都大学に合格した織河七海は入学式の日、考古学部の一部室を訪れる。そこで出会ったのは十崎という掴みどころの無い男だった。七海は首尾よく入部したものの、先輩からのネチネチとしたイジメに悩まされる。

その窮地から七海を救い出してくれたのが十崎とその仲間のならず者にしか見えない九城という男だった。

交友を深める3人を余所に、イラク北部からウルと呼ばれる女が来日する。目的は、ウルがボランティアとして滞在する村の者が以前贈った遺物を

十崎から買い取ること。十崎はかつて、イラクで冥府からの声と呼ばれた、暗殺者だった。違法な遺物の取引に手を染めている

彼を見張るために米軍に雇われ、派遣されていたのがイラクで狂犬と恐れられた傭兵、九城であり、ウルの来訪を期に全てが七海に露見する。

プロローグ（前書き）

某新人賞、2次落ちの長編です。大学で、考古学を志す少女が巻き込まれる、ガン・アクション小説です。次々と起こる思いもよらぬ展開と、キャラの魅力に自信があります。是非ご拝読を。休日以外ほぼ毎日更新します。

ブローグ

人生は悲しみに満ちている。

がんばっても、がんばっても、思い通りにいかない事でいっぱいだ。

そうすれば、楽になる事がわかっていながら、私達は限られた選択肢の中から、

自分で選んだ小径を、引き返せずにいる。

そうして、数えきれないくらい転んでも、傷ついても、私達はあがき続けるのだ。

望む答えを得られないにせよ。

せめて自分が納得できるまで。

この物語は、その証左だ。

私は、古ぼけた画用紙をめくり、拙ない、絵と文章に眼を落とす。

そこには、涙を浮かべた河童が、ゴミ捨て場から星空を見上げる姿が描かれていた。

かつぱさんは、なみだをひとつぶながしました。
「ごめんね」

かつぱさんは、お星様をみあげてつぶやきました。

「ぼく、なにかしっぱいしちゃったみたい。ぼくがもつとかしこければ、みんなうまくいったのに」

ぼくさえ、かしこかったらなあ……

「おい!？」

大男が、振り上げた手を見た九城くじょうは、叫んだ。

闇色の、血反吐を流す。

道化師の、口元のような弧月が、濃密な夜の海に漂い。

幽霊の棲家となって、久しいカーシヨップを、朧に照らしていた。その屋根の下、高い天井からあちこちが欠けた、蛍光灯の大群が三つの人影を煌々と照らしていた。

「役に立たない女ですね」

スーツ姿の男は、座り込んでいる女の側頭部を、後ろから張り飛ばした。

一八〇センチー〇キロはあるだろう体格から、繰り出される平手打ちが女を木の葉のように吹き飛ばし、コート姿の女は、埃にまみれたフロアの上を転がると動かなくなった。

「何しとんねん!」

九城くじょう 京けいは吼えた。

二〇メートル程離れているその大男が、大儀そうにコルトガバメントの銃口を九城に向けた。

九城は男の色眼鏡越しに光る、冷たい眼を見るまでもなく身を翻した。

四五ACP弾が、九城が身を隠したコンクリートの壁を鋭く抉る。夜気に冷え切った壁に、背中を貼り付け、九城は吐き捨てた。

「何考えとるんや、あのジジイ」

イラクから帰って以来、伸ばし放題な髪の毛を手早く後ろで括ると、無精髭がまばらに生えた、シャープな顔がさらけ出された。標

準より高めの身長に、バランスの取れた体躯と併せ、異性の目を惹きつけるのは間違いない容姿だが、好き嫌いははっきり分かれるだろう。醸し出す雰囲気、尖り過ぎているのだ。

まとまらない思考。

それをよそに、全身ほぼ黒一色の装備で固めた九城の体は、状況に即したアクションを起こしはじめていた。

バグダッドで、一年も銃把を握っていれば嫌でもこうなる。

すばやく胸ポケットから、取り出した手鏡で中を覗くと、男はスライドが後退したままの自動拳銃を、スーツの懷にしまうところだった。

九城は今覗き込んだ展示室と隣接する、自分が立つ自動車修理工場の中を急いで見回した。

あった。

焦げ臭さと、ストレスからくる汗の匂いが、焦燥感に拍車をかける。

銃弾でえぐられた、展示ルームへの入り口に身をさらすと、男が気を失っている女の黒髪を掴んで引き起こしているところだった。

その手にナイフが握られているのを見た九城は、さっき拾い上げた物体をメジャーリーガーばりのフォームで全力投擲した。かじかんだ指先に浅い擦過傷を残して、汚れたレンガは臙脂色の弾丸と化する。

レーザーのように飛来する鈍器に対し、男はとっさにナイフを持った左腕をかざした。

腕と即頭部を掠めた、凶器が背後の壁にあたり、鈍い炸裂音を響かせる。

男はずれ落ちかけた、サングラス型のゴーグルを直すと、コメカミから滴る血を無視して、無造作にナイフを女の左胸に突き立てた。トマトジュースの缶に、ナイフを突き立てたかのように、真っ赤な液体が女の胸から噴出する。

女は眼をつぶったまま、微動だにしない。

「うつらあああ！」

九城は、レンガを投げると同時に、ダッシュを敢行。

男の凶行をとめることが出来なかった、自責の念と失望感を胎のそこから追いやり、動画の早送りのような速度で、地味なスーツを着た殺人者に肉薄する。

あのニヤけツラに、飛び膝を叩込んでやる。

その後、俺に会うまでに死んどきゃよかったって思わせてやる。

九城は自分の目が血走り、全身の血管がメロンの表皮のように、浮き出ていくのがわかった。

男は慌てた風もなく、ナイフを持った左手を懐に突っ込む。

さっきまで、銃をにぎっていたのと反対の方の手を。

悪寒を感じた九城が地を蹴るのと、男が悪魔のように笑ったのが同時。

蛇が襲いかかるかのような速度で向けられたリボルバーが、轟音を木霊させるのと、九城が男の射線からスライディングで身を躲したのも同時だった。

コルトパイソン特有の、甲高い二回目の咆哮。

九城の至近距離に着弾した。衝撃に意識を飛ばされそうになるのを、自らも吠える事で必死でつなぎ止める。フロアを下半身で滑走しつつ、左袖から抜き出したナイフを男に向けた。

彼我の距離およそ三メートル。スパイシーな芳香が鼻をつく。そばで女が横倒れになっていた。

完全に九城の胴体へとポイントされていた銃口が、死神の鎌を吐き出す寸前ずれた。

九城の手許から、発射されたナイフの刃先が、男の指に一瞬突き立ったのだ。

スプリングと本体を、別々に買い漁って自作した、バリステイツク・ナイフだ。

内蔵したばねにより、刃先が射出される。

男はわずかに顔を歪めると、右手にパイソンを持替え……咄嗟に

首を傾ける。

「らアッ！」

九城は残ったナイフの柄を投付け、勢いよく立ち上がると、体を伸べて全力で銃をはたいた。銃身が完全にあさつての方を向く。

九城が男の顔に向かつて、思い切り右のロングフックを振り抜いた。男は辛うじて顔を背けたものの躲し切れず、カットされた額から、滝のように鮮血が流れ出す。

男は怒りに眼をすくめ、いつの間にか、再度左手で抜いていたナイフで鋭い孤を描いた。

獣並みの反射神経を持つ、九城のバックステップでも逃れ切れなかった。右目の上あたりから鮮血が咲く。

歯ぎしりしつつ、九城は両足タツクルに行こうとした。距離を取ると、拳銃の餌食だ。中断して目を見開いた。

九城を追うように踏み込んできた男の形相が、鬼気迫るものだったからよりも――向けられた掌に、銃が握られていなかったからだ。九城は背筋を這い登る悪寒に逆らわず、両腕を合わせて壁をつくった。

世界が終わったかのような衝撃。

視界が白から黒へ、そしてまた白に。いつの間にか、裏口に向かって、右手方向に数メートル吹っ飛ばされていた。

掌打を受けた腕が、鈍痛と痺れを断続的に脳に伝える。

「なんや……今のん」

立ち上がれない。

辛うじて、上体を起こす。

ケンカと格闘技を、長年やってきた九城でも、初めて味わう重さの打撃だった。

九城が喰らったのは掌打のはずだが、まるで軽トラックに衝突されたような衝撃だ。

「発勁です。手首がイカれるから、使いたくなかったんですがね」
男は血まみれの顔で笑いながら、パイソンを拾い上げた。フラフ

ラと立ち上がった九城の、血が伝う顔にピタリと銃口を向ける。

「役に立たなかった女の次は、うつつうしいガキ。ターゲット以外に、無駄なエネルギーを使う事になったのは、大変遺憾です」

「人殺しよりも、遺憾に感じるところはそこかい」

「別に他人が勝手に死んだところで、私には関係ありません」

「てめえが殺したんだろ！ 仲間で、しかも女だぞ？ どこに殺す必要があつたんだ！？」

「……使えない女でした。まあ、殺す事はなかったのかも知れませんが」

男はハンカチで、額の傷を押さえながら照れたように笑った。

「済んでしまった事は、しかたありません」

死体の始末幾らかかるんだろ、不安そうに呟く男に、九城は怒りよりももうすら寒いものを感じた。

このオッサンからは、人間的な何かが欠如している。

アイツに似ている。

意表を突き続ける闘い方も、アイツにそっくりだ。

「けちくさい事言う割りには、ええ銃使つとるな」

話続ける。でなければ死ぬ。

「手が大きいもんで、アメリカンの方が。じゃ、死んで下さい」

連続した銃声が、灰色の沈鬱な処刑場に響き渡る。

紅蓮で縁取られつつあるフロアに反響したのは、パイソンの甲高い金切声ではなかった。

「……ぐ」

男が呻き声を洩らした。

咄嗟に振り返り様、側頭部をかばうために、折り畳んだ腕から脇腹にかけて、三八口径らしき弾丸が点々とめり込んでいた。

特殊な素材で織られたスーツなのか、でなければ服の下に防弾の為の仕込みでもあるのか。

いずれにせよ衝撃を緩和しきる事は不可能だったようだ。

だが。

裏口と反対側にあるショールームから現れた人影。

それを見た男の顔は、苦痛に歪んだ表情から、獲物を見つけた猟犬のそれにと変化した。

「……真打登場ですか。地獄の女神……」

男はアーミーグリーンのコート姿を、血塗れの顔で凝視し、憎悪とともに言葉を続けた。

「ペシユメルガ」

泰然と微笑むガンスリンガーに、男は邪悪な笑顔を向けた。

「今度は逃がしませんよ……冥府からの声」

第一章 DNCへようこそ 1

第一章 DNCへようこそ時間は、午前十一時前。

構内は、勧業会館での入学式を終えた、新入生であふれ返っている。

四月の日差しが、柔らかく校舎と学生達を照らしてくれてはいるが、肌寒い。

おりがなつみ
織河七海は、校門をくぐると、唇を軽くへの字に曲げ、今日から通うことになる、校舎の時計台を見上げた。ウェーブした髪を、肩の少し上で切りそろえ、大きな目のぼちで、よこつちよを一房括っている。漆黒の大きな瞳、高すぎない鼻と桜色の唇。新調した紺色のスーツから覗く形の良い脚が、彼女の身長一六〇センチ弱の三分の二近くを占めている。ともすれば、敬遠されそうなレベルのプリティフェイスを、まだ色濃く残る少女の面影が、親しみやすい雰囲気にとらげていた。

京都大学正門前。

四月の初旬、満開の時期は過ぎたものの、彼女を迎えるかのように、通りの両側に立っている桜の木達が、恭しく手を差し伸べている。

「合格して、ここの桜並木を歩くのが、夢だったんだ」

咲き誇る国花が、七海の胸を誇らしい気持ちで満たした。

きれい……お祝いしてくれてるみたい。よくぞ、ここまでたどりついた、我が精鋭たち……っていうか 私

七海は舞い散る桜を眺めながら、小学五年生から今までの自分史に、思いを馳せた。

寂しい八年間だったな。ほとんど友達もいなかったし。

七海が育ったのは、緑に囲まれた大阪の能勢だ。

小学校低学年の頃は、こたつの中で鶏の卵を抱いて暖めたり、コックリさんに熱中して、親に叱られたりする普通の女の子だった。

だが、高学年になってから、兄の本棚にあったマンガを呼んだのがいけなかった。

なまじ漢字に強かったのが災いしたのだ。

英国空挺部隊上がりの考古学者が、変な武器を持って襲い掛かってくる変人と戦ったり、どう見ても無許可で個人的に発掘をするという、今考えるとあんまり学問には関係ないお話なのだが、当時の七海はハマッてしまった。

進路は決まった。

目指すは、京都大学考古学部。

その決意を表明し、かつ実行すると、周囲の反応はさまざまだった。

両親は、手放して喜んだ。

我が子が自発的に、国立大学を目指そうというのだ、喜ばない親はいない。

兄は正義の味方には勉強など必要ない、と言って日がな一日中、決めポーズと高いところから飛び降りる練習しかしていなかったの
で尚更だ。

ただ今まで遊んでいた、お友達の態度の変化が辛かった。

自ら通い始めた学習塾のせいで、今まで廃病院の探検なんかには欠かせない存在だった、七海の欠席が目立つようになり始めた。

” なつみんは変わってしまった ”

” おたまじゃくしから、足が生える瞬間をみるために、朝の八時から夕方の五時半まで（五時半から、見逃せないアニメがあったのだ）水槽を眺め続けた、タマシイをなくしてしまった ”

” もう奴には、ドッチで背中を任せられない ”

そんなわけで、お友達からの誘いがどんどん減り、最後にはなくなってしまった。

「今思えば、低学年がグループにいっぱい混ざっていたとはいえ、小学五年生にもなってやることではないよな」

七海は行き交う様々な年齢層の、新入生を見ながら独りごちた。

髪を括っているぽつちを、胡桃のようにゴリゴリ手の中で擦り合わせて、クールな振りをするようになったのは、その頃からだ。バカバカしいことを、しなくなった子供は子供じゃない。

「だから私は、子供じゃないもん……そうやって強がってたっけ」
塾の友達とは仲良しだったが、進学専門の厳しいところだったので、塾の間での付き合いでしかなかった。

勉強しては、マンガを含む読書に、没頭する生活。

それだけの犠牲を払って、勉強漬けの学生生活を送ったのだ、落ちたら眼も当てられない。

去年の春、模試でC判定が出たときは、この世の終わりかと思っただ。本気でベランダから、放物線を描いてジャンプしようかと思っただくらいだ。自分の事を頭が良いと思っただ事は無い七海だが、時間さえ貰えればどんなことでもがんばれる自信があっただし、実際努力した。

頭のいい人は、勉強なんかしなくても合格するんだろうな。夜遅くまで予備校の課題に追い込まれ、意識が朦朧とした時には、その言葉が自分を苛んだものだ。

「それもこれも」

くわっと時計塔を睨み付ける座りきった目付きには、八つ当たりにも似た怨念が、どろどろと渦巻いている。ブツブツ独り言を呟いている、美少女に脅えた何人かの新入生が、必要以上に彼女を迂回して通り過ぎた。友達がいないと、どうしても独り言が多くなるのだ。

「ここで夢を叶える為。待ってる、卑弥呼」

七海は気合を入れて、最初の一步を踏み出した。

オリエンテーションを終えて解散し、人で溢れかえった廊下を歩く。

まだ、履修要綱やら、四月中のスケジュールを聞いた今でも、大

学生になった実感はぜんぜん湧かない。

だが、おろしたての靴を履くときのような、わくわく感は七海の胸を満たし、足取りを軽く大胆にしていた。

ついて来てくれる友達なんかいないけど、そんなにやわじゃないもんね。

七海は一人で目的地を目指す。場所は知っている。高校生のとき自分を励ますため、何度かこっそり見に来たことがあるのだ。

体育会系クラブの勧誘をあしらいつつ、新棟の三階にある考古学研究室のドアの前に辿り着いた。

真新しい金属製の扉は重く、大型の遺物などを搬入するためか大きい。

七海が不思議に思ったのは、扉の前に人気がないことだ。新入生を勧誘するつもりがないのだろうか。

逡巡の後、思い切って扉を引いた。

室内は大きめの理科室という感じで、高校の教室の半分くらいあるだろうか。部屋の真ん中に、六畳ほどの巨大な机があり、部屋の大半を占めている。

考古学の授業で使用するため、土器や、遺物の図面を描く道具やトレーサ台も部屋の隅にある。

七海の目を引いたのは、窓際に置かれた粗末な机と、そこに置かれたノートパソコンを操る男の姿だった。

より正確に言えば、その左手にじゃれつく二つの小さな影だった。雑種らしき猫達が、男の掌から何かを食べている。

室内に、一人だけしかないその男がこちらを向いた。

四回生くらいだろうか。穏やかなまなざしが印象的だった。いや、しつとりと濡れた様な黒髪、高すぎない鼻、整った眉に穏やかな微笑み。華やかさは無いが、じっくり見ると男前かも。黒いハイネツクの長TシャツにGパンという飾り気のないいでたちでも、それなりに垢抜けた印象だ。全体的に柔らかい、中性的な雰囲気纏っている。

「ほら、人が来たぞ。行け」

その男は優しく猫たちを追い立てると、窓から出て行くのを見送った。

七海の方に色白の顔を向ける。

「こんにちは」

暖かい声と、凪いだ海を思わせる優しい笑顔を向けられ、七海は鼓動が高まるのを感じた。

「こんにちは。名前なんていunnoですか、あの子達」

「ジャギとハートです。どちらもメスですが」

呼び名ですでに虐待ですね。

七海はツツコミを辛うじて飲み下し、聞いてなかったふりをするために、あたりをさも珍しげに見回し、分かり切ったことを聞いてみた。

「ここ、考古学研究室ですよね？」

「そうですよ」

「考古学部の方ですか？」

男はわずかに目を見開いて

「入部ですか？」

と問うて来た。

「はい」

ハッキリと答える。そのためにこの学校にきたのだ。

「あー……… そうですか」

男はそっかーと重ねて呟くと机から一枚の紙を取り出した。

「じゃあ、これ入部届」

A四用紙半分程の大きさの紙に目を通す。氏名やクラス書き込む欄の他に。

「……… DNC？」

本来考古学部と、書いてあるはずの場所に記載されていた、アルファベットに、七海は眉をひそめた。

男が口を開こうとした、ちょうどその時、七海の入ってきた扉が

開いた。

「こんにちは……あれえ？　あなた、新入生？」

七海も、慌てて挨拶を返す。

肩掛けかばんを提げて入って来たのは、小柄でおっとりしたしゃべり方の女性だった。ゆるくウェーブのかかったロングヘアに、ピンク色のセルフフレームの眼鏡を掛けていて、けっこう可愛い。面倒見のよさそうな、長女っぽいイメージを纏っている。

女は七海のもっている、入部届を見て怪訝な顔をし、その表情を十崎に向けた。

「十崎さんとひさきの、知り合いですか？」

「ええ。知り合って、一分足らずの仲です」

十崎と呼ばれた男は、淡々と答えた。

女は七海に視線を戻した。

「貴女、考古学部に入部しに来たの？」

「え、は、はい」

成り行きに戸惑いながらも答えた。女は十崎のほうに向き直り、
「もう、十崎さん。シャレにならない悪ふざけはやめてくださいよ
う」

怒ったように言った。

シャレにならないって？　七海は女の台詞に軽く引いた。

「あの、どういうことですか？」

「それ考古学部の入部届けじゃないの。十崎さんとこの」

「え？　え！」

「DNCってサークル」

「そうです……ロードウォリアーズみたいなメイクをしてえんど
うみちろうのように喚くのです。」

「い、いやです。なんだかよくわからないけど、楽器はピアノとマ
ンドリンしかできません。パンクなんか無理です」

十崎の眼に、突如強い関心の光が宿った。

「……！　えんどうみちろうの方に反応するとは……タダものでは

ありませんね。是非我がギルドに欲しくなりましたよ」

さつきまではどうでもよかったんですが、と付け足す十崎に、
「もうそこまでにしといてくださいね、彼女未来ある身なんですから。それにだまし討ちなんて感心しませんよ」

と女が溜め息混じりに言った。

「嘘はついてませんよ。それに説明しようとしてました」

「あ、そなの？」

「はい。入部してもらってから」

「意味ない！」

「なんです、桃井さん。はいつてから説明聞くのも、説明聞く前に入るのも、どうせ入るんなら同じでしょう。」

「なるほど、確かに『閉じたり閉まつたり』くらい言ってる意味はおんなじね」

桃井が感心する。

「わかりません！ 熟れたてフレッシュくらいに意味がわかりません！ なんで私が入部するのが、前提なんです！？」

十崎は突然、尊大な口調で一席ぶち始めた。

「この目の前の饅頭を見たまえ。食べてみないとどんな味かわからないだろう？ まずは試してみることだよ……僕は怪しげな新興宗教の教祖にそう言われたことがあります」

「……で、入信したんですか？」

と七海。

「いえ、和菓子嫌いなんです」

「はあい、そこまで」

桃井と呼ばれた女が手を叩いて会話を遮った。

「こっちきて」

桃井が七海の肩を抱き、十崎に背を向けて離れた。

「乗せられちゃダメ。十崎さんの渾名は振り向いてはいけない背後の声よ」

あー……ピッタリだ。名付けた人、天才。

「で、考古学部の見学に来たのね？私は桃井早苗。三回生で考古学部」

七海もほっとしながら自己紹介をした。

十崎は何事もなかったかのようにノートパソコンに向かっていて。「見学じゃなくて入部したいんです。定員埋まっちゃったら困りますし」

桃井は頭を掻きながら

「今うちの部、校舎の目立たないところで勧誘してるけど……先ず定員オーバーはないとおもうなあ。織河さん、よっぽど考古学やりたいんだ？」

「はい。私、小さい頃から歴史の本が好きで、将来」

後日、七海は桃井の親しみ易いキャラが悪いんだと逆恨みする。つい言ってしまったのだ。

「邪馬台国を見つけるのが夢なんです」

「あー……はは、スケールでつかいねえ」

「笑顔で腐海に突撃するとは、なんと言う逸材……格闘技で言えば、コッポウ習ってましたくらいのタブー。ますます欲しくなりました」

「え？ え？」

引きつった桃井の顔と、眼を輝かせている十崎の顔を、交互に見比べて七海はにわかにテンパリだした。

「私何かおかしい事……」

「いーのいーの。ささ、それよりみんなのところに行こう。紹介するよ」

「自覚なしとは……堪えられませんね」

「そこうるさい。いこいこ」

桃井に肩を押され、七海は出て行った。

「いるんだよな、そういう単純ってというか考古学勘違いしてるヤツ…… 幾つだよ」

眼鏡に生え際の後退した細面、いかにも研究者然とした神経質そうな男がジョッキから口を離すと厭味ったらしく吐き捨てた。

周囲から場を凍らせないためであろう、乾いた笑い声があがる。

七海は小さくなつて手許を見つめた。

入部してから三日目、講演等で使用される、公会堂内の会議室で行われる事になった新歓コンパ。

七海の気分は最悪だった。

「黒田さん、言い過ぎでしょ。最初はみんなそんなところから入るんだから」

七海の隣りに座った、桃井がたしなめる。

ほぼ正方形のテーブルを囲んで、二五人の院生を含む研究生、考古学部員が囲んでいる。

女性七海を含め、六人と少ない。

「桃井は甘いんだよ。ここで考古学やろうってんなら、発掘現場の説明会まで暇つぶしにきてる年寄りみたいな考えは、はじめに潰してやらなきゃ。考古学実習の定員も毎回いっぱいなんだから、勘違いに気付いて、辞めるヤツは早めに放り出すべき」

強い口調で断じると、桃井は困ったように黙り込んでしまった。

七海にもそれは理解できるが、もうすこし言い方があるのでは。

「言い方キツいか、新入生？ おれ東京者だからさ」

また周囲で、硬い笑い声があがる。七海はあいまいに笑って、またうつむいた。

「ひとつ教えといてやるよ。邪馬台国だ卑弥子だったのは、昔の書物に存在が書かれてただけの代物。アトランティス大陸とかと、それほど変わらない。なんかの暗号みたいなクダラネエオカルト本とか、それで金儲けしようってヤツらの飯のタネなだけ。わかったかい、ど素人」

「は、はい」

下腹部に見えない刃が、ザンザン刺さるのを感じながら七海は返事した。

よかった。

額田のオオキミの暗号って本、面白いですよ、とか言わないで本当によかった。

七海は背中冷や汗をかきながら、これ以上状況が悪くならなくてよかったと必死で思おうとした。

「しかし、部室にだれが残ってたのか？ みんな勧誘に駆出したのに……十崎？ ああ、あいつか。いつか埋めてやる」

解散したあと、七海は一人暮らしをはじめたマンションまでとぼとぼと自転車を押して帰った。

途中まで帰り道の一緒だった、桃井がいれてくれたフォローが、耳に木霊している。

『あの人も、実力あるのに助手になれなくて、イライラしてるみたいでさ、現場では、面倒見のいいひとんだけど』

なんとかその言葉に慰めを見出だそうとするが、うまくいかない。そもそも自分の状況がよくなかったら、周りに八つ当たりして良いとか、面倒見がよければ普段どんなことを言っても許されるなんて思えない。自分の脳裏に浮かんで来る、多分正しいであろう言い分がどうしても消えない。

「何よ、ハゲのくせに」

呟いてみたが、あんまり気分はよくなかない。なにせ、そのイヤなハゲと、何年も一緒に、机を並べてやっていかないとならないのだから。

この先の事を考えると、七海は泣き出しそうだった。

「いやあ、まさしく趣味の世界ですからね、邪馬台国とか。アーサー王子とかと変わリません。」

翌日浮かない顔で、研究室に顔を出した七海に十崎がいった。

二人しかいない研究室にノートパソコンのファンの音だけが響く。昨日はどうでした、の話からこうなったのだ。

「研究者になるのは大変ですよ。人間関係が、特に。それと考古学って趣味としては楽しいけど仕事にしちゃえばみんな同じ……らしいですよ」

七海は悲しくなつて言い返した。

「なんでみんなそんな風に研究者になるのを諦めさせようとするんですか？ 私何かしましたか？」

十崎は穏やかに微笑んで言った

「食べて行くのが、難しすぎるからですよ」

七海は息を飲んだ。

十崎さん、この人……

「だから、さあ、我が団で全てを否定し、五人のゴッドハンドを崇めるのです」

最低だ。

「私は考古学者になりたくてこの大学にきたんです。贅になるつもりも鷹の団にはいるつもりもありません」

十崎の眼に動揺が走った。

「……何者です、あなた」

バカバカしいと思いつつも、ちょっとだけ溜飲がさがる。

「なら食べられるようになるまで、がんばるだけです」

七海は、頬を膨らませて言った。

「では研究テーマで、みんなを見返してやるべきです。大体論文のタイトルを聞いたら、その人の知識の深さがわかります」

「そう……ですか。じゃあまずは知識をつけないと」

「コロボックルなんかお勧めです。北海道に住んでいたという、伝説の小人」

「……もういいです」

その時ドアが開いて、黒田が入ってきた。七海はお腹の底に嫌なストレスを感じつつ慌てて挨拶する。黒田は、七海と十崎の方

をチラリと嫌そうに見ると、

「おしゃべりに来たんなら帰れよ、邪馬台国」

と憎々しげに吐き捨て、早足で席に向った。

すみません、七海はうつむいて呟くと、席についた。

とりあえず桃井に薦められた、基本の洋書を開く。

十崎は気にした風もなく挨拶をすると、またノートパソコンに向き直った。

しばらくの沈黙の後、黒田が言った。

「おい、邪馬台国」

七海はびくつとした。

「あ、あの織河七海です」

「そうか、悪かったな、邪馬台国。で、なに読んでんだ？」

「あの、桃井先輩に薦められて……」

読んでいた本を掲げて見せた。聴講生の試験などにも使われる比較的易しい

洋書だ。研究室の隣にある書庫から借りた。

「辞書使ってたの？」

「あ、はい」

「コリン・レンフルーなんかで？ 学生やめちまえ」

「……すみません」

十崎は黙ってノートパソコンを触っている。

七海は泣いちゃいそうだった。

十崎は、すっかり凹んでしまった七海をちらりと見ると、思いついたように検索エンジンに、彼女の名前を打ちこんでみた。

検索結果を、一瞥した十崎の動きが止まる。

表示された一件目から五件目まで全てに、彼女のフルネームが含まれているのだ。

十崎は、しょんぼりと本を読んでいる彼女を再度一瞥すると、そ

これから拾った新しいワードを、彼女の名前から1マスあけてペーストした。

検索。

表示される去年の日付と、出身校。放映日。

十崎のノートパソコンを操る動きが忙しくなった。

その後三〇分かけて、芋づる式に検索を続ける。

講義で中断したが、夕方から検索の続きを研究室で再開する。

織河。おりが。オリガ。七海。ナツミ。なつみ。

織。七。河。海

スペースを入れ、増えていくキーワードを加えながら、思いつく限りの検索方法を試す。

最後にたどり着いたのは、だれも訪れることがないであろう、男子高校生のプロフであった。

十崎の眠そうにすら見える、湖面の様な瞳が爛々と輝き……唇が吊り上った。

笑いの形に。

怨敵：オリガ。海——最低のビッチ——これを見てる奴ら、楽しみにしてる。見てくれだけはいいいあのメスを、次は素っ裸にして晒してやる……

「……スフィックスゲームで」

陽も暮れ、誰もいなくなった室内で、十崎は我知らず、これから始まる物語の序章を呟いた。

「虫も殺さないような顔をして……楽しくなってきたじゃないですか」

DNCへようこそ2

「ん……」

九城は、人が目覚める時に感じる、方向感覚の喪失を味わいながら、眼を開いた。

トタン屋根が視界に入り、ついで硬いベンチの感触を背中に感じる。

身を起こし、ぼんやりしながら辺りを見回すと、一ダース近くのスポートウェアや、ジャージを着た男女が、陽光の下でテニスに興じていた。そこでやっと自分が、どこにいるのかを思い出した。ここは、京都大学構内の、テニスコートだ。

そついや京大って、スポーツで名を売ってる競技ってあつたっけ。携帯で時間を確認しながら唐突に浮かんできた疑問を適当にスルーする。午後四時前。

食堂で昼食を済ませたら本格的に眠くなって来たので、無人だったテニスコートのベンチで昼寝をしたのだ。慢性の寝不足が大部分解消された。

九城が今座っているのは、バス停などに設置されている青いプラスチック製のベンチだ。二つ並べられているので一七五センチ近くある自分が、二人寝そべっても十分スペースがある。

なのに。

九城は眠い眼をしばたたかせながら、ボールが飛び出さないよう、三方を高く囲んでいるフェンス際を見た。今部活だかサークル活動だかをしている連中のバッグや水筒が固めて置かれている。そして粗末なトタンで囲まれた、ベンチを含む九城の周囲には、荷物も人の影もなかった。

なにか腑に落ちないものを感じながら、大きくゆっくりと伸びをし、首を回す。ゴキゴキと凄い音がした。結構はなれていても、その音が聞こえたらしく、何人かが九城の方を見たが、眼が会うつ

慌ててそらし、何事もなかったかのようにプレイを続ける。きやいきやいと騒がしいが、無理にテンションをあげているのが丸わかりだった。

「あちい……な」

九城はひとりごちて前開きのジッパーを開いた。

羽織っていた派手な柄のパーカーを脱ぎ、Ｔシャツ姿になると、逞しい筋繊維のうねる鋼の様な体躯があらわになった。

鋭角的な顔立ちと三白眼、長めの直毛に無精ひげ。野生的な魅力溢れる外見。

しかし残念ながら、そのどれもが陽光溢れるテニスコートに不似合いで、悲しいくらい用がなかった。

資格の欄に英検三級と書き込んだ履歴書を持ち、運送会社のバイト面接に意気揚々と臨んだ、痛い過去を思い出し、少し凹む。『用がない』で連想してしまったのだ。

九城は、目の前の光景を見ながら、何か説明し難い、わずかな苛立ちを感じていた。

保護観察処分で済んだのが、不思議なくらいのおバカを中学・高校と重ね続け、留学先のアメリカでも、犯罪スレスレの商売に手を染めた。

果ては民間軍事会社の一員として、イラクで銃声と簡易爆弾により、耳と心がバカになる思いをするという、極めつけの愚行に走った自分。

そんな己がなんとなく、軽蔑と引け目を同時に感じる……そう『爽やかさ』

そう思い至ると同時に、九城は立ち上がった。

「ちょー、自分」

ずかずかと歩きながら、手近の男に大阪弁丸出しで声を掛ける。

「え、ぼくですか？」

テニスウェアではっちり決めたその爽やかそうな男は、どうやら、この集団の頭らしかった。振り向いた満面の笑顔がたまらなく不自

然で、九城のイラ度のゲージを上げるのに一役買った。

「そー、自分や。ええラケット持っとんな。おれもテニスやってみたいんやん、教えてーや」

「ええ、ぼくで良かったら……いやー、凄い体してますねえ。テニスの経験は？」

「んー、中坊の頃、ラケットの硬いところで、ヤンキーの頭シバいたときくらやな」

男の満面の笑顔が、一瞬硬化したが、

「いやーそうですか、じゃあ、大分ブランクがありますねえ。壁打ちからやってみましょうか？」

微妙なスルーをしてから、九城を壁際に誘った。

男は一度荷物のところにダッシュすると、九城に貸すためのラケットを手に取って戻ってきた。

九城は少し古びたそれに、眉を顰める。

「そのラケット、かつこええな。俺みたいな初心者でも、ホームラン打てそうやん？」

男が大事そうに抱えている方のラケットを、ガン見して遠まわしどころかほぼ最短距離で無心する。

「いやー、ホームランはダメでしょう。じゃ、まず利き手でにぎってみてください」

欲しくないほうのラケットを手渡され、九城は人の奥ゆかしさを全く理解しない男に、音高く舌打ちした。それでも仕方なく我慢して、男の退屈なレクチャーに付き合っただけ。

この時点で、九城は自分からテニスをやりたいといったのを、すっかり失念していた。

三分経つと、めんどくさくなってきた。だが、壁打ちは結構面白かった。何度か失敗するうちに、跳ね返ってきたボールをうまくラケットで捉え、ラリー出来るようになる。

「上手ですねえ。ホントに初めてですか？」

男は本気で驚いているようだった。

「ん……まあな」

「運動神経いいんですね。すぐにプロになれるかも。じゃ、続けといってください、ちょっとサークルにもどりますんで」

男は爽やかに手を振ると、仲間の所へ駆け戻っていった。

九城は無表情にそれを見送ると、ノロノロと壁打ちに戻った。ひよいとボールを頭上に放る。

「ぱーん。」

壁から跳ね返ってくる打球を追いながら、今抱えている、さつきとは別の苛立ちの原因を考える。

「ぱーん。」

「よし、ユカリんめー 今日の本気で打ち込んだじゃあーかなー」

男のさつきとは打って変わった、威勢のいい声と女の子の甲高い嬌声を背中で聞く。

「ぱーん。」

九城の脳裏に、うまく言葉に出来なかったもやもやした気持ちが、明確な形をとりかける。

「よし、今日も飲み会行こうっていう、サムライ誰と、誰よ？」

男のテンションの高い、叫び声を聞いた九城は、ラケットを握りなおした。

「ひょーい。」

「すりゃっ！」

「ぱこっ！！」

「……次お持ち帰りしようとするっ！！」

九城の渾身の、オーバーハンドによるサーブが、見事に男の後頭部に命中。

「サー！」

どんな温和な相手でも、ウザくて血圧が上がるであろう掛け声をあげる。

命も危ぶまれるような、倒れ方をする男に向かい、九城は吼えた。「テキトーに相手して、穩便にお引取り願おうとか思とんちゃうぞ、

くらあつ!？」

核心を突く、ならず者の言葉に、気絶した男を除く全員が凍りついた。

「ぬわあああにがテニスじゃああ、お上品ぶりやがってえええええ!」

うがー、と両手を振り上げた、九城にほぼ全員が悲鳴をあげて逃げ腰になる。

「をい! そのねーちゃん」

鷹がドラッグをキメたら、こんな目になるかもしれない、と言う様な九城の眼光に射られ、手近にいたおとなしそうな女の子が、すくみあがった。

「見たれや、こいつを!」

ついで、両手の指で作った輪で強調し、突き出された九城のバギーパンツの股間に視線が釘付けになる。

「テとぺ、一文字違いや、かかってこんかい! いえ、むしろかかって来てください!」

「きゃあああああ!」

女の子はやつと絶叫をあげると、呪縛から解き放たれたかのように、必死で逃げ出した。

それをガニマタのまま追う九城。途中気絶している男の背中を踏んづけ、戦利品のラケットをゲット。

そいつの握りを、バギーパンツの裾から自分の股間に突き刺した。「ババアアアアン!」

痛みを堪えるかのような表情で、劇画チックに効果音を叫ぶ。

四月のテニスコートは、阿鼻叫喚の地獄と化した。

雲ひとつない空の下、足の速いゾンビに追いかけられる様な恐怖を若人達は忘れないだろう。

「猿くん! 今日はいいつで勝負だ……その見せパンはいてる嬢ちゃん、そうや、ワイはサルや!」

蜘蛛の子を、散らすかのように逃げ惑う群集に、エリマキトカゲ

のごとく驀進しながら、九城は絶叫した。
「ホールインワンやでえ!!」

まだ気絶している男の尻に、ラケットを刺して返却すると、九城は誰もいなくなったテニスコートを後にした。

「あー、すつきりした……ん？」

震えてる携帯に気付き、耳に当てる。

「おー十崎。ん？ テニスコートでたところ……今日は出てきといてくれ言ったんおまえやろ……え、マジか？ かわいいん、その新入生？ 紹介してーや、おーおー今からいくわ」

七海は三日目には、胃に痛みを覚えた。
のんびり屋の自分には、無縁だったのに。

研究室にいかない理由をあれこれと探したが、一度行かなくなると、そのまま足が遠のくのはわかっていたので、我慢して通いつづけた。扉が重い。今日は選択している授業の関係で、研究室を訪れたのが夕方になった。

いつもより多くの研究生や学生がいた。

桃井の姿を見掛け、少し気分が軽くなった七海は 席に付きチャリと黒田の方を見る。黒田は入り口の扉のほうに向かって移動しながら男子学生と談笑していた。

どうか今日はやなこと言われませんように。

期待は簡単に裏切られた。

「おい、邪馬台国」

七海は聞こえない振りをした。

「おーい。聞いてんのか」

「織河です」

七海はそちらに目を向けずに言った

「悪かったな、邪馬台国。お前出身どこ？」

「……能勢です」

「すげえ田舎だな。俺にハマった事あるだろう？」

黒田と話していた男子学生が、おいおいと言って笑った。

七海は音を立てて立ち上がった。

周りが徐々に静かになった。

俯いたままの視界が狭窄していく。

あれ？

怒りで真っ赤になった頭の中が、突如ブラックアウト。

七海はゆっくりと、黒田の方に目を向けた。

薄笑いを浮かべた黒田の目に、動揺が走る。

そのとき。

七海は頭をぽんぽんと軽く叩かれた。

「鳩がですよ」

気配を感じさせず横に立った十崎が、七海の頭に手を載せたまま言った。

我に返った七海が、びっくりして眼を向ける。

あれ？ 私……

いつの間にか、髪の毛を括ってるぼつちに伸びていた、自分の手に驚く。

何しようとしてたんだろう？

見上げると、携帯を耳に当てた十崎が、初めて見る生気に満ちた瞳で、七海に笑いかけていた。

ショータイムのはじまりです。

その笑顔は七海にそう語りかけていた。

十崎は眼を閉じ電話に集中しながら呟いた。

「三、二、一……」

その時入口の鉄扉が勢いよく開き、黒田と話していた男子学生を、紙くずのように吹っ飛ばした。

笑みを深くし、十崎は言った。

「ショーダウン」

「うーっす」

野太い声が響き渡り、七海はわが目を疑った。

長目の髪をセンターで分けた直毛におどろおどろしいプリントのパーカー、派手な柄のバギーパンツ。

鋭角的な顔立ちにはめ込まれた三白眼と、躍動感溢れる身のこなし。

そういう人種に縁のない七海でも、およそこの国立大学には似つかわしくない人物だという事ぐらいはわかる。

「……ん？ ドアの前に立つなよ。危ねえぞ」

男はずかずかと入ってくるなり、倒れている学生に向かって言った。

携帯を畳みながら、

「退きタマエ！」

あわてて横に逃れようとした、黒田の背中を思い切りはたく。シャツの上からと思えないような音がし、黒田があまりの痛みに、声も出せずにのけぞった。

男は、十崎の方にデコトラよろしく驕進しながら七海を見て笑う。
「おー、この娘か。めっちゃめんこいやん」

その邪気のない笑顔に、状況も忘れて七海は心臓を跳ね上がらせた。

「三年後が楽しみやな。で、十。面白いものみせたるって何？」

なんだとう！？

七海は歯を剥きだした――

心の中で。

だって怖いんだもん、この人。

十崎はノートパソコンを、指差して言った。

「黒田先輩が、我らのルーキーを性的・精神的に虐待した全会話がここに」

「ふーん……」

男が興味なさそうに、覗き込んだ。

セクハラはさすがにない、と誰も突っ込めず、妙な静けさが訪れた。固唾を飲んで全員が注視する中。

「新歓コンパでの会話ログで……お前行ったん？」

いぶかしむ男に、

「まさか。そんな退屈なものに参加するくらいならネットゲームでPKやってる方が百ましですよ。単にスパイを紛れ込ませておいただけです」

十崎は朗らかにとんでもないことを言った。

「だあな……………あん？」

パソコンに眼を走らす男の剣呑な呟きに、場の空気が凍りついた。
「十崎。この九城をいつか埋めてやるって下りはマジデスか？」
皆がぎよっとする気配がした。

確か九城ではなく、十崎だったはず。

「ほんとうですとも。嘔吐したことなんかないですよ、ぼく」
その場にいた大半が叫んだ。

「……嘔だッ！！」「」

「黒田くん！！」

男は大腿に近付くなり大きく万歳し、黒田の両肩に全力で振り下ろした。

すごい音がして黒田が悲鳴をあげる。

「モニカイパーイココロ怪我シタヨ！」

男は黒田の胸に両腕を回し、持ち上げると全力で締め付けた。

「ぐふっ！」

黒田は喉の奥から、絞り上げるような声を洩らす。
なぜか男は、照れたように叫んだ。

「こ、これは唯のベアハッグなんだから、ギュっとかじゃないんだから、勘ちが以下略！」

「ああー、懐かしい技ですねェ」

十崎がコロコロと笑った。

男は床に黒田を優しく浴びせ倒すと、今度は立ったまま片足を絞り上げた。

スタンドのアキレス腱固めに、黒田は純粹な悲鳴をあげ、何度も床を叩いた。

周りから引きつった笑い声がちらほらあがるのを聞いて、七海は我に帰った。

自分は笑う側には周りたくない。

二人に駆け寄る。

「ち、ちよつと。やめましょうよ」

男にじろりとねめつけられ、七海はちよつぴり後悔した。

「い、いくらなんでもそれは」

びくびくしながらも抗議する。

「なんで？ ただ懐かしのUWFごっこをしてるだけやで？ 単なる冗談ってヤツだよ……」

そこでじろりと周りを見回し、言った。

「こいつら風に言うとな」

七海は言葉を失った。

この人は、この研究室の空気を理解しているのだ。

「黒田も楽しそうやろ」

「明らかに嫌がってますよ！」

「……自分、日曜の子供アニメに出てくる、黄色い子に似とるな」
「話を逸らさないでください！」

考える。考える。

七海は棚にあった、黄色い糸を掴んだ。

発掘の際に使う水系だ。

しゃがみこんで、相変わらずもがいている黒田の手に握らせる。

七海は男を見上げて言った。

「ロープです。ブレイク」

「プロレスルールちゃうで。ひやっていったらう」

「ロープエスケープ三回で失格がルールです。解いて下さい。ち

なみに内ヒー（ル・ホールド）外ヒー（ル・ホールド）ともに禁止です」

男がぎよっとした顔をした。

「レフェリー手伝ったらあかんやん。」

なおも抵抗する男に、

「レフェリーも道具の一部。レフェリーを踏み台にした飛び膝、シヤニングウィザードを否定するつもりですか？」

強引に話を逸す。男は黒田の足を放り出すと、うれしそうに言った。

「十崎。この娘めつちやおもしろいやん」

「いやあ、私もこれ程とは思いませんでした」

腕を組み、眼を細めて、満足そうに十崎が言った。

とりあえず助かった。

顔をしかめて起き上がる黒田をぼんやりと見ながら、七海はへたりこみそうになるのを必死にこらえた。

「んで、もう入会紙は渡したんか？」

「もちろんです。」

甘かった。

「あ、あの」

「おー、俺、九城。よろしくな、えーと」

「織河七海です。私考古学部だけで手一杯なんで、とても掛け持ちは無理です」

「……え、そうなん？ 残念やな十崎…… まあ、ええか。研究室に来るんやったらだべるくらいはできそうやし」

「あっさりあきらめるなんて、らしくないですね。それに九城の口から、そんな前向きな言葉を聞くなてがっかりですよ」

十崎はそういうと、机の中から三冊の本を取り出した。

「今入会したら、もれなく必ずゼミで薦められるこの三冊をさしあげましょう」

「いえ結構です。そんな問題じゃありませんてば」

即答する七海に、

「この三冊、絶対必要なのに高い上、なかなか手にはいきりませんよ。サークル活動ついていっても大半だべっているだけなので、部の支障にはなりません」

七海の髪の毛を、よこつちよで括っているぽつちが動揺で揺れた。一人暮らしでお財布が厳しい上、一刻も早く勉強がしたい。

「乗せられちゃダメっ、織河さん！ お嫁にいけないくなるわよ」

桃井のとんでもない援護射撃に、一瞬で我に帰るが

「それは無い」

九・十コンビに、軽く否定される。

「しかたありません。とっておきの物件を出しますか」

欲の皮の突っ張った娘ダヨ、キャシー、などと呟く十崎にムツとする七海。

だが、続いて取出された厚い洋書に、桃井のみならず、なんと黒田までが、声をあげた

「それは……」

「コリンレンフルーのアーケオロジー。これもまた、なかなか手に入らない上に高価です。しかも初版。准教授も持っていないのがミソです。」

いいなあ、という呟きに振り返ると、桃井はバツが悪そうに眼を逸らせた。

「なんでそんなの持ってたんだ？」

黒田の呆然とした独り言が、七海のハートを、夜中の通販並に焚き付けた。

「あ、あくまで参考のため聞くんですけど、サークルの活動日ってどんなシフトで実際どんなことをするんですか？」

織河さん、らめえという桃井の悲痛な叫びに胸を痛めつつ、七海は冷静を装って聞いた。

十崎はにっこりと笑って言った。無邪気に見えるところが、怪しさフルスロットル。

「活動日は毎日で出席はほぼ自由。いままで一人も来なかったですよ？ 活動内容は、主に昔なつかしの漫画やアニメについてだべること。だらだらと懐かしいものについて語るサークル、略してDNCです。昔の事をねちねちくどくど勝手に妄想し、地面に空いてた穴ぽこから、適当にそれらしいウソと建物を立ち上げて、あわよくば観光名所として儲けてやろうと言う、浅ましい考古学の一環と考えてください」

「……おい」

桃井の突っ込みを、軽やかにスルー、十崎は続ける。

「会費はなし、退会は自由。でなければ、本代を稼ぐために水商売に身をやつした女教師のようになりますよ。それをネタに、英語教師に強請られて、夜の学校であんな事やこんな事……」

「菊地秀行の、読み過ぎです。これ以上、私の立場を悪くしないで下さい」

十崎の表情に、一瞬だけ感嘆の色が走ったが、すぐに、
「そうですか」

残念そうに眼を逸らした。その伏せられた眼差しには、狙った獲物をゲットし損ねた落胆が、ありありと見て取れた。

「しかたありません。では淋しさを紛らわせるため、滅多に来ない上、来てもすぐ帰る九城に……」

十崎は悄然と呟いた。

「毎日来てもらいましょう」

七海は足元から、全身が石化していくのをたしかに感じた。

周囲の空気が、零下にまで下がる。

「えー、そんなめんど」

「九城、夕佳さんを見送って三十秒後に、ホームにいたヤンキーを三人とも病院送りにした件ですが」

「……くないようん。まかせとけ」

九城は快活に言った。

ああ、消防署でバイトしてるのかな、とかありえないことを、白

くなつた頭で考える七海。深くは考えなくなかった。

気配に気付いて周囲をみると、部員たちが手振りと言葉で必死に訴え掛けていた。

いっとけ。いいから、いっとけ。

「う、売るんですか？ ヒドい、ヒド過ぎます！」

桃井を振り返ると、他の女子部員たちに口を抑えられ、ムームー言っている。なんだかわい。

「十崎さんも、恥ずかしくないんですか？ そこまでして、なんで私なんです？」

もう涙目で、手足をじたばたしながら、ヤケクソで叫んだ。

「菊池秀行の、バイオニクスルジャーシリーズを知っている十代の女の子なんて……まさか、二十年近く前の、官能シリーズにまで手を出しているとは、このスケベ」

「きいやあああ！」

「錯乱しとるやんけ。やめたれや、もうええやん」

九城が心配そうに言った。

その時思わぬ方向から横槍が入った。

「織河。静まれ」

黒田の静かな声が、七海を現世に引き戻した。

黒田が片足を痛そうに引きずりながら、机によりかかって立っていた。

「十崎、織河は考古学部の部員だ。俺には元部長として、彼女を護る義務がある」

「いままで散々痛ぶっておいて、どの口が言いますか」

「護る義務があるって言ってるだろ？」

黒田が何故か悔しそうに強調した

「こいつは、山を最後まで登って来そうなんだ。頂上まで来たら、こんなはずじゃなかったって言わせたくない」

「あなたみたいですか？」

黒田は眼をそらした。

「織河。談話室まで来てくれないか」

「はい」

七海は話の急転回についていけないまま、反射的に返事した。誰も何も言わなかった。

DNCへようこそ3

窓からの夕陽が、六畳程の談話室をオレンジ色に染めている。
七海は、黒田とテーブルを挟んで、差し向かいに座っていた。
頭の中は、混乱したままだ。

「織河」

碇提督のポーズを取ったまま、しばらく無言だった黒田が口を開いた。

「はい」

「お前高校生クイズで、準優勝したことあるだろ」

七海は、意図しなかった角度からの、パンチによるめいた。

「……なんでそれを」

高校生クイズといえば、名門高校同士、三人一組で争う超ハイレベルの大会だ。

七海は大会で、本戦まで残った、たった一人の女子だった。

「おまえさ、考古学以外に興味はないのか？ まだ一回生だろ。ちよつと肩の力を抜いたほうがいいぞ」

七海はがっかりした。

「なんでそんなに私を嫌うんですか？ 動機が軽薄だったのは認めますけど……」

「ムーって知ってるか？」

歴史あるB級オカルト本の名を、出し抜けに聞かされ七海は、キョトンとなった。

「あの学研のですか？」

「あれの愛読者の成れの果てが、今おまえの目の前に、座っているわけだが」

「……はい？」

「どうしても、京大で考古学がやりたくてな。この大学に受かったのは、苔の一念でヤツだ。物覚えが良い方じゃなかったが、時間をかけてよければいくらでも頑張れた。そして時間だけはあった。友達がいなかったからな」

自嘲気味に笑う黒田の横顔を、七海は信じられないものを見る眼で凝視した。

「それで多くの説明は、要らないな？」

「……後悔してるんですか？」

七海はようやく、言語機能を回復した。

黒田はアメリカ人のように、軽く肩をすくめる。

「運のいいことに、嫌いじゃなかったみたいだ……もちろん俺がそうだったから他の奴らもそうだ、なんて決め付けるほど自惚れちゃいない。実際のところ、無理もないんだ。考古学をやりたいっていうやつは、みんな考古学を勘違いして門を叩くんだよ……俺や織河のようにな」

黒田は恥ずかしそうに笑った。その笑顔には、何故か七海の味方をしてくれているらしい九城や十崎の影に、媚びている気配は微塵もない。ただ、ちよっぴり痛い過去に共感する者特有の、照れくささが見えるだけだった。

「それはそれとして、十崎のサークルに入るのか？」

「……わかりません」

七海は迷っていた。

最初は、部とサークルの掛け持ちなんか考えもしなかった。

確かに高価な学術書が、口八で貰えるのは魅力だ。

サークルの活動内容も、いいかげんつばいなので、それほど勉強には響かないだろう。

それに、サブカルチャーを含む、雑学の知識なら、自信がある。なにせ、クイズに高校生活の青春をつぎ込んでいたのだから。けれど。

一番の揺れ動いている理由は、十崎の存在だ。

今日のことは間違いなく、計画的な行動だ。

十崎は七海を救う手立てを、考えていてくれたのだ。

サークルに入れば、誰にもいじめられないのでは、という打算がないとはいえないが、純粋に、十崎に対して恩義を感じているのも本当だし、そちらの方が間違いなく大きい。

「あれって実際何のサークルなんですか？」

七海は、黒田にも聞いてみることにした。

「十崎の説明したとおりだ。まあ、ほかにも思いつきで色々やるみたいだな。メンバーは一五人もいないと思うけど」

「なんで考古学研究室でやってるんですか？ 定員もいっぱい余分なスペースなんてないんですよね？」

そもそも、考古学部の活動は、一昨年まで週二回くらいで、写真部の部室を共同で使っていたらしい。研究室は院生や助手、ゼミ生だけでスペース的にもいっぱいだったのだ。

「九城は聴講生でな。学生じゃないんだけど教授も含めて妙なコネがあるんだ」

「……十崎さんと九城さんて何者なんですか？」

「本人達に訊け」

黒田は立ち上がった。

「十崎のサークルに入ろうと入るまいと、ゼミの根回しは俺が手伝う」

「え……」

七海は驚きのあまり言葉を失った。今日はそんなことばかりだ。

「やな思ひさせたしな。理由はなかったわけじゃないけど、やりすぎた。いじめられるつらさは知ってるのにな」

呟き、立ち上がり入口に向かう黒田を呆然と見送った。

「それから俺の実家、三重の田舎でな」

黒田はドアノブを回しながら、無表情にいった。

「ガキの頃近くの滝に落ちた。しかも三回。滝の裏に宇宙人の秘密基地があると思ってな。」

七海が腹を抱えて笑い出したのは、ドアを閉じる音がしてしばらくたってからだった。

「あははははは！」

顔を逸らし、体を折り曲げ笑う笑う。

黒田に悪いとは思わなかった。彼がそう望んだのが分かったからだ。

「あははははは……はっはっ……はぐっ、ひっ、ひぐっ、ひっ、ひっ」

七海の頬を涙が濡らし始めた。夕日が七海の未来を照らすかのうに、その雫を茜色に染める。

何年ぶりか……何年ぶりに私に両手を広げてくれた人たち。居場所。

私が一番欲しかった私の居場所。

残照が談話室を、別世界のように暖かい色で満たした。

拭っても拭っても涙は止まらなかった。

七海が研究室の扉を開けたのは、すっかり日が暮れてからだだった。室内にはノートパソコンのキーボードをを叩いている十崎がいるだけ。

十崎が七海をみた。

「いい顔になりましたね」

「おかげさまで」

泣き腫らした眼のままで、七海は自分に両手を広げてくれたもう一人の人物に微笑んだ。

七海は以前うけとったまま返し損ねた入会用紙を突出した。

「これ、お返しします」

それを受け取った十崎は、用紙に眼を落とした。

七海に目を戻し、十崎は魅惑的な笑顔に向けた。

「九城に連絡します」
なぜだろう。

その向こうに砂漠の広がり、鼻孔を刺激する青く清冽な大気、突き刺さる灼熱の日差しが、七海には見えた様な気がした。

この人の笑顔には、私の心を掻き立てる、何かがあるんだ。

七海は体の中で鳴り響く、フルオーケストラのファンファーレに、背筋をぞくぞくさせながら思った。

兄が言っていた。

『ダンサーは、自分が選んだ曲で踊るもんやで』

これから、何が始まるのだろう。

自分が選んだステージ、全く趣味じゃない音楽は、かからないはず。

ダンスホールに鳴り響くのが、どんな調べであろうと……私は壁の花になるつもりはない。

ちっちゃい頃から、自分の足を踏みそうなドンくさいリズムでここまで来たけど……

おしゃれじゃない靴でも、素敵なステップは踏めるのだ。ましてや。

未だ自分を見つめている、十崎の微笑みに胸をときめかせながら、七海は笑った。

一緒に踊ってくれる人たちは、なかなか素敵そうなもの。今宵の一番手が、七海に手を差し伸べて言った。

「ようこそDNCへ」

第二章 ウル

イスラム教。

八世紀に現在のサウジアラビアで、ムハンマドが興した、アラ
ーを唯一の神とする、世界三大宗教の内のひとつ。

偶像崇拝を禁じ、生活習慣の細部まで規範がある。

イラク。

一九四〇年代にアラビアのロレンスで有名な、英国に嵌められる
までは、メソポタミアと呼ばれた地域。

二〇〇三年、アメリカは査察により、この国のミサイルその他の
兵器を押さえ、丸裸にしてから侵攻した。アメリカの介入を歓迎し
たのは、政府の中枢を占める少数派のスニー派に抑圧されていた、
クルド人と、シーア派イスラム教徒達である。

アメリカは、早々と勝利宣言したものの、かつてのアフガニスタン・
ソ連のように、戦況は果てしない泥沼に突入する。

そして、アメリカ軍、イラク人共々、戦時中、他国から紛れ込ん
できたイスラム過激派による宗派、民族の区別なく行われるテロに
悩まされることになる。

古より、独立を悲願するクルド人は、世界最大の土地を持たない
民族達である。イラク北部に隣接するトルコ、イランにまたがって
生活しており、その元遊牧民が住まうイラク北部地域は、現在、ク
ルディスタン自治区と呼ばれていた。

比較的治安が安定しているため、南部から流入したアラブ人たちの
避難場所にもなっている。

彼女はそこにいた。

眼下に広がる峻峰を、彼女はいつものように眺めていた。

峰を渡る風は冷たく、身にまとっている色褪せた、緋色の民族衣装と多くはない装飾品を奪い去ろうとするかのように、容赦なく吹き付ける。

イラク北部の山間にある、寒村にまだ春は訪れない。

彼方まで見通すことが出来る白い乾いた景色の中、古代の城壁に囲まれた都市、アルビルが遠くに見下ろせた。

空だけが高く青く、赤茶けた大地との境目で、芒洋としたコントラストをなしている。

「ウル」

呼び掛けに、彼女は振り向いた。

被りものからこぼれる黒髪を風が梳き、褐色の顔を覆う。

それを細くしなやかな指が払いのけると、意志の強さを湛えた黒曜石のような瞳、次いで美しい顔がさらけ出された。

ただ、彼女を創造する際、天の何者かは、少しばかり悪戯心を発揮したようだ。整った鼻梁、薄く引き締まった口許、それらが織り成す調和は、アラブ系にも極東系にも見え、容貌から国籍を判断する事が困難だった。

だが美貌と言うには、まだどこか可憐さを残したそれは、どの国の基準で見ても美人だろう。どこか近寄り難い雰囲気を感じさせるのは、その容姿のせいというより、全身から発散される気品によるものだ。

薄汚れた民族衣装を着た、アラブ人らしき少年は息を切らして立ち止まった。

「サラーム、アラディン」

女が低く、官能的とすらいえるハスキーボイスで言った。

「サラーム。ハシム師が呼びだよ……今日は何か見えた？」

少年は山々に視線を向け、次いでウルと呼んだ女の、澄んだ瞳に眼をむけた。

「いや。何もない」

素っ気無く女は言ったが、少年はにっこり笑っただけだった。

歓声に眼をむけると、少年が走って来た村の方からバラバラとこ
っちに向かつて子供達が、一ダースほど駆けてくる。

ウルに来訪が、伝わったのだ。

それを見たウルは、一瞬表情を緩めたが、直ぐに口許を引き締め
た。

「そのあたりで止まれ。」

大声で制止した。

ウルの立っているあたりからは、足場が悪く危険なのだ。

「危ないから、ここまで来ては駄目だと、何回言わせるんだ」

子供達は素直に従い、ウルのかなりキツイ物言いにもかかわらず、
一様にニコニコしている。

ウルが近寄ると皆、我先にしがみついて来た。

「ウル、遊ぼうよ」

口々に叫ぶ。

「後でな。ハシム様に呼ばれているんだ」
遊ば、遊ば。

アラディンは笑い、

ウルに眼くばせした。

ウルが微かに顎を引く。

「さあみんなモスクまで走るぞ。誰が一番早い？」

ウルは叫ぶや駆け出した。

皆も雪崩をうって走りだす。

ウルは徐々にスピードを落とし、最後尾の泣きそうになって、よ
ちよち皆の後を追う女の子を抱き上げた。

「行くぞライラ」

一瞬にして笑顔になったライラが、歓声を上げてウルにしがみつ
く。

イラク人でないウルが、ここにとどまる理由。
彼女が守るべき子供達。

ウルはアラディンと、モスクの入り口で別れた。

モスクといえば、壮麗で巨大なものを想像しがちだが、実際はプレハブ建ての公民館程の規模や、マンションの一室であったりする。ウルが通う村のそれも、レンガ造りで小規模なものではあったが、周囲は綺麗に掃き清められ、信者が大切にしている施設であることは一目でわかる。

ウルは鳥の囀りに送られながら、扉のない入口をくぐり、高校の教室二つ分程の広さの礼拝所を抜けた。その奥の十二畳ほどのスペースに、壮年の男達が十人程座り込んで談笑していた。部屋に漂うチャイの香に気が弛みそうになる。

「サラーム」

ウルが平安の挨拶をすると、あちこちからパラパラと挨拶が帰ってくる。

「師よ、お呼びですか」

上座に座っている細身で赤色のベストを羽織った五〇前らしきアラブ人に声をかけた。

「よく来てくれた。座ってくれ」

ハシム師は言った。

低く、よく通る声だった。穏やかな笑みを浮べている。他の男達も会話をやめてウルに眼を向けた。

無遠慮な視線にももう慣れた。最初の頃は、その眼の中に読み取れる、年頃の女性として耐えられない下卑たものに反発し、ことさら攻撃的になったものだが。

一六五センチの長身にグラマラスなスタイル、大抵の男が振り返るであろう魅力的な顔立ちに大きな要因があるのだが、本人は全く気付いていなかった。

十代の頃の苦い記憶とイスラム教徒としての規範が異性に対して堅固なバリアーをまとわせていたせいだ。

ウルが一礼して座ると、奥から黒いチャドルですっぽりと全身を覆った女がチャイを運んできた。礼を言い、湯気をたてる透明の、

硝子の器に口をつける。

フルーティーな芳香が口腔内に広がり密かに眼を細めた。ウル
の好きなトルコ等で飲まれる林檎のチャイだ。

「ウル。子供達に追い回されて大変だな。羊の世話でもしてる
うが楽だろう」

ハシムが軽い口調で言った。

「たしかに楽ではありませんね。でも楽しい事も多い。ライラは
少し体重が増えたようです」

「ほう、それはよかった。あの子は小さいからな。食べ物が好き
嫌いが減ってくればいいんだが」

ハシムがうれしそうに言った。

ウルが、彼を尊敬している点はここだ。

村を治め、イスラム過激派やよそ者のアラブ人をよく思わない、
一部のクルド人達から皆を保護しながらも、子供達の状況を把握し
ている。

「それから、アラディンがノートを欲しがっています。もう書く
ところがありません。英語の教科書も。それとヌールに新しい下着
を。あと……」

「おい、そんなことは後にしろ。子供のほしいものを聞くために
お前を呼んだわけじゃない」

体格のよい粗野な容貌の男が、ウルを言葉で遮った。

ウルが敵意を隠さず向けた視線を、ハシム師の親戚にあたるその
男が濁った眼で受け止めた。

サダム。

以前暗がり、ウルに抱き付いてきた男だ。

「貴様に気安く、お前呼ばわりされる筋合いなどない。何度も言わ
せるな」

その時の事を思い出して、ウルは怒りが増幅しそうになる。

「口の聞き方に気をつける！ 異人の女！」

サダムの方でもその際ウルに踵で急所を蹴られ、目を指で擦られ、

彼女がいつも持歩いている棒で、気絶寸前までめった打ちにされた時の屈辱が、よみがえったのだろう。

アラブ人は感情の起伏が激しく、面子を事その他重んじる。

ウルが密殺されない理由は……

ウル 2

血まみれで地面に丸まり、力無く呻くサダムの前でウルは荒い呼吸に豊かな胸を上下させた。

凍るような空気に白い息が速いペースでウルの中から吐き出される状況にそぐわない、降るような星空とあいまって、学生の頃に、田んぼの畔道で変質者にのし掛かられた時の悪夢が、フラッシュバックする。

一瞬パニックを起こしそうになったが、深呼吸し、顔の横で垂直に構えた一メートルほどの柵の棒を強く握り締めた。

大丈夫。

あの時は先輩が助けてくれたし、今は示現流剣術と、私自身が守護天使だ。

神の定めた人が現われるまで、この身体は誰にも触れさせない。

だが……

アラディンと散歩しているところに突然現れ、俺の金入れが無くなった、犯人は余所者のお前しか考えられないと、酔っ払い特有の据わった眼で吼えるや、抱きついてきたのだ。今でもそのおぞましさ、震えが止まらない。大半は、怒りから来るものだが。

「立て、イヌ！ 女相手にもう終わりか？」

中東では、最大級の侮辱を、コンボでぶつける。

言い掛かりをつけられ、後ろから抱きすくめられた上に、胸をまさぐられた怒りは到底治まらない。

「……殺す。雌イヌが……」

浅く速い呼吸を繰り返す黒いベストの背中が、もぞもぞと身を起こしはじめた。

血まみれの顔から、殺意に光る視線でウルを灼き殺そうとする。それに呼応して、ウルも黒曜石のような瞳に、あちら側の世界へ渡りきった狂気を漲らせた。

ウルは心の中で、呪文を唱えた。

正義は我にあり。

間合いを詰めるウル。

腰に手を伸すサダム。

ウルの裂帛の気合いが、口をつきかけたその時、

「ハシム師、こっち！」

こちらに駆けつけてくる足音と、ウルと歩いていたところを、サダムに追払われたアラディンの声がした。

二人とも、動きをピタリと止める。

程なく息を切らせたアラディンと、険しい顔つきのハシムが現われた。

一触即発の雰囲気をかぎとったアラディンが、慌ててウルにしがみつき、サダムとの間に割って入った。

ハシムもまたサダムの前に立ち、まだ腰から抜き切っていない、拳銃の射線を予め遮る。

「説明してもらおう、サダム」

サダムはハシムの平常と変わらぬ落ち着いた声に、狼狽を隠せなかった状況から立ち直ったようだ。

「ハシム、俺の金入れが無くなったんだ！ だからこの異人に知らないか聞いたら、怒って殴り掛かって来やがった！」

「ウソだ！ ウルに無理やり抱き付いてたじゃないか！ ハシム師、俺隠れて見てたんだ。それにウルが盗みなんかするもんか！」

アラディンが叫んだ。

ハシムがサダムに眼を据えたまま、その前から退いた。

視界の開けたサダムはハシムに血まみれの顔を向け、しわがれた声で吼えた。

「黙れ！ ガキが一丁前に色気づきやがって。異人の小娘の腰巾着は口を開くな！」

アラディンはやせっぽちで体力はないが、頭の回転は早い。わざとだろう、困惑した顔で言った。

「血まみれでいわれてもなあ……心身ともにKO？　イカしてるぜ、ベイ（旦那）」

ウルが思わず失笑し、ハシムがうまいな、と呟いた。

「……っ！」

サダムが言葉に詰まるほど頭にきたのか、口から出損ねた怒りが、そのまま右腕に奔流となつて流れたかのように、グリップに手をかけた。

が。

抜けない。

「相手は丸腰だぞ。」

いつの間にか近寄ってきたハシムが、その手を押さえていたのだ。サダムの手に、掌を被せているだけにしか見えないのに、びくともしない。

細身で中背の、首領のどこにそんな力が隠されているのか。

テイクリートで問題を起こし、二か月前にこの村に逃げこんできたというサダムには分からないようだった。

「なら、素手で殺れば文句無いだろう！？」

サダムは怒鳴った。

ウルが棒を構えて前にでた。アラディンを背後にかばう。サダムが血まみれの顔をそちらに向け歯を剥いて威嚇する。

「サダム」

ハシムが、楽しそうに呼び掛けた。

「今おまえの内ポケットから、失敬したんだが」

ハシムがにこやかに掲げた物を見て、無頼漢は凍りついた。ハシムはイタズラっぽく微笑んで、財布を左右に振った。

口をばくばくと開閉するサダムを見て、ウルは怒りを感じるより先に、ハシムの手管にあきれていた。まるでプロのスリだ。

「いかなあ。サダム」

間延びした声でハシムが呟くと、アラディンがウルにしがみついた。

訝しんでウルを見ると、アラディンはサダムと対峙したときにもみせなかった怯えをハッキリと表情に刻んでいた。

「人を嵌めるなら、もう少し頭を使わないと」

サダムが一瞬ボカンとした。

「返すぞ、ほら」

ハシムがサダムの眼の高さまで、古びた皮財布をトスした。

サダムが慌てて受け取ろうと、両手を伸した。

刹那。

「がっ」

苦悶の声を発し、サダムは前のめりにくずおれた。

「しかも酒臭い。始末におえん」

側頭部から地面に落ちたサダムを、足で転がし仰向けにさせる様子を、ウルは呆然と見つめた。左ボディからのワンツ―。

後ろから見た背中動きで推測しただけだ。手の動きは見えなかった。

「お前は本当にボンクラだ。普通そついう事をやるのなら、相手の荷物にプランティングしてからにするんだよ」

ここでハシムは、チラリとウルの方を見た。

数秒たってから、ウルは意図を理解した。

「すぐに荷物をチェックします。以後私物の置き場には気をつけます」

ハシムは満足そうに頷き、サダムに眼を戻した。

さすがに虫の息だ。

「とうわけで、その手は以後使えなくなった。そもそも金が欲しい人間が、こんな貧しい村に居着いたりするものか。」

ウルはアラディンが怯えている理由を理解した。態度とは裏腹にハシムは激怒しているのだ。一度村の防衛のため、彼が銃を撃つところをみたことはあるが、この村に通いはじめて一年になる彼女でも、長が人を殴るのをみたことはなかった。

「ティクリートで問題を起こして逃げて来たあげく、ろくに働かず、

酒は飲む、威張り散らす、あろうことか子供たちの恩人に無礼を働く……血縁でなければアラアの身許に送ってやるところだが」

淡々とした口調が、かえって恐ろしい。

「手首の切断で勘弁してやる。左でいいな？」

アラディンが、ひつ、と喉の奥で悲鳴をあげるのを聞いて、ウルは我に帰った。

「ハシム師、もうそれだけすれば十分です。よしましょう」

しかし腰から山刀を抜いたハシムは、振り向かずに行った。

「ウル、申し訳ない。ここからは村の問題なのだよ」

「お願いです、師よ。子供も見ています」

ハシムが無表情に振り返った。

アラディンがウルの中腹に半ば隠れ、蒼白になって震えているのを見て、ハシムは嘆息した。

「サダム。貴様はこの二人の慈悲によって救われたわけだ。それをゆめゆめ忘れるな」

ハシムがマチェットを、サダムの右足の甲に突き立てた。

絶叫が夜の大気を震わせる。

凍りつく、二人を尻目に、ハシムが淡々と言った。

「傷は浅い。治るまで、家に閉じ籠もっている」

「サダム」

ハシムの静かな呼び掛けに、ウルは我に帰った。

「二人とも落ち着きなさい。サダムも口のききかたを改める。ウル、子供達の話は後でゆっくり聞かせてくれ」

サダムは気まずげに眼を逸し、ウルはおとなしく頷いた。

あの晩以来、ウルとサダムはお互い良好な状態を保っていた。つまり無視しあっているのだ。あの晩の事は散々な目に合わされたサダムはもちろん、ウルも、震えていたアラディンも口をつぐんでいる。

「ウル。日本に行つてくれないか」

師の唐突な頼み事に、ウルは言葉を失った。

「どういうことでしょうか」

返事が口から出るまでに、実に五秒を要した。

「ある人間に会つて、預けてあるものを引き取つてきてほしい。君はアジアの諸言語に堪能だ。我々は、英語すらもとに話せない」

ウルは返事をしなかった。実際には英語と、日本語が母国語で、アラビア語は学習したので会話が出来るというだけだ。そのせいで思考が混乱することもしばしばで、あまりいいものではない。

「相手は日本人のですか？」

「そうらしい。アウルディーという通り名しか名乗らなかったが、ここにくるまでは、カジワラと名乗っていたようだ。所在地を見つけるまでに一年かかった」

ちようどウルがこの村に来たところだ。

「あまり友好的な関係ではないのですか？」

物品を預けておいて、一年間、音信不通というのが理解できない。ハシムは苦笑した。

「いや、彼の素性を、こちらが詮索しなかったただけだ。交渉のため日本人を雇つたが、完全には信用できん。そこで君に頼みたいんだ」

「相手は、何者なんです？」

ウルは、一番気になることを聞いた。

「……バグダッドでタチの悪い官憲を二人懲らしめた、まあ英雄だ」

「日本人がですか？ 相手を殺したんですか？」

「いや、それならさすがに指名手配されてるよ」

「でしょうね」

ウルはほつとしたように笑つたが、次のハシムの言葉で凍りついた。

「相手に薬を盛つて、眠らせている間に、路上で死に掛けている、ウィルス保菌者から採血した血を注射したんだ。死亡率一〇〇%のな」

「……………」

「そのまま北上して我々の村に数日滞在した後、更に北上してクルディスタンに滞在した後、帰国した様だ」

「やり方が残忍すぎます」

ウルは恐怖を覚えるよりも、腹が立った。

「異国の娘よ」

ずっと壁によりかかり眼を閉じていた、髭にうもれたような老人が口を開いた。

「なるほど、残忍じゃ。だが、権力を笠に着て、町にあふれている貧しい子供達を男女問わず犯しては責め殺すようなシャイターンにはちょうど良いと思わんか」

「……」

ウルは今度は別の怒りに囚われたが、何も答えなかった。

「その被害者の中の一人が、このウスマン老の孫でな。この村に形見を届けてくれた」ウスマン老が、小さいながらしっかりとした、装丁の本を取り出した。

コーランだ。

「その際、バクル——殺された子の名だ——のわずかな私物の入った鞆を渡された。その中に二つ、これが入っていた」

ハシムが懷から大きな判子大の薄青い物体を取り出して、ウルに掲げて見せた。

ウルは訝しげに眉をひそめていたが、その正体に気付いた。

「それは、昔、博物館でみたことがあります」

「そう、円筒印章と呼ばれる、古代メソポタミアの遺物だ。アウルディーが言うには、バクルが綺麗だからひとつを家族に、もうひとつをアウルディーにあげると言っただけ。ウスマン老は喜んでそうした。その価値を知らなかったし、知っていてもそうしたらう」

「盗品ですか」

「多分な。盗品の盗品で、出所はバグダッド博物館だろう」

アメリカによる侵攻の、どさくさにまぎれて略奪が行われた場所

だ。

「我々はこれの買い手を日本で見つけた。先程のサイヤーラと呼ばれる日本人に見つけてもらったんだ」

ウルは、眼に怒りを閃かせた。

「私に、運び屋をやれというんですか？」

「もちろん、君は断るだろう」

「無論です」

「運び屋は、サイヤーラの仲間がやる。君はアウルディーを説得するだけだ。日本の好事家は一本なら十万、二本揃えば二五万usドル出すと言っているらしい。アウルディーには、七万五〇〇〇ドルで買い取らせてもらえるよう交渉してほしい」

「お断りします。私には関係ありません」

ウルはハシムに対して、失望を禁じ得なかった。

ハシムは、答えはわかっていたというように、にっこりと微笑んだ。

「君の言いたいことは分かる。盗品を売る上に、恩人から利ざやを取ろうというんだ。後ろ暗いことこの上ない」

「そうですね」

ウルに容赦はなかった。

サダムが割って入った。

「ハシム師、もういい。そもそも彼女は同胞ではないんだ」

その言葉に、嫌味なものは混じっていなかった。むしろ諦めが感じられる。

「そのとおり。師よ、ミスターサダムに任せたらどうです？」

それでも何か疎外感を感じ、皮肉のひとつでもいわずにはおれないウルだった。サダムはちらりと不満げにウルを見たが何も言わない。

「当初はその予定だったんだ。彼は英語が話せるからな。しかしその足では……」

メガネを掛けた男が言いかけるのを、ハシムは苦笑しながら片手

をかざし、遮った。人のよさそうな笑顔からは、あの夜の酷薄さが想像できない。

「まあ待て、ウル。最後まで話を聞いてくれないか。君も知っての通りこの村は貧しい。子供達に、最低限必要なものすら与えてやれない。南方からの避難民の吹き溜まりだから当然だがな」

ここでハシムは真顔に戻った。

「結局バクルも――彼の上にアラーの祝福があらんことを――その貧しさに嫌気が差して都会に出た。だが一三歳やそこらで仕事があるわけがない。結局は盗みか、体売るくらいしかないのだ」

ウルはかすかに眉を寄せ、唇をかんだ。

ありふれた、そしてやりきれない話だ。

「そこからは私に話をさせてくれ、ハシム」

先ほどの、ウスマン老が口を挟んだ

「きつとこれも、アラーの思召しだったのじやろう。そう思わねばやりきれん……じゃがな、もう二度と、この村、いやできればこの村に限らずバクルのような子供達を出して欲しくはないのだ。わしは難しいことはよくわからん。じゃが、ハシムは子供達に未来を与えたいと言った。わしにできることなら命をくれてやってもかまわん。あの仇を討ってくれたアラーの御使いも、あまりしゃべらん男じゃったが、同じ気持ちに違いない。異国の娘よ。あんたはやさしい娘じゃ。子供達に対する態度や眼をみていれば分かる。そして腕っぷしも強い」

ウルはかすかに苦笑した。

「しかし、同時に荒事は苦手じやろう……いや、今言うことではないな」

ウル表情が強張った。その通りだ。

しかしこの荒れた地でそれを悟られたくない。だからこそ、自分でも尊大と思える態度と口調で突っ張って来たのだ。

「二五万ドルあれば、多くの子供達を救えるだろう。だがもつとあればもつと救える。わしには金など必要ない。家族に先立たれ、早

くアラアの御許に行くのを心待ちにしてるだけの年寄りじゃ。ハシムならうまくやってくれる。そう信じている。わしを含めて男共は死ぬために遠路はるばる集まった、フェダイン（戦士）だ。どうなるうとかまわん。娘よ。子供達を助けてやってくれんか」

うそ偽りのない朴訥とした物言いに、ウルは心は動かされた。

「ウル、私はこの村をもっと大規模な、難民村にしたい。学校を建て、医者呼びたい」

ウルは小さくため息をついた。アルビルで外国人として住民登録を行っている為、ビザは問題ない。

先日、慌てて脱いだ靴が重なっていたのを思い出す。クルドでは旅立ちの日が近いことの予兆だという。

ライラや、アラディンの顔が眼に浮かぶ。見て見ぬ振りはいできない。

サダム足の怪我に関して、自分に落ち度があるとは思わないが、皆に対してはやはり負い目を感じる。だが犯罪の片棒を担ぐのは彼女の中の潔癖さが許さない。

「私はそのアウルディーという男に会って、取引を持ちかけるだけでいいんですね？それ以上はやりません」

彼女の中で、妥協せざるを得ないラインだ。

「ああ。後はサイヤーラがやってくれる。交渉が不調に終わってもかまわない。目標の規模を小さくするだけだ。」

ウルは覚悟を決めた。

子供達のために、自分ができることの中では一番大きなことのような気がする。お金でしか買えないものもたくさんあるのだ。

「わかりました」

ハシムは真剣な表情を一層厳しくした。

「助かる。チケットはこちらで手配する」

「段取りはお任せします」

ウルは立ち上がった。

「ウル、アラアに誓おう。子供達の笑顔を、守ってみせる」

ウルは背中をみせたまま頷いた。やはり気は重い。

先ほど発言した男が、ウルに聞いた。経理をつかさどっている眼鏡の男で、アリという名だ。

「何か必要なものはないか。金は諸経費とは別に、三〇〇〇ドルくらいなら準備できる」

つまりは報酬か。

ウルは入り口のところでかすかに振り返って言った。

「ノートと教科書と下着、八歳児にあうサンダル三足とボールを」

第三章 遙かなるサバーランドとクルディスタン

その一週間後。

数千キロ離れた、極東の地では大学の講義中で、七海は俯いて必死に笑いを堪えていた。

「……でな、その番組でイタコにダイアナ妃の霊を呼び出させるってコーナーがあつたんよ、なあ、十崎」

右隣りにデンと座った九城が、七海の左隣に座っている相方に、小声で話を振った。

「ええ、あれは秀逸でした。まじめ腐った婆さんが……」

ここで突然声色を変え

「アチユい、アチゆい、マフィアコワイアラブ人カネモチ」

「めつちや日本語でさ。アラブ人関係ないし。息子らの名前聞かれたのかたつぽしか答えられへん」

七海は耐え切れず、額を机にくっつけて全身を震わせた。

負けだ。笑ったら負けだ。

唇を噛み、太股をつねって、全力で二人の悪意に反抗する。

ここで講師に目をつけられたら、最悪、今日の出席票がもらえない。

そもそも今朝、一緒に授業に出ていいか、とニヤニヤ笑う二人に尋ねられ、

「おしゃべりできませんよ」

と答えると、十崎が、

「笑わせたらどうします？」

と笑顔で聞いてきたのだ。

「笑いません。集中してるから」

「なら、今日一日ギブアップしなかったら、だれもが欲しがる考古アイテムを、進呈しましょう」

「受けて立ちます」

「トレヴィアン」

十崎と九城は、手を打ち合わせた。

受けて立たなければよかった。学問に学生生活を捧げんとする七海に、当然二人は容赦しなかった。次々と笑いの波状攻撃を仕掛けてくる。

授業中に突然立ち上がり、

「由美ちゃん！」

「永井クン！」

と言つて、顔の高さを三段階に変えて見つめ合うのは——キックオフするのは反則だろう。

ちなみに教室でそのあまりに古いマンガネタにツボられたのは、教壇で講義していた四〇前の講師と七海だけだった。

本当なら降参したかったが、悔しいのでどうしてもギブアップが言えない。

昼休みになる頃には、笑いすぎで、顔と腹筋が痛くなっていた。ついでに太股と、噛み締めていた唇も痛い。

講師や教授に目を付けられて、頭も痛い。

七海は盛大に溜め息をついた。
しかも。

「幸せが逃げますよ」

向かいの座席に、トンカツとカップラーメン、コーラという、滅茶苦茶な取り合わせが載ったトレイを運んできた、十崎が座った。

「誰のせいだと思ってるんです？」

恨めしげに、七海はにらんだ。

「まあまあ。物欲に眼がくらんだなつみんなも悪いで」

ニヤニヤ笑いながら、九城もトレイを持って、十崎の横に座った。「悪乗りしすぎです。教授や講師に目を付けられたじゃないですか」唇を尖らす七海に、九城はニヒルな笑いを浮かべて言った。

「なつみんってば……怒った顔もイカしてるぜ？……ヒヤッハー！これ言ってみたかったんよ、十！」

「映画版バンパイアハンターDですね、さすが九城です」

「九城さん」

真顔で七海は言った。

「おう、なんや？」

「自殺してください」

「いいすぎやろ！？」

「ちょうどそのバルコニーが開いてます。二階程度じゃ難しいかもしれませんがなので放物線を描いて、ユーキャンフライ」

「鯉のぼりの季節には、早いで！？」

この数週間の間に、十崎だけでなく九城とも大分打ち解けることが出来た。

九城という男は、見かけはおっかないし行動もおっかないが、陽気で竹を割ったような性格で、少なくとも七海には優しくかった。

テーブルに眼を落とすと九城のトレイには焼肉とカツ丼とプリン二個に紙パックのマミー。

七海はコメカミを押さえた。十崎の取り合わせもひどいが、こちらも大概だ。

「二人ともなんのバツゲームです、そのメニュー」

「ん？ いつもどおりやで、なあ十」

「いや、九城は少し変化がありますよ。プリンがいつもより一個すくない」

照れたように九城が笑った。

「わかる？ いや、そろそろ身体絞らにやいかんと思ってや」

突っ込む気持ちにもなれない。

そのまま見つめあい、手を取り合う十崎と九城。

「由良さん」

「真さん」

くッ、負けるものか。

そんなすけべなマンガは全然知らない振りをし、七海は無表情に、買ってきたうどんを啜りはじめた。

「で、九城」

コーラを飲みながら十崎がさりげなく言った。

「青汁はやめたんですか？」

「……！」

七海はむせそうになった。
やられた。

この悪魔超人どもは……

この悪魔超人どもは、七海が食べ始めるのを待構えていたのだ！
十崎は、今日一日としか言っていない。

そう、授業中だけ、なんて十崎は言わなかった

七海が油断したのだ。

うどんを口にいれたまま、飲み込む事も、吐き出すことも叶わない。
い。

……見える。

嗚呼、顔を上げずとも見えるッ！

六本腕で顔が三つあるヤツと、四角の塊で、下手したら金色のライターに変身しそうな悪者達が、カーカカ、フオーフオフォと嗤う影が！

七海は、進退窮まった。

どんぶりに、口の中のを戻すのも躊躇われるし、飲みこんでいる最中にやられたら、眼も当てられない。

万が一クリティカルヒットを喰らった日には、最悪鼻からうどんがでてくるという、今世紀最大級の、痛ましいことに……

その姿を想像してしまい、笑いのゲージが、一気に危険領域まで上昇した。

顔が真っ赤になり、うどんを口から垂らしたまま俯いて堪えた。
効いてない、効いてない。

七海は兄の口癖を暗誦する。

「おー、悪ないんやけど、かき混ぜんのがめんどうでなあ。テレビで見てええわあ、おもてんけど」

「織河さん、朝の青汁のドキュメント番組知ってますか？」

十崎が穏やかに問うた。

七海だけで無く、クイズにハマったことのある人間なら皆そうだが、知らない、と答えるのを極端に嫌う。止せばいいのにいつも十崎の振りを受けてしまうのもそのためだ。

「ふいつてはふ」

飲み込むチャンスを逃した。

いや、無理だ。

鼻からうどん。

それだけは避けたい。

「なら話は早い。あれがんばって働いてる一般の人が苦勞の末にそこそこ成功して現在に至る、って形で紹介されてるじゃないですか。例えばこんなカンジで……」

ロシア系トルコ人のメフメット・サバスキーさんは苦節十年、やっとこの島根の地に、ガラタ橋、名物サバサンドを根付かせる事が出来ました。店の名は、彼の敬愛していたアメリカの、黒人アーティストに因んでサバーランド・島根」

子供一人で遣いにやれんなあ。

九城が背もたれに体を預けて呟くのを、七海は遠くで聞いた。

メフメット・サバスキーさん。

サバーランド島根。

あかん。

腹筋が痙攣し、視界が揺れる。弛みつつある口から麺が一本、二本と丼の海に帰って行く。

噛み切れない。噛み切ったらもう戻せないからだ。

神様。

「それでかならず過労や病気で倒れて、奇跡的に生還した彼は、健康に気を使い青汁を飲むようになった……がパターンじゃないです

か」

七海は肩で息をしながらカクカクと頷き、うどんを噛み切って腹を括った。

飲み込む。一瞬のスキを突き飲みこむ。

「あの番組で凄かったのはね……そんな彼を襲った突然の悲劇。身体を蝕むのは癌！ でコマーシャル」

今だ！

七海は意を決して口の中に残ったうどんを飲み込む。

けれど七海は賭に負けた。

九城が続ける。

「んでコマーシャル明けのナレーションが、まさかの『幸い癌ではなかったが』……癌ゆーたやん」

「んげぶっ」

がはげへこぼ、

ごっほごっほげべ

によるん。

パーティーで鳴らすクラッカーのように、自分の顔面から、ひも状のものが咲くのを感じ、七海は奈落の底へ突き落とされた。

七海は、顔を光の速さで俯かせながら箸を置き、まだとまらぬ咳ごと顔面を、取り出したハンカチで必死に覆う。

……

全てが終わり、涙目でおそろおそろ顔を上げると、硬い表情の九城と、興味津々の笑顔で、ガン見している十崎がいた。

「……いや、正直すまん。ここまでなるとは思わなかった」

九城が引いたままの顔で言った。

周りを眼だけで伺うと、幸い他の学生はこちらに注意を向けていなかった。

十崎は微笑み、拳を握ると励ます様に言った。

「えんがちょ」

出立の朝が来た。

あの会合以来、一週間が経っている。

ウルは、青く澄み渡った空を見上げた。

アラデインは思った。

背を伸ばし、垂直に空を見上げるその姿は、いつか海賊版のD V Dで見た、吹雪に耐える南極の皇帝ペンギンのような荘厳さだった。ウルは狼だ。

高貴と言う形容詞が、こんなにふさわしい女性を見たことがない。村のほとんどが、見送りにあつまった。

石造りの家の屋根から、子供達が見下ろしている。

大人達にかこまれていて、ウルに近付けないのだ。

屋根に登ることが、出来ない子たちが泣いている。

ウルは大人達を掻き分けて、ライラを抱き上げ、尚も泣きやまない彼女に二言三言呟いて頬擦りした。

子供達が一斉に泣き出して、ウルのもとに駆け寄ろうとした。

大人たちが道を空ける。

ウルが、ライラを抱いたまましゃがみこみ、駆け寄ってきた子供を空いてる手で抱きしめる。

あつという間に子供達の壁に囲まれたウルを見て、周りの大人たちは苦笑した。

一人づつ抱きしめては、言葉を掛け、頭に頼ずりする。

自分も駆け寄りたい衝動を、ぐっと我慢しながらアラデインは、自分の任務に思いを馳せた。

車で二時間ほどのアルビルの空港で、円筒印章をサイヤーラの仲間へ渡す。

それは、自分と会計のアリの役割だ。

仕事に関しては、なみなみならぬプライドを持っていると評判のサイヤーラだが、異教徒をどこまで信用してよいものか。

そして……

「アラデイン、行くぞ」

運転席のアリに、声をかけられて我に帰る。

給油が終わったらしい。

車の傍に放置されている、空になったポリタンクから、垂れる雫はピンク色だった。イランからの密輸品だ。最近は純度の高い、イラク製の黄色いガソリンは手に入りにくいらしい。

これで世界第三位の、原油埋蔵量を誇る国だとは笑わせる。

全てフセインと、アメリカのせいだ。

ウルが立ち上がった。

泣き声が一層大きくなる。

ウルが追い立てられるように車に乗せられた。空港まで会計を司るアリとアラディンが一緒だ。ハシムは村を留守に出来ない。

「感謝する。君が無事に帰って来てくれないと、子供達が怒る。私もタダじゃ済まない」

ハシムが笑って言った。

「すぐに帰ります。私にはここで、大事な仕事があるので」
ウルは涙に潤んだ眼を、後部座席から子供達に向けた。

「すぐに戻る。みんないい子にしてるんだぞ。崖には近付くな」

車が走り出した。

「神の御加護を」

ハシムとウルは、互いに言いあった。

追いかけてくる、子供達の声が徐々に遠ざかる。

やがて喚声は砂埃の向こうに消えた。

その光景を、石造りの粗末な家の窓から、見つめる影があった。

やがて窓から離れると、使われていない暖炉の中に手を突っ込み煙突の裏側の壁に隠してある衛星電話を取り出した。

「リオンよりベースへ。予定通り、鷲は飛び立った」

道中、アラディンが話かけても、ウルは生返事を繰り返すだけだった。

心の中では、今別れた子供達の事ばかり考えていた。

アラディンは聡い子供なので、それ以上話かけてこなかった。やがてアラディンは眠り込んでしまった。

ウルは、そつと膝を貸してやる。

あどけない寝顔を見た、ウルの口許が弛んだ。

「アラディンは寝たか？」

道中必要事項しか話さなかった、アリが口を開いた。

「ええ」

「ハシム師からの伝言だ。安全を第一に、兎に角無理はしないでくれ、とのことだ」

「以前も聞きましたが、相手はどんな人物なのですか？」

ウスマン老の話は、美化されているような気がして、参考にしていいものかどうか。

「身長は、ハシム師より少し高い程度で痩せ型。村に現れたときは、アラブ人のなりをしていたよ。黒髪に黒目で、まばらな髭……ハザラ人（モンゴル系イスラム教徒）かと思った。年の頃は二〇代半ば……かな。若かったが、落ち着いていて、穏やかな目をしていた。

それなりに上手なアラビア語を話していた。バグダッドでNGOをしていたといっていたが、多分嘘だろう。軍人にも見えなかったがね。いったい何者なんだか……ただな、ひとつだけわかってるのは」

次の言葉は、ウルの脳裏にこびりついて、離れることはなかった。

「ウスマン老が言うような、上等な人間じゃない。官憲二人に、注射をしたときの事を話している時だけ、子供が夢を語る時のような輝いた眼をしていた。殺しても胸が痛まない相手を探して歩いている……心のどこかの配線を間違えた、狂人だよ」

アルビルの空港に着いたのは、昼前だった。

アラディンは、車の停車する振動で目が覚めた。

そして、その途端、後悔した。

ウルのそばにいられる、最後の機会なのに。

けれど。

アラディンは、目を開けたとき、信じられないものをみた。柔らかいひざの上に、自分の頭を乗せたウルが見下ろして、慈母の様な微笑みを浮かべているのだ。

ここまで優しい笑顔を浮かべる彼女を、アラディンは滅多に見たことがなかったし、自分にむけられたことはなかった。

「アラディン、少しばかり留守にする。その間子供たちをたのむぞ」アラディンは、まだ夢の中にいるのだろうかといぶかりつつ頷いた。

ウルは、アラディンの頭を、豊かな胸の間に抱えた。

「あの晩サダムから、私を守ってくれてありがとう。汝の上に平安のあらんことを」

遙かなるサバーランドとクルディスタン2

ずんずんと早足で去って行こうとする七海を、九城と十崎の悪魔超人コンビはさほどあわてず追いかけた。

「俺まだ食ってる途中……なつみん、ごめんて」

「九城は、食べててください。よければ僕の分も」

十崎は、後からついてくる九城を振り返り、自分たちの座っていたテーブルをさしていった。

じゃあ頼むで、九城の声を背中で聴きながら、十崎は、七海の後ろ姿を追いかけた。

「いや、悪かったです。ちょっとやりすぎました」

十崎は七海の隣に並ぶと、かなりふくれっ面のまま、早足で歩く横顔にさほど悪びれもせずと言った。

「ついて来ないでください」

とげとげしく言い捨てる七海に、

「大丈夫ですよ。僕ら以外は誰も見てません……決定的瞬間を」

「ついて来ないでください！」

「まあまあ……これもあなたがやってきたクイズと同じ、ルール内での戦いじゃあないですか。まあ、確かに説明が足りなかったのと、隙をついたのは認めます」

七海の経歴を、黒田から聞いたのか、或いはその逆なのか。

気にはなったが、七海はむくれたまま歩き続ける。

「昼ごはん抜きってわけにはいかないでしょう？ パンが何か奢りますよ。だからあんまり怒らないでください」

七海の歩調が、心なしか落ちてくる。

「織河さん、じゃないと僕は」

十崎が、深刻な表情で続けた。

「……アメンホテップ……三世」

……ぶふっ

「……あつ、ごめんなさい、間的につい。ちよつと、織河さん」
十崎、そして自分自身に対する怒りという燃料を注がれたきれいなあんよが、さつきよりも速いスピードで前進を再開した。

「……いや、悪ノリは僕の悪い癖です、怒ったままでも仕方ないとして、ちよつとこれを見てください。今朝言つてた景品です」

今度は、横に並ぶ十崎から思い切り顔をそらしつつ歩く七海の目の前に、あるものを突き出した。

いやおうなく、視界に入るものが何かに気づき……

七海は我知らず、足を止めた。

「それって」

「きれいでしよう」

それは円筒形の薄いブルーの物体だった。ハンコほどの大きさで側面に複雑な彫刻が施されていた。

「円筒印章じゃあないですか……なんでこんなもの」

「手にとつてみてください。放しますよ」

怒っていたのも忘れて、七海は、慌てて両手で受け取った。

「きれい……私遺物を手に取ったの初めて」

七海は、時間も場所も忘れて、ただ手のひらの上の、古代のハンコに魅入られた。

「これ、大学の所蔵物ですか？」

「いいえ。我々が手に取れるのは、実測のために置いてある、三角縁神獣鏡のレプリカぐらいでしょう。僕が個人的にイラクで、仕入れたものです」

「イラク……冗談に聞こえないんですが」

「それは本当です。旅行は好きなので、アジアをうろついていたんです。一年前の話ですが」

これ以上七海を怒らせるのは、サークル脱退の危機と判断したのか、十崎の口調は優しいものだった。

「まさか本物!？」

七海は素っ頓狂な声をあげた。

十崎は楽しそうに笑った。

「本物だったら闇ですごい値段がつきますよ
「ためしにボケてみただけです。……きれい」

十崎もその様子を楽しそうにみていたが、
おもむろに言った。

「差し上げますよ。約束の報酬って奴です。あと、悪乗りしたお
詫びと、ウェルカム・アワー・サークル」

「いいんですか？ わーいやったー」

我ながら、賄賂によわいなアなどと思いつつも、綺麗なアイテム
をもらって単純に嬉しかったし、正直、十崎がここまで素直に謝る
とは思わなかったので、機嫌を直さざるを得ない。

「ええ……あなたにならいいでしょう。これ一個だけしかないんで、
大事にしてくださいね。」

「はい！肌身離さず持つてます」

七海が、ぴょんぴょん跳ねながら喜ぶのを、十崎は目を細めてみ
ていたが、振動する黒い携帯を取り出し、画面を確認すると言った。
表情は変わらない。

「すみません。急な用事が出来ました。お昼からはあなたの不戦勝
です。九も帰るんじゃないですかね」

「二人でお出かけですか？」

「いえ、そうじゃありません」

十崎は、謎めいた微笑を浮かべた。

「初めての、共同作業ってやつでしょうか」
「？」

「さっすがにくいきれへんな……」

もしかしたら、口を動かしながら九城はひとりごちた。

その時、携帯からエアロスミスの着メロが流れ出し、九城は顔色
を変えた。

周りを見回すと、まだチラホラと学生がいる。

舌打ちして早足で食堂をでる。その間も携帯はやかましく歌い続ける。

「……はいー。おー久しぶり、はうあーゆーほーるどおんぷリーズ」階段を駆け降り、人気のない食堂裏に回ると、がらりと口調を変えた。

「ご無沙汰しております、サー」

よどみのないきびきびした英語だ。 九城を知るものがみたらびつくりするだろう。

「……からかわれているのかとおもったよ、ジェイソン」

太平洋を隔てているとは思えないほどのクリアーな音質で懐かしい声が、自分の通り名を口にするのを聞き、九城はおもわず苦笑した。

「失礼いたしました、校内だったもので……」

「そう硬くなるな。もう一年近くなるか……そっちでも相変わらず暴れているのかい？」

「勘弁してください。やっと、普通の生活ってやつに慣れつつあるところです、サー。大佐こそ、相変わらずリングでKOの山を築いておられるのでは？」

「……いや、最近はコート（裁判所）でくそつたれた、人権派弁護士どもとの、血を流さないボクシングがメインだよ」

「想像が付きませんね。バグダッドの方が、お似合いですよ」

二人は笑い合った。

「イラクでは、一年近く本当にお世話になりました」

「世話になったのは。こっちの方だ。今もまだ世話になっている」

「とんでもありません。本社から指名をいただいたときは、大佐の名前を聞いて本当に驚きました」

「今の会社はどうだ？ まあ、以前いた、デザート・ローズ社に比べればどこでもマシだろうが」

現在籍を置いているPMC——民間軍事会社——ツイン・トリガー社で九城は、長期休暇扱いになっており、 傭兵稼業は休職中だ。

一ヶ月、八〇万近く稼いでいたので二年くらいは働かなくても平気だ。

「まったくです。悪くないですよ、後から撃たれる事もないし」

その時、九城の脳裏に、思い出したくない光景がフラッシュバックした。

吐き気と目眩がする。まだ軽口を叩ける段階には、至っていないようだ。

「……だいたいいいようだな。安心した。……どうした？」

「いえ、なんでもありません。それで例の件ですか？」

「そうだ、動き出した。エージェントから連絡があつた。運び屋は若い女だ。特徴は……」

九城は、電話の向こうの大佐が述べる、女の特徴を録音しながら暗記した。

「で、運び屋がこつちに到着するのはいつですか？」

「明日の、二〇一五時、新関西エアポートだ」

「……！ 急ですね。準備が間に合うかどうか」

「他のPMCの、手を借りるのかね？」

「いえ。もしものときは、日本の警察に頼ります。こちらでの女の仲間は、何人ですか」

「日本で人を雇ったらしいが、正確な人数は分からない、ただ、その中心人物はサイヤーラと呼ばれているらしい。今回は私個人の依頼だからカンパニー（CIA）のバックアップはない。すまない」

「いいえ。何とかかりますし、なんとかしますよ」

そう答えながらも、九城の中で、得体の知れない不安が広まっていった。

情報は命なのだ。

加えてあまりにも、準備期間が無さ過ぎる。例え、相手が女ひとりであつたとしても全く油断できない。テロリスト等は女性の方が残虐な場合が多い。その強がりをつたかのように大佐は続けた。

「すまない、ジェイソン……今回は君個人への依頼という形になっ

てしまった。君の会社を通じて依頼するのが筋なんだが、報酬の面で……」

「次お会いしたときには、一番高い酒をおごってもらいますよ」

九城はそれを遮る様に、ことさら明るい声で言った。

大佐は、笑いながら言った。

「そいつは、高くつくな……頼むぞジェイソン」

「その呼び名はやめてください」

九城も笑いながら答えた。

メールで資料を送ると言って、大佐は通話を終えた。

食堂にもどると、食べかけの食事はテーブルに置かれたままだった。人影はさつきより減っている。さっきの話で食欲は失せていたが、九城はいくらが残った物に手をつけ、トレイを返却コーナーに戻した。歩きながら携帯を開くと大佐から英文のメールと写真が送られてきていた。子供達と一緒にいるところを気づかれないように撮ったものらしい。件の運び屋の顔を拝んで九城は短く口笛を吹いた。

「美人だな……」

アラディンたちと別れて一〇分後、ウルは空港構内のカフェに腰掛け、豆を直接淹れるトルコ式コーヒーをすすっていた。

甘ったるいチャイに慣れている舌には、久しぶりに飲むそれは、なんとも苦い。

黒い水面を見ながら、ウルは今後の事を考えた。一年ぶりに日本へ戻る事になったのに郷愁は感じなかった。

それほどいい思い出が、あるわけではない。

むしろ今の村が、自分の居場所である気がするのだ。体に流れるクルド人の血が呼んでいるのだろうか。

父は日本人だが、母はアラブとクルドのハーフで、祖母の時代に移住してきた中東系アメリカ人だ。ハワイで結婚式を挙げ、二ヶ月

もしないうちにウルを出産。勿論計画的なものだ。そのため、ウルは日本とアメリカの二重国籍で、二一歳になる今年中にどちらかの国籍を選択しなければならない。

幼少をアメリカで過ごしたが、911で有色人種への風当たりが強くなったため、高校を日本で過ごし、日本の看護専門学校にすんだ。

いったい、私は何人なのだろう？

いつもの自問自答を繰り返す。

そのこともあって、看護学校を卒業すると同時に、独りでイラクの親戚を訪ねた。難色を示す父、猛反対する母に就職前の最後のチャンスだから、クルド人がイラク国内でクルディスタンと呼称している北部は、日本並みに治安が良いからという説得で押し切った。

母に反発したのはおそらくそれが初めてだったろう、湧き上がる小さな勝利感を抑え切れなかった。

ウルはあの事件以来、示現流剣術を習い始め、性格がほぼ一八〇度変わった。

拍子抜けするほど、近代的なクルディスタンで二週間が過ぎ、外へ出るのが億劫になり始めた頃だ。ボランティアをしている親戚のおばさんの勧めで、歩いて三〇分ほどの山岳地帯にある、アラブ人達が住む難民キャンプを訪れた。治安がよいため、イラク北部のクルディスタンと呼ばれる地域は、南部からの難民で溢れかえっている。クルディスタンには、アラブ人の子供達しかない小学校もあるぐらいだ。

山岳地帯にある、うち捨てられた民家や倉庫に住み、ゴミの中から遊ぶものを探している子供達の姿に、彼女はショックを受けた。自分にも何か出来ないか。

そうしてなんとなく始めたのが、ボランティアで、就学前の幼児たちを含む子供達に、青空教室を開講することだった。

開講当初から、時間を持て余していた子供達で、授業は盛況だった。胡散臭い目で見ていた、村の者たちも回を重ねるにつれ、同じ

色の肌を持つ、彼女に気を許すようになった。

妙齡で美しいウルは、たちまち男達の好奇の的になったが、彼女自身がクルド人の血を引くイスラム教徒で、親の決めた婚約者がいるというハッターも加わり、妙な考えを、起こすものもいなくなつた。

それでも一部の、真剣に求婚してくる男たちには辟易したが。

しかし、地雷だらけの——それでも治安はいいのだが——クルドイスタンからなかなか帰国しないウルに母は激怒していた。

しつこくイラクを出国するよう電話をかけてくる、一代で財を築き上げた強烈な個性を持つ女傑とは、結局ケンカ別れになったままだ。ウルが世話になっている親戚や、事情を聞いたハシムらは心配して、一度お母さんのところに戻るべきだとしきりに言われたが、頑として受け入れなかった。

ここが私の居場所なのだ。

そうして一年が経った。

カフェに入ってきたアラディンとアリが視界に入りウルは思考を中断した。

二人ともウルと反対側の壁の席に座った。

もちろん他人の振りだ。

ややあつて二人連れが入ってきた。

片方はベレー帽を被り片足を引きづつた中東系の老人、もう一人はチャドルを着て縁取りの濃い目だけを出した小柄な女性……子供かも知れない。

アリはその姿を見つけ、大げさな身振りで立ち上がり——中東では普通だが——声をかけた老人はうれしそうな顔で近づき、抱擁しあい、鼻がくっつくような距離でお互いの親族の無事を確かめ合った。女性は気遣わしげに、無言で老人に寄り添っており、アラディンも無言で立ち尽くしている。

しばらく大声で久しぶりに会ったかのようなやり取りをした後、老人と握手をしてアリとアラディンは立ち去った。

ウルに、ちらりとも視線を移さなかったアラディンは、やはりえらい子だ。

二人は、やはりウルから離れた場所に座ると、ウェイターに飲み物を注文した。

搭乗時間ぎりぎりまで、時間を潰した二人は店を出た。

ウルもその後を、離れて追う。

もしもの時のために、空港内の三人が見える位置に、アリらは待機しているはずだ。

ドバイの空港で、初めてウルは老人の供をしている女性の素顔を見た。

アルビルからの便が発着する、ターミナル？のトイレから出てきた時は、それが彼女だとまったくわからなかった。

連れの老人の隣に、腰掛けるまで判らなかったのだ。

正直驚いた。

思ったとおりローティンの少女だったが、

ジーンズにスニーカー、ポニーテールにした黒髪をインディアンズロゴの入った野球帽で押さえつけているというそっけないでたちでも……

はっとするような美貌は隠せなかった。

黒目がちで透き通るような白い肌、桜の花びらのような唇、ほっそりとした体に長い足……雑誌のグラビアでも、なかなかお目にかかれないような典雅で線の細い美少女だ。ただ、左頬に張られた、大きな絆創膏がやたらと不似合いだった。

これから日本への直行便に乗るので黒いチャドルを脱いだのだらうが、目立つのは変わらないだろう。

願わくば、審査官が彼女に見とれてくれたら……美人というものも考えものだな、自分の容姿に無頓着な彼女は己のことを棚に上げてそんな感想を持つと、読みかけの雑誌に眼を戻した。

保安検査官の石本豊は、この職業について五年になる。金属探知機を手にしたまま、ころころとキャリアバッグを引いて近づいてくる少女に、眼を奪われずにはいらなかった。

五年……いや三年後には一体どんな美人になってんだ？

ジーンズにラフなトレーナー。

服って美人を引き立てることは出来ても、逆は無理かも、などとぼんやり考えていた。

背筋の通った、それでいて嫌味な感じのしない歩き方。

顔を赤くしてよつこらしよ、と検査台にトランクを載せる姿まで、何かのシーンに見える。

「麻薬、その他違法なものはもってませんね？」

三〇半ばの、同僚の女性検査官が、トランクを開きながら語気鋭く声を掛ける。

女性検査官が検査する、というのが原則だ。惜しい。

少女は、一瞬きよんとしたが、あわてて何度もうなずいた。

次の瞬間、

「……きゃっ！　だめ！」

あわてて、開いたトランクに飛びつく。

一瞬周りが色めきたったが、はっとしたかのように、少女が真っ赤な顔で後ずさった。

華奢な掌で、覆い切れなかった可愛らしい下着類が、トランクにつめられた荷物の表面に散らばっていた。

「ごめんなさい……隠すの忘れてた」

うつむいて、消え入りそうな声でつぶやく彼女に、険しい顔をしていた眼鏡の女性検査官は、噴出してしまった。

「女同士でしょ、気にしないの」

石本も、萌えずにはいらなかった。

かわええ。

薄いブルーやピンクの下着が眼に焼きついている。

「はい。結構です」

女性検査官が、まるで姉のような笑顔で言った。
少女は赤い顔のまま

「ありがとうごめんなさい」

とつぶやくと、早足で行ってしまった。

ウルは、パスポートコントロールで、旅券を入国審査官に差し出した。

彼はページ目をめくり、ウルと顔写真を見比べる。

審査官は、しばらくパスポートを触って確認していたが、スタンプを押すと言った。

「日本へようこそ」

その一言は、ウルの裡に複雑な感情をもたらした。

第四章 サイヤーラ（前書き）

ようこそ、いらっやいませ！ いつも読んでくださり、ありがとうございます。今回は、幸という少女が登場します。楽しんでいただけたらうれしいです。

りょう

第四章 サイヤーラ

ウルが、関西国際空港の構内を出ると、すっかり日が暮れていた。吹き付けてくる潮風に、感動を覚える。一年近く、内陸部にいたせいだ。

沖の方の漁火が、遠い星のように輝いていた。強風に、肩まで伸びつつある黒髪をなびかせながら、駐車場に向かう。

しかし、寒い。

灼熱のクルディスタンにいたことを差し引いても、日本の四月はこれほど寒くはなかったはずだ。

ウルはこらえきれず、季節外れは承知の上で、トランクの中からロングコートを引っ張り出した。

広大なパーキングは、多数の街灯に照らされ、闇が白い蛍で駆逐されている。ウルのいた村とは、かなりの違いだ。

白い平凡な軽のバンの傍で、老人がニコニコと手招きしていた。

スライドドアを開け、後部座席に乗り込んだが、車内特有の黴臭さがなく、ほっとする。ウルはあまり乗り物に強くなかった。

すぐに老人が、車を発車させた。

車にはすでに、ドバイ空港で見た少女が乗り込んでおり、携帯をいじっていた。

パチンとそれを閉じると、車内が静寂に包まれる。

ウルは自分からは、話しかけなかった。

ベージュのコートの下で、柞の棒を抱いている。油断するつもりはない。

異変が起きたのは、空港と本州をつなぐバカ高い有料道路に、車が載ったときだった。

「くっくくく……」

少女が、肩を揺すって笑いだし、

「あーっはっはっはっ」

こらえきれなくなつたように爆笑した。

手を叩き、ダッシュボードの上に、靴のままの細い足を放り出し、バタバタとかかとを叩きつける。

運転席の、真後ろに座っていたウルは、呆然と斜め前の少女を見た。

可憐な容姿、鈴のなるような声と大口を開けて馬鹿笑いする姿に、ウルは自分が今までだまされていたかのような感覚に陥つた。

「やったやった！ 見事にやってのけたぜ、ざまあ見るとっつあん！
なあ、マス爺さん、私きっちり仕事こなしたぜ」

「これこれ、お客さんもいるんだぞ」

老人は苦笑して嗜めたが、少女は全く聞く耳を持たなかった。

「な？ 言つたとおり日本に入るときは、私がブツを持つてたほうが怪しまれないっていったろ？ どうやって荷物検査をパスしたか
つていうとだな……」

そこで少女は、ごそごそと小さなバッグをまさぐり、

「じゃん。これよ、これ。トランクを開けたら、このコたちがどー
んに見えるようにしといたんだ」

可愛らしい下着を、片手で掲げた。

「いやっ、だめっ」

突然、少女の声音が変わつたのに、ぎよつとしたウルだが

「だってよ、オイ。われながら致死量こえてんよ……をを鳥肌たつ
てら」

あつという間に、伝法な口調に戻る。

ウルは、どつと疲れを感じた。

「んでよ、金属探知機もつた検査官のおっさんが、私の下着ガン見
してやんの……あーいやだいやだ。ロリは犯罪です……まあ、でも
パンツさまサマってやつだ、今日メンスのきてそうなおばさんも丸
め込めたっしさ。」

幸は上機嫌で、ぶんぶん下着を振り回しながら、フリクニ・フリ

クラの節で元気に歌い始めた。

♪ ゆきーのパンツは良いパンツう

白いぞおー萌えるぞおー

ロリーのコカンにストライクうー、

欲しいかー高いぞおー

♪

ウルは顔をしかめて、窓の外に目を逸らした。聞くに耐えない。

「なーんだよ、姐さん、そんな顔すんなって」

少女がケタケタと、邪気たつぷりに笑いながら、初めてウルに顔を向けた。黒目がちの魅力的な顔に、不敵な笑いを浮かべている。

「自己紹介が遅れたね。私は幸って呼ばれてる。こっちはマスード爺さん」

「ウルだ」

短く答えた。

そのそっけない物言いに、幸は絡み始めた。

下着を、ダッシュボードに投げ捨てると、口を尖らせる。

「おいおい。ハッピーにいこうよ、ウルさん。見事、密輸に成功したんだぜ？」

「ミス・ウル。勘弁してやってください。初めての大仕事で緊張が解けたんでしょう。普段はこの半分も、しゃべらん子なんですよ」

「余計な事いうなよ、マス爺。それに私は、緊張なんかしてない」

「近くの駅で、降ろしてもらえないだろうか。明日おちあえばいいだろう」

ウルは、関わりあうことを、出来るだけ避けたかった。

だが、幸は歌うように言った。

「悪いけど、今日中に車屋とあってほしいんだ。明日の予定も詰まつてるからさ。このまま京都まで向かう。二時間ほどでつくだろ」

京都に入るなり、問題は生じた。

九条の交差点で、信号待ちをしていたウルたちの乗った白いバンは、ニヤケ面の若者達——ざっと五人はいるだろうか——に囲まれ立ち往生していた。

車高を低くして、下品に改造された4WDが路肩に二台寄せられており、彼らがここらでだべっているところで、折悪しく信号が赤になったのだ。

助手席で、深くうつむいている幸は、激しく後悔しているようだ。呪詛の言葉を呟いている。

確かに、幸もウルも並外れて綺麗だが、ダッシュボードに下着が放つてあるのを見られてなければ、ここまでの事にはならなかっただろう。

幸があわてて下着を隠したのも、彼らを焚きつける原因になった。「ネエネエ、お嬢ちゃん、その下着ちょーだいよ。中身でもイイヨ」茶髪でピアスをした、フライトジャケットの男が、助手席の窓を小突きながら大声で言った。

「俺、こっちのガングロの彼女、タイプー。手ーつなぎてー。タイプー」

泥酔したような眼をした肥満の男が、窓の外から爛々とした眼で覗き込むのを、がんぐろとはなんだろう？ と考えながらウルはシカトした。

防寒着をきている男達を見て、寒いのは私だけではないのだな、と妙なところでほっとする。

「チクシヨウ、人の初仕事に泥塗りやがって」

幸は俯いたまま、毒づいた。

インド人の運転手つきかよ、おい、じゃあ後ろのコ、ハーフかあ？
アーリア系と、アラブ系の区別も付かんのか？ ウルはイライラを押えた。

マスードは、困ったように笑って、クラクションを鳴らしているが、男達は退く気配がない。

「ム力つく。マス爺、轢くか？」

幸が俯いたまま、ボソボソと呟く。

「ナンバーが、クリーンなんだ。そうもいかんし、輸送の途中だ」
マスードが、後ろから我関せずと追い越していく車に、眼をやりながら答えた。

ハンドルを右に切って、隣車線から脱出を試みるが、進行方向に立っている細身で長身の男が、ガンガンボンネットを叩き始めた。

コラ、インド人危ねえだろが、殺す気か。

「そうなのよ、ぶっ殺したくてたまらないの、短小包茎野郎。

……マス爺やつちまおうよ。車は処分しちまえばいいじゃん」

幸が、くいしばった歯の隙間から、本気にしか聞こえない台詞を洩らした。

「短気を起こすな、幸」

マスードは、苦笑を男達に向けたまま言った。

このジジイ、アラブじゃねえの？ おーアルカイダ。

ウルは、怒りの溜め息をついた。

アメリカでも日本でもそうだった。我々中東系を見たら、必ずそれだ。

知ってるか？ イスラム教ってパンティ被るんだぜ。

ゲハハ、そりゃねえだろ。

幸は芝居をするのも忘れて、愕然と顔をあげた。

「……今コイツらパンティつつった？ ……ねえよ、ありえねえ」

ウルがポリスを呼べ、と口を開こうとしたときだった。男たちの誰かが、面を上げた幸を見て言った。

お、やっぱかわいい顔してんなこのコ。もしもーし、このタリバに拉致られたの？

その台詞が終わった瞬間、マスードはギアをバックにいれ、車の側面にもたれかかっている男達がよろけるのにも拘らず猛スピードでバックした。

ウルと幸が慌てて体を支える。

「つかまれ」

マスードは言うと同時にギヤを入れ替えた。これで脱出だ。出るなら最初からやれ。

ウルは思ったが、次に起きたことは、ウルと幸の想定外だった。喚きながら、ズカズカ歩いて来た長身の男とその隣の金髪の小男に向かい車を直進させたのだ。

上下がわからなくなるような衝撃と、短い悲鳴。

そして、ブレーキパッドの、歯の浮くような甲高いシャウトが、耳をつんざいた。

驚くまもなく、男たちは面白いように吹き飛び、二、三回転がって動かなくなる。

ウルは急発進で、シートにぶつけた頭の痛みも忘れ、呆然とその光景を見つめた。

幸も、あんぐりと口を開けている。

まるでスチール写真のように、誰も動かない。

「コスマク（m a t h e r c u n t）」

アラビア語の中でも、最低の部類に入る悪態を、静寂の中でマスードが呟いた。

てつめえ！

肥満体の巨漢が、助手席の窓を拳で叩き、幸が悲鳴をあげた。

二発目で、ガラスが砕けるかと思ったが、パワーウィンドーが、スルスルと下がり始めた。男が殴るのをやめて、手を入れて来る。

「ちよ、爺、何考えて」

幸の抗議は、男の悲鳴で遮られた。

マスードが、今度は無表情に、パワーウィンドーを閉め始めたのだ。

巨漢が、身も世もない悲鳴を上げるのを確認してから、マスードは車を急発進させた。

布団にくるんだ、木の枝をへし折るような音がして、さらに絶叫

が響きわたる。

マスードは、窓を下げて男を開放すると、巨漢はゴロゴロと転がった。

対抗車線の車が、スピードを落としてこっちを見ている。

マスードは、二〇〇メートルほど離れたところで停車し、車から降りると、ガムテープでナンバーをかくした。

マスードは、大騒ぎしている男達に手を振って、天に無かつて繰り出したアッパーの、肘の内側を掌で叩いた。フランス式のファックキューだ。

「さて、逃げ出すか、追ってくるか……」

マスードは、運転席に戻ると携帯を開いた。

「おい爺さん……」

幸は、青い顔で何かを言いかけたが、マスードの酷薄な表情に言葉を飲んだ。

「サイヤーラ、私だ」

ルームミラーで、二台の四駆がこちらに向かって走ってくるのを確認してから、マスードも車を出した。

「すまん、トラブルだ。九条でならず者の乗った、車二台に追われている……いや、関係ない、幸とお客にからんで来たところを、俺が轢いた……ああ、すまん。だがな」

マスードは、一呼吸おいて言った。

「あのゴミどもは、俺に向かってタリバンと吐かしおった。元北方司令官であるこの儂にだ。奴ら、言っではいかん事を、言っではいかん人間にいいおった……」

マスードは、片手で器用にハンドルを切りながら続けた。

「サイヤーラ、詫びは後でなんとでもする。依頼だ。九号線を西に走って、竹林におびき寄せる。奴等をアラアの身許に送ってくれ。どの車を使ってくれてもいい、死体の始末はこっちでやる。派手な葬式をあげてくれ……そうか、そうだな。わかった。それでいい。恩に着る」

通話を終え、携帯を置むと、誰にともなく呟いた。
「幸の見ている前で殺しはできんわな……」

第四章 サイヤーラ（後書き）

作者より

お読みくださりありがとうございます。

更新をすっかり忘れないかどうか、いつも心配なようです。

昨日も風呂で、1分前に体を洗ったかどうか、どうしても思い出せませんでした。気を抜くと、シャンプーも余裕で2回してしまう男です。

今回は、『サイヤーラ』が登場します。

どうぞ、よろしくお付き合い願います。

よろしければ、ご感想などをコメント欄に残してくだされば、うれしいです。

urumma@hotmail.co.jp りょう

サイヤーラ 2 (前書き)

ここまでお付き合い下さりありがとうございます。
それでは、ごゆっくりお楽しみください。

サイヤーラ 2

「なあ……この体たらくはなんだ？」

ウルは、断続的に伝えられる衝撃を、こらえるため天井に手を、前方のシートに膝をつつかえさせて聞いた。

二台の四駆が、後ろからクラクションを鳴らしながら迫り、時折バンパーをぶつけてくる。片側一斜線の一般道を、西に向かって三台は走り続けた。マスードの運転は、年齢に似合わず巧みで、前方に回りこまれるのをうまく防ぎながら、七〇km/h台をキープし続けた。

「すまん、客人。全てわしのせいだ」

「そうだな、お前達のせいだ」

幸が、不満げにこちらを見たが、ウルは冷たく燃える怒りの視線で迎えた。

「降りる。車を止める」

ウルは、低い声で言った。

幸が白けたように言った

「眼と耳ついてるか？ 今車止めたら、パンティ共に、よくて粗末な股間のブツで穴だらけ、悪けりや殺されるぜ」

「それは私のせいかな？」

怒気を孕ませて、ウルが幸に言った。

「あいつらにそう言や、見逃してくれるかもな」

幸が、能面で答えた。

「どのみち、今回の計画は無しだ。ポリスが絡んでくる」

ウルは横を向いて、吐き捨てた。

交通量が減ってきた。まるでわざわざ寂しい方にむかっているかのようだ。

「いや、客人。それはない。アラーに誓って言える……サイヤーラが依頼を受けたんだ。今夜のトラブルはなかったし、奴らはこの

世に存在しなかったも同然になる。」

「これ以上、おかしい犯罪に関わるのはごめんだ。降ろせ」

「おいおい」

幸が、あきれたように振り返った。

「イラクくん dari からここまで、愛と平和でも説きに来たのか？」

僕たちや、陽気でおしゃまな密輸団だ。とつくに、あんたは犯罪者なんだよ」

「違う。お前達といつしよにするな」

ウルは語気を強めた。

「客人。あなたはただ、話を持ちかけるためにこの地へ来たただけだ。何の法律も犯していないし、わしらとは無関係。行き先が同じじゃから同乗させていただけた。と、同時に今この車から降りられても、交渉から降りられてもわしの面目は丸つぶれになる。そこでだ」

マスードは、反対車線へ回り込んできたメタルブルーのハイラックスを、ちらりと見た。巨漢が、折れてないほうの手に握った木刀を窓から突き出して、屋根に叩きつけてきた。耳を聳する金属音に、ウルは顔をしかめて、そそくさと反対側の席に尻をずらす。

マスードは、ハンドル操作で距離をとりながら、淡々と続ける。

「取引しないか？ 金じゃないが、君が喉から手が出るほど、欲しがる物をやる」

「それは、興味深いな」

ウルは、窓の外に目を向けたまま、興味なさげに言った。コートの下では油断なく、柞の木を握り締めている。

「君の住んでいる村の辺りは治安が悪そうだな。わしはあのあたりに顔が利く。わしが言えば、おそらくスニー派の襲撃に関しては、止まるだろう。」

ウルは一瞬驚いたが、まなざしに疑いの色を濃くして聞いた。

「あなたは、イラク人ではないだろう？」

「イラクの北部には、アフガンからの民兵が、多く流れ込んでいる。知っているだろう、過激派と呼ばれる連中はほとんどが、外国から

紛れ込んできたイスラム教徒だ。それに、あのあたりの部族長たちとは親しい。可能だ」

木刀が、屋根を叩く音でうるさい。

「私はそれを、どうやって確認すればいい？」

ウルは半信半疑で、問うた。

「そうだな、ミズはシレルキャンプから来たといっていたか。ハシムの小僧はどうしておる？ アフガンの戦闘に、参加しに来たときは、初陣でがたがた震えておった。いっしょにおった眼鏡の小僧……名前は忘れたが、頭の良い奴だった。二人とも、基地内でアイスクリームを食わせてやったら、あまりのうまさに叫び声をあげておった」

「ハシム師と、アリさんを知っているんですか？」

ウルは思わず、驚きの声をあげたが、

「師？……こいつは、驚いた。わしも年をとるはずだ」

話しながらも、マスードは、鋭くハンドルを切る。

対向車がやってきて、ハイラックスは、やむなく元の車線に戻った。

「マス爺、とつつ……いや、サイヤーラは、いつ来るんだ？」

幸が、じりじりした口調で聞いた。

「もうそろそろ落ちあうころだ。客人、あとでハシムに、連絡を取ってみるといい。マスードが、つぎに会ったときは、ストロベリーアイスをご馳走してやると言っただのを覚えてるかとな」

「今の話を……」

「アラーに誓う。取引の話に乗ってくれるかな？」

ウルは、スカーフから覗く両目を、煌かせながらいった。

「そういう話なら、願ってもない……それに」

ウルはコートの下から、ゆっくりと柝の棒を抜き、胸の内語りかけた。

友よ、目を覚ませ。

「いい加減、駄犬どもの鳴き声には、うんざりしていたんだ」

ノラ犬狩りの時間だ。

ウルは、コートを脱いで膝の上に向け、得物を隠した。

「イヌどもの、運転席に寄せろ」

「おお、かつけー。急にやる気になったなあ 姉さん」

感極まったような、幸の嬌声を無視して、ウルは、タイミングを計ることに神経を集中した。

かなり凹凸になった軽が、対向車線に入り、スピードを落とした。徐々にウルが座っている助手席側の後部座席が、ハイラックスの運転席に近づき、運転席の男が、興奮した表情で、ウルに向かって何かをわめき散らした。

並んだ。

武器を握り締める、右の二の腕の筋肉が膨れ上がる。左手は添えるだけ。

「窓を開ける」

言われたとおり、マスードがウルの左側面の窓を開けた。

正義は我にあり。

愚かなことに、相手の男も、運転席の窓を開けた。

バカが。

「ぜえええええいつ！」

裂帛の気合と共にくりだされた、ウルの渾身の突きが、開きかけた男の口に飛び込み、前歯の大半をへしおった。

運転していた男は、陸に揚げられた魚のように痛みに暴れ、道路から逸れたハイラックスは、竹林に突っ込む。

「……すげえ」

幸が、やっとそれだけをつぶやいた。

「後一台だな。寄せろ」

ウルは、何事もなかったかのように次の指示を出した。

「……客人。唯乗っていてくれるだけでええんじゃが」

マスードが、言いにくそうに言った。

「……そうなのか」

ウルが、きよとした顔で聞き返した。

「あれ、生きてるかな」

バックミラーを見て、幸が不安そうにつぶやく。

ウルは構えを解き、スカーフの下で皮肉っぽく口元を歪めた。

「お優しいことだな。殺したいんじゃないかったのか？」

幸がむっとして、シートの隙間からこちらを睨んだ。

「勘違いするんじゃないよ。死体が出たら、後始末に費用がかさむんだ……にしても迷いねーな、あんた」

「やるときは、絶対に躊躇うな。剣術の師匠の厳命でな」

ウルは、棒に付いた血を、車内のティッシュでふき取りながら答えた。

マスードが、やれやれと言った感じで尋ねる

「反射的に、言われたとおりにしちまったが……喉をついたのか？」

「口の中だ。前歯が何本か折れたろうな。まあ、死んだとしても、お互い覚悟の上での勝負だ」

「いや、向こうは明らかにしてねーだろ」

幸が突っ込む。

「エアバッグがあるから、死んではいないだろうが……あまり現場を広げると、サイヤーラが苦労する……驚いたの、まだ追ってくるもう一台の、臍脂色のハイラックスは、止まることなくついて来た。

あちらも、常軌を逸している。

「で、どうする。座っているだけでいいなら、ありがたい」

幸の携帯が、流行のポップスを歌いだした。

「……電話……。サイヤーラ！……ハイ、幸。え、そっちから見えるの？ どこ？ そう、後の赤茶色の四駆。一台はやつつけた。で、どこにいるのさ？」

竹林に囲まれ、ぽつぽつと街灯があるだけの、交通量の途絶えた片側一車線の道に、二台の車の走行音が響く。

「どこ？ わかんねえよ。え、次の曲がり角？」

ぼろぼろになった軽が右折可能な道を、通り過ぎた瞬間だった。ライトを消した、四角い車が横合いから、獲物に襲いかかるかのように、サーフの後部かなりのスピードで激突した。

工事現場で、鉄板を落としたかのような緊迫した轟音が響きわたる、ハイラックスはブレイクダンサーのように回転する。

黒塗りの四角い車は、群生している竹を何本か折り敷いて止まったが、男達の乗った車は、竹林の奥深くまで突っ込んだ。マスードは車をゆつくりと停車し、ため息をついた

「もういい……視認した。」

幸が、呆然と携帯電話につぶやいた。

ウルを含め、三人は車から出た。息が闇夜に白い。

蒸気を派手に上げた四駆が、尻をこちらに向けて止まっている。

下手人の、黒い車がバックで動き出した。

ごついぼろぼろのアメリカ製4WDだ。

前方部は、ロールバーで強化している為か、傷らしい傷は見えない。

運転席から油で汚れたつなぎ姿の男が降りてきた。年は四〇前後だろうか、五人の中にいた巨漢より、一回り大きい、顔中無精ひげに覆われ眼には変わった形のサングラスを掛けている。

男はこちらに一瞥もくれず、無造作になぎ倒された竹林に踏み込み、車中を確認した。

驚いたことに、軍手をはめた手には、何の武器も帯びていない。運転席を開け、気絶してこちらによりかかってきた男をうつとうしげに突き飛ばした。

しばらく上半身だけを車内に入れて、ごそごとやっていたが、一分もしないうちに、手ぶらでこちらの方にやってきて、ウルたちの前に立った。

街灯もない、漆黒の闇の中で、細い月の光が、その姿を映し出した。熊のような巨軀に、疲れた表情をのせたその男は、どこにでもいる労働者に見えた。近くで見てわかったのだが、掛けているのは、

サングラスではなくセーフティーゴーグルだった。無精ひげの生えた顔立ちは、特に人目を惹きつけはしないだろう。

ガタイのいい、一見どこにでもいそうな中年男だ。

ただ、その佇まいは何か見ているものの心胆を、寒からしめる雰囲気放っていた。その元凶は、男の眠そうにすら見える、白けた目つきだ。

ポリカーボネートでできた、レンズ越しに見えるこの世のすべてに興味がなさそうな、醒めた眼差し。

それは、男の素性を物語る、履歴書に思えた。

「車内のカバンと、ダッシュボードを漁ったら、合成麻薬がわんさか出てきました。二人とも生きていますようですし……安く済んでよかったですね。マスード」

錆を含んだその声は、世間話をしているようにしか聞こえなかった。

「まったくじゃ、つかつかとしてしもての。よく考えたら、あんな奴らのために、無駄に金を使うのは、馬鹿馬鹿しい」

老人は、照れたように笑った。

「後は、もう一台の方ですね」

男は振り返り、二〇〇メートルほど離れた場所で、竹林の檻に自ら閉じ込められている四駆を見た。

「とつつあん、あれ！」

幸の緊張した声の先に、皆が眼を向ける。

先ほどサイヤーラが、漁っていた車が揺れている。程なく後部ハッチが開き、マスードに、片腕を折られた巨漢が降りてきた。

いいほうの手に、バットを握ったその男は、左脚を引きずりながらこつちにゆっくりと向かってきた。

狂気に支配されている、血だらけの形相をみれば、挨拶しに来たわけではないのがわかる。

ウルは皆から一歩さがった。自分は、遠慮するという意思表示だ。サイヤーラは、男をセンスのない壁の落書きでも眺めるような顔

で言った。

「幸」

「んだよ」

巨漢から眼を離さず、返事をした幸だが、

「お前がやれ。武器は持つてるな」

その台詞にびっくりして、サイヤーラを振り返った。

「な……あいつ、私より三〇センチはでけえぞ！　もう少し初心者向けからいこうぜ！？」

サイヤーラは、五メートルの距離まで近づいて来ている男を眺めながら、めんどくさそうに言った。

「相手は手負いだろぅが。やれ。なんなら銃を使うか？」

幸は何か言い返そうとしたが、忙しなく、巨漢とサイヤーラを見比べると、

「やってやるよ！　なめんじゃねー！」

やけくそ気味に喚いて、背後に手を回した。

パチン、とボタンを外す音がすると、トレーナーの背中から、何かがすべり落ちてきた。

それを右手で引っつかみ、体の前で構えて喚く。

「明日から、幸さんって呼びやがれ！」

それは短い木刀だった。いや、鞘に収まったままの、短刀だ。

いわゆる、昔の任侠映画で出てくるような、無粋な代物である。

しかし、その白鞘は彼女の肌のように白く、工芸品の様な趣を備えており、美少女と匕首という、およそ似つかわしくない組み合わせを、鑑賞に堪えるものにしていた。

「私は、弱くない……私は、地獄を見たんだ」

小刻みに震えながら呪文を呟く幸を見て、ウルは異を唱えるのをやめた。

彼女もまた、闘わなければならない理由があるのだろう。己の闇を抱える者独特の、張り詰めた暗さを、ウルは幸から車の中で感じ取っていた。

闘いたくはないけど、やらなければいけない。

もう二度と、あんな思いはごめんだから。

諦念にも似た、覚悟で織られた……四六時中、脱ぐことの出来ない外套。

ウルは、幸にシンパシーを抱いた。

ウルは柝の棒をだらりと下げたまま、緊張で固まっている、幸の横に並んだ。

「動け。居つくな」

ウルが低い声で忠告すると、幸ははつとして横に飛んだ。剣先をむけたまま、巨漢から見て反時計回りに、軽やかなステップでサー클リングする。黒髪と白い息が、宙に舞った。

ウルは、棒をぶらさげたまま自分の存在を強調するかのように、ゆっくりと逆方向へ歩く。気の弱い人間なら、腰を抜かしそうな殺意に満ちた視線を、横目で送りながら。その様は、血刀を引っさげた、古代インドの殺戮の女神、カーリーを連想させた。

幸の柑橘系のシャンプーの香りと、ウルから立ち上るスパイシーな香気が攪拌されて、周囲に漂った。

月明かりだけが、朧に照らすアスファルトを、美しい破壊神がひたひたと歩を進め、可憐な戦乙女が舞う。

巨漢は当然、まずウルを潰しにかかった。ウルはバックステップで、ぎりぎりの間合いを保ち、どんどん後ろに下がる。棒は構えない。受けたところで、力負けするからだ。男は引きずった足のせいで、間合いを詰められず、バットを振り下ろせないでいた。ウルは戦術は単純だ。ひたすら下がり、幸にチャンスを与える。あくまで闘うのは彼女だ。そのとき、予測していなかった事が起こった。

痛めている筈の足で、地面を蹴った男が、一気に間合いを詰めてきたのだ。

ウルは、眼を見開いた。

「フリか！」

銃声が、夜気を切り裂いた。

男の動きが、一瞬だけ凍りつく

しかし、次の瞬間、明確な殺意を持って、袈裟に振り下ろされるバット。身をかがめ、斜めに掲げた棒で擦って逸らせることができたのは、はつきりいつてまぐれだった。ウルは、相手の右脇をくぐり抜けざま、横殴りに腹を打つ。

剣道で言う、『抜き胴』だ。

だが、体勢を崩していたためか、ほとんどダメージは与えられなかった。

男の振り向き様、横殴りに襲ってきたバットから、間一髪逃れる。そのウルと、すれ違つかのように、シトラスの疾風が走り抜けた。「お客に、なにしやがる！」

威勢のいい掛け声とともに、幸が跳んだ。

「ぐっ」

顔の真ん中に、ずっしりと重い鞆付きの匕首をたたき付けられた巨漢は、バットを取り落として顔を覆った。

着地した幸は、二、三歩行ってバレーナーのように優雅にターン、巨漢の方に踏み込むと、左手に持った、小型のスプレーを噴射した。「ぎあっ！」

催涙スプレーを浴びせられた巨漢は、女のような悲鳴をあげ、眼を押さえた。文字通り、うずくまって転げまわる。

「うつらあああああー！」

幸は雄叫びを上げると、うずくまっている男の頭を匕首で乱打した。

真っ白な鞆が、巨漢の血で汚れていく。

髪を振り乱し、絶叫を上げる幸の美しい顔は、恐怖に支配されていた。

「立つな、立つんじゃない！ 死んどけ！」

「幸、もっいいい」

ウルは声をかけ、後ろから幸の腕を捕らえた。

幸はぴたりと動きを止めた。ウルの方を振り向きもせずに、肩で

息をしながら、平べったくなつて、痙攣している男を見下ろしている。

人を刺したりすると、緊張のせいで得物が手に貼りつき、とれなくなるという。

ウルは白鞘を握り締めすぎて、白くなっている幸の指を、一本づつはがしていった。

「ここまで、やるつもりはなかったんだ……ただ、気付いてみたら」
幸はガタガタ震えながら、言った。右頬に、うつすらと十センチほどの赤い線が走っていた。

傷だ。

今まで目立たなかったのが、頭に血が上ったせいで、浮き出てきたのか。

白鞘を預かったまま、ウルは頷き言葉少なに言った。

「初陣なら、たいした戦果だな」

幸は口許を押さえて、道路際に走った。

しゃがみこんでえづく幸に、ウルは近づかなかった。下手な気遣いは、彼女のプライドを逆撫でするだけだ。

「サイヤーラ」

マスードの厳しい声に、ウルは並んで車のそばに立つ二人へ眼を向けた。

いつの間にか、サイヤーラの手には拳銃が握られていた。

さっきの銃声の主は彼か。

「幸は十分苦しんで生きてきた。まだ足りんというのか？」

「あなたには関係ないでしょう、マスード」

「少しは関係あるんだよ、サイヤーラ。実の母に売られ、タイの売春窟に放り込まれる寸前に、アラーの意志で、お前が助けることになった不幸な少女は、私にとって孫も同然なんだ」

なおもはいつくばって、えずく幸の後姿を見つめるマスードの声は、怒りに満ちていた。

ウルは聞いてない振りをした。上手に出来ていればいいが。

「助けたんじゃない」

口調を崩したサイヤーラが、不機嫌そうに顔を逸らすのが、視界の隅に入った。

「三〇〇バーツで買ったんだ、あの忌々しい、やり手ババアからな」

「まだ言うか、サイヤーラ」

マスードは、鋭い声をサイヤーラに放った。

「あの子を、売春婦のように言うのはやめろ。お前が、彼女を純潔のまま救い出すことが出来たのは、アラーのご加護があつたればこそなんだ」

「もういい。なら、施設に入るように、あんたから説得してくれ、マスード。あんたが引き取ってくれたら、なおい……幸、いつまで吐いてやがる！」

サイヤーラは、大声で怒鳴った。醒めた印象が一変して、強面の鬼教官のようだ。幸は、口許をきれいに置かれたハンカチで押さえながら、涙目でふりむく。

「何で刺さなかった？ 挨拶してから、殴りかかってくれる、町道場のチャンバラじゃねえんだ、相手が殺しに来てんのが、わからなかったのかよ？ 0点だ、甘ちゃん……車に乗れ」

ウルは、サイヤーラが運転する、アメリカ製の四輪駆動車の後部座席で、ぼんやりと過ぎ去っていく、田舎路を見ていた。

幸は、助手席の窓を全開にし、その上に顎をのせて放心していた。「近々テストする。その結果が0点なら、施設へ行け」

エンジンをスタートさせながら、サイヤーラが出した通告に、シヨックを受けているのか。

こちらから見える、左頬が腫れている。

匿名で119してもよいか、と恐る恐る尋ねた幸を、サイヤーラが無言で張り飛ばしたのだ。

これにはウルも苦笑し、マスードも渋面を作った。

ウルは切なくなつた。幸は優しすぎる。こんなことには全く向い

ていない。

結局もう一台の三人も、命に別条はなく、サイヤーラがぶつけた方の車から持ってきた、合成麻薬を車内にばらまくと、気絶しているのを尻目に、さっさとその場を離れた。

マスードは、

「今夜ハシムに、連絡してみるといい。わしの連絡先は、サイヤーラに聞いてくれ」

そう言って、今日一日で、すっかり廃車に近付いた軽自動車を駆り、帰ってしまった。

サイヤーラの説明によると、警察は事故よりも、自分たちの点数になる、麻薬の売人の検挙の方に重きをおくので、せいぜい事故現場に、目撃者を募る看板を置く程度だろう、ということだった。事件を一つでも、なかったことにしようという警察の勤勉さは、どこの国でも一緒のようだ。

今、ウルを乗せた車は、サイヤーラの、知り合いの外国人ばかりが集まる安宿に向かっている。

できるだけ、足がつくような宿は避けるべきだというサイヤーラの助言に、ウルは全面的に賛成した。

サイヤーラは、無表情で何事もなかったかのように運転している。やがて幸は透き通るような声でハミングを始めた。夕焼け小焼けだ。ウルでも知っている。

家路に着くことから連想したのか。

お手でつないでみなかえろ

カラスと一緒にかえりましょ

先ほどの、がさつな口調から、想像できない……逆を言えば、清楚で儚い外見にふさわしい、歌声だ。

小さく歌い始めた、そのファルセットボイスに、ウルは黙って耳を傾けた。

先ほどの立ち回りで、声が囁れていないのは何故だろう？ それに、歌が上手すぎる。

夕焼け小焼けの赤とんぼ
負われてみたのは何時の日か

十五で姉やは嫁に行き……

「……お里の便りも絶え果てた」
ハスキーな声でハモリ出したウルを、幸は驚いて振り返ったが、歌うのはやめなかった。

夕焼け小焼けの赤とんぼ

狭い車内に、二人のハーモニーが優しく響く。

止まっているよ、竿の先

サイヤーラ 2 (後書き)

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。
次回はウルが京都大学を訪れ、話が急加速いたします。
どうか、お付き合いの程をよろしく願います。

りょう

第五章 君の胸でいつまでも（前書き）

こんばんわ。明日は休日ですね。（うをー）

そうでない方はごめんなさい。

ここまでお付き合い下さりありがとうございます。
それでは、ごゆっくりお楽しみください。

第五章 君の胸でいつまでも

翌日。

「おはようございまーす……あ、暖かいラッキー」

朝一番で、研究室の扉を開けると、部屋には十崎がいるだけだった。誰か先に人が来て、部屋の暖房を入れてくれているのはありがたい。

この人、健康とは縁が遠そうなのになんでこんなに早起きなのかな、と七海は思った。

「寒いのに早いですね、十崎さん。御年寄りみたい」

十崎はにっこり笑って言った。

「織河さんは、寒いのに子供みたいに元気ですね。 飴玉をあげましょう」

「わーい、やったー」

ほんとに飴玉を差し出された七海は、喜んで受け取った。

「十崎さん、十崎さん。これみてください」

七海は着ているワンピースの前掛けボタンを順に外して、首に掛けている鎖を引っ張り出そうとした。

「朝から、それほどでもない胸を見せてくれるんですか？ うれしくありません」

「ちがいます！ 悪かったですねっ、それほどでもなくてっつ！」

穏やかに微笑む十崎の台詞に、一気に気分を害したが、七海の取り出したものに表情が変わったのを見て、してやったりとほくそえんだ。

「……それ、どうやって穴をあけたんですか？ 開いてなかったでしょ？」

件の円筒印章に、鎖を通して、ペンダントにしたのだ。

「知り合いのおじさんに、ドリルで開けてもらったんです」

十崎は、慌てて腰を浮かして円筒印章を手にとり、顔を近づけた。
「油をつけたり、傷をつけたりしてないでしょうね？」

「大丈夫です。くれぐれも慎重にっってお願ひしましたから。そもそもシリンドーシールって、こういう使い方もあったんでしょ？」

円筒印章を手にとって、試すがめつすしている、十崎の頭のつむじを見ながら、得意げに言った七海だったが。

「……ほんとに、僕を退屈させませんね、あなたは」

顔を上げた十崎に、超至近距離で微笑まれ、七海は心臓の鼓動が、不自然なまでに大きく跳ね上がるのを意識した。

色白。優しげなまなざし。中性的な雰囲気。に痩身。

よく考えたら七海の、

「タイプうー。手エつなぎてー」
であつた。

七海は、顔が赤くなつてない事を祈りながら、

「そ、それはどうも、どうも」

と返事するのがやっとだつた。

あなたのことがとっても気にいりましたよ

鼻二つ分くらい先の、十崎の瞳が語っている気がするのだ。あくまで気、だが。

十崎の吐息からは、コーヒーの香りがするが、不快ではない。

私、お口……大丈夫だよな？

そうだ、昨日食べたのは鯛の兜煮だ、大丈夫。

今となつては、バクバク音を立てる心臓に、視界を揺らされる七海。

すつと身を離すと、十崎は背中を見せていった。

「なるほど、これからそのシールは、あなたの柔肌で、ずっと保護されるわけですね……それほどでもない、胸の間に挟まれて」

七海は十崎の後頭部に、全力でペンケースを投擲した。

ウルが京都大学の最寄り駅、出町柳駅に着いたのは一五三〇時頃

だった。昼過ぎまで寝ていたので、時差ぼけの影響はない。

一応、それらしい交渉の代理人に見せかけないといけないので、パンツスーツ姿だ。この姿で、柞の木は持ち歩けないので、皮製のシオルダーバッグには、サイヤーラに頼んでおいた催涙スプレーと特殊警棒が入れてある。ゆつたりとスカーフを頭に巻きつけているのは、長年のムスリムとしての習性だ。

穏やかな日差しの中を二〇分ほど歩くと、大学の裏門の一つに着いた。入学の時期なのか、生徒が作ったと思しき、派手派手しい巨大な立て看板が、あちこちに飾ってあった。自分の学生生活など、遠い過去のように思える。自分がこの一年ほどで、とても年をとったように思えた。

昨日の、ハシム師との会話を思い出し、思わず独り笑う。マスードの言葉をそのまま伝えたのだが、あんなに興奮している師は初めてだった。どうやら、マスードの言っていた事は嘘ではないらしい。サイヤーラによれば、交渉相手の住居は、ここから駅ひとつ離れた、学生用のワンルームマンションだが、ほとんどそこには帰っていないらしい。ならば、彼の通う大学で接触するしかないだろう。この時間なら、全ての授業は終わっているかもしれない。もちろん帰宅している可能性もあるが、別に今日は下見で終わってもかまわない。

アメリカのキャンパスと比べても、遜色ないほどこの大学の敷地は広く、また学部によって分散している。

ターゲットのいる場所は、文学部らしい。それがどこにあるのか、尋ねようにも事務局の位置がまたわからない。学生に聞くのが手っ取り早からう。そう考えていると、後ろから声が近づいてきた。

「おー、十崎か？ 今どこ？ え、学校とちゃうんか？ うん、うん。え？ 考古学研究室で待つとけばえーんか？ いつなるん……あーわかった。おれ？ えーとな」

ウルを追い越して行った男が、三メートルほど先で立ち止まって、あたりを見回した。

「環境学部やな。わかった、もししたら研究室向かうわ。文学部のやる？OK、チャオ」

パーカーに、ジーンズ姿の体格のいい男は、携帯を畳むとポケットにしまいこんだ。

男をみつめていた、ウルと眼があうと、

「Help you?」

ウルは男の話す英語につられ、同じ言語で問い返した。

「文学部の、考古学研究室を、さがしているのですが」

「それなら俺も、今から向かうところだから。ついてきて」

男の口調に、浮ついたものは感じられなかったので、

「助かります」

とだけ返事し、二メートルほどの距離を置いてついていく。

同時刻。

七海が研究室に顔を出すと、そこにいたのは十崎と桃井、あと二人の研究生だけだった。

後頭部に、わざとらしく絆創膏を貼った十崎が、普段どおり声を掛けてきた。

「こんにちは」

「……こんにちは」

半眼で、いやいや挨拶を返す七海。

「織河さん、九城をみませんでしたか？」

席に着く七海に、十崎が問うてきた。

「知りません。なにせ、それほどでもありませんから」

隣で桃井が笑いをこらえている。十崎が喋ったのだろう。

「まあまあ。僕のことをガリモヤシと言った件であいこですよ。ちなみに二度目はありませんからね」

「言ってます。なんです？ 気にしてるんですか？」

七海は意地悪く笑いながら言った。

「ええ、体重六〇kgを切ったら、自殺するって決めてますので…

…今怖くて、体重計に載れないんですよ。織河さんが羨ましいです」
「そんなにありません！……確かに、食べ過ぎたらすぐ太っちゃいますけど」

ここで徐に、七海はフウとため息をついた。

「何食べても、体重が増えない誰かさんがうらやましいです」

「……むかつかますね」

いつもの笑顔だが、眉間にしわが一本よっていた。

七海は悪魔超人に、一〇pのダメージを与えた……と思う。

へへーんだ。

七海は舌を出した。

もう、許してあげてもいいだろう。

「さっきの話ですけど、九城さんは見てませんよ？」

「そうですか。電話も繋がらないんですよ」

九城とウルは、ほとんど会話もせず、文学部の棟に着いた。

「誰に用事？ 呼ばうか？」

「ミスター・カジワラ、を訪ねてきたのですが」

男はシャープな顔に、一瞬怪訝な表情を浮かべたが、直ぐに笑顔で言った。

「カジワラって、俺くらいの身長で細くて眼鏡かけたヤツ？ いや、

二人おってさ」

「もう一人は？」

ウルが他意なく問うと、一瞬詰まってから男は答えた。

「えーと……身長が二メートルくらいで、髭生えてて、得意技はアックスボンバー」

まるで、ステイツのプロレスラーのようだな。

「……？ おそらくあなたくらいの、身長の方だと思います。」

「それなら、俺の友達だな。さっき携帯で連絡してた男だ、もう少しここで待ってたらくるよ」

と伝える。

「ああ、お知り合いでしたか」

アウルディーの知り合いと、話すことになるとは思ってもよらなかった。

この男から、情報を仕入れておくべきか、ウルは迷った。

その際どこまで、自分のことを話すべきか。

先ほどの携帯での会話を聞く限り、この男もアウルディーに用があるようだし、立ち去りそうにない。

「十ざ……カジワラと知り合い？」
来た。

「いえ、直接の知り合いではないのです。共通の知人から、日本に行くなら会ってくれと頼まれて」

できるだけ真実を話すこと。それならぼろがでない。

「……そつか。あいつ英語はなせるのかな」

「ああ、私は日本語が話せるので」

突然、流暢な日本語に切り替えたウルに、男は驚いたようだ。まじまじとウルを見つめる。

「なんや、そうなん？ おどろいたな。」

「あなたが英語でしたからつい」

「ほとんどなまり無いな。まあ京都では、ときどきいるけど」

「そうなんですか」

「この辺学生の町やしな。留学生もようけおる。けど、自分みたいに、流暢な日本語話せる人は珍しい」

「ありがとうございます」

その後、当たり障りのない会話を続けたが、頃合いを見計らって、男は携帯電話を取り出した。

「あいつ遅いなあ。こっちからじゃなくて、裏口から入ったんかな

……十崎？ 今どこ？……ああそうか、すぐそっち行くな。お前にお客さん」

携帯を閉じると、男はウルを促した。

「行こう。もう、上にいるみたい」

リノリウムばりの、薄暗い廊下を階段に向かって歩きながら、ウルはひそかに呼吸を整えた。やはり緊張する。白昼衆人監視のなかではいえ、自分が相對するのは、楽しんで人を殺すような類の間だ。

「うーっす」

男が挨拶しながら、大きな鉄扉を開けると、中の人間が一齐に振り向いた。だがその視線は、すぐに男の背後にいる、自分に向けられた。

「お前にお客さん。ごっつい、美人やけど、誰？」

男は机に座って、かわいらしい女の子と、談笑していた人影に声をかけた。黒のハイネックのシャツを着たその男は、ウルに視線を向ける。澄んだ瞳に、微笑をたたえた色白の顔は、ウルの予想を裏切り、病的な印象を持っていなかった。このどこにでもいそうな、線の細い男が殺人狂？　ウルは相手を違えている、危惧を抱いた。

「十崎さん、誰ですか、このすっごい美人？」

呆然とこちらを見ていた、十崎の話し相手の少女は、興味深々で尋ねた。

トザキというのは、ニツクネームだろうか。でなければ、何故アリから聞いた、カジワラという名前で、この男に通じたのだろう。

「そうですね。かれこれ会って、三秒くらいの中です」

トザキと呼ばれた男——アウルデイ——は淡々と答えた。

考えるのは後だ。ウルは静かに入室し、軽くひざを曲げてメイドのようにお辞儀すると、あらかじめ用意してあった。挨拶を口にした。

「アッサラームアレイクム、アウルデイー。シレルキャンプの、アブ・ハシムの使いでまいりました。漆間と申します」

ウルは、近頃、滅多に口にしなかった、姓を名のった。

「これは懐かしい。……イマーム・ハシムは、ご健勝ですか？」

ウルは確信した。この男がアウルデイーだ。

「はい。くれぐれも、カジワラ様には、よしなに、ということですよ。」
「周りの学生は、みんな困惑していた。会話にまったくついて来れないようだ。」

「ちよつとゴメンな。十崎、じゃあオレ行くわ。このファミコンのカセット……パクられたら困るから、ちゃんと持って帰って、ひよこちゃんに渡しといて」

「……わかりました」

「それじゃあな、ミズ」

「ありがとうございます」

男が扉から出ていったのを見送りながら、十崎もまた立ち上がった。言った。

「さて、我々も場所を移しましょうか」

ウルは、十崎と文学部の棟を出て、人気のない自転車置き場で、向かい合った。

目立たない、穏やかな容貌。彼が本当にアウルディーなのか。

自分の抱いていたイメージとのギャップに、未だ苛まれるウルであつた。

「こんな場所で申し訳ありませんが、誰にも聞かれない場所ということになると、限られてしまいますので」

男から渡された、ゲームのカセットを掌でもてあそびながら、十崎は言った。

「いえ、構いません」

「で、どのようなご用件で、はるばるイラクからこちらまで？」

「ウスマン老を、覚えておいでですか？」

「……シリンドーシールの件ですね。まあ想像はついていました」

「単刀直入に申しあげます。買い取らせて頂けませんか」

「……これは驚きました。やっぱり返せ、と言いに来たのかと思つたのですが。提示額はいくらです？ あの村に、そんなお金がある

ように思えませんが」

淡々としたの失礼なものいいにも、ウルはさほど腹を立てなかった。礼儀を欠いているのはこちらなのだ。

それよりも、目の前の男の、物怖じしない態度に気を引き締めた。
「七万US\$」

十崎は失笑した。

「……へえ。そんな大金どうやって用意するつもりです？」

ここからが、きわどい話だ。ウルは慎重に、言葉を選んだ。

「この国で買い手がつきました。ウスマン老の所持する、もう一本と合わせて売却します」

「いくらで？」

「……それはご想像にお任せします。七万USドルは、さまざまな諸経費や、リスクを差し引いた金額です。あなたは何の危険も犯さずに、大金を手にすることができます」

「ならお聞きます。たとえば、私が取引に乗るとして、お金はいつ支払われ、私はいつあなたがたに、シリンダーシールを渡せばいいのですか？」

ウルは答えようとして、その回答が用意出来ていなかった事に、気付いた。

「それは……シリンダーシールを、先に預けていただいて、売却した後には費用を……」

ウルはそれを口にしながらも、恥ずかしさで顔が熱くなるのを感じていた。自分はケチな寸借詐欺師です、と言っているかのようだ。

「……聞き返すのも、馬鹿馬鹿しいですが、私が今から家に引き返して、シリンダーシールを取ってくるので、お金を先にください、と言ったら、あなたお金を渡しますか？」

「……」

「つまり最低でも、取引の現場に、私がいなければならないわけです。どこがノーリスクなんです？」

ウルは、うつむいて言った。

「……おっしゃる通りです。あなたが我々の同胞だと思いこみ、甘えておりました」

十崎は、少し驚いたような表情で言った。

「どこから、そんな発想が出てきたんですか？」

「あなたは、クルドの軍事組織、ペシユメルガの一員だったのでしょ？」

ウルも本で読んだだけだが、クルド人でもペシユメルガの隊員になるのは難しいはずだ。

まず四十五日間監視され、スパイでないが、適性があるかを、徹底的に調べられる。パスしたものだけが、三カ月訓練に参加することができ、その内容は、政治や軍事、武器の使い方、ゲリラ戦のトレーニングに、三日三晩山中を歩くなど、多岐にわたる。クルド語や、英文学を読むクラスまでであるらしい。

外国人であるこの男が、入隊できたという事実が、いまだに信じられない。

ウルは、ぎょつとして顔を上げた。

笑ったのだ。

淡々と語っていたこの男が、顔を逸し、おかしくてたまらないというように。

そしてそれは。

「あなたがたのおめでたさ、失礼、純粹さには脱帽です。私がイラクくんだりまで行った、本当の理由をお教えしましょうか？」

この男が、自分の正体をさらけ出す、オーバーチュアであるところをウルは感じた。

十崎は、屈託のない笑顔で言った。

「退屈だったからです。ただ、それだけですよ」

第五章 君の胸でいつまでも（後書き）

作者より

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

夜中に、耳が痛いので救急に行ったら、医療事務の女性が綺麗だったので得をした気分の

りようです。しかし、夜中の3時だったので、患者は僕と後2人だけでした。

なぜ間違いなくホストであろう彼らが小児科に座っていたのか、いまだに謎です。

次回より、物語が疾走を始めます。

どうか、お付き合いの程をよろしく願います。

第六章 ペシュメルガ（前書き）

作者より

こんばんわ。きのう、何気に日曜洋画劇場の「0の焦点」をみてたのですが、中谷美紀怖かったですね。ホントに電車男のエルメスさんとおんなじひとなんでしょうか・・・

第6章です。お付き合いの程を。

第六章 ペシユメルガ

ウルは、男の醸し出す雰囲気、確かに変わったのを感じた。その理由は、眼差しだ。凧いだ海を思わせる穏やかなそれは、今は、生気に満ちた、輝きを放射しているのだ。

だが、ウルの立ち直りは早かった。相手が本性を現わしたのなら、戦い方も組み立てられる。

「ではキルクークで、二人の悪人をこらしめたのも……」

男はにっこりと笑って言った。

「単なるレジャーです。バ力をはめるのは本当に楽しい。それだけです」

ウルは先ほどから、この男の情に訴えかける作戦を放棄していた。今聞いたのは、この男の精神状態の、確認のためだ。やはりアリの言った通りだった。この男は狂人だ。

知らず知らずのうちに、ウルの瞳には、敵意が宿っていた。

「そんな目で、見ないくださいよ。あのシリンダーシールは、僕に押し掛けガイドとして付きまとっていた、バクルという少年に、いまわの際に手渡されたものです。それは、私にとってはたいした意味を持ちませんが、金になると分かった途端、やっぱり返せと回収しにくるあなた達も、見上げた恥知らずだと思うのですが……似たもの同士ですね、僕たち」

「貴様のような、外道と一緒にするな」

ウルは堪えきれずに、吐き捨てた。すまない、みんな。

「悔しいが、貴様のいうことにも一理ある。それどころか、私自身もそう思っていた。だが、私たちが、恥を忍んでこうするのは、明日の食べるものにも事欠く、子供達のためだ。決して貴様のように、富をため込んだり、暇つぶしにあちこちをフラフラするためじゃない」

「自分探しと称して危険地域でニートをし、母親に心配をかけている、痛い子には言われたくないですね、漆間・アスコール……」

「黙れ！ 母親のことは口にするな……！！？」

なぜこの男は、私のことを知っている？

「あなたの事は、フランスの新聞で知りました。美人ボランティア、クルディスタンでアラブ人と、クルド人の架け橋となるか。写真付きで載ってましたよ。ご存知なかったんですか？」

「……！ あの時のジャーナリストか。sit head！ 写真撮るなど言ったのに」

「そんな約束を守るわけがないでしょう。ということは、その後あなたの母のインタビューが、掲載されていたこともご存知ない？」

ウルは自分の顔から血の気が引いていくのを、確かに感じた。

十崎が、苦笑しながら言った。

「そうですか。あなたにとつて、最低なことに、母親は、アメリカで一代で財をなした、アスコール商会の社長と紹介されていたましたよ」

ウルは、めまいに襲われよろめき、壁に手をついた。はずみでぶつかった自転車、ウルの中の心に築いていた砦とともに、倒れていった。

「それは……」

「約二ヶ月前です。ご存知のように、フランスには、アラブ人が非常に多い。もう情報は、とくにクルドに伝わっているんじゃないですかね。」

ここで男は、悪魔のように笑った。

壁に手をついたままのウルの呼吸が、浅く早くなる。苦しい。

「現地のイラク人でも誘拐される現況で、金持ちのアメリカ人が、一人でボランティア活動をやっているだなんて知れたら……。言わなくてもわかりますよね？」

覆い被さる様に響く、男の声をウルは遠くで聞いた。
あの村に。

あの場所に、いられなくなる。

やっと見つけた。私の居場所に。

嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

もう一人は、嫌なんだ。

呼吸はどんどん苦しくなる。もう十崎のことは、意識になかった。

先輩、ハシム師、ライラ、アラディン、ヌール、アヤ、ハニーン

……お父さん……

助けて。

エンジンをかける音がした。

ウルが、脂汗にまみれた顔をあげると、アウルディーがつまらなさそうな顔で、原付バイクにまたがっていた。

「あなたでは交渉の相手として役不足です。相手の前で、弱みをさらけ出しているようでは話になりません。興ざめですよ」

「待て……」

「その前に、一つだけ確認しておきましょう。これがあなたがたの欲しがってるシリンダーシールです」

アウルディーは、目の前にハンコ大の遺物を掲げて見せた。

「あなたも持ってきているのなら、見せてください」

ウルは壁によりかかったまま、苦しい呼吸を堪えつつ、バッグからシリンダーシールを取り出した。アウルディーに向けて掲げる。

アウルディーは、スタンドをかけた原付から降りると、遺物を持った手を、ウルに差し伸べたまま近づいてきた。

「手にとって、調べてください」

アウルディーは、ウルが手を伸ばせば届く、ギリギリの距離で止まると言った。

ウルは気力を振り絞って、アウルディーの手からシリンダーシールを受け取った。青く透明な素材に、古代の神々の姿が、彫りこまれている。

「確認しましたか？ ではあなた方の持つてる方の遺物を、確認

させてください。ニセモノであれば、検討する余地ありません」
ウルは、サイヤーラから預かっていたシリンダーシールを、アウルデューに渡した。当然、アウルデューから、預かったほうは返さない。

アウルデューは、受け取ったシリンダーシールを隅から隅まで丹念に観察している。ウルも、アウルデューから預かった方に目を落とした。ウルにはそれが本物かどうかを見分けるすべがない。

だがありがたいことに、その間に呼吸は正常に戻っていた。

「どうやら本物のようですね。考える余地がありそうです……お返ししますよ」

アウルデューは、手に持っていたシリンダーシールをウルに返し、さっさと原付にまたがった。

「おい待て、私のほうは返さなくていいのか？」

ウルが慌てていると、

「差し上げますよ……東京のアナトリア博物館で買った偽物ですから」

こともなげに、アウルデューは言った。

「なっ……」

「ちなみに私が、今返した方もよく見てください」

ウルが慌てて眼をおとすと、素材はよく似ているが、明らかなニセモノだった。

古代の神々の神聖な姿どころか、人の頭をサッカーボールに見立ててシユートしているという、悪趣味な構図が彫込まれていた。何か字も書かれてある。

「ダイビングヘッドだ、ワカシマズくん……貴様っ……」

つい読んでしまった、ウルが絶叫した。

「イラクでも、キャプテン翼は大人気でしょう……あなたは単純すぎる。本当に相手をしていて、くだらない」

警棒を抜き、血眼で駆け寄るウルから、アウルデューは急発進で、軽々と身かわし、大声でいった。

「私は盗みはやりません。先ほど研究室にいた、織河さんという女の子の携帯にあとで連絡します。彼女の傍で待っていてください。はははははは」

ドップラー効果を残し、去っていくアウルデューの背中に、悔し紛れに警棒を投げつけたが、辛うじてテールランプに当たっただけで、アスファルトの上でむなく高い音を響かせた。

あまりの怒りに、かみしめた奥歯がくだけそうだった。

上衣のポケットから、大学について以来、ずっと繋ぎっぱなしにしている携帯電話を急いで取り出した。

「サイヤーラ、すまない。シリンドーシールを奪われた」

「話は全部聞こえてました。あなたも状況も最低です。ターゲットの着ている服と乗り物の特徴を」

サイヤーラのセリフに傷ついている暇はなかった。

「黒のハイネックのシャツ、濃いブルージーンズ。黒の原付に、青と黒のハーヘルメット」

「了解。いま門から出てくるのを視認した。追跡を開始する」

サイヤーラは近くで待機していたらしい。

ウルは壁にもたれたまま、ずるずるとしゃがみ込んでしまった。最悪だ。

もう何から考えていいかわからない。自分が大間抜けだとは、知っていたが、ここまでとは思わなかった。

乾いた笑いが口をつく。

もう笑うしかない。

そうだ。

あの男に言われるまでもなく、知っていた。

ボランティアだなんていいものじゃない。自分は、ただのニートだ。

典型的な温室育ちで、おまけにアメリカでは環境になじまないムスリムとして育てられてきた自分は、本当に狭い世界で生きてきた。ウルは、ハイスクール進学を機に、母と別居している父を頼って、

日本へやってきた。

だが日本は、ウルが想像していたよりも、遥かに排他的な国だった。いや、排他的というより単文化だったのだ。

ただのアメリカ育ちならともかく、彼女はムスリムだった。彼女自身もなじめるように努力した。抵抗はあったが、極力スカーフも頭にまかないようにした。彼女にとつてそれは、下着姿で出歩くような心もとなさだったが、慣れることができた。共学ではあったが、それなりに偏差値の高い学校だったので、校風は落ち着いていた。美人だが、穏やかで謙虚な彼女は、物珍しさも手伝ってクラスの人気者だった。そうであれば、妬むものも出てくる。しかし、胡乱な目で見られたのは最初だけで、本当にただおとなしくて、恥ずかしがり屋なだけだということが分かると、手を貸してくれる者が多くなった。つまり彼女を取り巻く環境は、良好だったのだ。

けれど。

彼女はムスリムで、周りにはムスリムは一人もいなかった。コーランを持ち歩くものも、祈りを捧げるものも。

彼女自身も、実際のところそれほど熱心なムスリムではなかった。日本人でいえば、般若心経を暗誦で唱えられ、盆と正月には、必ずお墓参りに行く程度のレベルだ。

けれど、日本人がイスラム教国で、一人仏教徒として生きていくのと同じくらい、ウルが日本社会馴染むのは、難しかった。それに加え、母親との約束で、門限は五時半と設定されていた。これでは他の生徒と、本当に親しくなるのは難しいし、異性に対しては、なおさら疎遠になる。

そういう場合、塾や予備校が逃げ道になるものだが夜遅くの帰宅を良しとしない母親に、同性の家庭教師を付けられていた。

だが、そんなウルにも思いを寄せる人が出来た。

それは、ある事件がきっかけだった

文化祭の準備で、珍しく帰りが、一九〇〇時を過ぎた、高一の帰り道。

人気のないたんぼ道で、暗がりには潜んでいた変質者に、自転車ごと押し倒されたのだ。口をふさがれ、スカートの下に手を入れられた。ウルは、恐ろしくて声も出ず、ただ場違いに美しい星空を眺めながら、アラアの御名を心の中で必死に唱えた。

祈りは届き神の使いは現れた。

寂れた神社に続く石段から。

夜空を切り裂くような気合が、辺りに響き渡り、急に体が軽くなった。ウルが、恐怖に体をこわばらせたまま見上げると、剣を高く構えた人型が、星空を切り抜いていた。暗くて表情も見えないその人影は、頭を押さえて体を丸めている、暴漢の右足と、右肩に、一度ずつ剣を振りおろし、その度に、短い悲鳴が響き渡った。

「大丈夫か!？」

若々しい、緊迫した声の主が着ていたのは、ウルと同じ学校の制服だった。ウル肩をつかみ、呆然とする彼女を無理矢理たたせると、背後にかばう。だが、ウルを襲った男は、もう抵抗する素振りを見せなかった。地面で弱々しく、うめき声をあげているだけだ。

「来た道を引き返して、人を呼んできてくれ。こいつをこのままにしておけない」

ウルより少し背の低い男は、木刀を垂直に構えたまま、肩越しにいった。

「でも……」

「灯のあるところまで、二〇〇メートル足らずだ。走れ。大丈夫、俺にはこれがある」

なおも躊躇するウルに、

「行くんだ!」

自分よりも小さく、年下に見える少年に叱咤され、ウルはもつれる足で駆け出した。運動は得意な方ではない。豊かな胸が揺れた。だから走るのキライ。

必死に駆ける自分の呼吸音が、乱れる思考を駆逐する。

早く、早く、もっと早く!

泥だらけの地味なローファアが、アスファルトを叩く。

よし！

さすがに悲鳴をあげ出した心臓を無視し、街灯が照らす安全地帯に駆けこむ。灯がこんなにも有り難いだなんて。

でも、まだだ！

歯を食いしばり、必死で重い足を動かす。

いた。

向こうから歩いてくるカップルに、ウルは夢中で叫んだ。

「助けて下さい！　むこうで襲われたんです。警察を呼んで、お願い！」

どれくらいそうしていたらう。ウルはのそのそと立ち上がった。

そうだ。

自分もいつか守る側に立ちたい。そう強く願って、今日まで生きてきたのだ。私がトンマなのは、今に始まった事じゃない。まだ出来る事があるなら…… やってみるまでだ。ウルはおぼつかない足取りで、アウルディーが言っていた、少女がいるはずの研究室を目指した。

原付で、鴨川沿いを南に向かっていた十崎は、バックミラーに映る黒い四駆に目をやった。一定の距離を保っていたそれは、通行車両が少なくなった頃をみはからって迫ってきた。十崎の顔に、イタズラ相手を見つけた子供のような笑顔がよぎる。四駆が対向車線にはみだし、一気に追い越しをかけてきて……

並んだ。

左ハンドルのマシンを駆る、男の眼と十崎のそれが至近距離であった瞬間、迷わず両手のブレーキを握り締めた。原付の鼻面を、弧を描いた運転席の扉が掠めた。

アスファルトに、黒い悲鳴を擦り付けながら蛇行した原付は、気性の荒い馬のように、操縦者を前に放り出した。

少し先で停車した、凸凹の四駆から降りてきたのは、地味なスーツ姿の男だった。

頭から血を流し、薄目を開けて大の字になっている十崎に、急いで歩み寄る。助け起こす所か、無造作に頭を蹴りに来たばかり革靴を、死んだふりをやめた十崎は、素早い動きでキャッチし、脇の下へ挟みこんだ。背中を軸にして、優雅にターンすると、男を下から蹴り上げた。派手な色のスニーカーのかかどが、慌てて逸した男の顎を掠める。

バランスを崩した、男の足に下からからみつきしりもちを着かせると、抱えたままの右足を、両膝で挟み込み、ヒールホールドと呼ばれる技を決めにかかった。その気になれば、一瞬にして足を破壊することが可能なため、多くのアマチュア競技では禁止されている危険な技だ。

男は冷静に、自由な方の足で十崎の肩を蹴り、身をひねって脱出した。両者とも身軽に立ち上がると、互いに距離を……とらなかった。

うなじの毛が逆立つような、男の右のパンチを躲しざま、十崎はタックルで片足を捕りに行く。

捕らえた。

だが狙いはテイクダウンではなかった。足に回した腕をすりあげる。

「ぐっ」

手首で股間を打たれ男の動きが一瞬止まると、十崎はするすると背後に回り、あごの上から首を決めた。フェイスロックと呼ばれる技だ。転倒の際に、破れたシャツの袖からのぞく擦り傷だらけの腕が、持ち主の怒りをあらわすように怒張し、見事なカットをさらけ出す。

「あんまり知られてないんですが」

十崎はくぐもった呻き声を、わずかに洩らすだけの男の耳元に囁いた。嬉しくて嬉しくて、仕方がないという風に。

「このまま後ろに歩くだけで、あなたは死ぬんですよ？ 頸椎がポ

ツキリ折れてね」

突然、十崎がとびすさった。

銀色に光るナイフが描く弧から身をかわした、十崎に向き直った男は、首の具合を確かめながら笑った。

「強いですねえ、油断しました……なんだか、優先順位が変わってしまいそうです」

「あなたもなかなかのものですよ。あの日本語のうまい女の仲間ですよ？ 何故、あなたが来なかったんですか？」

「……あの女が、自分でやると言って聞かなかったからですよ。申し遅れました。私、物部と申します^{ものへ}」

十崎は、嬉しそうに微笑んでいた。

「……これはご丁寧にどうも。ついでに住所も教えてくれたら、特上寿司とデリバリーピザを、千人前ほど届けてあげるんですが」

「あいにくダイエット中でした。少し運動に、付き合っていたいただきますよ」

具合を確かめるかのように、軽くナイフを振ると、物部は一八〇センチー〇〇キロはあるだろう巨体に似合わない、滑るような足取りで十崎に近づいてきた。

立ち位置が入れ替わり、物部の乗っていたアメリカ製の凶器を背後に背負う形になった十崎は、物部の後の鍵穴の壊れた、あきらかに盗品とおぼしい改造バイクに目をやり言った。

「言われなくても、昨日拾ったばかりの僕の愛車の仇は取らせてもらいます……」

十崎は、両手をだらりとたらしたまま、半身になって構えた。

当然だが、ギャラリーがちらほらと現れはじめている。次の一合で片を付けるつもりなのだろう、物部は前に出た。

しかし。

会心の笑みを浮かべると、十崎は続けた。

「九城がね」

即座に言葉の意味を理解した物部は、一瞬逆側にフェイントをかけると、大きくサイドステップして背後の敵を振りかえった。

そして、そこには。

遠巻きに眺める二、三人のギャラリーがいただけだった。

悪鬼の形相で振り返ると、十崎が物部の車に、乗り込む所だった。

「そこそこやりますが、あなたも、あの女と変わらないまぬけです。さーて、クラッチは、どーこーかなー？」

物部は怒りに沸騰した形相で、懷に手を入れたが、辛うじて思いとどまったようだ。

「こんな楽しい時間は、久しぶりです。御礼と言ってはなんです、取引に応じましょう」

目を見開いた物部の前で、チエロキーが、ドロドロという音をたてて、進み始めた。

「後で、あの女に連絡します。ごきげんよう。ハハハハハハ」

窓から直角に出した手を、ピコピコ振りながら去っていく、十崎を乗せた自分の仕事道具を、殺意に燃える眼で見送っていた物部だったが、早足で最寄りの駅に向かって歩き出す。

その彼の背中を、つかの間の役目を終えた盗難バイクが見送った。

十崎は上機嫌で、南に向かって戦利品を走らせた。血止めのタオルを、頭に巻いたその顔は、日曜日にゴルフか釣りに出かける、お父さんのような笑顔で輝いていた。

シートを前に調整しないと、足が届かないことに軽くムカついたが、そんな些細なことは問題にならないほど、ハイだった。

「さて、役者はそろいつつあります。あとは舞台ですね」

十崎は、右手で携帯電話を開いた。

第六章 ペシュメルガ（後書き）

作者より

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

次回から、十崎の経歴が少しずつ明らかになっていくと思います。
どうか、お付き合いの程をよろしくお願いします。

第七章 さよならの前に（前書き）

第七章です。

第七章 さよならの前に

気まずい。

右斜め前方に、視線を走らせる。

七海は談話室で、ウルと二人きりだった。

突然、研究室に戻ってきた彼女に、彼からあなたに連絡があるはずなので、そばにいさせてほしい、と頼まれ、帰り支度を整えていた七海は、戸惑いながらも頷いたのだ。

パイプ椅子に腰掛けた、ウルのどこか悄然とした姿に、十崎さんとなにかあったんだろうな、と思いながらも、それには触れることができなかった。相手が俯いているのをいいことに七海はウルをじっくりと観察した。

肩にかかる黒髪、八頭身のスタイルに、意志の強そうな面立ち。

どこの国の基準でも美人だろう。

そして日本人ではないだろうに、流暢な日本語。友人を見ればその人が分かるというが、ますます十崎という人間が分からなくなる。まあ、彼らしいっちゃあ、彼らしいが。

沈黙という名の不可視の妖精が、二人がL字型にはさんだテーブルの上で、かれこれ一〇分間ライダースを踊っていた。

こちらから、電話をかけようと思った矢先、ウルだけではなく、七海も又待ちこがれていた着信音が、静寂を破った。

ウルが弾かれたように、顔を上げる。

通話ボタンを押して、妙に緊迫感のある、スーパーマリオが土管に入ったときのBGMを遮った。

「この着信音は、十崎さんです……もしもし」

ウルに問われる前に、七海は言った。

「やあ、いとしのハニーですね」

「……あなたがお掛けになった電話番号は、ずっと通話中であるか

十崎さん禁止のため、お繋ぎすることができません。反省するか、いつぺん死んでから、お掛け直し下さい」

コメカミに青筋を浮かべたまま、七海は平板な声で言った。

「ああっ！ 切らないでください。なんでこれぐらいでそんなに怒るんですか？ 短気はあなたの欠点ですよ」

「それをいうなら、十崎さんなんか、息をしていること自体が、神様の計画ミスじゃないですか！ もう、さっきからお客さんがお持ちですよ。代わりますね」

「その前に、そこにハンズフリースピーカーがあるでしょう？ 繋いでください」

「え……でも」

七海は研究室の備品である携帯電話を接続する為のスピーカーを見た。

携帯電話が、無料になったキャリアが多いため、遠方の研究生と、意見交換をするためという建前で揃えたのだ。

「構いません。二度説明する手間を、省きたいので」

七海は、言われたとおりにしてから、じりじりしていたウルに、自分の携帯を渡した。

「代わった。貴様よくも……」

ドスの効いた声音と、突然の激しい口調に、七海は十光年ほどドン引きしたが、ウルは構わず続けようとした。

「そういうあなたこそ、よくも、あんな危ないオッサンに、私を襲わせましたね。危うく殺されるところで、わくわくしちゃいましたよ」

ウルは、はつとして十崎の声が流れ出て来た、スピーカーの方を振り向き、それから咎めるように七海のほうを見た。

慌てて言い訳をしようとした七海だったが、ウルは直ぐに会話に戻った。

「盗みをした、貴様の自業自得だろうが。取引はもういい、あれを返せ。さもないと、どこまでも追いかけて、貴様の息の根を止める」

冗談には聞こえないウルの警告に、七海は事態の深刻さを悟り、蒼白になった。

「そうですね……だけど残念ながら、取引に応じることになりました。もうダイエツトのために、徒歩で移動中の物部くんには伝えてあります。このチエロキー外見の割には、快適ですね」

ウルは、堪えきれずに叫んだ。

「貴様いったい何がしたいんだ！」

「……この時代に、皆がなくそうとしているものを伝えたい……。まあ、青臭い理想論ですが」

……………。

ウルは雷鳴が似合いそうな沈黙の後、地獄の底から響いてくるような、低い声でいった。

「……次に会ったときが、貴様の命日だ。必ず頭蓋骨を叩き割ってやる。必ずだ」

「いいでしょう、ならば私からも。必ず頭蓋骨を叩き割られてやります。必ずです。はみでた脳味噌は、アルジャーノンにお供えしてください」

「ぬぐああああ!!」

「私の！ 私のです！」

七海は、ウルが自分の携帯を床に叩きつけようとするのを、腕にしがみついて必死でとめた。お気に入りの黄色のそれを、ウルの手からもぎ取ると十崎に向かって叫んだ。

「聞こえてましたよ、十崎さん！ いったい、何をやらかしたんですか？ 盗んだって何をです？」

「あなたの心です」

「殺す！」

「……突然ですが、お別れです」

「逃がすかつ！ 脳味噌はみでたところを写真に撮って、バンコクの交通安全掲示板に貼り出しますよ！」

「いえ、学校をやめるという意味です」

「……は？」

「九城もやめるんじゃないですかね」

いつもの淡々とした口調から、本気の匂いを嗅ぎ取った七海は、リノリウムばりの床に足腰の力を吸い取られ、しゃがみ込みそうになった。

「いったい、何を言い出すんですか？」

失笑するふりをしながらも声が震える。

「僕は正体がバレちゃいましたし、僕がいなくなったら、九城は僕を見張るために、大学に来る必要がありません」

「見張るって……」

「国際美術品密輸防止会議という、団体がありましてね。九城は僕を見張るため、そこに雇われた傭兵です」

「密輸……傭兵……」

視界が、蒼い紗膜に覆われた。

真っ白になった七海の頭に、聞き慣れない単語がこだまする。

自分の顔から、血が引いていくのがわかった。

地面が歪む。

ちがう。

七海の体が、よろけたのだ。

「その団体の中には、京都大学の学長の名もあります。九城の籍は、この学校にありません」

スピーカーの向こうからかけられた、非日常という名のくすんだ色のペンキが、無慈悲に心のキャンバスを侵食していく。日常が、あつと言う間に崩れていく。

「僕は仕事で、必要な鑑定眼を養うために……」

「聞きたくありません！ 聞きたくありません！」

七海は金切り声をあげた。両目から涙があふれる。

「そんなこと、言わなければいいじゃないですか。黙って今まで通り……。私は何も聞いてません！ サークルはどうなるんですか！？」

今度は、十崎が押し黙る番だった。

静寂の中、七海のしゃくりあげる音が悲しく部屋に響いた。

ウルスの視線を感じながら、七海は続ける。

「私……皆には黙ってたけど……勉強とクイズばかりやって……友達もろくにいなくて……出て来てもすぐにいなくなつて……この学校に入つて、やっと仲間を見つけることができたのに……一人にしないでください、責任取つて下さいよお」

「……やっぱり、駄目ですか」

十崎は、独り言のように呟いてから続けた。

「まったくあなたという人は……興ざめです」
そういう十崎の声は、優しくかった。

「あなたは、別の意味で私の同類です。生い立ちのせいにはしたくありませんけど、僕は小さい時分から、親にアザだらけにされて育つたせいか、心の大事な部分のどこかが壊れてしまつてるんですよ。死にそんな時しか、生きている感じがしないんですよ」

「ペシユメルガ……『死の淵を渡る者』」

ウルスの呟きが、狭い室内に響く。

「あなたは京大生で、高校生クイズの準優勝者。なんでもそうです」
が、超一流の領域に入るヤツらは、オタクかイカレのどちらかです」
七海の嗚咽の中、十崎の声が続く。

「残念ながら、よくも悪くもそういう人種は、コワれた生き方しか出来ない。選択肢がないんですよ……ミズ・ウルマ。携帯番号を」

七海は、とうとうへたり込んでしまった。

自分は今、何に絶望したんだろう。

仲間を失うことか。それとも……薄々自分でも気付いていた、十崎の指摘にか。

この先も訪れるであろう、誰に囲まれても満たされることのない孤独にか。

「あなたには、何も言わずに去りたくなかった」

七海は、とうとう声をあげて泣き出した。

ウルが叫ぶ携帯の番号を聞いてから、十崎は続けた。

「それと……一度あなたとスフィックス・ゲームを試してみたかった。それだけが、心残りです」

七海の泣き声が、ピタリとやんだ。

のどの奥で、小さくしゃくりあげる音だけが、傾き始めた太陽が照らす談話室に響く。

「……十崎さん」

今までと、打って変わって、触れれば凍てつきそうな押し殺した声が、床を転がった。

「どこまで、私の過去を調べたんですか？」

「心配しないでください。誰にも言うつもりはありません。念のため、横にいる女に、私の携帯番号を伝えてください。それではまた来世で」

無機質に響く、ツーツー音を七海は呆然と聞いていた。

「いったい……なにが」

七海は困惑し、瞬きを忘れた目をウルに向けた。

ウルは暫く七海を見つめていたが、低い声で話し始めた。

「アイツは、一年前、クルディスタン……イラク北部で民兵をやっていた。詳しい経緯は知らないが」

「民兵……密輸の次は民兵？」

七海が唇を震わせた。

「ギリシャ神話の、エウリュディケを知っているか？」

七海は眉根を寄せた。回りくどい話方に、付き合う気分じゃない。だが、違った。

七海が返事しないのを、知らないからだと勘違いしたウルは続ける。

「あの世まで、死んだ妻を連れ戻しに来た彼女の夫は、冥府から妻を連れ帰っていい代わりに、地上に出るまで振り向いてはいけなしと言っ約束を、地獄の神と交わした。あと一息というところで、夫は無言のプレッシャーに負け、振り向いてしまい、妻はあの世に引

き戻された……クルディスタンで背後から、素手で敵の頸骨をへし折るのを得意としていた……」

七海は血の気が、顔から引いていくのが分かった。話を制止しようとした。耳をふさごうとした、。

どちらも間に合わなかった。

「冥府からの声と、呼ばれたキラー。それがあの男……アウルディーだ」

耐えられなくなり、七海はしゃがみこんだまま、机の脚にしがみついた。

七海は俯き、思考を止めようとした。

別のことを考えようとした。

そうだ、高校時代の、つらかったことを思い出そう。

ひとりぼっちで、昼ごはんを食べていたあの頃を。

惨めで、一番嫌だったあの頃を。

あの毎日に比べれば、どんな事だって……

うまくいかなかった。

「あなたのために言わせてもらうが、アイツは殺しても、胸の痛まない獲物を求めて彷徨っていた狂人だ。関わるべきじゃない」

「見たんですか？」

七海が俯いたまま、唐突に言った。

「あなたはそれを、その目で見たんですか？」

ウルは、しばらく間を置いてから言った。

「いや。伝聞だ。ただし」

七海が、何か言おうとしたのを遮る。

「私の村の者に、嬉しそうにそれを話していたのは、彼自身らしいが」

ウルが続ける。

「今、私が滞在している村のものが、アイツにあるものを贈った。私はそれを買取らせてもらったためここに来た。後は聞いている通りだ」

ウルはこれ以上話せない、とばかりに言葉を切った。
暫く、虚空に焦点の合わない視線をさまよわせていた。

「つまり……あなたが……」

七海は、震える声で呟いた。

「あなたがこなけりやよかつたんじゃないですか！ 狂人呼ばわりするくらいなら、わざわざ飛行機に乗って！ 贈り物を買収する？ 反則じゃないですか！ 毎日、楽しかったのに、こんなに楽しかったのはじめてだったのにッ！」

ピントのずれた怒りをぶつける。だが、迸る激情は、正論以上の正しさを持ってウルを圧倒した。

ウルは眼を逸らした。

「すまない」

「すまないじゃすまないッ！ 十崎さんと、九城さんを返してください、大事な、大事な毎日を、返してください！」

「……私が言えた義理ではないが、あなたの気持ちは、痛いほど分かる。私も、またこの国で一人だったし、今も一人だ。この国に父はいるが、同年代に、囲まれての孤独感は消えなかったよ。いつかイラクの子供達が言っていた。日本では、若者の自殺率が非常に高い、という話をしていた時だ。あんな豊かな国で、自殺するだなんて……。ぼくたちも大変だけど、日本の子たちも大変なんだね……と」

七海の、瞬きが止まった。

「孤独は、いづどんな場所であれ、人の心を蝕むおそろしい毒だ……だが」

ウルは、決然と視線を上げた。

「ミズ。あなたの学生生活に、影響を与えてしまったことを、非常に残念に思う。だが、私もやるわけにはない。生半可な気持ちで、この国に来たワケじゃないんだ。だが、どうしても腑に落ちない点がある。私はあなた達に、何も言うつもりは無かった。やつは何故、自分からあなたに告白した？ たとえば、私がばらしてから

でもよかつたはずだ。なぜあなたのそばに、私を呼び寄せた？」

「……分かりません」

ウルは、別の椅子に置いていたバッグを、肩にかけながらいった。「いずれにせよ、終わったことだ。あなたはもう、かわらない方がいい」

「待ってください！ もっとちゃんと説明してください！」

「必要ない」

ウルは、にべもなかった。ドアに向かって歩きながら、ウルはいった。

「マツサラーマ。あなたの学生生活が、実り多いものであることを祈ってます」

「いきなりやってきて、人の日常を壊しておいて、勝手なこと言わないで下さい！」

「なら、あなたも戦え」

ウルはドアノブに手をかけながら、七海の目を真っ直ぐに見た。

「あなたの欲するものを……日常を取り返すために。我らクルドはまさしくそのために闘っている」

「……っ、突然、そんな、理不尽です！」

ウルはもう、視線を逸らさなかった。

「ミス、あなたも、わかっていないはずだ。私のことは、きつかけに過ぎなかったと。起こるべくして起きたことだと」

七海は言葉を失った。

凶星を言い当てられ、喉に絡まった言葉が喘いでいる。

「理不尽といったな。知らなかったのか？ いやそんなはずは無い」

ウルは眉根を寄せ、いつそ官能的にさえ見える、辛そうな表情で、長い睫毛を伏せた。

「闘いが始まるのは、いつも突然で、理不尽だ。そうでない戦いを私は知らない。ただ……」

扉を抜けた、ウルの言葉のみが室内に留まった。

「私が押し付ける側に、まわる日が来るとはな」

九城は、路肩に寄せた二五〇ＣＣの愛車ににまたがったまま、深呼吸をした。

イエス、ジーザス、ラブズ、ミー
ホンマかいな。

携帯から流れる、ホイットニー・ヒューストンの高い歌声が、夕闇の迫る虚空に吸い込まれていく。

半ヘルとゴーグルを外し、歌い続ける携帯の、イヤホンについている、通話ボタンを押す。

「聞いてましたね、九城」

「あら、バレとった？」

ファミコンの、カセットの中に仕掛けた、盗聴器の存在が。
「無駄な説明を省きたいから、カバンに入れなかったんです」

「……そっか。俺のこと、何時から気付いとった？」

二人は、出会って以来、初めて正面から向き合った。

「会って、二カ月くらいたってからですかね」

「ひよこちゃんトコに、転がりこませてもらう頃か。じゃあ一年近く、泳がせとったんや。何のつもりや？」

「……美夜子がね」

「……そっか」

「あなたのことを気に入ってたし、すごく気にかけてましたから。冬なんかどこで寝てるのか、すごく気にしてましたよ」

「敵わんな、あの子には」

「一つ聞きたいんですが」

十崎が静かに聞いた。

質問の内容は分かっていたし、返答如何で、自分が知っている個の中では最強の暗殺者に、首を狙われることも理解していた。

「美夜子に近づいたのは、利用するためですか？」

だが躊躇は無かった。答えは決まっていたからだ

「まったくなかったと言いつくれへん。ちようどええかもな、確か

にそう思った」

「……」

「その上、危うくあの娘を、殺してまうとこやった」

九城の脳裏を、今も必死で眼を逸らし続ける、記憶がよぎる。

握り締めた拳を、弓のように引き絞るその先には……

九城が、妹のように可愛がっていた、しっかり者で心優しい女の子の、恐怖に歪んだ表情があった。

死んだら、許してくれるだろうか。

また、笑いかけてくれるだろうか。

自分の記憶って奴には、パンチもチョークも効かんから、逃げ回るしかない。

「だから俺は、自分が許されへん。十崎、俺を殺るときは、ひよこちゃんの為や言うてくれ」

九城は、力なく笑って続けた。

「抵抗はせんよ」

「早く楽になりたいんですか？ 美夜子の家を出て、ちっとも良くなつてないじゃないですか」

「……」

「自殺の手伝いに、僕を利用するのはやめてください。夕佳さんは、どうするんですか？ 姉から彼女に、ジョブチェンジしたばかりなんでしよう？」

九城の後で、バカでかいクラクションが、苛立たしげに吠えた。

だが九城は、またがったバイクのタンクの表面をただ見つめていた。

「俺は……」

「小僧、耳ついとんかあ！」

あきらかにスジモノらしい、派手なスーツを着た中年が、センチユリーの運転席から降りてきた。九城のバイクが邪魔で、スナックの前に路上駐車が出来ないのだ。

「あなたは、美夜子のことを妹のようにかわいがり、美夜子はあな

たのことを、今でも兄のように慕っています。　あの時の事は……」

「兄貴はお前やる。十崎」

「オイ、こっち向けや小僧」

細身でチヨビひげをはやし、サングラスをかけた男が、うなるようにいい、九城の肩を小突いた。

わずかに体が揺らいだ、九城の姿勢はそのままだ。

「贖罪代わりに、美夜子の事を、お願い出来ませんか」

九城の無理な作り笑いから、吐き出される言葉は震えていた。

「お前がおるやる、十崎。なんて言われても、俺には無理や。あんな事しといて、もういつペンひよこちゃんに会う度胸なんかないわ」
「何シカトこいとんじゃ、ボケエ！」

九城は胸倉を掴まれ、上を向かされた。至近距離から、九城の目を覗き込んだ男は怪訝な表情を浮かべた。光のないその目は、何も見ていないのだ。

「九城、うるさいです」

「あ、わりい」

無造作に、左手で胸倉を掴み返した九城は、男の顔を正面まで持つてくると、右手を振った。

「……へごつ!？」

右フックをくらった男は、確実に顎と奥歯がくだけた手ごたえを残して、道路の真ん中まで吹っ飛び、急停車したタクシーにぶつかった。

「九城。この件から手をひいてくれませんか。僕は今夜、楽しもうと思ってるんです」

「……十崎。この件だけ手をひいてくれへんか。もう大佐の仕事は、受けへんからさ」

首をひねって、後ろの車から降りてきた、新手の二人をぼんやり眺めながら、九城は言った。

「どこまでも、平行線みたいですね。たとえ九城でも、僕の楽しみを邪魔したら命はありません。警告はしましたよ……マッドドッグ・

ジエイソン」

十崎は、九城の通り名を初めて口にした。それは別れの言葉だった。

何もかも知ってたんやな、お前。

「そのカセット、間違ってもひよこちゃんに渡すなよ」

通話の切れた携帯のイヤホンを外し、バイクから降りると、ドライビンググローブをはめた手を開閉して、軽く首を回した。

「……さて悪いけど」

徐々に光が戻りはじめた眼で、トランクから得物を取りだしている男達に、視線を飛ばす。

ドクン、と言う心臓の鼓動に押し出された血液が、軽い頭痛とアドレナリンをもたらした。

全身の筋肉が、空気を入れたゴムタイヤの様に、膨張していくのが分かる。

特異体質なのか、九城の筋肉の膨張率は、尋常ではない。普段からルーズファッションなのはそのためで、体格が文字通り、一回り大くなるのだ。

握り締めた鉄拳に、瘴気と狂気が集中していく。

鼻腔に蘇る匂いは、ディーゼルの黒煙、突撃銃の硝煙。

全身の血管を、イラつきで脈打たせながら、『六人殺しの狂犬』は言った。

「俺の八つ当たりには、付き合えや」

九城はバイクにまたがると、エンジンに火を入れた。

フロントガラスに、顔をメリこませたスキンヘッド、飛び膝で、顔の真ん中をへこまされて、痙攣している長髪の若者。

新たな二人の犠牲者には目もくれなかった。

顔についた、返り血をぬぐいもせず、九城はつぶやいた。

「十崎……俺ら死ぬまでこんなんか？」

九城は我知らず、虚ろな笑みを浮かべている、自分に気づいた。

まあいいか。

どうせ、今日死ぬ公算が高いのだから。

それはそれで、悪い事ばかりじゃない。

眠れない夜達の、長い長い手から、逃れる事が出来るのだから。

悪夢に脅え、眠りの精が訪れるまで、当て所もなく町を彷徨う、

孤独な夜から解放される。

九城は迷いを振り切る様に、アクセルをふかす。

墓の下なら、夢も見ずに眠れるだろう。

蛮人を玉座に頂いた、血のような赤色のバンディットは、犠牲者

とギャラリーを残し、弾かれたように飛び出した。

第七章 さよならの前に（後書き）

作者より

次は第8章。

どうぞよろしくお付き合いください。

第八章 さよならは言わせない（前書き）

花粉辛い・・・

第八章です。どうぞお付き合いください。

第八章 さよならは言わせない

あるところに、おとうさん、おかあさん、男の子がいました。とつても仲のいい、しあわせな、かぞくでした。

でも、ある日、おかあさんが、びょうきでしんでしまいました。やさしかったおとうさんは、お酒を飲んで、男の子をぶつようになりました。

毎日ぶたれてばかりの男の子は、大事にしていた、かつぱのぬいぐるみをぶつようになりました

かつぱさんは、うでのところと首のところがとれかけて、なかみがすこしはみだしてしまいました。

かわいそうにおもった、かみさまはあるばん、おもちゃばこのかつぱさんのまえにあらわれていました。

「かつぱくん。なにかおねがいはありませんか」
かつぱさんはいいました。

「ならばくを、男の子がぶたれそうなときに、一回だけでいいからおおきくして、しゃべれるようにしてください」

七海は放心したまま、パイプイスに腰掛けていた。

ウルマと名乗る女が去って、どれくらい経つたろう。

一度桃井が、心配したのか覗きに來てくれたが、七海は窓の外を見つめたまま振り返りもしなかった。

日が暮れるとともに足元から忍び寄り始めた冷氣だけが、七海を現実の世界につなぎとめていた。

さっきの十崎との会話。

まるでいつもの帰り道で、交通事故にあつたような唐突さだ。付き合ってる彼氏が——いないが——実は女でしたと聞かされても、きつとこんなに驚かないだろう。手の込んだ、十崎一流の悪ふざけ

と思いたかった。ウルマと言う女の存在がなければ、絶対に信じなかったろう。

このまま家に帰れば……明日いつものように研究室の扉を開けたら……

「相変わらず、朝早いですね、十崎さん」

「実は、九城さんとの蜜月に、この部屋を活用してるんじゃないんですか？ でバレないように九城さんだけ先に……いやらしい」

「聞いているんですか、十崎さん」

くしゃつと七海の顔が歪んだ。

きつとしない。

明日はきつとしないし、ずっとしない。

九城さんが、気紛れにやってきて、違法ダウンロードしたデータを、十崎さんにたかりに来たりすることも、きつとない。

明日には、愛すべきダメ人間達はいないのだ。

そして……

スフィックス・ゲーム。

この単語が、十崎の口から出てくるとは、夢にも思わなかった。

このゲームにまつわる、記憶がよみがえるたびに、自分を小声で罵ったり、脈絡の無い事を口走ったりして誤魔化して来たが、今はそうする気さえ起こらない。

七海の中で、相反する感情が、意識の水面に交互に顔を出す。

スフィックス・ゲームに、興味があったから、私に近づいてきただけ。

落胆。怒り。悲しみ。

それは、珍獣に興味を持つと同じ意味合いの、関心なのだろうか。黒田さんから助けてくれたのも、全部計算づくだったのか。

そして、もうひとつの感情。

スフィックス・ゲームの事を知っているのに、私に興味を持ってくれた。

安堵。

後者の方が、七海には大きかった。
それくらいまでに、消したい過去なのだ。
心理的なガードを取っ払った七海の脳裏に、次々と断片的な映像が走り抜ける。

仲間だった同級生に、頬を張られる自分。
金切り声を上げて、うずくまる半裸の自分。
真っ赤な顔で、襲い掛かってくる裸の男。
その後ろの、男達……

七海は、我知らず呟いた。

「十崎さん……」

助けを、求めるかのように。
さっきの口調の暖かさ。

『全く……あなたには興ざめです』

ウルマという、女の言葉。

『なら、あなたも戦えミズ』

勝手言っただけじゃないわよ。

「言われなくても」

七海は、涙を拭って立ち上がった。

「黒田さん、聞きたいことが」

すっかり夜の帳に包まれた、研究室の扉を開けるとそこにいたのは黒田だけだった。

「なんだよ」

黒田は、パソコンから、顔もあげずに返事を返した。

「お客さんを連れて来た時、九城さんがいった……」

「ひょこって子だろ？ 美夜子^{みよこ}って名前で、十崎の妹だ」

先を越されて、鼻白んだが、

「聞こえてたんですか？ 談話室での会話」

「叫び声だけはな。いくら壁が厚くても……俺と桃井しか、聞いてないから安心しろ」

「その美夜子さんと……」

「無理だ。十崎と九城以外は、その子の連絡先をしらない。それに十崎は、妹の事に触れられるのを、極端に嫌う」

七海は、失望でずっしりと体が重くなった。九城さんは、教えてくれるだろうか。無理な気がする。

「だが、九城は別に気にしてなかった。だからその子の家までの地図をダウンロードさせられた事がある」

「……！ あのっ」

「何するつもりだ、その子の家について」

黒田が、はじめて顔をあげた。

七海は、研究者が、論文のプレゼンターに向けるような視線を、ガツチリと受け止める。

全部を、説明するわけにはいかない。

考える。考える。

そして。

「明日」

七海は、決然とした表情を黒田に向けた。

「十崎さんに、いつもどおり挨拶して……」

七海は、最大限の想いを言葉に込めた。

「もしかしたら、来るかもしれない九城さんに備えたり、学食までダッシュしたり」

七海の眼から、光るものが溢れた。

「二人が授業中、笑わせてくるのに耐えたり、十崎さんに、また明日って言ったりするために……」

「その話をまとめると」

七海の言葉が、終わらないうちに黒田が言った。

「十崎が……いや二人とも、いなくなるうとしてる。そういう事か？」

黒田さんは、喜ぶかもしれないな。

「はい」

「そいつは」

黒田は、おもむろに立ち上がり、窓際まで歩いて行くと、背中を向けたまま言った。

「そいつは……非常に困る」

やっぱり。でも。

「黒田さんには、確かに好都合かもしれませんが……え？」

「困るって言ったんだ。朗読か……もとい、サークル活動がなくなったら、確実に現在の部員が激減する……何考えてるんだ、副部長も、警備隊長も」

「あの、話が……」

「言ってなかったか？」

黒田は振り向いて、ニヤリと笑った。

「俺も、DNCのメンバーだ」

「……えええっ！　ちょ、そんな……聞いてませんよ、聞いてません！」

天井が、グルグル周りそうだった。

「聞かれなかったもん」

「女子高生みたいな、言い訳はやめてください！……もう、今日は何がどうなってるのやら……」

七海は頭を抱えて、しゃがみ込んでしまった。いろいろありすぎて、頭がパンクしそうだ。

「間に合うのか？」

七海は顔を上げた。

黒田が、自分を見下ろす真摯な視線に、所期の目的を思い出し、急いで立ちあがった。

「たぶん……いえ、きっと」

「具体的には、どうするつもりだ」

本当に、この人の質問は、的を外さない。

「十崎さんが、欲しがるアイテムを集めます。そしてもう一つ、十崎さんの人に知られたくない、ウィークポイントを、彼女から聞きます。その二つがそろえば」

七海の腹は決まっていた。

興味半分？ 結構。

珍獣扱い？ 何を今更。

黒田さんも言っていたじゃないか。

『最初はみんな、そんなもんだ』

きっかけは、どうでもいい。

今が大事なんだ。私と十崎さんとの繋がりは、そんなゲームだけなんかじゃない。

これって、きっと自惚れじゃない。
だからこそ。

七海は記憶の底に封印した、忌まわしい過去の蓋を、開けるつもりだった。

今度は、大切なものをなくさないために。

七海の唇が、二度と口にする事は無い、と信じていた単語を紡いだ。

「スフィングスゲームを、挑みます。」

「スフィングスゲーム？ ……聞いたことがないな」

「それはそうでしょう。最初は、一部のクイズマニアが、冗談半分ではじめた遊びだったんですから」

七海の胸が、過去の傷でうずいた。顔をしかめたくなくなるほどの痛みだ。

「十崎さんは、私とそれをやりたがっているんです」

「それで、十崎と九城を、引きとめられるのか？」

「十崎さんは、スフィングスゲームの意味を、知っていました。お互いがベットするものは、プライドなんです。賭け将棋と同じです。ゲームに対して、なんの思い入れもない人には、強制力はありませんが」

七海は、ちらりと壁時計を見た。十八時四五分。

「そもそもそういう人は、このゲームをやりません。ですから九城さんに関しては、引きとめられるかどうかかわからないです」

「……まあ、九城はほとんど来てないも、同然だからな。十崎さえいれば、きつといつも通り、餌をもらいにやってくるだろう。時間が無さそうだな。結論から言えば、俺には、十崎の妹の住所を教えることは出来ない。道義的にとか、そんな理由じゃない。十崎にばれたら、何をされるか分からん」

「……黒田さん」

「だが、あくまで偶然だが、今俺がいじっていたパソコンに、京都三条の地図が出ていて、ある箇所に矢印が出ている」

「……黒田さん！」

「もう一つ。十崎の価値基準は独特だ。赤ん坊が高価なおもちゃよりも、トイレットペーパーの芯を、欲しがったりするのと同じようにな」

そのとおりだ。実際、十崎が何を欲しがるのか、皆目、見当がつかない。

「俺はその一つを持っている。今から下宿まで取りに帰って、引き返してきて一五分。ここでコピーするのに五分。間に合うか？」

「間に合わせてみせます」

七海は眼差しに、精一杯の感謝の念をこめていった。

無言で踵を返し、扉に向かう黒田の背中に言った。

「黒田さん」

彼はきつと、この時間まで待っていてくれたのだ。

「かなりかつこいいですよ」

「気づくのが遅いんだ」

黒田は振り向かず、扉の向こうに消えた。

第八章 さよならは言わせない（後書き）

作者より

ここまでお付き合い下さり、ありがとうございます。

どうか、最後までお付き合いください。

次回もどうぞお楽しみに。

第八章 さよならは言わせない2（前書き）

みなさんこんばんわ。今日も寒いです。お昼はびっくりドンキーを食べました。

今は菓子パンを食べてますが。小学生の作文のようですね。それでは、どうぞお付き合ってください。

第八章 さよならは言わせない2

今は、待つしかない。

陰鬱な空気が、二人の間に流れていた。

「逃げられました」

四条駅で落ち合った際、サイヤーラが無表情に言った。ウルは黙って、頷くしかなかった。

後は、サイヤーラのネットワークと、アウルディーからの連絡を待つしかない。

サイヤーラの仲間がもってきた、小型の古いロードスターが、鴨川沿いを、修学院にあるウルの宿泊先に向かう。
寒い。

川べりだから余計にそうなのかも知れないが、それにしても、異常気象だろう。ウルは、コートの前を合わせた。車内に暖房は入っていない。鴨川の、暗い水面を見つめながら、ウルは努めて何も考えないようにした。

その時、携帯の着信音が、車内の静寂を破った。

「アウルディーですね。私と奴以外、その番号は知らないはず」

その通りだ。

ウルは、携帯のモニターを見もせず、通話ボタンを押した。

「私だ」

「ウルマさんですか、さっきの織河です」

「……どうして……そうか、さっき携帯の番号をアウルディーに伝えた時か。なんて記憶力をしているんだ、あなたは」

「おい」

サイヤーラの険悪な声がかかった。

ウルは通話口をふさぎ、

「奴の女友達だ」

囁いた。

「十崎さんの、居場所は分かりましたか？」

「関係ない。切るぞ」

「彼が欲しがるものを手に入れました。多分、十崎さんは、お金には興味がありません」

「……ちよつとまで。この通話、ハンズフリーにできるか」

サイヤーラは車を路肩に寄せると、携帯を受け取り、コードを繋げてから返した。

「アロー、今、奴は金には興味がないといったか？」

「感じませんでしたか？ 隣りの危ない方は、どう思つか聞いて下さい」

ウルは、内心の動揺を隠して言った。

「……何を言っている？」

「今車の中でしょ？ 運転しているのがあなたでないなら、隣りにいるのは十崎さんが言ってた、危ないオッサンしか考えられない」

「別の仲間だったらどうだ」

「語るに落ちましたね。そういう場合は別の男だっているんですよ。そんなことはどうでもいい。聞くぐらいどうってことないですよ」

こんな少女にまで、手玉にとられるとは……ウルは泣きなくなつたが、黙ってサイヤーラに目を向けた。不機嫌そうにこちらを見ていたが、黙って不承無精頷いた。

「……なるほど、そうかもしれん。では、見つけ次第殺して回収しよう」

ウルは、できるだけ冷淡に言った。

電話の向こうで、息を飲む気配がした。いつまでも、主導権を握られてたまるものか。

「冷静になつてください。そんなスタンスだと、よくても逃げられるし……」

「悪ければ、なんだ」

「あなた方が、殺されます」

「おまえ……」

「落ち着いてっていったでしょ。少しでもいいから、想像力を働かせて下さい。あなた方から盗んだっていうのは多分、密輸品でしょ、カバンに隠せる大きさの」

「……続ける」

「十崎さんは、以前イラクに行ったことがあって、京大には鑑定眼を養いに来たと言っていました。彼がコレクターとは思えません。ならば、ブローカーでしょう」

「……」

「あなたは、取り引きはいい、盗んだあれを返せと言いました。十崎さんが盗んだものが、現金とは思えません。かさ張るし、普通現金をあれといいいません。じゃあ分からないのは、買い取りに来たあなた方から、何の品を盗んだのか？ 逆ならわかりますが」

七海は一旦、言葉を切ってから続けた。

「考えられるのは、密輸品は対になって、はじめて価値のあるものか、または価値の上がるもの。単純に多いほうが、値段は上がるってだけの理由かもしれませんが、あなた方も、十崎さんの所持するものと、共通する密輸品を持っていた。十崎さんに、イラクで手に入れたっていう、円筒印章を見せてもらったことがあります。まずそれは除外するとしても、その類かもしれませんね」

ウルは、心臓の鼓動が早くなるのを感じた。なぜ、円筒印章を除外する？

叫びだしそうになるのを必死にこらえた。カマをかけているとは思えない。

「でも、それがなんにせよ、盗まれたものは何か、あなたがなんの取引できたのか、私はこれ以上詮索しない。どうでもいいから」

ウルは、少女の理路整然とした推測に、舌を巻いた。

「結論からいえば、あなたたちから何かを盗んだ理由、呼び寄せる理由は、面白半分……としか思えない。ただ……」

ウルはサイヤーラを見た。サイヤーラはあきれたように笑い、首を振ると、七海の言葉を遮った。

「聞こえますか？ 初めまして、私、物部と申します」

「……聞こえてます。初めまして、織河です」

「……見事な推理です。さすが京大生。いままでの推理、メモにとっているなら焼却してください」

「演繹法と言ってください。ご心配なく、全部頭の中です」

「あなたの仮説が、当たっているかどうかはともかく、結論の部分は同意です。あの男が求めているのはスリルでしょうね……で？

わざわざアドバイスをくれるために、お電話を？」

「私を、彼のいるところに、連れて行ってください」

「自分で、勝手に行けばいいでしょう」

「ええ、居場所を教えてもらったら、勝手に行きます」

「教えようにも、知らないんでね。それでは」

「分からないんですか？ あなたたちにはもう、打つ手がないんです。手詰まりなんです。取り返せる可能性があるのは、スフィングスゲームだけです」

「……何を言ってるんです？」

自分に、問いかけられたと思ったウルは答えた。

「アウルデーが、その娘とやりたがっているゲームだ。何の事かは、さっぱりわからない」

「欲しいものを、ベットしてやりあうゲームです。彼は去るにあたって、それが私と出来なかったのが、心残りだと言ってたんですよ。彼が喰いつく餌としては、唯一のものです。そして多分……」

「……あなたは、彼の恋人なんですか？」

「……は？ お、おぞましいこと、言わないで下さい！ 赤ちゃんを産みますよ！」

錯乱して、訳の分からない事をいう少女に、サイヤーラは苦笑したが、真剣な顔になって続けた。

「あなたは、冷静な分析ができているようだ。なぜ身の危険をさ

らす？」

「……彼を含む日常を、失いたくないんです」

「説得力としては、弱い。それくらいの事で……」

「それくらい？」

少女の声に含まれる、ただならぬ怒りを察して、サイヤーラは言葉を失った。

「私は小学生の頃から、独りでした。高三の夏からは、バカな事をしたせいで、本当の一人ぼっちになりました……一人で昼ご飯を、食べる辛さってわかります？ 私には友達がいまssenって、全身で表現しているんです」

電話の向こうの少女が、涙を必死にこらえているのが、スピーカ―越しに伝わり、ウルは感嘆を禁じえなかった。

泣き落としをするつもりは、無いらしい。

「その頃ちよつとだけ、仲のよかつた男の子もいました。でも彼とは、お昼を一緒にしなかつた……。余計に惨めだからです」

ぐつと詰まる気配があつた。

「私は……一人で前庭の、車の陰で食べてたんですよ」

ウルは、この件に関わつた事を、心の底から後悔していた。ウルの抱える、少女と似た傷が激しく痛みを発し、血を流しはじめていたのだ。シリндаーシールを盗まれたのが、自分の責任でなかつたら、今すぐこの仕事を放棄していたかもしれない。

「そうなたきっかけが、スフィックスゲームでした。高校生クイズで負けた悔しさに任せて、優勝高のチームに、決闘を申し込んだんです。気付いたときには、ゲームは終わってました。そして……大変な事になってました。でもゲームの間の、記憶が私にはないんです。ホントなんです」

七海はまるで、当事者に言い訳するかのように、必死でサイヤーラに訴えかけた。

「自分のチームの男の子に頬桁を張られて、目を覚ますまでの記憶がないんです。でも……その場にいた誰も、信じてくれません

でした。そして離れて行つた」

七海はこらえきれなくなつたのか、声を上げて泣き出した。

「一体……何があつたのか……誰も教えてくれないから……いまだにわからない」

「青春白書は、他でやれ」

サイヤーラはいら立ちを露にし、七海の言葉を遮つた。

だが、それは話が脇道に、逸れたせいではないようにウルには感じた。

「話を戻しましょう。私たちに、打つ手がないとはどういう意味ですか」

七海はすすり泣くのを、無理矢理断ち切つて答えた。

「もう……分かつているでしょう。あなたがたは否応なしに、十崎さんの指定する、時間と場所に従わなきゃならない。犯人から公衆電話にかかってくる、指示に従つて走りまわられる、ハリー警部と一緒になんです」

「……『車屋』を、面と向かつて侮辱した人間は、あなたが初めてです」

サイヤーラ。アラビア語で車。

「車屋？」

サイヤーラは、一瞬気まずげな表情を浮かべた。

「もういい。大人の仕事を、邪魔するのはやめてもらいましょう」
ウルが言葉を挟んだ。

「私は、シリンドーシールが戻れば、何でもいい」

サイヤーラは、怒りに満ちた視線を、ウルに向けた。

早口で、ウルが囁いた。

「サイヤーラ。彼女を利用させてもらおう。このままでは、私たちはハリーにすらなれないかもしれない」

「それも、ヤツから連絡があつての話です。なければどのみち、捜し出すしかない」

その時、シフトレバーの手前に置いてある、七海との会話に使用

している携帯が震え、電子音を吐き出した。

キヤツチだ。ウルとサイヤーラは顔を見合わせた。
間違いないくアウルディーだ。

サイヤーラは左手で、携帯を掴み上げた。

「織河さんといいましたね。懸念が一つ消えました。ヤツからの携帯にキヤツチが入ってます」

「……！ あのっ」

「車屋の、任務達成率は一〇〇パーセントです。それでは」

「ヤツには伝える。準備しておけ」

ウルが、七海に聞こえるよう、大声で言った。

通話を一方的に終えたサイヤーラは、携帯を持ち換えると、素早くウルの胸倉を掴んで引き寄せた。

「ものは盗まれる。勝手なことと言う……。いいかげんにしないと、息の根を止めますよ」

至近距離でのぞき込んだ、ウルの伶俐な眼差しには、恐怖の色は微塵もなかった。

スカーフで隠された、ウルの口元とサイヤーラの顔の間で、傷だらけの棒の先端が当たり前のように、ニヤニヤ笑いを浮かべていた。
「保険だ。貴様が仕事を完遂すれば、必要ない……。電話に出たらどうだ」

サイヤーラは、右手の携帯の通話ボタンを押すと、険しい顔でウルの目を見据えながら、左手を離れた。

「もしもし、サイヤーラです」

電話の向こうから、朗らかな声がした。

「やあこんばんは。お散歩はどうでした」

「……もう若くないんでね、別の足を使ってますよ」

「せっかく、あなたの健康を気遣って、嫌々仕方なくこの車を強奪したと言うのに……それはそれとして、この車、二五歳以下にも保険が利くんですかね？」

「いやあ、もうすぐこの世からおさらばする、あなたには関係で

しょう」

「そういうことなら、仕方ありません。このチェロキーの鍵もお返ししないといけないから。今から十条の交差点まで、来れますか」
「今日は疲れたんでね。勘弁して欲しいんですよ。お金も、準備しなくちゃいけませんし」

「いえ、今回はあなたがたの分を返却するだけです。だから、お金は又今度で」

「行かなかったら、どうするんです？」

「明日、ニューヨークのボグダノス大佐のオフィスに郵送します」
……最悪だ。

誰も罪に問われないが、一円にもならない。なにもかもが無かつた事になる、最悪の選択だ。

黙っていると、十崎は続けた。

「コーヒー一杯では郵便代にもなりませんかね」

遺物を、自発的に返却しに来た相手に対し、ボグダノス大佐のチームが執り行う儀式を口にした。

ウルは手のひらに汗がにじむ感じ、同時に確信した。

この男はシリンダーシールにも、札束にも興味がない。

本物の狂人だ。

「あなたは……」

「その代わり」

十崎は、逸る気持ちを、抑えるかのように言った。

「今晚来てくれたら、私の持っている方を、二万四八〇円でお譲りしましょう」

「……その半端な金額はなんです」

「二万円は、今日頑張った僕の時給。四八〇円は、片道の電車賃です」

「……。高くないですか、時給にしては」

「え……」

十崎は、虚を突かれたように、言葉を失った。

「待つて下さい、闇で売ったら一〇万ドルはするんですよ、お買い得じゃないですか！」

慌てたように続ける十崎に、サイヤーラは疲労の色を面に浮かべたが、ウルは赤面を禁じ得なかった。七万と聞いた時、どんな気持ちだったのだろう。

同時に、相場を知っているということは、売る気があるのか。

「知りませんよ、あなたが時給を口にしたんでしょう」

「車の鍵もついてるんですよ。欲をかいて……人として、恥ずかしくないんですか？」

「どれも、盗品じゃないですか」

「……まあ、それを言われると」

「そんなに、今晚来てほしいんですか」

「……」

「いい加減にしろ！」

ウルは吼えた。

「いったい何がしたいんだ、アウルデー」

「日本人が無くそうとしているものを……」

「切るぞ」

「ああ、今晚来てくれればいいんですよ」

「取引もしないのか？」

「そこでちよつとした、ゲームにつきあってもらえれば、円筒印章は二本ともお渡しします」

「随分、高く付きそうな気がするな、え？」

「そりゃあ、二本二五は下らない代物ですから」

十崎が正確な値段を知っていることに、ウルはもう驚かなかった。

「スフィンクスゲームというやつか」

クスリ、と電話のむこうで笑う気配がした。

「あなた方では、役不足ですがね」

「悪かったな。織河からの伝言だ。スフィンクスゲームを、受けて立つとよ」

息を飲む気配がした。

「段々分かって来たよ。お前が呼びたいのは、我々じゃない。彼女だ。あの娘に通話を聞かせた理由も、それだろう」

「……残念ながら」

十崎は、力なく笑って続けた

「彼女はサークルの仲間です。お互い全力にはなれないでしょう。それに」

十崎は、残念そうに続けた。

「僕が用のあるのは、今の彼女じゃありません……通話の内容を聞いてもらった理由は、どうにかして、僕の知らない彼女に……興が削がれましたね。どうしてもよくなってきましたけど、どうします？」

本当に、テンションが下がってきた十崎の声を聞いて、ウルは答えた。

「行くさ。それしかないからな」

「では、十条にいたら電話を下さい」

サイヤーラは、通話の切れた携帯をウルに放った。

「女版コナンに連絡したければ、お好きに。ただし、巻き込まれて死ぬでしょうがね」

サイヤーラは、懐から自分の携帯をとりだすと、英語で話始めた。

「やあ、ジョンですか？ああ、Bエリアで前から言っていたパーティーがあるんだ……うん、そうだな、ゲイルとリー、ブラウンとマイク、ロバートとタクマでどうかな……そう、プレゼントは大きめのを、派手な音のするヤツ……二次会は、マスードさんちで。楽しみだねえ。ところで」

ここで言葉を切ると、今度は日本語で、同じ陽気な調子を崩さずつづけた。

「電波を傍受している、公安のイヌくん達がいたら言っとくね。今回は、一般人に迷惑をかけるつもりはないから、邪魔しちゃうダメだよ。じゃないと、どこかの街中であっても不幸なことがおこるか

らね

第八章 さよならは言わせない2（後書き）

作者より

いよいよ核心にはいります。

どうぞお付き合ってください。

第九章 ランニング・ウルブズ（前書き）

みなさん、こんにちわ。大阪は雨です。寒いなあ・・・

第九章 ランニング・ウルブズ

九城は、人気の無い工場街の一角にある、貸しスペースのシャツターを開けた。

一ヶ月五千円で借りている、トランクルームだ。

埃っぽく、カビ臭い三畳程のスペースに入ると、敷地内の街灯を頼りに、積まれている段ボールやら、大型のバッグを取り出した。

蓋を開いて、ナフタリンの匂いを嗅ぎながら、暗い目で中を見下ろした。

その視線の先には、着古された黒の市街戦用のカーゴパンツと、同色のベスト、

そして……

かれの通り名の由来である、近接戦闘に流用していた、落書きだらけのホッケーマスクが、青白く、不気味な笑顔で彼を迎えた。後は現地で買った長袖のシャツ。PMCは軍服を着ないし、階級もない。

よお、相棒。お見限りじゃねえか。

頭で響く声に、無表情のまま答えた。

「ハイ、バディ。俺は毎日お前から見てた世界を見てるさ……繰り返しな」

ハハハハハ……もう、飽きたろ？ 昔の女を思い出してコスるよ

うな、さもしいマネはやめてよ、七人目の……

ドガッ！

九城の岩のような拳がマスクごと、二段にかさねた段ボール箱の底をブチ抜いた。

下の段ボール箱に入っていた、武器にまみれたホッケーマスクが、拳の下で、愉しくてたまらないという様に嘲笑する。

ゲハハ、頑丈だろ。感謝しろよ？ じゃねえと一年近くも、あん

な腐れたブラッディランドで、お遊戯できなかったさ。

お前みたいな、コワレと一緒にな。

「……」

九城は拳を抜くと、深呼吸を繰り返した。気を落ち着けると、堂々とトランクルームの外で、着替えをはじめた。

誰もいないし、見られたところで、サバイバルゲームの準備にか見えないだろう。

凍み入るような、寒さも気にならない。

トランクス一枚になった姿を、弱々しい街灯が照らす。

上半身も、下半身も、鍛え抜かれた筋肉に覆われ、何か禍々しい雰囲気を感じていた。

その理由の一つは、右のわき腹付近にある、背中の弾痕だろう。

それ以外の目立つ傷は見当たらないが、それ一つで、彼の経歴を語るには十分だろう。

サッカー用のプロテクターを、スネと前腕に装着し、着々と装備を整えていく。

バグダッドの傍にある、悪名高いアブグレイブ刑務所と同じ地区に、米軍が補給物資を貯蔵している倉庫群がある。米軍を憎悪する輩たちに、四方を囲まれたエリアを護るのは、ファルコンチームという民間軍事会社であり、五百人のクルド人精鋭部隊がその任を背負っていた。九城がイラクにいた頃、その中に腕の立つ日本人がいる、と聞いたことがあったが、そいつがある日、官憲二人に、病人の血を注射して町から消えた、という噂が立った。その二人は、九城が殺した男達と同等のスカムだったので、だれも同情はしなかったし、歩く死人にふさわしい顔になった二人も、何も言わずに行方をくらました。ただの噂で、被害者が何も語らない以上、罪に問われるわけがない。

その後、イラク北部のクルド人自治区に逃げ込んだその男は、クルドの軍隊——何年か前までは只の民兵集団だったが——ペシユメルガに潜り込み、外国人のイスラム過激派を、暗殺して回る非合法

部隊の一員として暗躍している、と言う噂が流れた。

それが、十崎という男で、京都大学に通っていると知ったのは、日本でぶらぶらしていた時だった。

九城が籍を置くツイントリガー社から、米軍司令官ボグダノス大佐が、連絡を取りたがっているというメールがあった。普通、民間軍事組織は、社員の情報を明かすようなまねはしないが、米軍の上層部に、恩を売ることに躊躇があるはずはなかった。このギリシア系で、九城より少し背の低い、ピットブルの異名を持つ博識な軍人に、九城はイラクで助けられ、様々なことを学んだ。国際美術品密輸防止会議に所属し、ニューヨークでは、検事の顔を持つ彼に、十崎の監視を頼まれ、九城は二つ返事で引き受けた。

九城は実際に憔悴した官憲二人を見た、注射云々の話を除いて、噂をほとんど信用してなかった。バグタッドは噂話の温床だし、ペシメルガに日本人が入隊できるとはおもえない。

九城は、自分の目で確かめたものしか信じなかった。

そして、十崎と過ごして確信したのは、この痩身で眼差し以外にこれと言って特徴のない男は、九城が知っている中ではもっとも狡賢く、最もケンカが強い戦士だということだ。

十崎が取引に使う場所は、幾つか候補があったが、最後の会話で目星がついた。

十崎は今夜、楽しむつもりだ、と言った。なら、時間を掛けて入念な仕掛けを施した場所だ。

袖口に、ナイフを二本巻きつけたところで、携帯が鳴った。

液晶の、今日五回目のなつみんの表示を見て、九城は通話ボタンを押した。

お別れを言うために。

「おいす」

「つ、つながった。九城さん、今どこですか？」

三条に向かう、京阪電車の車両の隅っこで、七海は声を抑えて叫

んだ。

「んー？ ええとこ」

「私も連れてって下さい」

「……女は無理やで。なつみんが、早う出るとこ出てBカップ卒業してくれたら、俺そんなところで金使わんで済むのに」

「悪かったですなっつ！ それにギリギリCカップですつ！」

叫んでしまつてから、周囲の好奇の視線に気付いた七海は、真っ赤になつて隣の車両に、移動した。

「電車の中やろ？ 大声でカムアウトするのはどうかと」

「……いい加減だまらなと、耳から手エ突っ込んで、奥歯力タカタ言わせますよ」

「……それって、英語でどう言うんやろな」

「知りませんよ、もう。それより、十崎さんの居場所はわかりますか」

電車から降りた。七海は階段に向かつて駆けながら言った。

「なんで？」

「馬鹿なことをやめさせるんです。そしていつも通りに学校に来てください。九城さんもね」

「あいつの八割以上は、馬鹿なことできてんねんで。消えてなくなつてまうやん」

「激しく同意ですが、今回は……」

「それに」

七海の言葉をさえぎり、九城は虚ろに笑った。

「二年ほど遅いわ」

七海は、改札口を出たところで、肩を怒らせて立ち止まった。突然立ち止まった彼女に、何人かの通行人が軽くぶつかったが、気にしなかった。

「仕方がないでしょう。二年前は……。」

七海はぐつと唇を噛んだ。

「私は私で、馬鹿なことしてたんですから」

「……そっか」

七海は再び早足で歩き出す。

「彼を止められるのは、スフィングスゲームだけです。そしてそれは私にしか出来ない」

「……スフィングスゲーム？」

「説明している時間はありません。私は今三条で、美夜子さんの家に向かっていてところです」

「……！ 十崎にばれたら、どえらいことになるで」

「スフィングスゲームは」

七海はそれに答えず続けた。噴き出してきた汗で気持ちが悪い。

結構寒いのにマズイな。

七海は、手に持った地図に、眼を落として、現在位置を確認しながらつぶけた。

「今回私が、やろうとしているスフィングスゲームは、一つでも多くの十崎さんの弱みが必要なんです。九城さんも協力してください」

「……まーよーわからんけど、以前あいつ、あらあら大辞典、毎週見ててな。研究生ってテレビも新聞も、見ーへんやん？」

七海の部屋にもテレビはない。NHKの集金人を堂々と、追い返せるのをひそかな自慢にしている。

「みんなに、それで見えた知識を嬉しそうに話しててんけど、あの番組やらせてばれてしもたやん？ それ以来、十崎の中で、そのことと黒歴史になつてんねん。周りの奴等は全く気にしてへんのにな」

緊迫した状況にもかかわらず、七海は笑ってしまった。

「……なんか可愛い。有難うございます」

「……自分、十崎のこと好きなんやろ」

「なななんですうなるんですか！ ラマーズ呼吸法を知ってるのと知らないのとでどれだけ違うと思ってるんです！」

「いや、でも」

九城は困ったようにつぶけた。

「十崎は多分、なつみんのこと好きやで」

「……は？」

なぜか滔々と、出産時の痛みを和らげる呼吸法を説明し始めた七海は、一撃で動きを止められた。

頭が真っ白になる。

「だって、あいつ女嫌いやで。口閉じてたらもてんのに、よってくる女みんなからかって、わざと怒らせるんよ。だからあいつ関わりのある女の子ひよこちゃんだけなんやけど」

七海の中の完全にフリーズしてしまった脳内に、織河製OSが警告を発する。

『次のアプリケーションの起動に失敗しました。……思っても見なかったラララ両思い・EXE 考古学研究室、又は太陽系に送信しますか？』

「なつみんだけいつも特別扱いやん？ あーあひよこちゃん可哀想

……」

「誰が送信するか！！ ろくでもない邪推はYou、やめて下さい！ クジラを食べて、何が悪いんです！」

「……いや、俺も好きやけど」

七海のまったく意味を成さない絶叫に、少し引きながら九城は答えた。

「……よー考えたら、十崎もあの女も含めて、今ならコーヒー一杯で何とかなるレベルや」

「……コーヒー？」

「君はわからんでええよ。十崎と子供作る計画でも立てとき。出産祝い、鯨のステーキでええか？」

「あああたたたたたた！」

七海は怪鳥のような奇声を発しながら携帯の番号を連打した。

「十崎は、こつちでなんとかするわ。ただ、危ないから場所は教えられへん。なんかゲームがしたいんやつたら十崎が戻ってから好きだけやり。ひよこちゃんにはあんまり心配させんでやってほしいけど……男の取り合いやから、しゃあないか。んじやな」

「おまえはすでに死んでいるっ！」

七海は携帯に叫ぶと、肩で息をしながら通話を切った。
疲れた。いろんな汗でびっしょりだ。

十崎さんが、私のことを……だと？

私のことを……だと？

私の……たわしを……

「はっ」

七海は両手で、お相撲さんのように、自分のほっぺをべっしべしと何度もはたいた。

ゆるんでない、ニヤけてなんかない！

いつの間にか、目的の家の前に立っていた。

ありふれた町並みにある、びっくりするほど普通の一戸建てだ。

なんて十崎さんの関係者としてはふさわしくないんだろう。いま

までの自分の挙動不審な所作や、会話が気づかれてないことを祈りながら、チャイムを押す。

程なく。

『はい』

インターホンから、少女のものらしい、誰何の声が流れてきた。

七海は襟を正すと、噛まないように心がけて、話始めた。

「夜分遅くにすみません、私十崎さんと同じ研究室のもので織河七海と申します。お兄様のことでお話したいことがございまして」

物部たちは今、十条から、町外れにある閉鎖したカーショップへ向かっていた。十崎に指示されたのだ。

物部が手配した別働隊は、二台に分乗して、別のルートから向かっているはずだ。大きなガラス張りの室内で、数台の新車を展示するタイプの自動車販売店の間取りは、どこも単純だ。後は立地だが、情報をあつめている時間はない。

「……まずいことになりました」

携帯で、通話を終えた物部は、誰にともなく呟いた。

「これ以上悪くなりようがあるのか？」

自嘲する様に笑う、ウルに眼を向ける。

彼女はだんだん寂しくなっていく景色を眺めながら、コンビニで買ったビタミンのタブレットを、少量の水で流し込んでいた。

「昼間、あなたを研究室まで案内した男がいたでしょう……九城という名で、米軍の犬です」

ウルは、手に持っていたペットボトルを落とした。

一気に、血の気が引く。

「この男、PMCとして赴任したイラクで、味方を六人殺している、本物の狂犬です。通り名はジェイソン。面白半分に、イラク人を撃ち殺すPMCは山ほどいますが、自分の仲間を撲殺した人間は、聞いたことがありません」

物部は、ため息をついて続けた。

「十崎といい、この男といい、なんでイラクと京都には、イカレた奴らばかり集まるんですかね」

「……ばれていたのか」

ウルは、放心したように呟いた。物部の話も聞いてなかったようだ。

震える手で、ペットボトルを拾う。蓋をしていたのが、幸いだっ

た。

「あの男に道案内を頼んだ、私が間抜けだった。これで私も立派な犯罪者だな」

「別にあなたのせいではありません。私も今、初めて事の露見を知ったばかりです。それに」

物部は寂しい十字路を、右折しながら続けた。

「あなたが、密輸をしたという証拠は、どこにもない。今のところ、犯罪者は十崎だけです」

物部は、震える右手を左手で掴み、静かに息を整えようとする彼女を、ちらりと見た。

「慰めはいい。あの九城という男が、アウルデューの素性を、知ら

ないとは思えない。接触した私が、無関係なはずがないんだ」

「うぬ婆れないで下さい。なんで私が、あなたを慰めないとイケないんですか？ 事実を把握してもらわないと困るから、言っているだけです。密輸をしたのはあなたではないし、取引は行われていない。万引きした商品は、店の人間にまだ見つかってないんですよ」

ウルは肩を落とし、大きく息をついた。少しは安心したらしい。

「計画は大幅に変更ですね……状況は一線を越えました。あなたには、この件を降りてもらいます」

「いいのか？ できるものなら私もそうしたい。正直、怖くてたまらないんだよ……だがな」

ウルは疲れきった瞳を、フロントガラスの向こうに向けた。かすれた声は、官能的ですらあるが、もちろん本人は意識していない。

「アウルデーが、それを許すとは思えない。やつにとつてのおもちゃが一つ消えたら、むくれて姿を消すんじゃないか？」

「……」

「シリンダーシールを、盗まれたのが私の責任でなければ、喜んで降りるさ……少なくとも、取り返すまでは付き合う。役立たずなりの、責任はとる」

「……いいでしょう。十崎の姿を確認するまでは、行動を共にしてもらいます。奴を見つけさえすれば、あなたは必要ない。捕らえて吐かせればいい」

ウルは、物部の横顔に目をやった。物部はチエシヤ猫のような笑顔で、前方に向けたまま続けた。

「私の手配した連中は精鋭ですよ。逃げることは不可能ですし、彼らが少し撫でてやればどんな奴でも囁ります……！？」

五〇〇メートル四方に、建物がほとんど見えない、開けた土地の産業道路沿いに、目的のカーショップはあった。

その懷に、闇夜を切り裂き、赤色灯を回転させる、少なくとも二台のパトカーを孕んで。

物部はヘッドライトを消し、車を慎重に路肩へと寄せた。少なくとも四〇〇メートルは離れているこの車を、向こうから視認したかどうかはわからない。

別働隊は、すでに展開していたはずだ。彼らは間違いなく、発見されているだろう。

「どうということだ」

ウルが愕然と呟いた。

「公安か……いや、行動が早すぎるし、私が現れるまで待つはずだ」

物部の表情も、さすがに硬い。しばらく様子を見てみると、パトカーは物部たちが向かう方角に消えていった。

程なくして、今度はヘッドライトを付けた、二台の車が物部たちのほうに向かってきた。

「仲間です」

物部が、囁いた。

その二台は、停車することなく、物部の車とすれ違った。一瞬垣間見たその車内にいるものたちは、日本人には見えなかった。

物部の携帯が、震える。

「ヘイ、エース、どうということだ。展開して、二分後にポリスが来たぞ」

通話ボタンを押したとたん、懐疑と、怒りの入り混じった声が流れてきた。

「よく、ごまかせましたね」

「捕り物にしちゃ、ポリスの数が少なすぎるからな。陽気に話しかけたら、向こうのほうから、ここでサバイバルゲームをしちゃいけませんと来た。建物の持ち主から、最近敷地内が、BB弾だらけにされて困ってるって通報があったんだとよ」

物部はすべてを悟った。アウルデーだ。

「してやられました。まさか、犯罪者が警察を頼るとはね」

「……！なるほどな。おれも初めて聞いたよ、そんなケース。だが、効果は抜群だ。みんなブルっちまって、今夜は立ちやしねえ」
「引いてください」

「それしかねえな」

通話を終えた物部は、十崎に電話した。

「どうです、僕のおもちやの兵隊たちは？二四時間、三六五日、電話一本、無料で働くんですよ」

電話にでるなり、十崎はうれしそうに言った。

「……僕の、というところと、無料、という部分には疑問がありますね」

物部は、内心の動揺を悟られないように言った。

「これで、招かれざる客はいなくなりました。お茶菓子の用意も、限りがありますし。まあ、どうぞあがってください、汚いところですが」

「警察を呼ばれたんじゃないやあね。出直しますよ。もっとも次があるかどうか……」

「物部英。西京区で、物部オートサービスを経営。従業員は無し」

十崎の謡うような口調に遮られる。

「武器の密輸から、はては犯罪に使われた自動車の解体。死体の処分まで請け負う、アフガニスタン人の営む自動車解体ヤードと、深いつながりを持ち、自身は危険すぎて、公安の深奥部でしか存在を知られていないA級テロリスト」

物部の眼差しが狂気を帯び、握り締めた携帯が、ピキリと音を立てた。

「なんでも、前・総理の急所を握っているそうですね。羨ましい」

「なかなか面白い与太話じゃないですか。あなたを殺したい理由が、またひとつ増えましたよ」

物部の頭の中で、一つの言葉だけが跳ね回っていた。
なぜ知っている？

「それと、最近若い娘さんが出来たそうですね。昔、児童売春撲滅

運動のボランティアで赴任していた、タイから連れ帰ってきたとか。なんでタイから、連れ帰ってきたのが、日本人なんです?」

「それはね」

物部は、眼も眩む怒りの中、額に何本もの青筋を立てながら、極めて優しい声で言った。

「ある日、あなたに突然妹が出来たのと、同じ理由だと思えますよ。榎田美夜子……でしたっけ、あなたの妹の名前? 女子高生にしては、幼く見えますね」

物部は、かつて自身が最も嫌悪していた言葉を、吐き出す。

「ツテを使つて、タイの娼館に売り飛ばせば、世界中の変態どもが……」

「首の骨をへし折る前に、全身の関節を増やしてやろうか?」
受話器から、絶対零度の声が流れ出した。

突如変わった十崎の口調に、物部は心地よい緊張を覚えながらも、唇の端をゆがめた。

「これは失礼。まあ、あなたが物知りな程度には、私も物知りだつてお伝えしたかったんですよ」

「しかし、そういう輩を、一番憎んでいたはずのあなたが、そんな台詞を吐くとはね……なんにせよ」

電話の向こうから、挑発するかのように、鋼が何かにはまり込む、鋭い音が聞こえた。

リボルバーの回転弾倉が、本体に叩き込まれた音だ。

「お会いして、もっと良く知り合うべきですね、僕たち」

物部は、馬鹿にしたように言った。

「のこのこ行くと、おもいますか?」

「もちろん。車屋の任務完遂率は、一〇〇%なんですよ?」

物部の顔が、怒りで膨れ上がった。

「……いいでしょう。生まれてきたことを、後悔させてあげます」

「ああ、それはとつくにしていますから。じゃ、僕はもう中にいますので、必ず二人揃って来てください」

物部は、通話の切れた携帯をしまつと、一つ深呼吸をしてから、ウルの方を向いた。

「バックアップなしで、行くハメになりました。今から、私の指示に従ってください」

物部は、後ろに放っていたバッグから、目薬を取り出した。

一台のロードスターが、カーショップの敷地内に滑り込んでいくのを確認し、九城は夜間用の双眼鏡を下ろした。

カーショップから、約一キロ離れている。ウルマの仲間らしき兵士達が展開し、パトカーがやってきて去って行く、一部始終を見ていた九城は苦笑した。

「あいつらしいわ」

九城は、傍らのバイクに双眼鏡のストラップを引っ掛け、徒手空拳で前進を開始した。

第九章 ランニング・ウルブズ（後書き）

作者より

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

今回は、この事件の真相が明らかになります。

どうぞお付き合いください。

後書きってむづかしい・・・

第十章 雑種（前書き）

更新がおくれてすみません。
この度の地震で被災された方、言葉もありません。
お体にお気をつけください。

第十章 雑種

ウルは、ロードスターのそばに立つて、広い産業道路側に面している、全面ガラス張りの壁を見た。

道路脇の街頭に照らされて鈍く光を反射する表面には、スプレーでの落書きやら、様々な種類の車の名前が張られた、あちこち剥げたカッティングシールやらが見て取れる。

店内は暗くてよく見えないが、雑然とした店内の白い床は、病人の寝顔のように消え入りそうな街灯の明かりを反射し、買い手がつくことなく終わるであろう、寂れた気配を醸し出していた。季節はずれの寒さといまって、墓地のような雰囲気だ。

建物の造りは、車が四台は悠々と展示できそうなガラス張りのショールーム、右手が奥へと続く道路になっており、スライド式の鉄格子の門が、口をあけて待っていた。

ショールームの前面が、駐車スペースになっており、ウルは今そこに立っている。

ウルから距離をとって、どこかに電話していた、サイヤーラが戻ってきた。

「行きましょう。車はこのままで」

ウルは、柵の棒が離れないように、右手に固定するため、ぐるぐる巻きにしていた布製のガムテープを、ダッシュボードにおいた。

開くことはないであろう、ショールームの自動ドアは無視し、鉄格子の門を通り、わずかな明かりが照らす敷地内へと歩を進めた。

建物は、奥に向かって細長く、ガラス張りの壁は早々と姿を消したが、客の視線を意識した壁面は、四〇メートルほど続いた。

それを過ぎると、建物に隣接する修理工場が、こちらに向かって内臓をさらけだしていた。

ウルは、棒の先端を斜めに垂らした下八双に構え、サイヤーラも、大型拳銃をぶらさげていたが、狙撃されればそれまでだ。

そのとき、サイヤーラが携帯を取り出し、耳に当てた。

通話を終わると、言った。

「奴からです。工場内にある裏口から、建物に入れとのことです」

片方が、ショーウィンドーを叩き割って侵入し挟み撃ちにするか？やめた。二人で来たことが知られている以上、不意打ちにならない。

二人は、迷わず左側の修理工場内に歩を進め、真つ暗な裏口をくぐった。

その時、想定していなかった事が起きた。

突然、長方形の室内に、煌々と明かりが灯ったのだ。天井の蛍光灯群が一瞬明滅し、五〇mの、室内プール大の闇をあつという間に駆逐する。

サイヤーラは銃を構え、ウルは棒を構えた。

電気が、通っていたのか。

さらに、ボツというノイズ音を立ててから、天井に備え付けられたスピーカーより、がらんとした空間に、ラジオ放送が響き渡った。「……ですね。ワグナーはもともと」

どうやらNHKらしい。

室内の真ん中を、奥に向かって点々と商談用の椅子と、テーブルが設置されており、壁際にタイヤや書類、ダンボールやバンパーなど、大小さまざまなものが雑然と放置されていたが、思ったよりは荒れていなかった。奥は、さっき見たショールームに続いており、展示用の自動車が入り出来るように、扉はかなり大きく開いていた。今は大きくこちら側に開いて、その向こうに明かりのついていない、ショールームが見える。

人影はない。

サイヤーラとウルは、少し距離を離して、堂々と室内の真ん中を横切り、奥へ向かった。つまり、やってきた産業道路側へ、戻って

いく事になる。

半ばほどに差し掛かったとき、

「よお」

ウル達が入って来た裏口から、声がかけられた。

サイヤーラが神速で銃を向けると、相手は顔をひっこめた。

「昼間あつたな、ミズ・ウルマ。俺の名は九城」

身を隠したまま、九城は叫んだ。

「知っている。昼間は世話になった、米軍の犬」

ウルは、刺々しく叫んだ。

「……犬はないやろ。まあ、話が早くて助かるわ。取引を中止し、遺物を置いてこの場を去れ」

「何のことか、わかりませんね」

傍らのサイヤーラが返事した。

「そのミズ・ウルマが、クルドにいるところから、バグダット博物館の盗難品が、あの村に流れてるのは分かっていたんだ……だが証拠がない」

九城の言葉が標準語に変わり、口調がシャープになっていった。

「俺は、ボグダノス大佐から、個人的にこの依頼を受けた。ある程度は、俺の裁量に任されている。十崎も聞こえてるか」

九城は、続けた。

「あなた達を、通報するつもりはない。今までの経緯も、ある程度は情報提供者から聞いている。ミズ・ウルマ、個人的には、手伝ってやりたいくらいだ。だが、恩人からの依頼を受けた立場上、そうもいかない。それと十崎」

さらに、大きく声を張り上げた。

「お前、あの円筒印章、売るつもりも譲るつもりもないやろ。形見やからな」

ウルは目を見開いた。

「結局、屑どもを二人、歩く死人に変えたのも仇討ちや。お前はなんやかんや言うて、寂しがりで、仲間をやたら大切に……俺も

お前も、コワレやけど……」

九城は一旦言葉を切って続けた。

「でも屑やない。あるべき場所に、あるべきものを返せ。どこへ逃げて……ひよこちゃんを追ってくるで」

静寂が、あたりを包む。

ウルは、全身が敗北感に包まれるのを感じていた。

体中の、骨という骨がなくなり、地面の上に、溶けたゼリーのようになだかまってしまった様な気分だ。

「いいですよ」

真顔で返事をしたサイヤーラを、ウルは信じられない思いで見た。

「……おい」

サイヤーラは銃をしまうと、大型の電話を取り出した。衛星電話だ。

「九城といいましたね。物部と申します。話しにくい。顔をだしてください」

九城は、慎重に姿をさらした。いつでも壁に、身を隠せるように、全身のバネをたわめ、警戒は怠っていない。

「俺のほうから、言い出してなんだが、素直すぎるな」

サイヤーラは、インマルサットを操作し、耳に当てながら笑った。「ただし、われわれの罪は問わない。ボグダノス大佐の名に誓えますか」

「大丈夫だ。遺物を回収する以外の、任務は受けていない」

九城は、真摯な表情で答えた。

「……おいっ！」

ウルは、盗まれたほうはどうするんだ、という言葉を読み込んで、サイヤーラに詰め寄った。

明かりが眩しい。目がちかちかする。

「車屋の、任務完遂率は、一〇〇%……アロー、サイヤーラ……出てください、Mrハシムからの説明があります」

ウルは、恐怖に満ちた目で、差し出されたインマルサットを見つ

めた。

おぼろげに……

おぼろげに、輪郭が掴めて来た。

素人頼りのずさんな計画、アウルディーの言っていた、フランスの新聞記事……そして、サイヤーラの今の言葉。

サイヤーラに再度促され、ウルは震える手で、すべての疑問に答えるであろう、大型の電話を受け取った。

「……ウルです」

「ウル」

まだ、三日も経っていないのに、ひどく懐かしく感じる声があった。

「本当にご苦労だった。危険な目にあわせて心から謝る……もういいんだ」

「一体……何が、どうなってるんですか」

尋ねながら、祈った。

お願い、答えないで。

「今回の目的は……遺物の取引なんかじゃない」

その言葉は、ウルを絶望の淵に立たせ、次の言葉は、ウルを奈落の底に突き落とした。

「君を、日本に送り返すことだ」

空っぽになった頭と心に、ハシムの声が容赦なく響き続ける。

「二ヶ月前、君のことがフランスの新聞に掲載された。写真付きでだ」

「……こっちに来て知りました」

「……そうか。じゃあ、わかるな」

「サイヤーラの、本当のクライアントは……」

「君の母上だ」

ウルは、がっくりとひざを付いた。

搾り出すように呟く。

「また……またあなたか、母さん」

「新聞のインタビューに彼女が答え、記事の掲載を許可したのも……彼女だ」

ウルは絶叫した。

言葉にならない思いを。

ひとしきり叫んだ後、ウルは吼えた。

「なぜだ！ あの女は、なぜ私の人生に干渉する！ いつまで私を子供扱いするんだ！ なぜ、何が憎くて、私の居場所を奪う！？

師よ、あなたもグルだったのか？ ……金か？ あの女に金を積まれたのか！？」

ハシムは、傷付いたように呟いた。

「ウル……」

「もういい！ もういい！ 私が疎ましかったのだろう！ クルドでもアラブでもない雑種なものな！」

ハシムの声が、怒りを帯びた。

「ウル！ 聞くんだ！」

「イヤ！ 聞きたくない！」

女の子そのものの悲鳴を上げ、ウルはインマルサットを左手で不器用に投げ捨て蹲った。

九城は、怪訝な表情で見つめているだけだ。

サイヤーラは、壁際に投げられたそれを無表情に拾ってくると、懷にしまいながら言った。

「お気づきでしょうが、私はあなたのガードとして雇われました。あなたの母上とは日本車の輸出の関係で知り合いました。私が依頼された仕事は、一、あなたを守ること。二、ぎりぎりまであなたの自由にさせること。円筒印章は本物です」

ウルは、涙で歪んだ視界のまま、床を見つめていた。

目薬が、流れてしまいかも知れないな。

サイヤーラは、九城の方に顔を向けると言った。

「ミスター・九城。この件について、どうしてもわからないことがあります」

ウルは、その言葉を聞くともなく聞いていたが、サイヤーラの次の言葉で、愕然と顔をあげた。

「何故、円筒印章ごときで、米軍が動くんですか？　いつでもeベイヤ、ヤフオクで二〇〇〇や、三〇〇〇ドル程度で売られているに」

「二〇〇〇……三〇〇〇だと？」

ウルが、しわがれた声で言った。イラクからの、往復チケット代と、大して変わらないじゃないか。

ウルは、七海の言葉を思い出した。

『円筒印章は除外するとして』

彼女は、このことを知っていたのだ。

ウルの呟きを無視し、九城は答えた。

「それは真偽のわからないものだろう？　今、あなたたちや十崎が所持しているものには、バグダッド博物館の通し番号がふつてあるはずだ」

サイヤーラは、意地悪く笑った。

「その通し番号を、偽物に付け足すなんて造作ないじゃないですか」
九城は少しだけ顔をしかめた。

「まあな……要は、買い手がどれだけ知識と、鑑定眼をもっているかに、かかっているけど。最初は、ボグダノス大佐の面子の問題かな、思たんや。あの人、自分の書いた本の中で、『円筒印章は全て無事だった』って書いてしもてるからな」

ここで、九城は呆然としている、ウルに眼を向けた。

「ミス。あなたの母親は、相当裕福らしいな。政界進出を、目論めるくらいに」

ウルは答えなかった。九城が続ける。

「ミスター物部。あなたが全貌を、クライアントから聞かされていないのと同様に、俺も全てを知っているわけじゃない。ここからは俺の勝手な推測だ。アンティキティ・コムって知ってるか？」

二人は、沈黙で答えた。

「アメリカで、最大手の小売業者、ウォルマート一族の一人と、ステイツの共和党が主催するオークションだ。趣旨は、イラクの遺物を競売に賭け、戦費に充てよう、愛国者は参加せよ……」というものらしい」

サイヤーラは鼻で笑った。

「ご冗談を。どう考えても違法でしょう？」

九城は無言。しかし揺ぎ無い視線で、サイヤーラの質問に答えた。
「……本気ですか？　なら米軍が……ボグダノス大佐がやっている事は、一体何なんです？」

「それが、今回の俺への依頼の趣旨だと思う。イラクの復興の為に、体を張って遺物を回収している大佐たちにとっては、許せない事実だろう。ウソだと思うなら、ネットで検索してみるといい。チェイニーの糞野郎が、競り落とした金の皿を持ってヘラヘラ笑っている写真が載ってるよ」

九城は、地面についた手をガクガクと震わせている、ウルに目を向ける。

「ミズの母上は、多分円筒印章を、政界進出の足がかりとして、共和党に持参するつもりだったんじゃないか？　そこなら、専門家が鑑定して本物だと認定されれば、一〇〇万ドルはないにせよ、相当な値段が付くだろう。もっとも、狙いは顔を売ることだろうから……」

……

その時、両方の壁際に、連続した爆発音が上がった。反射的に、サイヤーラはウルに覆いかぶさり、九城は、入り口から飛び退った。壁際に、等間隔で置かれていたダンボールが元凶だったらしく、爆発はどれも小さいものだったが、床からちろちろと炎の舌が、壁を舐め始める。

思ったとおりだ。アウルデューは、われわれを逃がすつもりはないらしい。

サイヤーラは立ち上がり、銃を抜いた。

「ミズ・ウルマ。立ちなさい。逃げますよ」

「もういいんだ。死なせてくれ」

ウルは力なく呟いた。

「甘ったれるんじゃないやありません、さあ、立って」

「ほんとに……死なせてくれ」

サイヤーラの額に、青筋が浮かんだ。

「どこまでも」

サイヤーラは、手を振り上げた。

「何しとる!？」

九城はそれを見て叫んだ。

「役に立たない女ですね」

七海は、美夜子に借りたスクーターで、産業道路をひたすら南下した。

『あつた、あれだ』

交通量も、まともな街灯もなくはない、寂しい場所にウルが電話で教えてくれた、閉鎖されたカーショップを発見した。

とつくに限界まで絞っているアクセルを、手が痛くなるまで、さらに回す。

足元の、これも美夜子に借りた大き目のザックが、ステップから落ちないように足でさらに挟み込み、前傾姿勢になって、フルフェイスから見える目的地を睨んだ。

やかましい音を立てながら、どノーマルのデイトは突き進む。

接近するにつれ、敷地内の建物の明かり取りから、光が漏れているのがわかった。

減速して、駐車スペースに滑り込む。

薄暗いショーウィンドーの奥の壁の、開け放たれた大扉の向こうに、明かりに照らされた空間があり、そこにいる人影を、七海の一・五の視力が捕らえた。

こちらに背を向けている大男と……銃をつきつけられ、その前に

立っている九城さん！

七海の口から、叫び声が迸るうとしたそのとき。

闇に同化していた、コート姿の人影が、ショーウィンドーの向こうを横切り、奥から漏れる光を、人型に割り抜いた。

生まれて初めて聞く轟音が、ガラスごしに響くたびに闇色の背中が揺れ、耳をおさえて蹲った七海は、悲鳴を上げた。

銃声が止み、しばらくたってから、七海はこわごわ顔をあげた。

ちらりともこちらを振り向かないが、はじめて見る暗色のロングコートの背中でもそれが十崎だということが七海にはわかった。

「十崎さん！」

言えるだろうか。

間に合うだろうか。

光の中に歩を進める、その後姿を追うように、七海はショーウィンドーに恐怖も忘れ駆け寄った。

第十章 雑種（後書き）

作者より

次回、七海がはじけます。
お楽しみに。

第十一章 友達未満 仲間以下

「わかりませんね」

十崎は、物部の背後で横倒れになっている、ウルに目をやり言った。

「何で殺したんです？ 仕事を放棄ですか？」

「契約違反ですよ」

物部は軽く顔をしかめながら、左手を振った。パラパラと、スーッにめり込んだ弾丸が落ち、床で音を立てた。

「ガードされる側が、言うことを聞かなかった場合は、契約を破棄できる取り決めです……足手まとい過ぎる。おかげで二対一ですよ」

物部は、さほど緊張した様子もなく、続けた。十崎も物部も、銃口は下を向いたままだ。

「そうや、オッサン覚悟はええな？」

九城が、笑いながら続ける。が、眼は血走っていた。

「僕はべつに、九城の味方じゃありません」

「おい！ 冷たいやんけ。仲間に優しいちゃうんか？」

九城があわてて突っ込む。

「……さっきから聞いてたら、何を根拠にそんな属性を。聞いてたこつちが恥ずかしくなりましたよ。夢でも見てたんですか？」

「それは好都合。じゃ、私たちの未来のために」

物部はニヤニヤしながら銃口を、血と脂汗を流す、引きつった九城の顔に向けようとした。

「いえいえ」

十崎は、物部に銃口を向けると続けた。

「銃を下ろしてください。同級生のヤクザから、五八万で買ったこのニューナンプが、火を噴きますよ」

「その半端な、八万はなんですか？」

「さあ……カスリじゃないですか？ 払う前に、塀の向こうに行っちゃったからどうでもいいです」

九城は、感極まったように叫ぶ。

「信じてたで、このツンデレ小僧！ YOU、撃っちゃいなヨ！」

「これ以上、駒を減らされてはたまりません。折角二日ばかりで仕掛けた花火ですよ」

十崎は左手を、素早くコートのポケットから出すと、物部のかけているものとよく似たオレンジ色の眼鏡をかけた。

スピーカーから物悲しく、他の存在を否定する、細く、硬い一本の線のような、パイプオルガンの音色が、天に向かい駆け昇る。

大バツハの『皇帝』。

その二文字から、九城が連想するのは、カリスマ性でも権力でもない。

孤独。

只一人頂点に君臨し、他の追隨を許さないが故の、孤独。

大バツハの『皇帝』。

それは、特異な才を持つ、孤狼達に捧げられる鎮魂歌。

十崎が左手を振ると、袖口から手品のように、三台の携帯電話が滑り出て、しなやかな指の間で扇状に広がった。

「うおっ」

工場側の入り口に近いテーブルが爆発し、突風と木製の破片が、九城と物部をよるめかせた。

笑った。

爆風に黒髪とコートの裾を、怪鳥の翼のようになびかせながら、狂気という交響楽団にタクトを振る指揮者――

かつて敵の背後から忍び寄り、別れを囁いてから頸骨をへし折る事を得意としていた山岳地帯の暗殺者が。

アウルディー。振り向いてはいけない冥府からの声。

「……やっぱあかんか」

爆風に伏せながら、九城は齒嚙みした。

なつみん、明日講義でれんかも。

「銃なんて、興ざめなものは捨てて、今から出す、三択に答えてください」

十崎は携帯を掲げ、結婚式のビンゴゲームの司会でもやっているかのような、にこやかさで言った。

「あなた方が選んだ番号を、私が押します。外れれば、私の斜め後ろの手製クレイモアが、鉄球と釘を吐き出し、あなた方のどちらかが死にます。わからなければ、正直に言ってください。泉の女神様から、正直なあなたには、両方さしあげましようというありがたいお言葉が、聞けるかも知れません」

そこで初めて、九城と物部は十崎の背後の壁の両隅にある、こちらに面を向けたダンボール箱に気づいた。黒マジックで、表面に文字が書かれてある。

右の箱には『スナックのママを、吊るしたりした原作者』、左の箱には『エルメスのベルトをした、ブランド嫌いの国際派ジャーナリスト』

九城は、脱力して呟いた。

「どっちもいらんわ」

物部は、ちらりと微動だにしないウルを見る。

十崎の右手が、携帯の表面を走った。

十崎の、背後のショールームに続く入り口と、十崎と自分たちの間に、通せんぼするかのように幾筋もの赤い光が走り、物部は眼を見開いた。

振り向く。

物部達の、わずか二メートルほど後ろでも、嫌な予感のする境界線が幾筋か横切っており、その向こうにウルが倒れていた。

赤外線により、空間は三マスに区切られた。

道路側に十崎、真ん中に物部と九城、裏口側にウル。十崎自身も自らを閉じ込めた形だ。

「あなたたちの背後にも今、赤外線が走っています。触れたら爆発。私を殺したら赤外線は解除できません。あなた達を閉じ込めたまま、二〇分後には仕掛けたC4爆弾で、この建物自体が爆発。逃げ道はありません」

だが、九城と物部は飽くことなく、隙を探す。火はそれほどでもないが、壁際の煙が勢いを増してきた。

「さあ、始めましょう！ 三問正解で一抜けです。では……」

「十崎さん！」

「その赤外線に、触れたら死にますよ！」

鋭い叱責が、十崎の背後、ショーウィンドー側の入り口に現れた七海の足に、急制動を掛けた。

「なつみん！ 逃げろ」

九城が、驚いて叫んだ。

物部が瞬間、銃を向けかける気配がしたが、断念したようだ。十崎はこっちを見据えたままだ。

「なにしてるんですか！ あしたは考古学概論ですよ……ウルマさん！？」

倒れているウルを見て、七海は悲鳴をあげた。

九城が言った。

「十。ウルマの容態を確認したい」

十崎は、銃口を物部に向けて言った。

「一番下の、赤外線を解きます。すぐに戻ってください」

なるほど、それなら走れんな。

九城は腹ばいになって、赤外線をくぐり、ウルの傍で膝をついた。脈を取ろうとしたが、右手には、棒を固定するためのゴムテープが、首にはスカーフが巻かれていた。瞼を指先で開いて確認する。瞳孔肥大。

九城は首を振った。

「……あかん」

「そんな……」

七海はぺたん、と座り込んでしまった。

「どうでもいいことですが、殺したのはそのオッサンです。僕じゃないですよ」

「どうして……」

「やあ、さきほどはどうも、物部です」

物部は、道端で知り合いにあったときのような気軽さで、七海に言った。

「人が……死ぬなんて。ウルマさん……うそ」

七海は聞いてなかった。放心したように呟く。床の上に広がった膝までの黄色いフレアスカートが、場違いなひまわりのように咲いていた。赤外線を潜って、元の場所に戻った九城は、ウルムの死を七海に告げた事を後悔した。ここにいる面子のように、人の死に慣れている方が異常なのだ。

「なつみん、警察呼んで。また、誰かが死ぬで」

「それは許せません」

十崎が言った。七海は、ウルムの方を凝視している。

「どうやって、この場所を嗅ぎ付けたんだか……貴女はほんとに、僕の予想を上回る」

「十崎さん、帰りましょう」

七海は顔をあげると、出し抜けに言った。

「明日は、朝一から講義なんです」

十崎の背中に、語りかける七海の声は真剣だった。

十崎は、肩越しに薄く笑った。

「……明日、僕に朝一の講義はないですよ」

「そんなの関係ありません。一緒に授業に出るんです」

七海は頑なに言い募った。内容は馬鹿馬鹿しくても、本気なのが九城にはわかった。ここが七海と十崎、九城にとっての分水嶺なのだ。

「そして……おはようからおやすみ……じゃなかった、また明日までを繰り返すんです、毎日」

七海は精一杯の思いを込めて、十崎の後姿をみつめた。

十崎は、銃をぶら下げた物部から眼を離さない。壁際を焦がす火は、先ほどの爆風であらかた消えているが、まだ煙を大量に生産し続ける。

「休憩です」

物部は、銃を落とすと足で蹴って、赤外線の間こう、ウル我倒れている方向に滑らせた。

「どうぞ、心行くまで話し合ってください」

背中を向けたが、九城からは十分に距離を取る。七海の説得に、かける事にしたようだ。

「十、血イ止めてええか？」

九城は、流血で塞がった片目を指して尋ねた。

「ポケットに入れるのは左手で……といっても九城、あなたは、銃が撃てないんですしたね。そっちのオッサンも、見苦しいから手当てしていいですよ」

物部に、銃を向けながら十崎は答えた。

二人とも、慚然としたまま、各々応急手当を終える。

九城は赤外線越しに、十崎と七海の横顔に目を向けた。

十崎は銃口を下ろし、半身のまま、首だけ振り向いた。

赤外線越しに、七海にやさしく笑いかける。胸が締め付けられるような瞳の色だ。

「おはようから、おやすみ……ですか。大胆ですね」

「……それでも……いいです……よ？」

七海は取り乱さなかったし、怯まなかった。

十崎が、少し驚いて真顔になる。九城もだ。

「何でもいい……です……だから……帰りましょう」

九城は確信した。

彼女の、十崎への気持ちを。

十崎には、分かっただろうか。

十崎は、少し苛立たしげな顔をした。

「なんで、怒らないんですか？ 僕がやって来たことが、全部無駄になっちゃったじゃないですか。もう、気付いてるでしょう？」

その先は言わせない、とばかりに七海はちよつとだけ、恨めしげな目をして十崎の言葉を遮った。

「怒ったら、負けな気がするからですよ。十崎さんの、思い通りになってたまるもんですか」

十崎は、一瞬だけきよんとすると、失笑した。

「……やっぱり、織河さんを敵に回すのは、無理ですね」

「帰りましょ。ね？ 十崎さん。明日青汁おごりますから」

十崎の笑顔が、変化した……悲しげに。

「あなたひとりで、帰るんです」

七海の顔が、打ちのめされたそれになり……ベそをかき始めた。

「十崎さん……」

「あなたは一杯勉強して、りっぱな考古学者になるんです。きつとなれます。私や」

無表情で、事の成り行きを見ている九城、背を向けている物部を見て言った。

「この人たちのような、どうしようもない人間に、かわるべきじゃありません」

九城と、物部がハモった。

「お前がいうな」

子供のように、顔をくしゃくしゃにして、頬を濡らした七海は、しゃくりあげながら言った。

「十崎……さん……」

えぐえぐいいながら、鼻水をすする。

「さ、行くんです」

十崎は遮った。その声は優しく、七海はぺたんとすわりこんだまま、声をあげて泣き出した。

「青汁いらないの？」

「今あなたが向いているのは、後ろです……前を向いて」

十崎は、七海の背後を指差した。

「歩き出すんです。振り向いては……いけません」

七海の泣き声が、高くなった。

「……七海さん」

十崎が、初めて下の名前を呼んだのに、九城は気づいた。
よかったな、なつみん。

「こまった……おちゃまです」

十崎は、少し困った顔で携帯を取り出し、操作した。

「どぎざざああん」

「……いい加減泣き止まないと、この三〇フレームで隠し撮りした、鼻からうどん動画をバラ撒きますよ？」

「をういつ！」

九城が、状況も忘れて突っ込んだ。

「ぶち壊しやんけ！ なつみん、死ぬな！」

赤外線越しに突きつけられた、携帯の衝撃映像に口から魂を引っこ抜かれた、七海は聞いちやいなかった。膝をM字にしてぺったり床につけたまま、器用に後ろにのけぞってノビている。

十崎は、七海に視線を固定したまま言った。

「いいんです。どんな方法を使っても、この場には留まらせません。なぜなら、彼女はぼくにとって……」

七海の眼に、一瞬光が戻る。

「かけがえのない」

九城も、拳を握りしめる。

『いけッ、逆転サヨナラやっ』

……照れたような表情の、十崎が赤外線を解き、頬を染めたなつみんが寄り添う。

『九城、僕には大切なものが出来ちゃいました。こんなもの要りません。お詫びに、知り合いのキャンギャルを紹介します』

俺は親指を立てて遺物を受け取ると、うろたえているオッサンを、後ろ回し蹴りで成敗。ウルマは生き返って俺にメロメロ。

九城は、今思いつく限りの神展開を、脳裏に無理やり描いて、十崎の言葉を待った。

十崎は、堂々と言った。

「大切な、サークル仲間のひとりなんです」

……………。

「ダメダメじゃないですか」

「ダメダメやな」

物部があきれたように吐き捨て、九城も眼が線になった。

十崎から、恋愛関係の話なんか聞いたこと無かったけど、ここまですで朴念仁とは思わなかった。

九城が天を仰いだその時。

「そうですか」

「!?!」

はつきりとした……………あまりにもはつきりとした七海の声が、その場にいる男たちの耳朵を打った。皆、はじかれたように、七海のほうを見る。

闇の中、七海は操り人形のように、器用に立ち上がると、

「ようつつつくわかりました」

すべての色が抜け落ちた、無機質な声で呟いた。

うつむいたままの、七海から立ち上る瘴気に、九城は眉根を寄せた。

「はじめましようよ……………スフィクスゲーム」

単語を羅列しただけのような、抑揚の無い七海の声にも、十崎は苛立ちを面に出したただだった。

「帰るんです。そうしてくれれば、この動画は携帯ごと始末しますから……………お互い本気になれないゲームなんか……………」

「黙れ、ボケ」

一瞬で。

その場の空気が、一瞬で空洞化した。

七海の、突然の変化についていけず、凝固する三人を余所に、少女は俯いたまま淡々と言葉を紡ぐ。

「そんなことだから、あらあら大辞典なんか、担がれるんですよ……眼に見えるようです。きっと賞味期限の偽装された、おたべを食べながら、ほくほくしてみてたんでしょう。お宅の耐震強度は大丈夫ですか？」

感情の起伏を感じさせない罵詈雑言に、展示室は一気にブリザード吹きすさぶ、南極と化した。

スピーカーから流れる、場の緊迫感にぞくわないNHKの解説が、さらに室温を低下させる。

「は……はは」

十崎のぼかんとした顔が、歓迎の高笑いに、占領されていた。十崎の、歓喜に満ちた笑い声が響く中、九城は七海の呟きを確かに聞いた。

「こいつぁマイツタ……友達ですらないときた」

十崎には聞こえなかったろう。物部にも。

だが九城には聞こえた。

なぜなら……

「しかも、大切な仲間……の内のひ・と・り（はあと）」

そりゃそうや。

「許せん。万死に値する」

普通、そう言うわな！

七海は面を上げると、十崎に向かって宣戦布告した。

「……覚悟はいいですね？」

「ははははは！ それです！ 僕が会いたかったのは、今のあなたです。すごく……すごく会いたかったですよ」

十崎は周囲の全てを忘れ、熱に浮かされたかのような視線を、七

海から離さなかった。

「スフィンクス殺しのオイディプス」

第十二章 スフィングスゲーム（前書き）

こんばんわ。第十二章です。

第十二章 スフィングスゲーム

七海はピンポン玉大もある、髪留めのぽつちを左手で抜き、頭を振った。

一房だけを、頭の横っちょでとめていたそれがなくなると、片目をくせの付いたウェーブヘアが覆う。

見えているのは、仏像のような醒めた半眼、表情の消えた口元。普段なら、思わず突っつきたくなる、柔らかそうな頬は血の気が失せ、蠟のような質感を、蛍光灯の下に晒している。

いつもの、少女少女した雰囲気は、冥府から現れた案内人のような陰気さに取って代わられ、事態の進展についていけない、九城の心胆を寒からしめた。

片や、冥府からの声と呼ばれた、闇の戦士。

片や、頭が良いとはいえ、二十歳前の女子大生。

お話にならないはずだった。

だが、今の七海を見ると、心の中ですら、そう断じる事が躊躇されるのだ。

十崎から感じる、底の知れなさ。

それを上回る、得体の知れなさ。

只ぼつちを握って立っているだけの、七海から感じるのだ。

冥府からの声と、無敵の妖魔を知恵だけで屠った勇者。

九城の見たことの無い類の戦いが、今、幕を開けようとしていた。恋患いに冒された様な眼で、メタモルフォーゼを遂げた、彼女を見つめる十崎の笑顔が深くなる。

「ほんとに、退屈させない人だ」

「私には退屈なゲームです……が、ひまつぶしに、相手をしてあげましょう。始めましょうか」

七海の姿をした別人は、感情を感じさせない平坦な声で返した。

「最高です……それでは先攻はどうします？」

「先攻？」

七海が、表情を変えずに問い返した。

「問題を出す側ですよ」

「ああ……あなたは勘違いしてますね」

「ごりりっ」

七海の左手のなかで、2つのぼっちがこすりあわされ、耳障りな音を奏でる。

「スフィングスゲームの名前の由来はね……謎掛けをするところにあるんじゃない」

「ごりっごりっ」

「負けたほうが、自殺したくなるところにあるんですよ。恥ずかしくてね……だから」

九城は、ことの成り行きについていけず、ただ呆然と見守るだけ、物部も今は、十崎たちのほうに向き直って、醒めた目をむけている。

「ルールから先に決めましょう。私が負けたら、その動画を好きにすればいい」

「まさしく、自殺したくなるほど、恥ずかしいですね。ぼくが負けたら？」

「私の言うことを、何でも一つ聞く、つてのはどうです？」

「二つでもいいですよ……で、勝負の方法は？」

「その二人を、解放できたら私の勝ち。野蛮な方法は使わないですよ……もしくはあなたに負けを認めさせるか、逆上して私に危害を加えても、あなたの負け。こちらの問いかけには、嘘はつかない。嘘がバレた時点で私の勝ち。私の問いかけに対するパスはOKで無制限。制限時間は十分」

十崎は、七海に視線を固定したままだ。

さまざまな方向から、七海の提案を分析しているようだ。

そして。

「OKです」

「そうですか」

ごりっ

七海の手の中で、ぽっちが不快な音をたてる。それは、大蛇の威嚇を連想させた。

「あなたはすでに死んでいます……十崎さん、勝負つてのはね、やる前についてるんですよ」

「ぞくぞくしますよ」

十崎の笑顔が輝き、七海の表情は変わらないままだった。

「では確認から。そこのお二方は、何で脅されているのですか？」

「彼ら二人の背後に、赤外線が見えるでしょ？ それに触れるか、僕の携帯で決められたナンバーを押すと、部屋の隅に設置された、対人性指向地雷と呼ばれる爆弾が、二人を穴だらけにします」

十崎は、七海と自分を隔ててある赤外線を、指して言った。

「これに触れると、あなたの真上にある爆弾が爆発します」

七海は、そちらを見もせず続けた。

「それらの操作をするのは、あなたのもっている携帯からですね？」

「イエス」

「今持っている、携帯は何台？」

「四台です」

「どの携帯が。どれにつながってるんですか？」

「さあ？」

「その中には、ダミーも存在する？」

「イエス」

「ダミーは何台？」

「……一台」

「……十分です」

ごりごりごり

七海は、ひとしきりぽっちをこすり合わせてから、床に置かれた大きな目のザックに、手をつっ込んだ。

「取引をしましょうか」

七海は薄いコピーの束を取り出し、十崎の前に掲げた。何かの漫画のようだ。

「なんですか、それは？」

十崎の怪訝そうな顔

「わかりませんか？ 実物を見るのは初めてなんですね」

「……それは！」

十崎の顔が、まごう事無き驚愕に彩られた。

「そう、あなたがさがしていた、子供向けの本、『カブトムシの飼いい方』の中に収められた漫画、オオクワガタ飼育バカ一代です」

十崎の手が、興奮でぶるぶると震える。

九城が眼を凝らすと、どう見てもつのだじろうが書いたとは思えないタツチで、昔斜め読みした空手バカ一代に出てたシンジくんや有明省吾が、オオクワガタを眺めているコマがあった。

「なんで……どうやっても見つからなかったのに」

十崎が、うわごとの様に呟く。

「子供の夏休み向けに発売された本に、こんなクオリティの高い一品が掲載されているとは、だーれも思いせんよね」

七海が、わざと間延びしたような声でいった。

「……読んだんですか？」

「……軽く。『梶原。騎先生の亡霊に悩まされる、津野田せんせい』に励ましのお便りを！」　なんて欄外のコメントは、ちびっ子向けにはもったいなさすぎます……携帯二台と交換です」

「……一台なら」

「そうですか」

七海はため息もつかず、クリップで留めてあるそれを一息で真つ二つに裂いた。

「うわああっ！」

十崎が本物の悲鳴をあげる中、くしゃくしゃに丸めて鼻をぶびびつと噛むと、後ろも見ずに、背後に投げ捨てた。

「あなたなんて事を……取引する気があるんですか？」

十崎の眉間に、縦皺が一本刻まれていた。怒ったらああなるらしい。

「は？」

七海は怪訝そうに言った。

「あなたがいらないうって言うんだから、仕方ないでしょ？ 頭大丈夫ですか、十崎さん」

「言ってますんよ」

「駆け引きをしてくれると思ったんですか？ これだから」
フウ。

七海はわざとらしく、無表情にため息をつき肩をすくめた。

「ゆとり世代の、相手は嫌なんです」

「それは、もっと前でしよう」

「まあ、安心してください。実際のところもう一部……」

七海がザックからもう一部、コピーを引っ張り出すのを見て、十崎は安堵の表情を浮かべた。

「……ありません。かわりというては何ですが、私があわてて書いた、パラパラ漫画を……」

「……ふざけないでください。原本はどうしたんです！」

「あなたこそよく見て！」

七海は赤外線越しに、初めて見るこわばった十崎に向かい、コピーの束を突きつけると、パラパラめくった。

「この絵心の、まったく感じられないイラストを。主人公の、凌駕院獅子丸は、下読みの人がげんなりすること請け合いの、左右で目の色が違うラノベ的設定を、恥ずかしげもなく取り入れています。

三分で書き上げた、高千穂遙も裸足で逃げ出すスペースオペラ……」

九城の、鷹の並みの視力がその内容をとらえた。スペースオペラも何も、丸に線だけのヒトが、端から歩いてきて、コケるだけだ。目なんか、どこにも書かれていない。

「普通の人なら、書くのに四分はかかります」

「……なるほど、逆上したら負けですか」

十崎が表情を険しくしたまま、無理やり笑った。

「うまく考えられた、ゲームです」

「うまく考えられた、ゲームでぶっ」

七海は下唇を突き出して、十崎の口調を憎ったらしく真似した。

「……続きを。時間がないですよ」

「んじゃ、次」

七海はザックから、緑色の大型枕ほどの大きさの、縫いぐるみを取り出した。

「……？ それは！！」

十崎の表情が、再びの戦慄に彩られる。

その場の張り詰めた空気を、台無しにできるほど平和な顔をした河童を、十崎の眼の前にかざすと七海は言った。

「そう。あなたの妹さんの大切なお友達、枕型かつぱくん。非常に希少でオークションにかければ五万は行きます」

物部は、あきれた顔で小さく首をふっている。

「なにが、スフィングスゲームだ。バカバカしい。なんだか、このまま帰って良さそうな気がしてきましたよ」

一方、九城は別の意見を持っていた。

「……すげえ」

あのイラクで、冥府からの声と呼ばれたフェイカーを、一女子大生が良いように手玉に取っているのだ。

世界は広い。

「……！ やっぱり。何で美夜子のことを、あなたが知っているんです？ 九城ですか？」

「知らんて。ホンマに」

ちらり、と不穏な眼で見られた九城が、あわてて手を振った。

「おいす。おいらかばぞう」

七海が、河童の短い前足をもって、平坦な声で挨拶した。

「おいらをたすけておくれよ、囚われの身なのさ。携帯二台と交換だ」

「朗らかに、お断りします」

十崎が、明るい顔で言った。

「私には、全く用がありませんから。サンドバッグにもなりません」
河童は背中を丸めて、本当に悲しそうに見えた。

「そっか。まあ、お兄ちゃんはそのうとおもったよ」

七海は、黄色の携帯を取り出し、外側のサブディスプレイに眼を走らすと、河童に持たせた。

「何です？ 警察に電話する、とかじゃないですよね？」

「だが、勝ちの決まったゲームを投了するのさ。おにいちゃん・・・・・本当にバカなんだね。自殺しなよ、自殺」

好き放題毒を吐いた後、送信できたことを確認して河童が続ける。
「それじゃ、そろそろだね。三・二・一……」

十崎の携帯の一台から、どこかで聞いたせりふが流れ出す。

『はははは……みたまえ、人がゴミのようだ！』

「……美夜子に！？」

「ははははは。十崎はザコのような……でたらどうです？」

「でませんよ。取り込み中です」

保留ボタンを押したのか、台詞がやんだ。

「……美夜子を、抱きこんだところで無駄です。さあ時間が」

『ははははは。人がゴミのようだははははは、人が』

再び、携帯が囀りだした。

「電源を切ればいいのに……」

ごりごりっ

十崎が、いやいや耳に当てた。

「……もしも、後にしろ。切るぞ」

しかし、十崎の台詞が終わらないうちに、携帯が怒涛の言葉を、あふれ出させた。

七海たちには、会話の内容はわからないが。

「……今忙し……え？ 何言ってた。……お前」

長い沈黙。

十崎の携帯から漏れる、小さな絶叫だけが、ふわふわと辺りに漂っていた。

「……わかった」

ピッ。

「携帯二台と交換です」

忌々しげに、十崎が吐き捨てた。

「ダミーは含んじゃだめだよ」

「調子に……」

「うわあっ、おいらの足がちぎれるっ！」

七海が、かつぱの前足をひっぱって十崎をみた。

不思議とかつぱの目が、本当に怯えて見える。

十崎は、歯噛みをしながら二台を捨てた。

「ああ、おいら、これで無事におうちに帰れるよ」

ごりりっ

「その音、耳障りです」

七海は薄く、ほんとに薄く、唇の端を吊り上げ……歯の隙間から、クスクスと声を漏らした。

「負けが込んでくると、みんなそういい始めるんです。背中が煤けてますよ」

クスクス。

残り四分。

「じゃ、時間もないことだし、さっさと終わらせましょう。残り二台のうち、今、美夜子さんと話してた、電源を切ることができなかった携帯が、リアルということになります。電源を切ってください」

「なんで？」

「おいらと、おにいちゃんの仲じゃないか」

河童が、前足を動かして訴える。

「阿呆ですか。あと四分弱……」

「ぐうッ!!」

十崎が、喉の奥から声を絞りだした。

「大臣、ご苦労だよな、もう何年も何年も……」

「やめろっ！ 首をへし折るぞ！」

「うえーん、おにいちゃんがこわいよう」

おーよしよし、と言いながら河童をなでる七海の口元には、はつきりと邪悪な笑いが刻まれていた。

「ぐすん。わかったよ、大臣。大臣が、黒い携帯を捨ててくれたら、おいらもだまるよ、大臣」

かつぱが前足を、忙しく動かしながら、真摯な目で続けた。

「それでもって、研究室のみんなと銀河系に、その心温まるエピソードを、無差別にメールで送信するのを、思いとどまってもいいかな」

「貴様……」

十崎の眉間に、二本縦皺が刻まれているのを、九城は呆然と見つめた。

河童が続ける。

「毎朝六時……」

十崎が、黒の携帯を床に叩きつけた。

硬質な音を立てた、プラスチックの破片が飛び散り、一気に緊張が走る。

「やったー。かつぱかつぱ」

だが、河童はのんきに、前足をぼんぼんうち合わせたただだった。

「ここまで私を追い込むとは、大したものですよ……でもね」

十崎は、九城が聞いたこともない硬い声で言った。

「これで赤外線も解けませんよ。つまりあなたの負けです。勝ちが決まった以上私は決して、逆上しない」

十崎が、やっといつもの笑顔を、取り戻した。

「残念でしたね。動画は、ようつべと2ちゃんを駆使して、祭りに

してあげますよ」

残り二分。

「河童、いきまーす」

七海は、河童を頭に乗せると、邪悪な笑顔を貼り付けたまま言った。

「何を……」

「今からこの赤外線のをぐぐりまーす。大丈夫、爆弾なんておいらのお皿が防いでやるよ」

「馬鹿馬鹿し……」

「カウントだうーん……じゅー」

九城は確信した。彼女ならやる。

「なつみんやめろ!」

「待ちなさい、織河さん」

「ろーく、ごー」

十崎が叫んだ。

「死にたいのかッ!」

「にー、いーち……どん!」

七海が、一步を踏み出そうと足を上げ。

……。

あっさりと、十崎の前に立った。

蒼白の十崎の前で、七海は河童を頭に乗せたまま言った。

「赤外線を解除できなければ、あなたも袋のねずみ。退路がなければ……どちらかの赤外線が、フェイクじゃなければ携帯を壊すとは思えない」

七海はまっすぐに、十崎の目を見て言った。

「どちらの赤外線に触れても、爆発する——嘘をつきましたね? あなたの負けです。十崎さん」

第十二章 スフィングスゲーム（後書き）

こんばんわ。

震災のニュースを見るたび、気持ちが暗くなっていたのですが、今朝、「粉ミルクとオムツ等が不足している」と聞いて、本当にショックを受けました。

物凄く、堪える・・・。

この作品が、被災者の方のちょっとした暇つぶしにでもなれば、望外の喜びです。

第十二章 スフィングスゲーム 2 (前書き)

こんばんわ。クライマックスです。

第十二章 スフィングスゲーム 2

ずっしりと重い沈黙が、凝固した空間を支配する。

元から色白な十崎の顔が、今は昔日の吸血鬼映画の主人公のような、色をしていた。

「……死ぬのがこわくないんですか？」

ようよう呟いた十崎は、信じられない生き物を見るような眼で、七海を凝視した。

かっぱをかぶったままそれを見上げ、七海は無表情に答えた。

「ウルマさんは、あなたが殺しても胸が痛まない相手を、探して歩く狂人といいました」

七海は、ウルの方に視線を向けた。

「もう大丈夫でしょう。ウルマさん、起きたらどうです？ ……まあどっちでもいいですけど」

七海は不可解な顔の九城、無表情な物部を残し、十崎に視線を戻して、話を続ける。

「美夜子さんに会いました。普通の……普通に、素敵な女の子でした。彼女からあなたの話をいくらか聞いたのと……私があなたと過ごした短い時間……それらが出した結論は」

七海は淡々と、十崎に止めをさした。

「あなたに、私は殺せない」

あっさりと。

「仮にこの赤外線が本物でも、あなたはなんとかしたでしょう……ホントの狂人は、胸なんか痛まないんです」

十崎の眼差しの変わりようは、がらがらと崩れていく無機質なブロックの建物を思わせた。

俯いた彼の表情は、途方にくれた、迷い犬のそれだった。

「僕は……」

七海は足元に落ちている臙脂色と、メタルグリーン、二個の携帯

を拾った。

「私の動画が入ってるのは、こっちの緑の方だけですか？」

十崎は視線を合わせぬまま、無言で頷いた。まだ、呆然自失のままだ。

没収です、と呟き、七海はそれをポケットに滑り込ますと、河童を脇にはさんだまま、十崎の襟に両手をかけた。

十崎の、至近距離で俯く。

「私は、十崎さんの過去なんか知らないし、知りたくもないけど」
小さく息を吸い込んで体を逸らし、感情の読み取りにくい瞳を据えた。

「……私たちは、これからです。ちがいますか？」

「織河さん……あなたは」

そして。

短い破裂音。

「ごはっ!？」

九城と物部は、我が目を疑った。
世界が凍りつく。

……なにが起こった、今？

二人の間の床を、点々と赤い雫が落ちた。

七海が襟を放し。

十崎は膝を付いた。

あの、アウルディーがひざまずいた。

もう一度、小さい破裂音。

……壁のそばで引火した木材が、二度爆ぜたのだ。

十崎の顔を覆った指の間から、鮮血が流れるのを、九城と物部は瞬きも忘れて見入った。

体を丸めて呻く十崎に、下の睫越しの、凍りつきそうな視線を送りながら、七海は囁いた。

「私の怒りは、こんなもんじゃない。まだまだ、これからですよ……
…ショータイムは」

十崎は、完全に不意打ちで決まった、頭突きのダメージの去らない顔をようよう上げた。

「さあ、二つお願いを聞いてくれるんでしたね。一つ目は決まっていますが、もう一つは何にしようかな？」

腰に手を当て、笑顔で見下ろす片目のチャームिंगな少女は、何かのフェアリーテールに出てくる妖精に思えた。

とびつきり邪悪な。

「……なつみん、なんぼなんでもちよつと」

「黙れ」

七海に静かに一喝され、九城は口を閉じた。

「あの動画を、撮っていたのを横にいたあなたは、当然知っていたんですよね？」

「いや……それは」

「あなたも的にかけますよ？ ヤなら、靴のつま先でも眺めてなさい」

「……はい」

レーニンくらい、逆らってはいけない。

タージマハールの客引きよりも、目を合わせてはいけない。

九城は、言われたとおり下を向いた。

「ああ！ 久しぶりのこの感覚ぞくぞくしちゃいます！ 自信满满的、愚か者を嵌める……痛快です」

河童を抱えたまま、腰と後頭部に手を当て、チアガールのように腰を振る七海を呆然と眺めながら、十崎は七海の情報を集めていたときに聞いた、大学生の話を思い出していた。

彼の名は、桑山進。

七海が高校生クイズに出たときの、チームの一人だった。

桑山は、額の汗を神経質にぬぐった。

夕暮れの教室に飛び込んでくる蝉の大合唱が、六人しかいない空間を満たし、かえって寂寥感を感じさせる。

だがそれは、暑さ故ではない。

向かい合った机を、囲むように立っている四人を含め、ここにいる者たちは、緊張感で暑さを感じるどころではなかった。

超有名な私立の進学校である、この教室はエアコンが効いている。なのに。

机に座り、拳を握り締めている、小太り・平たい顔にワカメ頭と銀縁めがね。

これでもか、これでもかという感じの素敵少年は、一〇日前に、高校生クイズで七海たちの池田付属を破って優勝した、この高校のクイズ部の部長・川田雄二。

そして、その後ろのおかつぱと、センター分けの、間違いなく私服はお母さんが選んでいるであろう、ふたりの部員。

自分と、その隣の、プリングルのマークにちよつと似ている、山中。

皆が嫌な汗をかいていた。

川田の向かいに座り、こちらに背を向けている、七海以外は。

「あらあら、なんでそんなに汗をかいているのかしら？ それ以上のクールビズはなかなか見かけませんのに。ふとっちゃんには、おしゃべりだってスポーツなんですねえ」

クスクス。

川田は、パンツ一丁だった。

「君こそ涼しそうじゃないか。パンティーだけになっても、そんなことがいえるかどうか楽しみだよ。なあ？」

川田は無理やりに笑い、振り返り、顔を赤くしたり青くしたりしながら問いかけると、後ろの二人は曖昧に笑った。二人とも、七海のほうをチラ見しては、うつむいている。

桑山は、七海のぴんと背中を張った後姿に、目をやった。

滑らかな撫で肩を、苦々しい思いで見やる。

彼女も、上半身はブラー一枚で、下は制服のスカートだった。

「パンティー!？」

七海は身を乗り出した。

「でましたね、彼女イナイ歴〃年齢という、お母さんが複雑な思いを抱くアビリティを、持つものだけが使いこなす……ダブルデートよりも、遥かに痛いマジックワード。今からあなたの二つ名は、パンター川田で決定です」

「ふざけるな、そんなどこかの格闘家みたいな、名前で呼ばれてたまるか！」

クスクスクス。

ごりごりっ

後姿からは想像するしかないが、さぞかし邪な笑顔を浮かべていることだろう。

やりすぎだ。

一週間ほど前、敗北のショック覚めやらぬ自分たちに対し、織河は無表情に、

「リベンジしよう」

と言い出した。

高校生クイズの収録が終わった直後、織河に対し、優勝チームのリーダーである川田が、携帯の番号が記載された名刺を渡したのだ。「再挑戦待ってるよ。いつでも受けるから」

気障ったらしい態度で差し出されたそれを、七海は無表情に受け取った。

その能面の下では、激情が荒れ狂っていただろう。

作り笑いをしていた、山中と自分がそうだったから。

三人とも、甲子園の決勝で負けた直後の、高校球児の気持ちそのままだった。

そこに勝った方のチームが、頭を踏んづけるような真似をしてきたのだ。

その晩は、悔しくて眠れなかった。

だから織河の提案に、山中も自分も勢い込んで乗った。ケンカを売ってきたのは、向こうだ。

織河が、電話で一騎打ちを申し込み、相手は自信たっぷり、二つ返事で了承した。

出題ジャンルの選択権は、相手に与えた。

川田達を選んだ分野は、こともあろうに日本史。

口許を笑いの形に歪めた七海から、それを聞いたとき、山中と自分分は天に向かって爆笑した。

なんて、引きの弱いヤツ。

織河に、歴史で勝負を挑むなんて、呂布に一騎打ちを挑むようなものだ。

出題は、国立大学の過去二〇年間——つまり二〇冊——の入試問題集の中から、ゲームスタート時にくじ引きで、どれを使うか決め、回答者の織河と、川田以外の両チームの者が、交互に問題を出し合う。

当時、クイズマニアの間で流行っていた、スフィックスゲーム形式を織河は提案し、川田は呑んだ。

負けた方が、大恥をかくことになるのがこのゲームの決まりだが、織河はどちらかがミスすることに、一枚ずつ脱いでいく、野球拳形式を提案した。

相手が、上擦った調子でOKを出したと聞き、山中と自分は堪えきれず、腹を抱えて、部室の床を転がった。

織河が負ける事は、万に一つも無い。

「バカのストリップを、拝みに行こうぜ」

山中の台詞に、三人でハイタッチした。

予想通り、織河優勢でゲームは進んだ。初っ端で一発被弾したが、絶対ワザとだ。予想通り、織河の半裸を前にして、川田はペースをガタガタに狂わせた。

だが……

『まあまあ、こおんな問題が分からないなんて、家族以外から初

めて掛かってきた電話に、浮かれすぎたんじゃないかしら？……
ほら、さっさとその中学一年から股下だけ変わっていそうに無い、
やぼったいノーマル制服を、脱いでおしまいなさい」

その間に挟まれる、織河の黒すぎる煽りに、だんだん川田を除く
男たちは引いてしまった。

桑山は言った。

「オイ、オリ。もうやめとこうぜ……十分だろ？」

七海は、振り向くといった。

「今からがいいとこな……みればわかるでしょ」

前髪で、隠れていない方の目をみて、桑山は止めても無駄だとい
うことを、瞬時に理解した。

完全に入り込んでいる。

こうなったときの、織河の突破力は日本屈指だろう。

告白してしまえば、高校生クイズで決勝まで残れたのも、ほとん
ど織河一人の力だ。

決勝の日、織河に月イチのアレが来て、体調を崩してなかったら、
優勝していただろう。

だが、今回は何かが違っていた。

うまく言えないが、並外れたコンセンレーションの中に、どす
黒い物が混じりすぎている。

自身のチームの敗北を、全国ネットで茶の間に流された恨みとい
うか、鬱屈したものが、マグマのように噴出しているのがわかるの
だ。

優勝を逃して以来、七海はあまりしゃべらないようになっていた
が、今、それを取り返すかのように、斬鉄剣のような切れ味の口撃
を繰り返している。

七海は首をかしげ、川田に向かって言った。

「ねー、パンテー」

「パンテーいうな！」

クスクス

七海は意味ありげに笑うと、片手でスカートのすそをつまみ、ゆつくりと持ち上げる。

「あなたが正解して、私がスカートを脱ぐことになったら、パンテーがみれまーす……よかったわね、パンテー」

「誰が、君のパンツなんか……」

そっぴいながらも、こつちからは見えないうが、つやめく太ももが徐々に露になつていくシーンに瞬きもできないようだ。後ろの二人は、眼をそらしながらもチラ見している。

「あつそ」

七海はそう言つと、おそらくあと一、二ミリ持ち上げればマンセーなところで、あつさりとスカートを離した。

あつ

「ざああんねん。今日のパンツ、自信あつたのにな……今の『あつ』っていう感じの顔、サイコーです、パンテー。」

クスクス

七海の蔑みのこもつた笑い声を聞いて、川田は真つ赤になった。

「いい加減に……」

「大丈夫」

机をぶつ叩いて叫ぼうとした川田は、七海に機先を制された。

七海は前かがみになつて、川田の顔を覗き込むと蟲惑的に微笑んだ。

「あなたが勝てば、なんでもアリです」

引き剥がそうとしても、寄せられた胸の谷間から眼が離せないようだ。レモン色のブラから覗く、普段陽光を浴びない柔肌が、秋波を送ってくるのに抗えないのだろう。

七海は、急に身を引き剥がすと言つた。

「勝てばね……続きいこつか」

ごりごりっ

威風堂々と席に着くと、七海のトレードマークであるぼつちが、彼女の左手で耳障りな音を立てた。

「んじゃ、一つ目」

十崎は、回想から我に返った。

「三年間、学食おこれ……きいてんのか負け犬」

こちらに向けた、七海の目の色がおかしい。口調が、どんどんぞんざいになっていく。

その姿は、あちこちから煙をあげている、オーバーヒート寸前のアンドロイドを思わせた。

結局、川田という気の毒な高校生に勝ったときも、そうだったらしい。

『パンテー残念だよね、無様だよね。パンーにされた上に、パンツはみれない、スフィックスゲームには負ける……わかったわ。来年のバレンタイン、善戦したあなたには』

暫く俯き。

意を決したように、顔を上げると、瞳を潤ませていった。

『お母さんから、もらったチョコも、数に入れることを特別に認めてあげる。よかったわね、パンテー』

逆立った、柳眉の下に、険をたつぷり含ませた目許。

道化師の様な、三日月形の口の端を、片方だけ更に吊り上げ、犬歯をむき出しにして、嘲笑う悪魔。

脂汗を顔一杯に浮かべた九城と、完全に引いてしまった物部は、その光景に口をあんぐりあけたまま、見ているしかなかった。

「なんです、その目は十崎さん？ 生意気に、赤い血流してんじやないですよ。じゃあ、最後の命令」

十崎の目の前の光景と、話で聞いた七海のかつての姿がシンクロする。

片目を黒髪で隠し、川田へ邪悪に微笑んだ七海。

親指で喉を掻き切る仕草。

その親指を下に向け、ぐると水平に輪を描いた。
『ケツ出して三回まわれ、このオタク野郎』

片目を黒髪で隠し、十崎へ邪悪に微笑んだ七海。
親指で喉を掻き切る仕草。

その親指を下に向け、ぐると水平に輪を描いた。
『ケツ出して三回まわりやがれ、このダシガラ野郎』

第十二章 スフィングスゲーム 2（後書き）

作者より。

ここまでお付き合い下さり、本当にありがとうございます。

東北大地震、余りの惨状に言葉もありません。

現場で作業している、原発や、自衛隊の方々。

本当のサムライが日本にいるんですね。

心からの敬礼を。

第十三章 闘将！ ラーメン女（前書き）

第十三章です。

よろしくおつきあいください。

第十三章 闘将！ ラーメン女

カーギー、おれ、ドジッちゃったよ……ううん、もう痛くもないんだ。ちよつと寒いけど。死ぬのかな。まあ、いいや。今以上最低な暮らしなんかないしさ、アラーの御許のほうで、ずっと良いに決まってる。そうだ、これあげるよ。機会があつたら、アルビルの傍のシレルキャンプにいるお爺ちゃんに届けてくれないかな。あと二個はカーギーにあげるから。

ひとつは……にあげるんだよ。約束な。

あ……暗くなつて来た……寒い。カーギーは、ムスリムじゃないよな。……無神論者……共産主義者なの？　ちがう？　ムスリムに看取られたかつただけ……そうだ、俺のあとについて、コーランを繰り返して。そうすりゃ、カーギーもムスリムになれるよ……いくよ、

アラーの他に神はなく……そうそう、その調子……ムハンマド……使徒……

じいちゃん……こわいよ……

「やめい、十崎！　殺すな！」

「こつちに来るな、九城！　その赤外線は本物だ！……大丈夫、落としただけです」

無言で襲い掛かり、七海の片手を手繰つて半回転させ、チョークスリーパーを決めた十崎は、九城に鋭く声を浴びせ……平静を取り戻した。気絶した七海を静かに寝かせる。

「殺したりするもんですか、こんな逸材」

十崎は苦笑し、眠っているかのように穏やかな顔をして横たわる、七海を見下ろした。

「まあ、でもちよつとばかり」

十崎は、きらりと眼鏡を光らせた。

「ん……」

目を覚ました七海は、最初自分がどこにいるのか分からなかった。高い天井にある蛍光灯よりも、鼻をつくきなくさい匂いが七海の違和感を刺激し……

気を失う前の、記憶を呼び覚ました。

「……十崎さん！」

がばつと上半身をおこして、頭をめぐらせた。

赤外線ごしに、話をしていた十崎と九城、物部は同時に七海をみた。

そしてなぜか……

ぼんやりと見つめる、九城を除いて顔を背けた。

七海は血相を変えて、十崎に詰め寄る。

「十崎さん、なんて物を撮るんですか！ 直ぐに消去しないと、知り合いのロシア兵にお願いしてシベリア送りにしますよっ！」

「……覚えてないんかい」

九城は呟いた。

「あなたのジャケットのポケットに、入れておいた携帯にしか、データは入ってません」

十崎は俯いて、苦しそうに言った。表情は見えない。

「七海さん……本当に……すみませんでした」

十崎の肩がわずかに震えているのを見て、七海は、自分がこの場に來たことが、無駄にならなかつた喜びを感じた。

「……十崎さん」

ありつただけの感情を込めて、七海は歩み寄った。

なぜか一瞬、十崎の体に緊張が走ったが、人の優しさに怯えているんだらう、そう思い気にしなかった。

十崎の正面に立つと、口許に微笑を湛えて見上げようとしたが、黒いコート姿は、くるりと背中をむけた。

「……今、僕を見ないでください」

小刻みに震える背中を見て、七海はクスリと笑った。
かわいい。

「泣き顔を見られたく無いなんて……十崎さんも男の子なんですね」
そっと、掌を背中に当てる。

「十崎さんの泣き顔か……見たいな。お返しに、動画で撮っちゃおうかな？」

掌に伝わる振動が激しくなり、七海は笑顔を深くした。

「冗談ですよ。見たいのはほんとだけど……この分だと、大丈夫そうですね」

ジャケットのポケットに両手をいれ、華奢な肩をそびやかすと、くるりと十崎に背中をむけた。

「ゲームなんかせずに済みそう……明日はちゃんと、講義に出てくださいね。遅刻しちゃだめですよ」

返事はなかったが、七海は気にしなかった。明日、必ず十崎は来てくれる。

私、信じてる。

「朝一ですからね。九城さんですよ」

こっちなになぜか、虚ろな目を向けている九城に、バッチン、ウインクを飛ばす。

「あ……うん」

心ここにあらずという返事を、ハイな気持ちで聞くと……

「さて……その、危ない物部さん」

こちらに、なぜか引き気味の視線をむける物部に、七海は強い視線で応えた。

「あなたがとった行動を理解することは出来るけど……もうパーティーはお開きです。私の大事な仲間たちに、怪我でもさせたら……ひどいですよ」

七海が自信に満ちた、挑戦的な笑顔を向けると、物部も何故か表情が見えなくなるまで顔を背けた。

「わかりました……わかったから……こっち見んな」

物部が苦しそうに呟くのを聞いて、七海は心の中でびしいっとポーズを決めた。

オス先輩、ナイスポーズデス

架空のボデビル部の後輩たちの、快い声援を聞きつつ、勝利に酔いしれる。

勝った。

七海は眼を閉じ、背後の十崎に、有無を言わせぬ口調で言った。

「十崎さん、赤外線を解いてください」

十崎は振り向かず、苦しそうに言った。

「五秒だけです。走ってください」

「ウルマさん！」

七海は駆け寄ると、横倒れになっている。彼女の手をとった。

「もう大丈夫ですから……。起きてください」

「いや、なつみんそれは無理……」

九城は言いかけて、言葉を失った。

ウルはゆっくりと、上半身をもたげ、背を向けたまま、七海に問うた。

「……何時から、気づいていたんだ？」

「さつき、少し動いたのを見たんですよ。人間って、気絶してても動くんです」

九城の、呆然としたつぶやきが虚ろに響く。

「うそやろ……瞳孔完全に開いとったで……」

七海はにつこり笑うといった。

「網膜剥離の検査をするときに使う、目薬を使えば簡単です。兄が試合の後、よくお世話になっていました。死んだふりするなら、本当に気絶しちゃだめですよ」

「待てい！俺オッサンと揉めた意味、なかったやん！！」

九城が絶叫し、物部が、けつと口許を歪めた。

ウルから、力のない笑いが漏れた。

「本当にあなたにはかなわないな、ミズ・織河。まぬけな私とはえ

らい違い……!？」

自嘲しながら振り返ったウルは、七海の顔を見たたん、表情を強張らせた。

え？ 私そんなに怖い顔してる？

七海が焦っている間に、ウルの表情は、たちまち泣き笑いに崩れ、顔を俯かせると咳こみ始めた。

七海は彼女の左手を握ったまま、努めて明るい声でいった。

「なんです？ 私そんな変な顔してます？」

「……………いや。…………ブル・シット、アウルデュー」

ひとしきりむせた後、ようようウルは声を絞り出した。

七海は、ガムテープで棒が固定されているウルの右手を見て、悲しそうな顔をした。

「ウルマさん、ハルヤマくんじゃないんだから……………女の子がこんな八〇年代の少女マンガみたいなことしちゃだめ。三メートル、空を飛びますよ」

静かに右手を取ると、ガムテープ剥がし始めた。

「ウルマさん……………あなたはまぬけなんかじゃありません。談話室で話をして直ぐにわかりました。まっすぐだから、嘘を吐いたり吐かれたり、駆け引きするのが苦手なだけ……………わかるんです」

同じ気持ちを、共有するものだけが浮かべることの出来る、はにかみの色を瞳に湛えて七海は言った。

「私も同じだから」

「……………どの口が!？」

九城達は、アクセル全開で突っ込んだ。

「え？ なんです？」

七海が他意なく三人を見回すと、全員次々に顔を伏せた。

「誰かを、恐ろしいと思うなんて、何年振りでしょう……………」

物部が、しわがれた声で、慄然と呟いた。

「さつきは、御免なさいウルマさん。十崎さんがろくでなしで、ろくでもないことをしているのは、ウルマさんのせいじゃないのに……………」

…。でもあなたの言うとおり、一步踏み出してよかった」

七海は、ウルのすべすべで柔らかい肌から、最後のひと巻きを剥がし終わると、ほっとした声でいった。

「はい終わりました。痛みますか？」

「大丈夫だ」

七海は微笑むと、ウルの両手をとった。

「ウルマさん。もう泣かないでください」

ウルはその声に、恐る恐る顔をあげたが、ちらりと目があったとたん。七海が見ていて、血が出るんじゃないかと思うくらい、必死の形相で唇をかみ、顔を伏せ、今まで以上に激しく体を震わせた。その時、車がタイヤを鳴らして、敷地内に進入してくる音がした。全員がそちらの方に目を向けるが、角度的に七海とウルには見えない。

みるみる近づいてくる音に向け、十崎が銃を向けたが……一瞬眉を顰めると、銃口をわずかに下げ二度撃った。

次の瞬間、ショーウィンドーが大声とともに砕け散り、飛び込んできた物体が派手なスリッパ音を撒き散らしつつ、ショールーム側の壁に激突して、建物を揺るがした。

頭を抱えて悲鳴をあげていた七海が、恐る恐る顔をあげると、七海が潜り抜けた赤外線の入りの直ぐ脇に、緑色の軽自動車フロントをひしゃげさせて、煙を上げている。その時、はじめて七海は、自分がウルに抱きしめられ、豊かな胸に顔を埋めているのに気づいた。

とっさに七海を庇ったのだ。彼女の左の乳房の下あたりに、たっぷりと付いていた偽物らしい血糊が、七海の服についてしまったとはいえ、なんというサムライレディだろう。九城などからすれば、土下寝してでも、代わって欲しいくらい、うらやましいに違いない。しかし。

十崎にそれほどでもない、九城にはBカップ卒業見込み、と己がチチを評された七海にすれば、存分にコンプレックスを刺激される

行為でもあった。

「ありがとう、ウルマさん。男らしいのに、ほんとに、おおきいおっぱいですね」

「……何を言っている？」

怪訝そうに訊くウルを、無視して立ち上がる。

大破した車の、立て付けがすっかり悪くなったドアから、ふくらんだエアバッグをおしのけて、おぼつかない足取りで運転手が降りてきた。

「……え？」

その小さな影をみた七海は、思わず声を漏らした。顔をしかめ、痛そうに頭を押さえてできたのは、インディアンズの野球帽にジーンズ、頬に大きな絆創膏というボーイッシュないでたちの、美少女だったからだ。

「幸！」

横合いから声が聞こえ、蒼白な顔をした物部が、十崎との境界を隔てる赤外線ぎりぎりまで駆け寄った。

「あつつ……とつつあん無事か？」

可愛らしい声での、典雅な顔には似つかわしくない誰何に。

「……なんて無茶を」

物部は、唇を震わせながら声を絞り出した。

「心配すんな、大丈夫だよ……らしくねえ」

すこし、照れたように笑う少女に、物部は血を吐くような、絶叫を叩きつけた。

「明日、納車する客の車じゃねえか！ 何考えてやがる！」

「そっちかよ！」

幸も、負けずにツッコんだ。

「大丈夫！？」

七海も大慌てで、赤外線の間まで駆け寄る。

「十崎さん、もう一度解いてください」

「できません。おっさんが近すぎます」

十崎は、自分の立つマス越しに向かい合う、幸と物部に、均等に目を注いだま言った。

「いえね、納期が……ちやいますねん……そこなんですよ」

何のりハーサルなのか、うわごとを呟く物部を横目で見ながら、七海はぼそりと呟いた。

「大丈夫だと思うけどな……まあ、いいです、あなた、怪我は？」
声をかけられた幸は、七海の顔に目を向け、動きをフリーズさせた。

まじまじと、七海の顔を見つめる。

「……宴会の帰りかい？　ねえさん。耳にも書いとかないと、お化けにもってかれるぞ」

表情を変えずに幸が問うと、

「何言ってるの？　怪我はないって聞いているの。こどもが運転しちゃだめでしょ？」

七海がきつく言った。

幸は数秒、珍しい生き物をみつけた、幼児のような表情で七海を見つめていたが、やおら乗ってきた車に向かい、踵をかえす。

「ふんっ」

「あつ、てめえ！」

ドアの窓枠に手をかけ、既に取れかけているサイドミラーを蹴り折った幸を見て、物部が我に返る。

幸は罵声を華麗にスルーし、そのサイドミラーを床に落とし、キック。

赤外線の下をくぐり、十崎の立つマスと、九城と、物部の立つマスも通過。

それは、カラカラと、運命のルーレットが回るような音を立てつつ、埃っぽい床を滑走し、七海の足元まで到達した。

バーのカウンターを滑ってきたグラスの如き、サイドミラーを見て、九城は

ぼんやりと呟いた。

「お嬢さん、あちらのお客様からです」

幸は満足そうに笑うと、額を二本指で弾くような敬礼を、七海に贈った。

「？」

怪訝な顔をする七海は、ちら、とサイドミラーを見た。

眼を見開くと、高速でしゃがみ込み、ミラーを食い入るように見つめる。

「……うぞー!!」

七海はゴルゴンになった

第十三章 闘将！ ラーメン女（後書き）

作者より

ここまでおつきあいくださりありがとうございます。

今日、おやしらずを抜くにあたって一昨日CTを撮りました。
凄く放射線を浴びる事になってたんですね。

驚きました。

第十四章 集う孤狼たち（前書き）

おつきあいくださり、ありがとうございます。第十四章です。

第十四章 集う孤狼たち

「卒倒しちゃったよ、このねえさん。よっぽどショックだったのかな……ま、確かに自殺レベルか」

額の中、鼻の下にどじょうひげ、その他諸々を、十崎にマジックで落書きされていた事に気づかされた七海は、再び気絶していた。

「このほっぺのどこにかかれてある字……ラクダくらい……なんて読むんだ？」

「駱駝苦楽血。キャメルクラッチです。ブロッケンマンを真つ二つにへしおった殺人技……国語でならったでしょ？」

十崎が、滔々と語る。

「そうか。朝の小テストにでたらお礼しなきゃな。学校行ってないけど」

幸も、淡々と返した。

結構達筆で、百歩神拳と書かれた七海の左頬をみながら、九城は先ほどから疲労感とともに、頭をめぐっていた言葉を口にした。

「なんで、おれのまわりこんな女ばっかなんやろ……」

「……さて」

十崎は赤外線越しに、九城と物部、仲良しコンビに目を向けた。

鼻血はとまったが、袖は血まみれだ。

「私の負けで、彼女の勝ちです」

十崎はポケットからシリンドーシールを二個取りだすと、赤外線に触れないように床の上を滑らせた。

「まいど。これで大佐に顔がたつわ」

九城は二つを拾いあげると、ほっとしたように笑った。

物部は、コートのポケットに両手をつっ込んだまま、白けたように笑った。

「やれやれ……とんだ茶番に、つきあわされたもんです。あなたが、円筒印章を手に入れた経緯は、聞いています。体売って生きてたようなクズガキに、死んでからも迷惑を掛けられるとは……お互い難儀な話ですね」

十崎の眉間に、縦皺が一本刻まれた。

「それは、あなたがドジだからでしょう。使えないエージェントは、口を閉じていた方がいいですよ」

物部は、小馬鹿にしたように笑った。

「やっぱりね……仲間が侮辱されるのは、許せませんか？ でもね」

物部は真顔になり、まるでそれだけは譲れないという風に言った。
「私は体売るようなガキは、反吐がでるほどキライなんですよ……」

…地獄の業火に焼かれるといい」

十崎の眉間に、縦皺が二本現れると同時に、九城が動いた。

とりあえず、このオッサンはシメる。

その時、物部が右手をあげた。

次の瞬間、九城は見た。

入り口に近い天窓が割れ、輝く破片の雨が降り、それが止むと、短機関銃を構えた人間の上半身が、手品の様に出現するのを。

迸る火線が、九城たちの足元を鋭く抉り、動きを封じる。

人影は一瞬だけ静止した後、力尽きたかのように、背中から落下した。

入り口から、大柄な影が走りこんできたのはその時だ。

ガラス片を纏い、背中から落ちてきた小柄な影を、軽々と受け止める。次の瞬間には、空から降って来た射手は、短機関銃を構えて膝立ちになり、物部くらいはある巨漢も散開して、拳銃を構えていた。

瞬きする間の出来事で、九城は反応できない。

物部は、右手を下ろさないまま笑って言った。

「そこのお嬢さんじゃありませんが、じっとして、つま先でも眺めててください。任務の仕上げです……ミズ・ウルマ」

物部は、ウルの方に目を向けて言った。

「本物の騎士たちの登場ですよ」

そこには、座り込んだまま、幽霊に向けるような目で、二人の突入者を凝視するウルの姿があった。

「そんな……なんでお前たちが」

三日前に、別れを告げたばかりの男たちが、そこにいた。

「なんで貴様が……足を……歩けないはずだろうか？ サダム」

綿のスラックスに、青い色つきの開襟シャツを着た巨漢は、バツが悪そうにウルから視線を逸らしたが、何も言わなかった。

そして何よりも。

「ウル、大丈夫かい？」

小柄な人影は、堂に入ったニーリングポジションを崩さないまま、静かにウルに問いかけた。

「そんな……おまえ……どうなっているんだ」

ウルの呟きは、ほとんどう言に近かった。

「アラディン」

同じように、スラックスに開襟シャツという、初めてみるいでたちをした、痩身の少年は、安心させるように薄く笑うと、既にウルに向けて、三八口径をポイントしている十崎に、表情の消えた目を向けた。

「久しぶりだね、アウルディー」

「あなたはシレル村で見たガキですね？ 気になる目つきだと思っていたら案の定……派手な登場ですね。落ちてくるとは思わなかった」

十崎は世間話でもするように、同じ英語で答えた。

「ああでもない、と、射線がね……銃をおろして」

黒光りする短機関銃の銃口と、かすかな怒りを孕んだ視線を、十崎から離さない。

「使い慣れたタブクじゃないけど、外さない。腕がなくなるよ」

「カラシニコフの、出来損ない狙撃銃と一緒にしないでください。」

そのMP5、手に入れるのが、どれだけ大変か分かってるんですか？」

銃を貸与したらしい物部が、苦い表情でばやいた。

十崎が嬉しそうに、笑いながら言った。

「僕は、自分に銃を向けた人間を許してやれるほど、人間が出来てないんです」

「……なら、僕を狙えばいいでしょ？ 丸腰の女を狙うなんて」

「卑怯だとか、興ざめな事はいけませんよね？ 不確定な状況では、より確実な標的を押さえるのはあたりまえです」

アラディンが、僅かに銃口を動かした。

「腕だけで、勘弁してあげようと思ったのにな」

「……私事です」

アラディンが、眉を顰めた次の瞬間。

立て続けの轟音とともに、短機関銃を十崎の頭にポイントしていたアラディンが吹っ飛び、拳銃を構えていた、サダムがくずおれた。ウルルの絶叫が、銃声以上の音量でもって、周囲の者の鼓膜を、びりびりと震わせる。

ウルルに向けていた銃は、すでにガバメントのマガジンを交換しようとしていた物部に向けられ、その動きを封じていた。

「十！ やめろ！」

「脇腹と肩を掠めただけです。まあ、お望みとあれば、涅槃におくってやりますが」

十崎は、九城に向かって淡々と言った。ゲームのように冷静に、たった一人で五人の行動を封じる十崎は、やはり化け物だ。

血が滲み出した、肩の傷も忘れて体を起こしたアラディンは、呆然と十崎の方を見た。

「左手は何も握っていなかったはず……何が起こったんだ？」

サダムの苦しい呻きが、アラディンの心を代弁した。

直ぐに分かった。

十崎の着ているコートの左半分に、焦げた弾痕が二つ空いており、

ぺらぺらになっっている左袖のところに、何かで留められた手袋がぶら下がっている。いつの間にか、袖から腕を抜いていたのだ。

前をあけたコートから、小型の自動拳銃を握った左手がのぞいていた。

「簡単なトリックですが、結構有効なんですよ……さて、駒が増えたところでゲームでもやりますか？」

十崎が、さほど乗気でもなさそうに言った。

「おい、にいちゃん！ 子供撃つてどうよ？」

十崎の背後にいた、幸が本気で怒って言った。

「……いや、的が小さくて、当たり難いかなとは思いますが？」
怪訝そうに言う十崎に、

「脳みそ、蛆がわいてんじゃねえか！？」

幸が、我を忘れて絶叫した。

「連れて来たあなたが、言わないでください。あなたが騒ぎを起こしている間に、彼らが配置に着いているのは、分かってました……うつ伏せになってください。足を撃ちますよ」

「幸！ 言うとおりにしろ」

物部の叱責に、歯噛みをしていた幸は、大人しく従った。

「おい、おっさん」

九城は、無表情の物部にむけて怒鳴った。

「十崎もうヤル気なかったで。なんで余計な事したんや？ なつみんとのやりとりで、なめてたやろ？」

九城は、転がっているアラディンとサダムに目を向けると、英語で続けた。

「お前ら撃たれて当然や。銃を向けてきた奴に、ガキも爺さんもないわ。引き金引く力があつたら、殺せるんやからな」

「手加減してくれなんて、言ってないさ」

アラディンの、その言葉が終わらないうちに、サダムが手負いとは思えないほどの敏捷さで、乱雑に積み上げられた建材の陰に飛び込み、そちらに十崎が速射している間に、アラディンもまた猫の

ように転がり、足首から小型の拳銃を抜こうとした。

「アッラーによろしく」

十崎は、つまらなさそうに呟くと、アラディンに銃口を向けた。
立て続けの銃声。

耳をキンキンと、聾する静寂。

だれも倒れていない。

だが、気を失っている七海を除いて、皆が息をするのも忘れて見ていた。

自由の女神の様に、右手を天に突き上げているウルを。

第十四章 集う孤狼たち（後書き）

ここまでお付き合い下さり、ありがとうございます。
次章、クライマックスです
どうぞ、おつきあいください。

第十五章 愛される資格 くいつの日も汝の上に（前書き）

第十五章です。

第十五章 愛される資格 ーいつの日も汝の上にー

第十五章 愛される資格 ーいつの日も汝の上にー

「やめろ！ 阿呆どもが！」

ウルが姿勢を崩さないまま怒鳴った。その手に握られているのは、物部が放置したままだった、コルトパイソン。

先輩。

ウルはかつて自分を救ってくれた、憧れの男の子の笑顔进行い浮かべた。

ダメな私には、子供達の笑顔を守る事ができませんでした。けれど、今。

たった今、私にもひとつの命を、護る事が出来るかもしれない。ウルは自分自身を突き動かす、神の意思を唐突に理解した。

アラーよ、この日この時まで、私の命を繋いで頂いたことに、感謝の言葉ありません。

どうか、広大な慈悲の心で以って……

私が使命を果たすまで、もうしばしのご加護を。

アラーは偉大なり。

正義は、今こそ我にあり。

「銃を捨てろ！」

「どこに、銃をむけて言ってるんです？」

十崎が、もう片方の手に握ったニューナンプで、ウルを牽制しながらあきれたように言った。

ウルは、躊躇いなくパイソンを、自分のこめかみに当てた。

焼けた銃口が、髪の毛と皮膚を焼き、嫌な音と匂いを発したが、気

にできなかった。

「ウル！」

アラディンが、抜いた銃を十崎に向けるのも忘れ、狼狽した。ウルはそのまま、ゆっくりとアラディンにむけて歩き出した。赤外線の間こうで、戸惑ったままの九城の前を通り過ぎ、険しい顔をしたままの物部の前を通り過ぎる。

「ねえさん……」

うつ伏せで、手を頭の後ろに組んだままの幸が、目だけ向けて呟いた。

「撃ちたければ、好きなところを撃て、アウルディー。望むところだよ」

ウルは言った。

パイソンを、己が頭に向けたまま。

歩みを止めず、目も向けず。

十崎は醒めた目で、成り行きを見ているだけだ。

とうとうウルは、中腰でバネをたわめているアラディンと、十崎との間に入る形で、少年の前に立ちはだかった。

「アラディン」

「ウル……」

ウルは静かに呟き、アラディンは戸惑ったように応えた。

ウルは大きく息を吸い込み、次の瞬間。

「誰がそんなものを、振り回していいと言った！！！」

アラディンが、小気味いいまでに吹っ飛んだ。

「立てい！」

パイソンを適当に投げ捨てると、アラディンを張り飛ばした右手で、胸倉を掴んで引き上げた。

完全に度肝を抜かれたアラディンは、痛みよりも、驚きで目を丸くしたままウルを見つめる。

「ウル、でも」

「言い訳するなっ！」

アラビア語で叫び、足をかけると、背中から床に叩きつける。

「私がお前たちに、銃を取るような教育をしたか。言ってみろ！」

「……してない」

咳き込みながら、ようようアラディンは答える。

「してない、だと？ 先生に対して、その口の聞き方はなんだ」

「してません……でも、銃がなきゃ、ウルを助けられないよ」

「この、ロバ頭が……いつまで寝ている！ 立て！」

アラディンが、恐る恐る立ち上がる。

「気を付け！」

アラディンが、反射的に姿勢を正す。ウルは滅多に、子供をぶつたりしなかったが、子供たちが卑怯なことをしたり、危ないことをしたときは、容赦がなかった。

「サダム！」

ウルが、啞然として大男に向かって吼えた。

場が凍結するほどの、威厳と迫力だ。

「子供に銃を撃たせて、自分は物陰か。貴様、今日という今日は許さん。後で覚悟しておけ」

サダムは、顔をそらして苦々しげに呟いた。

「そいつは、勘弁してくれ」

ウルは、アラディンに眼を戻した。

「アラディン。お前たち子供の命と、私たち大人の命。どっちが重い」

「僕よりかは、ウルはの命」

即答したアラディンは、さっきよりも派手に吹っ飛んだ。

「貴様は一年間、私から何を学んだんだ！」

アラディンの前に跪くと、襟をつかんで揺する。

「大人から先に死ぬものと、相場は決っているんだ。貴様らに、銃で護って貰うくらいなら、私は死を選ぶ」

ウルは立ち上がると、呆れたように事の成り行きを眺めていた、十崎に向き直った。

「アウルデー」

ウルは、アラディンに立ち上がるよう、促した。

「先に銃を向けたのは、私の生徒だ。どうか、許して欲しい」
深々と、頭を下げた。

横で呆然としている、アラディンの尻を思い切りはたくと、アラディンは慌てたように、ウルに倣った。

「よい、先生ぶりですね……興ざめです」

十崎は白けたように、横を向いた。

「どうぞ、ご勝手に」

「ありがとう。恩に着る」

ウルは、下げていた頭をあげると、アラディンに向き直った。

「アラディン……銃をもったのは、今日が初めてではないな？」

ぞっとするような、恐ろしい目で睨むと、アラディンの顔がこわばり、脂汗がにじみでた。

黙っていると、ウルが続けた。

「いままでに、何人撃った？」

しばらくの沈黙の後、アラディンは、ウルにしか聞こえない声で、ぼそりとある数を呟いた。

彼を縛る、呪われた数字を。

目を見開いたウルは、次の瞬間、三度、アラディンを張り倒した。サダムは銃を放り出し、覆いかぶさるようにしてアラディンの頬を叩き続けるウルに駆け寄り、羽交い絞めにして引き剥がした。

「離せ！ この子が犯した過ち分私が殴ってやる！ ……私に触るな！」

サダムは暴れるウルを離さなかった。

「あの時は済まなかった。必要だったんだ。それに私はホモだよ」
ぴたりと、ウルの動きが止んだ。

「……なんだと」

話の内容と、今までの粗暴さの欠片もない、理知的な語り口に、ウルはあつけにとられた。

「君を脅すように、君の母親に頼まれたんだ。それで、アメリカに逃げ帰るようなら、そのほうがいいってね」

「まさか……」

「そう、あの夜君を襲ったのは、ハシムとアラディン、私の三人で仕組んだ芝居だ」

ウルは全身の力が抜け……ずるずると座り込んだ。

「なにもかも……母の掌の上か」

ウルは虚ろに。

虚脱感に支配された頭で、虚ろに呟いた。

「知らなかったのは、私だけか……間抜けな話だ」

「自分を、悪く言うのはやめる。ウル、きみはよくやった」

サダムが、労わるように言った。

「帰る場所を……無くしたよ。もう、何もかもどうでもいい」

サダムは暫く黙っていたが、意を決したように言った。

「ウル、戻ってくるか？ ハシム師には私から話をしてもいい」

ウルは、力なく首を振った。

「私のせいで、子供たちに危険が及ぶ……あつてはならないことだよ。それに……」

ウルは、消え入りそうな声で言った。

「もう、何を信じていいかわからない。だまされて、踊らされるのはもうごめんだ」

サダムが、悲しそうに黙り込んだ。

乾いた音が、室内に響き渡った。

頬を打たれたウルは、呆然と加害者を見た。

「今のは、許せない」

手を振りぬいた姿勢のまま、アラディンは言った。

アラディンのぶたれつづけ、真っ赤を通り越し、紫になりつつある頬より、彼がウルを見つめるその眼差しのほうが、遥かに痛々しかった。

「みんながどんな気持ちで、ウルを日本に帰そうとしたと思って

るの？ みんながどんなに、ウルと離れたくないか知ってるの？
子供たちが泣いていたのまで、嘘だと思ってるの？」

アラディンは俯いてから、意を決したように顔をあげた。

「ウル、ソーリーレターって知ってる？」

「……アメリカ軍が誤爆や誤射なんかで、現地のイラク人を殺したときに、配る手紙だろう？」

「そう。姉の結婚式で、一族ごと吹っ飛ばされた後に、僕はもらったことがある」

ウルは言葉を失い、アラディンを凝視した。

「僕の家族を奪ったのは、アメリカの民兵、民間軍事会社だった。偽情報を鵜呑みにして、式をめちゃめちゃにしたんだ。信じられるかい？ すべてを奪っておいて、文字通りごめんだけなんだよ？ 法律であるんだ、同盟国のために働いている要員は、イラク当局に訴追されることはないってね」

ウルは言葉もなかった。一四歳の少年の、話す内容ではなかった。
「誰も何もしてくれないのなら、自分でやるまでだ。最初は、自爆兵に志願しようと思った。でも、同胞を巻き込む可能性が高い。それに、出来るだけ長く生きて、一人でも多くのアメリカ人を、殺してやりたい」

それを聞いたウルは、鋭く胸を、抉られるような思いだった。

「勘違いしないで……ウルはウルだ。何人でも関係ない。僕は狙撃兵になった。目がよかつたし、じつと動かないのが得意だったからね」

アラディンは、黙然とウルの後ろに立っている、サダムに目をやった。

「そのとき出会ったのがサダムさ。彼もまた、居場所がなくて流れ歩いてたんだ。インテリだけど、ホモセクシュアルだからね。フセイン時代のイラクならともかく、イスラムの世界では、ばれたら生きていけない……僕らは二人で組んで、片端からアメリカ兵を撃ちまくった。高い場所から撃ち、その後サダムの待機する地上に飛

び降り、姿を消す。ウルがさつき見た通りさ。何の証拠も残さないから、正体はばれない」

アラディンは、ここで目を逸らして呟いた。

「僕らは、アメリカ兵に『煙』って呼ばれてた」

黙って聞いていた、十崎の表情が変わった。

「この子が……九城」

十崎は薄く笑うと、九城に顔を向けた。

「なんや」

アラビア語の会話を、ぼんやり聞いていた九城は、めんどくさそうに答えた。

九城は、アラビア語をほとんど理解できない。

「指名手配されていた、テロリストの『煙』をおぼえていますか」

九城は、顔を顰めた。

「バグダッドに一年おつて・忘れられるわけないやろ？ おれもヤバかったつちゅーの。そいつに会ったら、言いたい事が山ほどあるわ」

「それは重畳。彼らが『煙』だそうです」

九城のあごが、カクンと落ちた。

九城たちの会話を他所に、アラディンは続ける。

「サダムは、ハシム師の親戚だっていったよね？ それは本当さ。ハシム師に、ウルの警護を頼まれたんだ。ほとぼりを冷ますのに、ちようどいいかと思って、僕らは引き受けた。兵隊以外のアメリカ人にも、興味はあったしね」

「じゃあ、私の傍にいつもいたのも」

アラディンは、微笑んだ。

「最初は、ハシム師の頼みだったから。でも、途中からは違う。いつの間にか、死んだお姉ちゃんに重ねていたんだ。次こそは、護つてみせるってね」

ウルの瞳から、透明な雫が流れた。

「でも、平和な時間が一年近くも続くと、いままで自分がやって

きたことに、疑問を感じ始めた。それは、人間として大事なことなんだろうけど、僕には地獄の責め苦だった……ぼくが殺していたのは、アメリカ兵である前に、人間だったんだ。僕にできるのは、アラに許しを乞う事だけだった」

ウルは歪んだ視界の中で、アラディンの礼拝の時間が、人より長い理由を理解した。アラディンの声が低くなった。

「僕は二度とバグダッドに戻らないし、アメリカ兵を狙撃することはないと思った。もう、これ以上祈りの時間が長くなるのはごめんだった」

一瞬つまつてから、震える声で言った。

「さつき、何も信じられないって言ったよね？　ぼくがどんな気持ちで、二度と触れたくもないと思っていた銃を握ったかわからないの？」

「わからない」

ウルの全く迷いのない答えに、アラディンは言葉を失った。

「ぬくぬくと育ってきた私に、理不尽な死を迎えた家族を持つ、お前の気持ちがわかると言ったら、最低のうそつきだ。だがな」

ウルは、涙にぬれながらも、揺ぎ無い光を湛えた瞳を、アラディンに向けて言った。

「一つだけわかっている事がある。この世に居ない人間の為に、お前の命を危険に晒すのは、絶対に許容できない。どうしても、銃を取らねばならないのなら……」

ウルは、静かに続けた。

「私が代わりにやってやる。そのためになら、クルドに戻ってもいい」

アラディンは、驚いて言った。

「冗談じゃない、僕なんかのために、ウルを危険に……」

アラディンは、言葉を失い。

「そうか……そういうことか」

独り言のように呟いた。

「お前たち」

サダムが歩み寄り、言った。

「許せないでも、分からなくても……よく分かるけど許せない、の間違いだろ？」

互いの、わざとはしよった会話は、噛み合わないままお互いの心に届き、その役割を果たした。

互いに背中中で、かばいあう必要などなかった。

必要だったのは……

「愛されるということは」

サダムが、静かに言った。

「自分が傷つけば、悲しむ人がいることを自覚して、自分を大切にすることだ……愛する人のためにな」

アラディンは、祈るかのように片膝をついた。

サダムは導師のように、厳かに続ける。

「二人とも……互いに愛される覚悟はあるか」

「……アラディン」

ウルは座り込んだまま、抱擁を乞う赤子のように、両手を伸ばした。

アラディンは、ウルの埃だらけの頭を、薄い胸に抱いた。

「一年もの間」

ウルは瞬きもせずに、涙の止まることのない瞳を虚空に据えたまま、アラディンの慟哭に震える声を聞いていた。

「僕らを護ってくれてありがとう。いつか、クルドの地に、本当の平和が訪れたら戻って来てほしい……みんな待つてるから」

ウルは、両手を伸ばしたまま、アラディンを抱き締められずにいた。

先輩、私……うまく出来ましたか？

あの日のあなたの様に、なれたでしょうか？

「僕らを……愛してくれてありがとう。いつの日も、汝の上に平安がありますように」

第十五章 愛される資格 くいつの日も汝の上に（後書き）

ここまでおつきあいくださり、ありがとうございます。

第十六章 それぞれの夜（前書き）

第十六章です。

第十六章 それぞれの夜

七海が、気掛かりな夢から目を覚ますと、自分が正義超人になる前の、ラーメンマンに変身している事に気がついた。

「!？」

慌てて上半身を起こすと、そこは大型四駆の後部座席だった。

三列シートが一番後ろで寝かされていたのだ。

「気がついたか、ミズ・織河」

真ん中の列の、運転席側に座っているウルは、少しだけ振り向いて言った。

助手席の少女と、運転席の物部が、ミラーでこちらを確認している。

窓から外を見ると、七海が乗った車はオレンジ色の街灯が照らす、交通量も途絶えた産業道路を走っていた。

「よっ、気がついたアルか？」

幸の一言で一気に記憶がよみがえり、七海は音速で仰向けにもどると顔を覆った。

「おい、刺激するな」

物部が幸をとがめる。

「んだよ、さつきから、妙にこの学生さんに気い使うな。ラブなん？」

「おまえは何もわかつちやいない。世界には、触れちゃならんものがあるんだ。とにかくよせ」

「物部さん」

掌で覆われた隙間から漏れる、くぐもった声で、七海がいった。
不自然な間。

えっ、俺？　なんで俺？　みたいナ。

物部は、おずおずと答えた。

「何ですか」

「あの野郎はどこです？ それと原付を置いたままです」

「置いたままの原付は、あの野郎が乗って帰りました」

「そうですね……。折りいってお願いがあるんですが」

「奴が、どこへ消えたか分かりませんし、銃は貸しませんよ」

「ガリモヤシは、原付を返しに三条に向かっていているでしょう。別に、鉄砲なんか要りません。カカシのような後ろ姿を見かけたら、ちよっぴり、アクセルとブレーキを踏み間違えてくれるだけで、私はかなり、幸せな気分になれます」

七海の感情の消えた声に、何か恐怖めいたものを感じているのか、物部は言葉を選びながら答えた。

「今、あなたの自宅に向かっています。住所はアウル……十崎から聞いています。とりあえず、今日はお開きということで」

「……とつつあん、なんかびびってる？」

物部は、幸の呆れたような言葉に答えず続けた。

「なにせ、みんな疲れてますから」

チツ

七海の舌打ちが音高く響き、むっとした幸が振り返ろうとするのを、物部はジェスチャーでとめた。

ウルは、何も言わずに窓の外を眺めている。

「どのみち……」

物部は続けた。

「もう彼と会うこともないでしょう」

七海は、目を見開いた。

走行音だけが、車内の静寂をかき消す。

小さく。

小さく嗚咽が始まり……。

振り返ったウルの目に、涙をボロボロ流す、七海の落書きだらけの顔が映った。

「学生さん……」

幸は同情を込めて呟いた。

「私……明日来てくれるって……信じてたのに」

「いや……記憶にあるかぎり、彼は返事も、約束もしてなかったんじゃない……」

言いにくそうに、物部がつぶやき、幸がしたり顔で続ける。

「よくあるよな」。私、私あなたの事信じてるッ……そうして、相手の返事は聞きたくないから、耳を塞いで走り去るのであった。まる」

今まで、黙っていたウルが、口を開いた。

「サイヤーラ、さっきからどうした？　なんだか、別人みたいだな」
「説明しよう。とっつあんは仕事が片付くと、いつもの弱気で、声の小さい営業モードに戻ってしまうのだ！　その速度は、僅か〇・五秒、ではそのプロセスを、もう一度……」

幸が、どこかで聞いたような解説を、ノリノリでまくし立てる。

「ふたりとも、よせ」

ウルが遮った。

「じゃあ、私は明日」

七海は、震える声で割って入る。

「家の文化包丁で……誰のどてっ腹を、抉ればいいんですか？」

物部と幸は、ちよつと気まずそうに、視線を彷徨わせた。

「織河もよせ。背中を押してやりたい気持ちはあるが、それはよせ」
ウルは、横たわったまま、大粒の涙を流す七海を、シート越しに見下ろした。

「すわりなさい。もう誰も、笑ったりしない」

お嬢さん、そいつはどうか、ニヒルに嘯く幸を無視しつつ、ウルは七海の手を引いて起こす。

七海は、上目遣いにウルをみた。

死んだふりをする際、物部に殴られたのだろうか。ウルの左頬は腫れていたし、泣きはらした目も真っ赤だったが、瞳の色は穏やか

で優しげだった。

「私が、着けていたもので済まないが」

自分の頭部に、ゆるく巻きつけていたスカーフを解くと、俯いている七海に被せ、軽く顎の下で結んでやる。

「似合うな。ロシア娘が、マツチ売りの少女みたいでかわいい」

ウルが、極めて珍しく軽口を叩く。

だが、それを見逃す幸ではなかった。

シート越しに、眼だけを覗かせ裏声で囁く。

「家路を急ぐ人たちの溢れる白い街角で、彼女は声を囁らして叫びました……ギョーザ、ギョーザ買ってください！　一〇個で、八〇〇万ジンバブエドル！」

ごぼっ、げぼごぼ

物部とウルは急いで俯くと、同時に咳き込み、その姿勢のまま物部は幸の頭をはたいた。

つてえな、とか言いながらも、満足そうな幸。

「風邪ですか。大事にしてください」

副音声のボタンを押したら、裏切り者、と聞こえてきそうな口調で、七海が言った。

「……いや、なんでもない。しかし、隠そうと思ったらこれでは無理か……チャドルがあればな」

真剣に呟くウルに、誰も突っ込まなかった。

「仕方ない」

ウルは、目を半月形にして虚空を睨んでいる七海の頭部に、くるくると手際よくスカーフを巻きつけ始めた。

……。

「よし。多少目立つかもしれないが、落書きをみられるよりましだろう……大丈夫、イラクで働く人たちはみんなこうしてる」

ウルは、満足そうに笑った。

ルームミラーで、ちらりとその様子を見た、幸と物部の時間が止まった。

赤信号を突っ切りそうになり、物部はあわててブレーキを踏む。

「……なあ、姐さん」

「なんだ？」

「他人を貶めて笑いをとるのは、お笑いの手法としては最低なんだから？」

己の事は棚に上げ、幸は静かに言った。

「……？ そうだな、私もそう思うが……急にどうした？」

「……なんでもない。悪かったよ」

「そうか。織河、近所まで送ってもらったら、自宅まで走るといい」
「……そんなことしたら、学生さんちに武装勢力が、突入してるようにしか見えねえつつの」

アルジャジールに、送りつけられてくる犯行声明ビデオなどで、旗の前に立ち、がんばって武器を構える農民風にされた七海は、微動だにしなかった。

「ナスがママ、キューリがパパだな、学生さん。姐さんまったく悪気がなさそうだから、はっきり言った方がいいぞ」

幸が、しみじみいうと、

「いいんです」

七海が、ぼそぼそと呟いた。

「図らずも、これでガリモヤシンちを強襲する準備ができました。みなさんつきあってくださいですね？」

そつと下を向いた三人に、追い討ちを掛けるように七海は言った。
「私、信じてる」

街頭が照らす通りに、人影は無い。

すっかり寝静まった住宅街まで、原付を走らせたきた十崎は、目的の家のかなり手前でエンジンを切り、惰性だけでディオを進ませた。

寒い。防寒用のドライビンググローブ越しに、侵入してくる冷気に、指先の感覚がない。今宵は本当に、四月の下旬なのか。

フルフェイスを外し、周りより少し広めの、見慣れた一戸建てを見上げる。

二階の電気が消えているのを見て、軽く安堵すると、そっと、門を開く。

錆付いた金属の軋みに舌打ちしそうになったが、原付を中に駐め、忌々しいかっぱ入りのザックをステップに置いたまま、鍵を車体の下に置くと、冷え切った指先の血行を戻すため、手を開閉しながら、そそくさと門を出た。よく避難場所に使う、ネットカフェの方角に歩き始めたところで……

はははは……人がごみのようだ

聞きなれた携帯の着信音が、十崎を凍りつかせた。

カーテンの開く音がして、さっきまで見あげていた窓から、強烈な海中電灯の光が十崎を照らす。

マグライトの照射に手をかざしつつ、十崎は諦めて携帯に出た。

「怪我は？」

美夜子の第一声はそれだった。声に感情が無いのは、相当怒っている証拠だ。榎田家に養子としてもらわれてから、一〇年以上の付き合いで分かっている。

「別に」

そっけなく答える。

逆光で表情はみえない。パジャマを着ているのに、まだ髪を二つに括った角が、シルエットになって見えているのは、いつでも飛び出せるようにだろうか。

「明日も学校だろう。なんでまだ起きてんのさ」

十崎は、不機嫌さを隠さず言った。

「いつ、訃報が届くかも分らんから」

淡々とした痛烈なイヤミに、私は全てお見通し、というメッセージが込められていた。

「それと、織河さんからさっき私に電話があった。バイク返しにいけないで、ごめんなさいとか」

「……ん」

「お兄ちゃん、なんで左袖、濡れてんの？」

きらり、と美夜子の銀縁眼鏡が光った気がして、十崎は急いで美夜子に背中を向けた。コートの弾痕でも見られたら、非常にめんどくさいことになる。

「なんで隠すんよ？」

「隠してない。まぶしいから、そっち向いてられないんだよ」

「ふーん……」

「それから、明日は自分で起きろ」

「……何、それ？」

織河に余計なことをいったらどう、という言葉を読み込んだ。今、一戦交える体力は残っていない。

「明日、起きれそうにないんだよ」

「夜型のくせに……まあ、ええわ。足も二本付いとるみたいやし。そのかわり」

美夜子は、語気を強めて言った。

「起きたらちゃんと連絡して。絶対やで？」

辛うじて、涙をこらえた震える声に、十崎は返事をする事が出来なかった。

日付が変わる時間帯を過ぎても、それなりに交通量のある大通の交差点で、九城はバイクを止めた。

平日の夜なので、走っているのは、トラックや貨物車ばかりだ。ゴーグルをあげた九城は、後方にそっと停車した、ロードスターに近づく。

パワーウィンドーを下げた運転手に向かい、英語でいった。

「そこを右折して、二つ目の信号を曲がったらコンビニ……コーナーストアがあるわ。そこで、銀色の軽に乗って待ってるってよ」

「ありがと。世話になった」

運転席のサダムが、につこりと笑っていった。

「七海ちゃんを、運んでもらう代わりとはいえ、無免許の車、先導するなんてな……」

九城が、苦々しそうに言った。

「随分まじめなんだな」

「それで二回、ガキの頃に、捕まった事があるから言うてんねや。

……まあええわ。傷どうよ？」

「かすめただけだからな。しかし、あの男……腰だめで撃って、よくもあれだけ器用に急所を外せたものだ」

「まあ……あいつは普通やないからな、色々と」

「そういう君の方こそ、目の上の傷はどうなんだ？」

「まあ、大した事ないわ。接着剤で固めといたし、抗生物質飲んだからな」

サダムは呆れたように首を振った。

「雑もいいとこだ……しかし、ミスターK。よく我々の前を走るのを承知したな？ 後ろから撃たれるかも、とか考えなかったのか？」

サダムが、不思議そうに尋ねると、九城は無表情に言った。

「お前から見てたら、なんとなくそれはない思たしな……ところで、ぼうず」

九城は、助手席ですつと俯いたままの、アラディンに言った。

「去年バグダッドのグリーンゾーンで、俺が所属していたPMCの一人が、カナース（スナイパー）に撃たれた……俺の目の前でな」

なおも顔を上げないアラディンに、構わず続ける。

「普通、安全区域の入り口で、部外者は止められるんやけど、ザルもいいとこな警備体制やから、誰でも入れた。犯人は、その頃名前を売り出し始めたテロリスト、『煙』の仕業って噂がたった」

「そう」

アラディンがポツリと呟いた。

「勘違いすんなよ。礼を言いたくてな」

アラディンが、ゆっくりと面を上げた。

何の光も映さない眼差しで、お互いの深淵を覗き込み合う。

「お前が殺らんかったら、俺がやられてた……なんでや？」

ほとんど動かさない、九城の唇からもれる問いは、囁きに近かった。

「なんで俺も殺さんかってん？」

「ツイントリガー社所属、K・クジヨー……CQ（近接戦闘）のエキスパートで、米軍遺物捜査班リーダー、マシュー・ボグダノス大佐のお氣に入り……」

アラデインの独り言に、九城の目つきが陰しくなった。

「通り名は、マッド・ドッグ・ジェyson。バグダッドの隊が借り上げしているフラットで、同僚の隊員及び上官、あわせて六人殺害」「やめえや」

九城の獰猛な唸り声に、サダムの表情が変わる。

「アラデイン、よせ」

「聞いてきたのは彼だよ、サダム……勘違いしないで、ジェyson。僕もお礼を言いたかったんだ」

九城を見つめるアラデインの眼に、初めて表情らしきものが現れた。

「ハニーンの代わりにね」

九城の眼が、驚愕に彩られた。

「おまえ……」

「彼女、しゃべれるようになった。あなたのおかげだよ、ジェyson」

「マジか！……あの娘……」

九城は、屑どものおもちゃにされていた、十七歳の少女を思い出し、言葉を詰まらせた。

「あなたに助けられた時は、ひどい状態だったもんね。いつか自分でお礼を言いたいつてのが、彼女の口癖だよ」

「……お前も、ザイナブの仲間なんか？」

アラデインは薄く笑った。

「『預言者の剣』とは交流が深かったよ。狭い世界だからね。それが、あなたの質問の答えさ」

一六歳の少女を頭に頂く、自衛集団の名前を聞いた九城は言葉を失い、ゆっくりと安堵の笑顔を浮かべた。

「あつちにいい思い出なんか、全然ないんやけど……今夜は、最後にええ話きかせてもらたで」

アラディンは、暫く九城をじっと見てからいった。

「今度は僕が聞きたい。なぜ？」

アラディンの瞳はまっすぐで、九城は眼を逸らせそうになかった。

「なんでアメリカ側のあなたが、イラク人の為に命を懸けたの？」

六人も仲間を殺したら普通、間違いなく銃殺刑だ」

「復讐や」

九城は即答した。

「あいつら、どさくさにまぎれて、後ろから俺を撃ちやがった……口封じにな」

「わかってるよ。でもそもそも消されかけたのは、あいつらが女の子達のパスポートを買い集めて、慰み物にする為に監禁しているのを、告発しようとしたからだろう？ 順序が違っよ」

九城は俯いた。

「六人と対峙して、ほとんど銃を使わずに斃した……考えられないよ、相手は武装してたのに」

「銃に、自信がなかっただけや」

「それは嘘だね」

アラディンは断言した。

「一人の顔の真ん中を、クイックドロウ（抜き撃ち）で撃ち抜いてる……そんなことはいいさ。なぜ？」

「普通やろ」

九城は、俯いたまま言った。

「抵抗できんガキ集めて、やりたい放題……普通ム力ついて、あたりまえやろが。同じ空気吸うてるだけで反吐がでるわ」

「……そっか」

アラディンは、得心したように呟いた。

「でも、殺してしもたんは成り行きや。俺は自分の為に、アイツらを地獄に叩き込んだ……お前らの為や思われるんだだけはカンベンやで」

「オーライ、わかったよ。でも、あなたのお陰で、何人もの同胞が死なずにすんだ。あんなゴミ共の為に、苦しむのはやめてよ」

「俺と、おんなじ眼えした奴に言われたないな。お前も、リスペリドンか、セレクサ飲んでるやろ……それともアンビエンか？」

九城は、精神にダメージを抱えた、イラクからの帰還兵が世話になる、薬の名前を口にした。

アラディンは、照れたように笑った。

「それ、イラクじゃ手に入らないよ。それにみつかったらウルに殺されてる」

アラディンは、真顔になっていった。

「僕の薬はコーラン。でも僕がお祈りする十六人の中に、アイツは入ってない」

九城は眼を見開いた。

「アラディン、もういいだろう。マスード司令官をお待たせするわけにはいかない」

サダムが優しく言った。彼らは、ハシムに言われて、マスードに会いに行くのだ。そして、明日には機上の人となる。

「ミスターK。私からも、イラク人を代表してお礼を言わせてくれ」
サダムが、サイドブレーキを外しながら言った。

「コーランで思い出した。これみんなから、ウルに」

アラディンが紙で包まれた、掌大の四角い紙包みを、九城に差し出す。

「お守りのコーラン。渡すの忘れてた。頼めるかな」

「……連絡つくかな。まあ、なんとかしてみるわ」

「ありがと……いつでもクルディスタンに来て。みんなに紹介す

るよ、バグダッドの英雄」

アラディンが、微笑んで言った。

「やめろ」

九城は、苦虫を噛み潰したような顔でぼやいた。

「ぼうず、お前こそ、はよ一人前になって、ウルマを迎えにきたれや」

アラディンが、きよとした後、笑って言った。

「それはありえないよ。彼女は僕にとってアラアの御遣いで、僕の手は汚れきっている」

車が走り出した。

「アラアのご加護を」

「ボン・ボヤージュ」

走り去るユーノスを見送ってから、九城はバイクに向かって歩き出した。

額の傷が、かぴかぴして突っ張る。

「僕の手は汚れきっている……か。耳が痛いわ」

九城は、物憂げに呟いた。

第十六章 それぞれの夜（後書き）

ここまでお付き合い下さり、ホントにありがとうございます。

第十七章 僕の好きな人（前書き）

第17章です。

第十七章 僕の好きな人

朝一番に研究室にやって来て、論文を打っていた黒田は、ドアの
開く音に顔をあげた。

チェックのスカートに、長袖のシャツといういでたちの七海を見
た黒田は、待ち人に声をかけようとした。

「おはようございます」

俯いたままぼそぼそと呟き、早足で机に向かう彼女を見て、黒田
はただならぬ気配を感じた。

「おはよう……昨日どうなったんだ？」

「おかげさまでうまくいきました」

七海は平坦な声でいいながら、机の中の整理を始めた。

「そうか」

「多分、また来るとおもいます、あの人たち」

持ってきた手提げに、乱暴な手つきで本を詰めると続けた。

「ですから、私は退部します。三回生になったらお会いしましょう」

「おい」

「……短い間でしたが、お世話になりました。じゃあ」

「まてまて」

黒田が慌てて駆け寄り、両肩に手を掛ける。

「何があつたかは知らないが、さぞかし大変で苦労したろう。なん
となく分かる」

七海は、俯いたままだった。

「だが、あれを見る」

黒田が、キラッとデコとメガネを光らせ、言った。

黒田が指差す方向に、仏頂面をむけると……

十崎がいつも使っているノートパソコンが、粗末な机の上に置か
れてあった。

「今朝、鍵がかかった研究室の前に置いてあった。多分織河宛にだ…… っておい」

すたすたと、早足で出口に向かう七海の前に、あわてて回りこむ。
「とりあえず開いてみる」

「嫌です」

「謝罪文が入ってるかも知れないじゃないか」

「嫌ったら、嫌です。そこにかざってある、もじやもじやした縄文土器をスケッチさせられるくらい嫌です」

「もじやもじやって……」

黒田は、研究室内のガラスケースに陳列されている、飛び切りサイケデリックな装飾が施されている、縄文時代中期の壺に目を向けた。

「火焰土器の事か？ それと、せめて実測って言え」

顔をしかめて、黒田がぼやくのを、七海は見もしなかった。

「とにかく、立ち上げてみよう。な？」

七海は、むすつとして立っている。とりあえず、足止めできたことにほっとしながら、黒田は中古で買ったらしい、ノートパソコンを起動した。

ファンの回る音、OSの立ち上がる音に続いて、自動で演奏がかかった。

「ん？……何の曲だ」

ラーメンマン

ラーメンマン

「なんだ、ずいぶんなつかしいな……なにしてたんだ、オイ！」

不穏な気配に振り返ると、実測の為に置いてある弥生時代の巨大な壺を、振りかぶった七海が眼に飛び込んできた。

「やめろ、復元すんのに、どれだけ時間がかかったと思ってるんだ！」

画鋏を踏んだ、ミックジャガーのような形相で、ノートパソコンに完成品のパズルを叩きつけようとしている七海を、必死で止める。
「……土器ぐらい、なんです……私なんか、顔も心も修復する間が

なかったのに」

食いしばった歯からもらす呪詛に、首を傾げつつも、黒田はある事に気づいた。

「とにかく、落ち着け……なんで顔が、局部的に赤いんだ？」

額と頬と鼻の下が、しもやけのように真っ赤なのを気づかれた七海は、急いで後頭部を見せた。

油性マジックだから、なかなか落ちなかったのだ。

「……色々あったんだな」

壺をそつと元に戻した、七海の後ろ姿が、細かく震えだす。程なくしゃくりあげる声が、朝の研究室に響く。

「……大変だったな」

しんみり呟く黒田に七海は、

「……簡単にいわないでください」

ぶるぶる震えながら言葉を漏らす。

やおら振り向くと、眼に涙をいっぱい溜めたまま、堪えていた気持ち爆発させた。

黒田さんに、ラーメンマンにされた私の気持ち、分かるんですか！？

「黒田さんに、ラーメンマンの気持ち、分かるんですか！？」

その言葉は、ほとんど物理的なパンチ力でもって、黒田を仰け反らせた。

黒田は、数秒間天井にぶら下がっている妖怪でも見つけたような顔で、七海を見つめ、横を向いた。

だらだら汗をかきながら、何事かぶつぶつ呟く。

七海は、俺製の呪文をとнаえている黒田を、大きな眼で理不尽に睨みつけていた。

黒田は眼鏡を中指でずりあげ、咳払いをしてから、七海の肩に手を掛けると俯いたまま言った。

「なるほど……織河の言うとおり、俺には少しかかり判りかねる。

いや、知ったような口をきいてしまった。怒るのも無理はない、す

まん」

七海は、大声を出して少し気持ちが治まったのか、眼を逸らして、いいえと呟いた。

「とにかく、座ってくれないか」

七海は下唇を突き出して、不満を表明しながらも、言われたとおりにした。

黒田は、七海の前に甘さ控えめの、缶コーヒーを置いた。

「まあ、これでも飲め。九城からだ」

「……なんで、九城さんからなんですか？」

「今朝電話があつてな、立て替えとくように頼まれた」

九城に、別段恨みはない。

毒が抜けた表情で、頂きますと疲れたように呟き、背中を丸めてコーヒーをすすり始めた。

「これを聞いているということは、パソコンは無事だということですね」

べふっ

突然聞こえた、につくきカタキの声に、思わず七海はコーヒーを噴出した。

「大丈夫か？」

黒田はあわてて立ち上がって、七海の背中を叩いた。

「……大丈夫です……ちいづくしよおおお」

七海は、相棒を殺されたデカのような形相で、動画を自動再生し始めたパソコンに振り向いた。

「どこまでも、どこまでもいまいいいいいい」

「待て、待てって」

黒田は情けない顔で、七海を羽交い絞めにする。

「離してください、黒田さん！　せめて、画面の上だけでも、黒焦げのドラえもんにさせてください！」

「やめとけて、本物が来たら、直に落書きしてやろう」

黒田が、諭すように言った。

「俺と桃井も、手伝うから」

「……黒田さんて」

ぽつり、と七海が呟いた。

「ほんとにいい人ですね」

黒田が返事に困っていると、

「そろそろ、落ち着いた頃ですか」

まるで、どこから観察でもしているかのように、画面の十崎が言った。

ぎろり、と昨日の姿そのまま、映っている十崎を睨む。

いや、自室らしい室内をバックに少し無精髭が伸びて、疲れた表情。

ダルイ感じがやだ、カッコイイ……

「ちがう！」

七海は、セルフ突っ込みを入れた。

「昨日はお見事でした。僕の負けです……ぞくぞくするほど、不愉快なゲームでした」

七海は怪訝な顔をした。

「もう二度と、やりたいとは思いませんよ」

疲れたように笑う、十崎に向かって、平坦な声で毒づく。

「なに言ってるんでしょ、このごぼう男」

「まさか、美夜子を抱きこむとはね。ほんとに、どうやって嗅ぎつけたんだか」

黒田が、顔を顰めた。

「……ばれませんように」

「お気づきのように、彼女は僕の、本当の妹ではありません」
やっぱり。

表札が、樫田になっていたから、まさかと思ったが。

「……おれは、聞かないほうがよさそうだな」

黒田は立ち上がり、扉に向かった。

「あのっ黒田さん！」

我に返った七海は、あわてて声を掛けた。

「すみませんでした」

黒田は振り返らずに、片手をあげると、無言で消えた。

「……が一〇歳のときに、施設から引き取られました。彼女が四歳の頃です。彼女の両親は、とてもお人よしな人たちでね」

十崎は、力なく笑うと続けた。

「おかげで、凄く居心地が悪かった……毎日父親に、気晴らしで殴られていたばかりとしてはね。で、成人してからすぐに籍を抜きました。美夜子の家族には、猛反対されましたけど」

「……ぼくの家族、とは言えないんですか」

蒼白な顔で、七海はポツリと呟いた。

「特に……美夜子には泣かれましてね。それはもうワンワンと」
その時を思い出したのか、十崎は苦笑した。

「月に何回かは、樫田家で食事するという、約束をさせられました。そうこうしているうちに、美夜子に、弟と妹が生まれました。美夜子を生んでから、なかなか子供ができないから、ぼくがもらわれたんですが……ぼくはほっとしました。これでぼくの役目は終わったなと」

「馬鹿じゃないの……役目とかなんとか」

「でもそうじゃなかった。子守に託けて、美夜子からしょっちゅう、呼び出しをくらう。タダで、あんな重労働をさせられるなんて……冗談じゃない。でもほんとに冗談じゃなかったのは、彼女の父の言葉でした。どんな形でもいい、美夜子を傍で見守ってくれないかと。あの子は表面上は友達が多いけど、凄く臆病だから、親以外にはお前にしか心をひらかないと」

「……」

「僕は、すぐに日本を出ました……元父親じゃなかったら、締め落としていたところです」

口を半開きにして、固まっている七海の前で、十崎は画面越しに俯いたまま、唇を歪めて笑った。

「大切な娘を、僕のようなクズに預けるですって？　僕の父くらいの外道じゃないですか」

「なんで……」

七海は、震える声で呟いた。

「なんでそんな風に、自分を卑下するんですか」

「いなけりやいいんです。僕がいなけりやいいんです」

自明の真理を語るかのように、一人頷いて言った。

「そもそも、インドで死んでいたはずでした」

「なんで……」

「死ななかつた。まあ、代わりに何人が死にましたが」

「なんで死ぬとか……」

「最後に流れ着いたのがイラクです。ここで死ぬはずでした……やつぱり死ななかつた」

「いいかげんにしろ、この死にたがり！」

七海は、とうとう立ち上がって叫んだ。

「そんなに死にたきや、身投げでもすればいいでしょ！」

「そこでやつぱり、かわりに死んだ人達がいきました。あなたが首にぶらさげてくれているのが、死んだイラク人の子供にもらったものです」

唐突に自分に話がむけられ、頭がからっぽになった。

今は、首に掛けていない。ネットで大よその値段を知ってしまい、仰天したのだ。真偽の怪しいものでも一〇万以上する。気軽に貰うには、高価過ぎるので返そうと思っていたのだ。

七海がウルに、『円筒印章は除外するとして』と言った理由は、『これ一個しかない』と言っていた、十崎の言葉を素直に信じていたからだ。

「話が遠回りしましたね。僕はふざけすぎたから、すこしばかり退屈な話をしないと、耳を傾けてもらえないと思ったから……ぼくが言いたかったのは……」

十崎は画面の中で、奇妙な表情を浮かべた。それは、いつもの飄

々とした表情からは、想像出来ないような……

自信なさげな顔だった。

「その子の名前はバクルといいました。屑どもの娯楽で殺されたんです。死ぬ間際に、言われたんですよ。約束させられたんです」

次の言葉で、七海は崩れ落ちた。

「そのシリンダーシールは、僕の好きな人にあげろって」

「……信じません」

床の上に座り込んだまま、七海はうわごとのように呟いた。

「あなたみたいな、ウソツキの告白を誰が……」

「ぼくはね」

画面の十崎が、困ったように続ける。

「人を好きになった事がないんですよ。そもそも、その感情がよくわからない。だから、敵意に触れると凄くほっとするんです。子供の頃に戻ったようなね」

「馬鹿……」

「バクルの言葉を思い出した時、正直なところ、あなたしか思い浮かばなかったってだけなんです。別に、一〇万ドルやそこの遺物になんか、興味はありませんから、二つとも九城に渡しましたが……あなたに渡したヤツは、一応、バクルとの約束だったから」

ホントに馬鹿。大馬鹿。一〇〇万円近くのお宝より、二〇万円弱で売れるかどうかの遺物と、約束の方を選ぶなんて。

今、わかった。

『これ一個しかない』と言っていた意味。

二つともいずれ、九城さんに渡すつもりだったんだ。

「長くなりました。ぼくが言いたいののは、ぼくは唾を掛けられて当然な人間ですが……そのシリンダーシールだけは、大事にしてあげてもらえませんか」

十崎は、笑って言った。

「最後のお願いです」

七海の頬を、光に照らされた銀色の朝露が伝った。

「……そっか」

七海はいままで、必死でごまかしていた気持ちを、素直に認めた。私はこの馬鹿に、三週間足らずで、心を丸ごと奪われていたんだ。学校にいる間、ずっと傍にいた、掴みどころのない背中に夢中だったんだ。

過去に縛られたまま生きている、不器用で優しくて、どうしようもない笑顔に本気で恋してたんだ。

そして多分……実った。

なのに。

なのになんでかな。ちつとも喜べないや。

たぶん、次に彼が言うことが、判っているからだ。

十崎は、眠気を追い払うかのように、ゆっくりと両手で顔を擦り終わると、いつもの……

七海が見てきた、いつもの笑顔に戻った。

「さて、昨日約束した、学食三年間おごるってはないですが、守れそうにありません。どこか他所の国へ行こうと思っています。それでは、いつかどこかで、また」

動画が、唐突に終わる。

「ふざっけんなあ!!」

七海は泣きながら駆け寄ると、ノーパソの画面を掴んだ。ひとしきり、不明瞭な罵声を上げる。

そして。

「……一方的に、言いたいことだけ言って! 私まだ」

画面を、がらがん揺さぶり続ける

「私まだ、十崎さんの下の名前も知らない……」

俯いて、力尽きたようにすすり泣く。

……

七海は携帯を取り出すと、緩慢な動作で掛電した。お客様がおかけになった電話番号は、電波の……
ぴーっ

「だれだか」

七海は、震える声で言った。

「だれだかわかりますよね？ パソコン見ました……私」

七海は、息を大きく吸うと。

絶叫した。

「私、十崎さんなんて。だいつきらい!!」

息もつかずに。しゃべり続ける。

「うそつきで、ふざけてて、がりがりで、失礼で、趣味も変で、馬鹿で自己評価が低くてデリカシーがなくて」

七海は続ける。

「最低で、平気で死ぬとかいうし、危なっかしいし、悪乗りするし」

七海は続ける。

「鈍感なくせに、妙に気が付くし、変に優しいし、無駄におせっかいで、私は助けられたし」

七海は続ける。

「女の子に冷たくて、美夜子さんを傷つけるし……人の気持ちに疎くて」

七海は続ける。顔中を、涙と鼻水で濡らして。

「私の……気持ちも……知らないで。キライ。大嫌い……だから」

七海は……言った。

「お願い、早く戻ってきて」

第十七章 僕の好きな人（後書き）

ここまでお付き合いくださりありがとうございます。

投稿時間の20時にアクセスが増えているという事は、待ってくださってる方いるんだなあ・・・感動です。

第十八章 美夜子、そして藤崎統治（前書き）

こんばんわ。第十八章です。

第十八章 美夜子、そして藤崎統治

第十八章 美夜子、そして藤崎統治

かわいそうにおもった神様は、ある晩、おもちゃはこの、かつばさんのまえに現れていました。

「かつぱくん。なにかおねがいはありませんか」
かつぱさんは、いいました。

「なら、男の子が、つぎにぶたれそうなき、ぼくを、一回でいいからおおきくして、しゃべれるようにしてください」

つぎのひ、お父さんは、また男の子をぶとうとしました。

神様はやくそくどおり、かつぱさんをおとうさんくらいのおおきさにしてくれました。

かつぱさんは、はりきってお父さんのまえにたちました。

「おとうさん、かわりに、ぼくをいっぱいいたいてください。ふかふかだし、血も出ないし、けがもしませんよ」

「ひゃあ、おばけ！」

おとうさんは、怖がってにげだしました。

もとの大きさにもどったかつぱさんは、その晩ふつうごみにだされました。

かつぱさんは、なみだをひとつぶながしました。

「ごめんね」

かつぱさんは、お星様をみあげてつぶやきました。

「ぼくなにか、しっぱいしちゃったみたい。ぼくがもっとかしこければ、みんなうまくいったのに」

朝になり、かつぱさんはごみしゅうしゅうしやに連れて行かれました。

九城は、緊張の面持ちで、その建物を見あげた。

表札に彫りこまれた檉田の文字が、平日の陽光に照らされている。青い空に、頼りなさそうな雲が細く、切れ目を入れていた。

「こんな時間に、その娘はいるのか？ 平日だぞ」

背後で、丈の長いスカートに、エキゾチックな上着とアクセサリを身に着けているウルが言った。

手には、キャリーバッグの取っ手が握られている。

「…… たぶん。悪いなつきあわせて」

九城は、振り返った。

大分腫れの引いた左頬は、大判のシユマゲ・スカーフで隠れている。

「まったくだ」

ウルが、眉を寄せてから続けた。

「まあ、世話を掛けたから我慢するか」

九城が、珍しく訪れた熟睡から醒めたのは、昼過ぎだった。

携帯に、着信が残っていたのに気づく。

登録のない番号に、いくら緊張しながらコールバックすると、出たのはウルだった。

昨夜の礼と、お別れに電話を掛けてきたのだ。

すぐに、ピンと来た。

アラディン達の事が、気にかかったのだ。

これ幸いと、アラディンから預かり物をしていることを告げると、サイヤーラの手配した、大原野の宿泊先から九城が泊まっていた、四条のネットカフェまで取りにくるという。

少し考えた九城は、三条の駅で落ち合うことにした。

改札で向かい合ったウルに、少し躊躇した後、九城は頼み事をした。

久しぶりに、知り合いに会ったが、付いて来てくれないかと。
ウルは、怪訝な顔をして難色を示した。
当然だ。

大して知らない人間の知り合いに、腫れた顔で会えと？　ありえないだろう。

だが、九城は粘った。

いまから会いに行くのは、女子高生の知り合いで、一人で会う勇気が、どうしてもでない。

ウルは、更に警戒を強めた。

ジト眼で見られ、九城は一日会っただけの相手に、話したくない恥部を全部喋らなければならぬ羽目になった。

世界中を、貧乏旅行するバックパッカーは、皆ずうずうしい。

元貧乏旅行者の、九城の面の皮は、とりわけどこに出しても、恥ずかしいほどに厚い。

それを駆使してアメリカでは、タダで初対面の人間のフラットに三ヶ月間転がり込んでいたくらいだ。

改札の仕切りをはさんで、ぽつぽつと九城は経緯を語った。

最後まで黙って聞いていたウルは、一つため息をついて組んでいた腕をほどくと、改札を出てきてくれた。

「助かる。恩に着る」

九城は手を合わせて、直角に腰を曲げた。

「あなたの経歴は、昨日別れ際に、アラディンとサダムから少しだけ聞いた」

ウルは、怒ったように言った。

九城は黙って、頭を下げ続けた。

「私がこうするのは、昨日あなたには礼を尽くすよう、彼らに頼まれたからだ、バグダッドの英雄。しかし、ほぼ初対面の私にそんなことを頼むとは……あきれるな」

ウルは歩きながら、心底あきれたように言った。

「いや、今日中に済ませときたいんよ」

後を追ひ、弁解じみたことを口にする九城。

「それは、あなたの勝手だ……まったく……朝起こしに来てくれた、女の子を押し倒して撲殺するところだっただと？」

ウルは、九城が抱えている大きな傷を、こともなげに口にした。

九城は、消え入りそうな表情で、下を向いた。

「これだから、軍人つてやつは……そんなに怯えるくらいなら、最初から戦場なんかに行かなくやいいだろう。大体、日本人のあなたが、わざわざイラクまで、何を好き好んで」

「……まあ、色々あつたんよ」

俯いて答えながら、九城は心から、澀んだガスが抜けていくような、心地を味わっていた。

この褐色の美人は怒ってはいるが、引いたり、軽蔑をしている様子は無い。九城が自分でも口にできなかった傷を、まるで仕事のミスをした部下と一緒に、得意先に頭を下げるにいくかのような感覚で愚痴にしている。厳しさと、大らかさを同居させる、不思議な女だった。

九城が呼び鈴の前できょどっていると、後ろに数歩下がって控えているウルが、あきれたように言った。

「早く押したらどうだ。こんな中途半端な時間を選んだのも、留守だったらいいな、とか思つてのことだろう」

凶星をつかれ、九城は泣きたい気持ちで、インターホンを押した。心臓が、こんなにバクバク音を立てるなんて、何年ぶりだろう。

戦闘やら、喧嘩やら、試合やらさまざまな修羅場を潜ってきた鉄腸も、まったく役に立っていない。

結局、肝っ玉だなんだといったところで、それはそのことについての怖さを全く知らないか、又は、慣れているかどうかだけの事だと九城は思う。

何人かの女に、鬼馬鹿死ねといわれたことのある九城だが、この女の子相手には、まったく慣れていなかった。

インターホンの、ボツというノイズの後に。

「はい」

「なんでおんの!？」

ウルが小さく舌打ちした。

「違うだろうが」

「は? ……その声、九ちゃん!？」

「え……あ、の」

九城は、しどろもどろで直立不動を崩せず、インターホンの前で固まっていた。

再びボツという音がして、インターホンが切れた。

つかの間の静寂。

どう解釈してよいか、考えあぐねる間。

三〇秒待って、このままだったら帰ろう。ダッシュで。

既にウルのこと頭から消えて、脂汗を滝のように流しながら、斜め四十五度上をみていた九城だったが、玄関のドアが開く音がして、心臓を更に跳ね上がらせた。

出てきたのは、野暮ったい銀縁眼鏡をかけ、制服を着た小柄な少女だった。

一五〇センチにあるかないかの身長、白い肌、細い手足、制服がセーラーだったら、中学生にみまちがえたかもしれない。かわいい角のように、ゴムで二つに括った髪型が、さらにその印象を幼いものにしていた。

だが、眼鏡があまり似合わない可愛らしい少女は、今の九城にとってサーベルを啜えた往年の悪役プロレスラー、タイガー・ジェット・シンよりもプレッシャーを与える存在だった。

驚いたように、九城を見つめていた少女は、やおらすたすた歩いてくると、九城の目の前に俯いて立った。

九城が、口をパクパクさせていると……

「ぐわっ」

むこうずねを、思い切り蹴られた。

「いいてええ」

徐々に鮮明になってくる痛みに、ゆっくりと足を抱えて片足立ちになったところを、両手でどん、と突き飛ばされ、派手にしりもちを着いた。

「ばかつ！ 心配したんよ！」

げしっげしっ、とストンピングの嵐。

「あ、やめ、痛いし。パンツみえてるし」

ピンクと白の縞々から眼をそらしつつ、九城は弱々しく訴えた。

九城は、安堵で涙が出そうになった。心の中の氷の一部が溶けてゆく。

「連絡もよこさんし、兄ちゃんに聞いても、知らん、しか言わんし

……それから」

少女は小さな拳骨を、九城の頭に見舞った。

「あつっ」

「あの時、めっちゃ怖かったんやからね！」

今しかない！

九城はすばやく正座すると、秘奥義、ライティング土下座を敢行した。

ババアアアン

と言う擬音が、似合いそうなシチュエーション。

劇画なら、全裸で股間を強調しつつ、ハンサムなマッチョが登場しているところだ。

「すみません、ごめんな」

九城は、本気で謝った。

以前、三又がばれて、包丁が出てくる修羅場になったり、アメリカでストリートギャングに銃をつきつけられた時でさえ、平気ではつくれることの出来た男が。

「ちょ……やめてよ！ 近所の眼があるのに！」

美夜子の方がうるたえて、周りをわたわたと見回した。

づかづかと近づいてきたウルが、襟首をぶら下げるように引っ張

つて立たせた。

「……立てい！ みつともない。それでも男か」

「あほ！ 俺かて女に、こんなんした事ないわい！」

吊り下げられた、猫のようなポーズのままウルに喚く。

夕佳ねえ以外には、という言葉は飲み込む。

ウルはうむ、と頷いてから、徐に美夜子に両目を向ける。

「かなりうそ臭いが、まあ、よしとしよう……ミズ、でしゃばったまねを許して欲しい。最後まで、口出しをするつもりなどなかったのだが」

ぽかん、と見あげる美夜子の、眼鏡越しの眼をみつめたまま続ける。

「この男は、この男なりに苦しんでいたようだ。どうか話だけでも聞いてあげてもらえないだろうか？」

しばらく呆けたように、ウルの真摯な言葉を聴いていた美夜子だが、うなだれている九城に尋ねた。

「はあ……九ちゃん、この方は？」

「話すと長いんやけど……」

九城はいいよんだ。

「申し遅れました、ウルマといいます。先日、日本に来たばかりですが、成り行きで彼に、ここまでついて来た次第です」

美夜子は、まじまじとウルを見つめながら、首を傾げた。

「ナンパされるようなタイプには、見えないしな……アッサラームアレイクム。ハムツドリラー」

ウルは驚き、戸惑いながらも返答した。

「ワレイクム・ムッサラーム……驚いた、挨拶を知っているだけでも珍しい」

次の一言で、ウルは心臓を一撃されたような表情になった。

「まさか……あなたクルド人？ ペシユメルガじゃないでしょうね？」

「なっ！ ……」

美夜子の顔に、あからさまな警戒心が表れた。

「九城！　どういうことだ」

食って掛かってくるウルを、横目で見ながら、九城は苦虫を噛み潰した様子で、襟を整える。

「この少女は、何者なんだ！」

「とざ……カジワラの妹や」

雷に打たれたように固まるウルを見て、今度は美夜子が、険しい顔付きになった。

「カジワラ……やっぱり」

忌まわしい、十崎のイラクでの通り名に、美夜子は柳眉を逆立てた。

「兄に御用ですか？　言っときますけど、うちの兄を二度とイラクなんかに行かせませんよ？」

「冗談じゃない！」

ウルは、思わず大声をだした。

「私たちとて、二度と関わるのはごめんだ！」

美夜子は、一瞬にして表情を酸っぱくした。

「うちの兄が、なにかご迷惑を……かけたんでしょね、やっぱり急にしょんぼりして、小さい身体が、余計小さく見える美夜子の姿に、ウルは我に返った。

この子はアウルディーとは、かなり性格が違うようだ。

「あ……いや、こちらにも、落ち度は多々あるので、気にしないでください」

小鳥のように、上唇を尖らして俯く美夜子に、ウルは慌てていった。

「まあまあ、それはそれとして……」

九城は、門の内側にとめてある、昨晚七海が乗ってきた原付に気づいた。

「昨日、兄ちゃん来たんやな……会った？」

「うん……起きたら絶対電話ちょうだい、って言ったんやけど」

美夜子が、伏し目がちに呟いた。

「連絡つかんねん。だからぽんたくん、幼稚園にお迎えいかならんゆつて、早引けさせてもろてん」

「今日、来たんはそれもあつてな。このままやったら多分」

美夜子が、弾かれたように顔をあげた。

「あいつまた、おらへんようになるかもしれんから」

美夜子は蒼白になり、唇がわなないた。

九城は、安心させるように笑いかけた。

「そうならん様に、俺が来たんよ。ひよちゃんか、おれの携帯のどちらかに、連絡あるやる。もしもの時は、捕まえに行こう」

美夜子は力強く頷くと、二人を家の中に招き入れた。

どこことなく、懐かしい感じのする玄関と廊下を通つて、人の声が漏れてくる扉を開く。

明るい、八畳程のリビングは、おもちゃや落書きされた紙が、散らかり放題だった。

原色だらけの室内にいた、二人の住人が大声をあげた。

「みよねえちゃん、どこいつてたん……あれ？」

駆け寄つてきた、坊主頭の幼児が、美夜子の後ろに続く二人を見て、不思議そうな顔をした。

「……おう。ぽんた、俺のこと覚えてるか？」

九城が、緊張した顔で笑いかける。

「九ちゃあん！」

子供は、タレ目で鼻の低い典型的な日本人顔を、くしゃくしゃにして笑った。

「もー、どこいつてたんよ」

「おー、ひさしぶりやな、はっはっはっ」

九城は相好を崩すと、くりくりと男の子の、いがぐり頭をなでた。少し、離れたところにあるソファに手をつき、プラスチックのブロックを口に入れていた、よちよち歩きの幼児が、知らない人を見て泣き出した。

「あー、むんちゃんなかない、泣かない」

美夜子が、歩み寄って抱き上げると、しつかりとしがみついた。

「おっ、むんちゃん歩けるようになったんかい」

九城が嬉しそうに言つと、そーやー、とぼんたが自分のことのように言い、ウルに目を向けると、不思議そうに誰何した。

「……おねえちゃん、誰なん？」

ぼんやりしていたウルは、あわててひざまづくと、ぼんたに視線を合わせて、スカーフを口許までずらした。

「こんにちは。私の名前はウルです」

優しく笑いかける。

「なんで泥棒さんなん？」

スカーフ姿が原因だと思い当たり、ウルは思わず顎を逸らして笑つてしまった。

前に大笑いしたのは、一体いつだったろうか。

「そうだな、私は泥棒さんなんだよ。色も黒いしな」

「ぼん。ウルマさんは、九ちゃんのお友達やで。どろぼうさんやないよ」

美夜子が、むずかる赤ちゃんをあやしながら言つと、ぼんたはちよつとだけぽかんとし、

「なんや、うそついたらあかんやん」

照れたように、笑つて言つた。

ウルは、暫くぼんたの顔をみつめていた。

「そうだな」

ウルは、ぽつりと言つた

「嘘は……だめだよな」

ウル表情が涙で決壊した。

「すまなかつた。だから」

ウルは、ぼんたを抱きしめた。

「君は、私に嘘をつかないでくれるか……たとえ私のためでも」

ぽかんとした表情で、ぼんたは美夜子を見、美夜子は驚いた顔で

九城を見た。

なんとなく、ウルの言っていることがわかった九城は、美夜子に向かい、人差し指を唇に当てた。

そのとき、ウルのスすり泣く声をBGMにしたまま、九城の携帯が鳴った。

「……あいつや。まずいな、むんちゃんの泣き声とか聞こえたら、ここにおるのばれてまうわ」

九城は直ぐ戻ると言うと、急いで表へ出た。

「おう」

「九城、元気そうですね」

「ん……まあな。お前こそ、鼻っ柱どうよ？」

「あれは効きましたねえ。近年、あれほどダメージを受けた記憶はありません」

「……概論、言ったんかい？」

「退学願いは、郵送するつもりです」

「……そんなん、通るんか？ 手続きいろいろあるんやろ？」

「さあ。別に受理されても、されなくてもどっちでもいいですし」

「なんで、やめる必要があんねん？ 面白くなって来たとこやないか」

「……さすがに、あれだけの事すればね。忘れたんですか？ 僕はあなたを殺すところだったんですよ」

「んー……そう言ったらそやけど」

九城は笑って言った。

「おまえやから、赦したるわ」

「……頭、涌いてるんじゃないですか」

「お前に言われとないわ。前から言おう思ってたんだけど」

振り返って、玄関が開いてないことを確認する。ぽんたらの声が聞こえたら、一巻の終わりや。

「自分で勝手に結論出して、人と距離とるのやめえや」

「あなたに言われたくありません。イラクでの事……夕佳さんに、言うつもりですか？」

「……」

「必要あるんですか？」

「巻き込むのはちよつとな。人殺しやし、俺」

九城は、言つてしまつてから、激しく後悔した。

「まつたんです。特に楽しんで、人を殺すようなクズの妹や仲間になんてね」

電話の向こうで、十崎は虚ろに笑つた。

「わかつてもらえて嬉しいですよ、アミーゴ」

「美夜子ちゃん、悲しむで」

「鏡に向かつて、言えばどうです？」

九城は、イライラした気持ちを排気するように、ため息をついた。
「……わかつた。わからんでもない。おれもアメリカに行こ思つてるしな。一緒に行くか？」

「アジアの方が、性にあつてるんでね。といいながら、ロシアに行こうと思つてます。司馬遼太郎いうところの、最後の外国ですよ」

「ひよこちゃんには言わんのか？」

「とんでもない。今日発つつもりですし」

悪い予感が当たつた。

「おい。早すぎるやろ」

「早いほうがいいんです」

「見送りくらいさせろや」

「あと二時間弱で、ボーディングタイムだから無理ですね。九城、今まで楽しかったですよ。礼を言います」

「……ん」

「それでは、someday、somewhere（いつか、どこかで）」

「……チャオ」

九城は携帯を切ると、急いで部屋に戻つた。

「あかん、美夜子ちゃん空港いくで……俺では、力不足」

九城は、言葉を失つた。

他所行きを着た、ぽんたの手をウルが握っている。すっかり打ち解けたらしい。

睦美をだっこ紐で装着し、すっかり戦闘準備の整った美夜子は、眼に強い光を湛えて言った。

「いつでも」

「ひよこちゃん……出番やで。自分が最後の切り札や」

第十八章 美夜子、そして藤崎統治（後書き）

こんばんわ。いよいよ終盤。次回またまたクライマックス。美夜子のスフィングスゲームです。よろしくお付き合いください。

第十八章 美夜子、そして藤崎統治2（前書き）

第十八章です。美夜子のスフィングスゲーム、状況開始。

第十八章 美夜子、そして藤崎統治2

九城とウル、その膝ではしゃぐぼんた、美夜子の腕で眠るむんちゃんの、大所帯を乗せたタクシーが京都駅に着いたのは、オレンジ色の光があたりを染め始める頃だった。一万円札をぼん、と九城に渡すと、

「お釣り受け取つといて。二人をお願い」

という台詞を残し、美夜子は手ぶらで、構内に向けてダッシュした。……頼むで。あいつがおらんと、面白いからな」

美夜子から、そつと受け取った赤子をおっかなびつくり抱えたまま、九城が言った。

美夜子は、振り向かず片手を挙げると、人ごみの中を疾駆する主婦そのけの、経済観念を持つ美夜子が、三条から京都駅までタクシーを走らすほどに、事態は切迫していた。

出発の支度を整えている最中に届いた、血のつながらない兄からのメール。

『すまん。またいつか』

「バカッ！」

走りながら吐き捨てた。

なにかあつたらすぐ逃げる。

何が、ペシユメルガよ、誰かと生きてくのが怖いだけの臆病者。ただっ広い構内で、小さい体を精一杯走らせる。

汗が噴出す。息を荒くし、辺りを見渡す。列車の発射時刻を知らせる、電光掲示板に眼を走らせる。

大阪行きの新幹線。先回りするにはこれが最速だ。

噴出す汗を拭いながら、緑の窓口を目指す。

鋭く短い衝撃が、全身を襲う。

ちらり、と見慣れた後姿を、改札の向こうに見つけたのだ。

「お兄……」

迸りかけた気持ちを、慌てて飲み込む。

今の状況では、逃げられる。

どうしよう、どうしよう。

大型のバックパックを、片がけに担いでエスカレーターを上っていく十崎を見て、パニックになりかける。

十崎を凝視したまま、無意識に髪の毛を縛っていたぼつちを、ふたつとも雀り取る。

イライラしたときの癖だ。

切符だ。まず切符だ。

当たり前のことに、ようやく気が付く。

間に合う、きっと。

わかりにくい切符売り場に、全力でダッシュした。

心臓とわき腹を突き上げてくる痛みから、必死で意識をそらしながら、階段を駆け上がる。

いた。

色白の顔が、ぼんやりした表情で乗客の列に並んでいた。

構内に滑り込んできた、電車が起こす風で、黒髪があおられるのに任せる横顔。

戦闘準備だ。

美夜子は、急いでポケットから出した銀縁メガネを掛けると、髪の毛をいつも通りに括りなおした。

状況開始。

縦二列に並んだ乗客の、死刑場に連行されるような、鈍い足取り。それに合わせて、四角く口を開く急行に乗り込もうとする十崎に、美夜子は思いのたけをぶつけた。

「恥を知れ、極悪人！」

突如ホームに響いた絶叫に、ぎよつとして振り向いた十崎の額に、美夜子が投擲した物体が、ぱーんと着弾した。

兄が、どこかの大統領のように、フットワーク軽くかわさなかつ

たのは、美夜子にとって意外だった。

ピンクのストライプの入った、白いスニーカーが十崎の背後に、弧を描いて落ちる。

十崎は、息も荒く靴を投げた姿勢のまま睨みつけている、美夜子を呆然とした表情で見つめている。

ようよう搾り出した言葉は。

「……なんで」

様々な意味に取れる、そして実際、様々な意味がこもった一言。それを把握しながらも、全てを飛び越えて美夜子は言った。

「なんで？ 何年、妹やってる思てんのよ」

十崎は、後ろに並んでいる迷惑顔のサラリーマンに気付き、会釈してから列を離れた。

いまいましてに、美夜子の投げつけてきた靴を拾い、人気の少ないホームの端に歩を進める。美夜子はけんけんについてくる。十崎は彼女の足元に、スニーカーを放り投げた。

「あのメール何？」

向き合うなり、靴を突っかけながら美夜子が言った。

十崎は、無言で顔を逸らした。

ふてくされた表情に向かって、美夜子が詰め寄る。

「イラクから帰ったとき、約束したやんな？ 日本でおとなしゅうしてるって」

「お前が勝手にいったただけだろう。約束なんかしてない」

「起きたら、絶対連絡してって言ったのに」

「それも約束なんかしてない。てゆーか、メール送ったじゃん」

十崎は、体中から溜まった澱を排気するようなため息をつき、口調を少し改めていった。

「なあ、俺、籍を抜いて何年経つと思う？ いつか言わないとって思ってた……俺、他人だぞ」

美夜子は胸に、ナイフを突きたてられたかのような、表情を浮かべた。

「もう俺に……構うな」

とどめを刺す。美夜子と……

顔を逸らし、苦痛の表情を浮かべている、十崎自身に。

美夜子は嗚咽を漏らした。走ってきた熱気で曇った、銀縁眼鏡。

美夜子は、顔の大きさに合わないそれを外すと、袖で目元を拭いた。

「なんで……そんな言うんよ？」

眼鏡を持ったまま、子供のように両手で涙をぬぐい続ける。

美夜子は、兄を探して、クルドの地に行き着いた時の事を思い出した。

最初、完全に現地の人間に同化しつつあった十崎を、美夜子ですら見間違えた。尋ね人を見つけ出した安堵など一瞬で吹き飛んだ。吊り上がった、何の感情も映さない眼、まばらに生えた無精ひげに、完全武装の民族服姿。□元に彫りこまれてしまったかのような、皮肉な笑み。

兄は……

恐らくは本人が望んだとおり……最悪の事態に陥っていた。

目の前に、下痢と緊張でやつれきり、薄汚れたバックパッカー姿で現れた、自分の存在が信じられなかったのか、兄はたつぷり、一〇秒間凝視した後……

思い切り張り飛ばされた。

今まで十崎にはもちろん、両親にすら手を上げられた事はなかった。あつけなく地面に転がった美夜子は、驚きと痛みと、初めて見る、鬼のような兄の形相に震え上がりながらも、立ち上がった。

その時、闘志と使命感と共に、胸に宿った炎の色は今と同じだった。

……お兄ちゃんは相変わらず、過去の世界をうろろしてる。

樫田家に引き取られ、ついで、普通養子縁組してからも、何処へと去って行った実の父を探して、幾度も小さな家出を繰り返していた頃とかわってない。

彼の実母が、ガンで亡くなる前に作ってくれた、手作りの小さなリ

ユックに、これも幸せだった頃、実父が買ってくれた、河童のぬいぐるみだけを入れて。

ぼくが、もつと賢かったら。

兄の口癖だった。

身の回りで起こる、全ての不幸はおまえのせいだと、幼い頃に刷り込まれてしまった兄を……

ゴミ捨て場で、泣いているカップさんを。

絶対につれて帰る。

持てる武器、全てを使って。

ゴングだ。

「……私」

美夜子は眼をこすりながら、情けない声で、十崎に言葉のボディブローを打ち込んだ。

「私、お兄ちゃんしか頼れる人おらんのに、なんでそんなこと言うんよ」

俯いたままの表情を、イラつかせながら、何か言おうとする十崎の鼻を、次はジャブでくじく。

「おとうちゃんも、おかあちゃんも、仕事でいっつもおらんの知ってるやん。弟と妹寝かせつけんの、どれだけ大変かも知ってるやろ」

十崎は、黙り込んだ。

「友達と遊ぶ時間もろくにあらへんし。あの子らかわいいよ？ かわいいからなんとか我慢できんねん……けどな」

手を休めるな。

「私、友達に、なんて呼ばれてるか知ってる？　ぴよバアって。

おばはんくさい言うて、ぴよバアってあだな付けられてんねん」

言葉のダブル。

一瞬、十崎の動きが止まり、ゆっくりと、冷たい色を湛えた虹彩

が、美夜子を見据える。

かった。

小さいころ私がいじめられ、泣いて帰ってくるたびに、何も言わず、今と同じ眼をした兄が、すれ違いで出て行った。

やっぱり、お兄ちゃんはかわらない。

エウリュディケでもない、九ちゃんと会って以来、「冗談で名乗り始めた十崎でもない。彼の尊敬するという、ホラ吹き達を合体させた、ノビー・梶原なんていう、変な名前でもない。

彼の名前は、ふじさき とつじ藤崎統治。

苗字が変わろうと、私の命と同じくらい、大事なお兄ちゃんだ。美夜子はおも、眼を拭いながら、上目遣いで十崎を見る。

「勘違いせんといてな、仲良しの子らにやで……でもな時々、くるんよ。実際、ババくさいもん。ぽんたらの世話ばかりで、彼氏もおらんし」

「おまえに、その気がないだけだろ。男の誘い、断りまくってるって、お前の女友達がいつてたぞ」

ミスブロー。

……莉子のヤロウ。

次あったら、パンツにリコの携帯を突っ込んで、マナーモードでコールしてやる。喜ばれたらやだな。

「時間ないもん。無理やもん。ぽんたらの世話誰がするんよ」
軸を崩すな。生命線は、子供攻め。

「言っただろ？ おまえ一人、苦勞する必要はないんだって。夕方まで託児所に……」

ここだ。

顔を上げ、涙の雫を頬中に貼り付けたまま、まっすぐに十崎を睨んだ。

「預けんの？ 施設にいたときのお兄ちゃんみたいに、じっと入

り口を見つめて過ごさすの？」

十崎は、世界のひび割れをみつけたような、青い顔で美夜子を見

……

そして、今まで見つからなかった、パズルのピースを見つけた表情から、敗北感が漂うそれへの、グラデーション。

「小さいころの私みたいに」

美夜子は、涙を拭いながら思った。

なんて人の良い、お兄ちゃん。

性質の悪い女に、だまされたりしないか心配だ。

ほんとはぼんたに、『家に帰っても退屈だから、ずうつと幼稚園がいい』っていわれてるけど……

美夜子は兄の単純さと、資本主義社会を夢み、声を上げて泣いた。延長保育は、お値段が、お高くていらつしやいますのよ。

「だったら文句いうなよ！ 自分が望んで、やってるんだろぅが

！」

十崎が、感情を爆発させた。

来た、苦し紛れのラッシュ。

呆然とした顔を作り、美夜子は呟いた。

「そんなん言っん？」

我に帰った十崎は、臍を噛んだような表情。

もういっちょ。

「そんなん言っんの？」

十崎は、歯を食いしばって下を向き、踵を思い切りアスファルトに叩きつけた。

オッケーもう少し。

美夜子は心中、掌に拳を叩き付けた。

また泣き出す。鼻水も垂れるがまだ。

「何で怒んの？」

しゃくりあげるスピードが増す。

「お願いやから、ひどいこと言わんといてよ。

俺にかまうな、とか言わんというて。

他人とか言わんというて。そんなん、言われるくらいやつたら」

……喰らえ。

「まだ、ぶたれるほうがマシや。イラクのときみたいに」

十崎の全身から、力が抜けた。

十崎は、断末魔の様な吐息を吐くと、傍の柱にもたれ掛かった。リュックを落とさずに、静かに地面においたのは、最後の余力だろう。

美夜子は立っているのが精一杯、という表情の十崎に、恐る恐る近づき……

臨終間際のような、顔を見上げた。

「……俺に……どうしろってのさ」

「決まってる」

迷わず言った。

「毎朝起こして。そのために、お兄ちゃんのマンションに、固定電話つけたんやから」

二人が加入するキャリアの、固定電話から携帯への通話は無料だ。

十崎は、俯いたまま言った。

「……いつまで続けさすんだ、それ？」

「……来年決めよ？ 私の誕生日に」

十崎は暫くの沈黙の後、掠れた声で呟いた。

「好きにしろ」

美夜子は、ひまわりの様な笑顔を浮かべると、両手を広げて一気に十崎の胸に飛び込み、一方的にしがみついた。

「よろしい」

美夜子は至近距離から、レモン漬けの苦虫を噛み潰したような、十崎の顔を見上げて甘えたように言い、そして厳かに宣言した。

「君を第三期、おはよう大臣に任命する」

ちょうどその時、向かい側のホームで呆然とこちらを見ている、九城達を見つけた。ぽんたは、新幹線に夢中で、こっちに気付いていない。

いくつものホームが、線路をはさんで並列する景色の中で、九城の視線が美夜子のそれと合う。

実は美夜子の視力は悪くない。なんにもアクセサリーの類をくれない兄から分捕ったのが、いつも掛けてる、男よけの銀縁めがねでだけだ。

美夜子は兄に見えない角度で、九城たちに向かい、会心の笑顔でウィンクすると、いたずらっぽく舌を出した。

ぎゅっ、と衣類の匂いしかない、兄の胸に顔をこすりつける。

九城と、睦美を抱えたウルが、呆然とこちらを見て……

九城がゆつくりと首を振り、何かを呟いた。

すげえ。

唇の動きが、そう読み取れた。

後で聞いたところ、こええといったたのだが。

第十八章 美夜子、そして藤崎統治2（後書き）

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございます。
もう少しお付き合いくだされば、幸いです。

この物語を楽しみにして下さっている人たちが、いると信じてこ
までこれました。

次章、最終章です。

最終章 帰巢する狼たち（前書き）

最終章です。

最終章 帰巢する狼たち

九城が、気を利かせて借りたレンタカーの車内で、美夜子は兄の腕を抱えて離さなかった。

ゆつたりめのステーションワゴン（美夜子は頑なに、ライトバンと呼ぶ）を、九城が運転し、助手席の簡易チャイルドシートには、しゃぎ疲れて眠るぼんた、後部座席には、眠ったままのむんちゃんを抱えたウルと、美夜子と十崎。

あの後九城達は、改札口で意気揚々と凱旋してきた、美夜子に引っ張られる戦利品をお出迎えした。

「いよう、お帰りなさいませ、ご主人様」

「いい様だな、アウルデュー」

ニヤニヤ笑う、九城とウルの二人を見つけ、十崎はぎょつとした顔になった。

すぐに疲れた顔に、羞恥と威嚇の表情を浮かべたが……

「とおちゃん！」

ぼんたが笑顔で十崎に駆け寄り、足にしがみついた。

「まあ、これでおあいこやな」

十崎は、九城の二カツとした笑顔に栓を抜かれ、萎んだ風船のような表情で、顔を背けた。

扉にもたれ、寝息を立てている十崎を、美夜子はいとおしげに見つめていた。

疲れきった白い横顔に、まばらな無精ひげと黒髪が映え、別人のような怜悧さを纏っている。

色っぺえじゃねえか。チクショー、追っかけてきた甲斐があるってもんです。

人目がなければ、色々したい美夜子であった。

「人前で眠るなんか信じられへん」

ぽつりと呟く。

「……まったくやな」

運転席の、九城が同意する。

「そうやっていると、普通なんだがな」

美夜子を挟んで十崎を見ながら、ウルが赤子を抱いたまま、苦笑した。

「ごめんね、ウルマさん、すっかり迷惑かけちゃって……代わるよ」
美夜子が思い出したように、あわてて手を差し出した。

「いい。良いものをみせてもらった。溜飲も下がったしな」
眼を細めて笑い、赤子に眼をやる。

「それに、やはり子供はいい。救われる」
しばらく、微笑みを湛えて、ウルを見ていた美夜子は言った。

「ウルマさん、もう遅くなってもたけど、まだ時間ある？　夕食食べてって。ハラルは気にせんよね？」

ハラルとは、異教徒の作った料理に手をつけることを禁ずる、イスラムの戒律だ。

「いいのか？」

美夜子にはっこりと笑った。

「もちろん。人手は多いほうがええもん。わかるやろ？」

「馳走になる」

ウルは軽く頭を下げた。

「九ちゃんもよ？」

「おーありがてえ」

どこかで携帯が、鳴り出したのはその時だ。
「だれ？」

美夜子が問うと、二人とも首をふった。

「お兄ちゃんか」

眠っている、十崎のポケットに美夜子は手をつっ込んで、ひび割れた黒の携帯を取り出した。

二つ折りのそれを開く直前に、メロディはやんだ。

センターに、留守番電話ありの表示を見て、二秒考えてから、問い合わせのためコールする。

さっきまでの状況が状況だったので、プライバシーについては誰も咎めなかった。

「知り合いからか？」

九城が聞く。

「わからへん。留守電や……変な奴やったら許さん」

「……いや、変なやつしかおらんやろ、そいつの周り」

美夜子の次の台詞で、世界は動きを止めた。

「そこなんよ。お兄ちゃんて悪戯好きなクセに、お人よしやからすぐ騙されるやん？　しっかり私が見とかんかったら」

ウルはあまりの衝撃に、ゆっくりと見開いた眼を美夜子に向けた後、縋るように九城を見た。

「九城、彼女はジョークを言ってるんだよね？　それとも、私の日本語のスキルが落ちたのか？」

「ウル、ここは流すとかや。スルーやで、スルー」

ウルと九城の、小声での深刻なやり取りを聞きもせず、美夜子は平坦なアナウンスに眉を顰めた。

「九時二〇分て……大分前やな。今頃センターから届いたんか」

しばらく怪訝な顔で、耳を澄ませていた美夜子だが、携帯からウルのところにまで聞こえてくる絶叫に、顔をしかめた。

「どうした」

ウルが気遣わしげに美夜子を見やり、九城もルームミラー越しに眼を向ける。

だが当の美夜子は、苦笑を浮かべていた。

「お兄ちゃんの被害者。心配あらへん」

「……ああ、なつみんか」

「なるほど、織河か」

二人も苦笑を浮かべた。

うんうん、と電話の向こうの叫び声に、同情を込めて頷いていた美夜子だったが、

だんだん、不審な顔つきになり、最後には。

……。

「ひよこちゃん」

九城が、緊張した声で言った。

「……顔こわいんやけど」

「どうしたんだ、美夜子」

ウルの間いにも、下の牙をむきだしたような形相の美夜子は、答えなかった。

「おかしいおもたんよ……只の後輩が、わざわざ訪ねてくるなんて、ようよう低く搾り出した、掠れ声。

「……ライバルがおらんのだけが、とりえやったのに」

九城は事態を悟った。賽は投げられたのだ。

「……ちよつと、イベント、立て続けすぎるやろ」

九城は、口の中でぼやいた。

「……なにを言っている？」

「ウル」

九城が、ジェスチャーで沈黙を強いた。

美夜子は、携帯を険しい顔で操作し、大きく深呼吸した。程なく。

「留守電か」

呟く。

緊張した沈黙の中……

ぴーっ

「あ、織河さんですかあ？」

突然、明るい声でしゃべりだした美夜子に、ウルはぎょっとした様だが、九城は予測していたのか、表情を変えなかった。

「昨日はどうも、お手数かけましたあ。原付はもどってきましたから、心配しないでくださいねー。ほんとに、うちのバカ兄が、ご迷

惑をお掛けしまして、申し訳ありません。また、逃亡しようとしてたんで、捕まえに行ってたんですよ。今、横で眠ってまーす。全く携帯は割れてるし、顔は傷だらけやし何してたんやら……」

妙に、肩のあたりに緊張感をみなぎらせている、九城の後姿を見つめたまま、続ける。

「ほんとに……イラクに迎えにいったときも、そうだったんですよ。寝顔はかわいいんやけど。あの時も、逃がさへんように一緒の布団で寝たなあ。なんや、この口許の煤。唾ついたらとれるか？ ん……」

ちうつ

「よし、とれた。九ちゃん、帰ったら、私が兄ちゃん風呂に入れるわ。あ、ごめんなさーい。織河さん、ご迷惑お掛けしました。早いうち、学校に復帰させますから、よろしくお願いしまーす。それじゃー」

プチッ

ツー、ツー。

……。

ソ連にあったという……立っているだけで、足元から腐っていく、極寒の刑務所並みの冷気が支配する車内で、美夜子は再び強く十崎の腕を抱きしめた。

「冗談やない」

頑なにあさつての方向を向き、脂汗を流す、運転中の九城とウルを気にも留めず、美夜子はむすつと呟く。

「だれの統ちゃんや、おもてんのよ」

「よし、と……」

論文をやつと書き終えた黒田は、デスクトップの電源を落とすと、ちらほら残っている学生に声を掛け、研究室を出た。

大分陽が長くなったものの、繁華街のネオンが輝き始めるこの時

間になると、廊下の窓からは、夕闇が見えるだけだ。

まっすぐ下宿に帰ってもつまらんし、談話室で、茶でも飲んで帰るか。

運がよければ、誰かいるかもしれない。

黒田は、微かな期待をしながら、スチール製のドアを開けた。残念ながら、灯りは消えていた。

「……？」

暗闇から聞こえる耳障りな音に、黒田は眉を顰めた。

ごりごりっ

窓から差し込む、わずかな灯りに照らされる室内を見た黒田は、身も心もフリーズした。

いた。

人がいた。

仄暗く浮かび上がる七海の後姿。パイプ椅子に腰掛けた背中から、立ち上るとす黒いオーラを、黒田は肉眼で捉えた。

運がよければ、誰かいるかもしれない。

さっきそう思った自分を、ぶん殴ってやりたかった。

水族館のイルカショーを覗いてみたら、客が誰もいなかった……のに、運悪く司会のピエロと目があってしまい、帰るに帰れなくなつた。

その思い出の、一〇倍は気まずい。

今日のかに座は、不幸ゲーシ満タンです。

「黒田さあん」

間延びしてゆくせに、異様な迫力を秘めた、七海のものとは思えない……七海の声。

「……こっち見ないで、なんでわかった？」

七海は取り合わず、続けた。

「まあ聞いてくださいよ」

七海はぜんまい仕掛けのように立ち上がり、自分の携帯をスピーカーに繋いだ。

緊迫した静寂の後、スピーカーがしゃべり始めた……

黒田の弔辞を。

「一件の留守番電話を、お預かりしています……ぴーっ……あ、織河さんですかあ？ 昨日はどうも、お手数かけましたあ。原付はもどってきましたから、心配しないでくださいねー」

緊張で汗を浮かべながら、怪訝な顔をしていた黒田だが……次の一言で電話の主がわかってしまいぎよつとした。

「また、逃亡しようとしてたんで捕まえに言っただけですよ。今横で眠ってまーす」

「……十崎の！」

「……この口許の煤とれへんな。唾つけたらとれるか？」

「あ」

聞いてはいけない！

頭の中を、最大音量でサイレンが鳴り響いたが、遅かった。

ちうっ

「よし、とれた。九ちゃん、帰ったら私が兄ちゃん風呂に入れるわ。あ、ごめんなさーい。織河さん、ご迷惑お掛けしました。早いうち、学校に復帰させますから、よろしくお願いしまーす、それじゃ」

……

黒田はショックで全身が痺れ、ずるずるとへたり込んだ。

消される。

十崎にこれを聞いたことが知れたら、間違いなく生きてられない。妹の住所を教えた事が、どうのこうのと言っていた、あの頃がうらやましすぎる。

「おかしいと思ったんですよ」

ごりりっ

いつの間にか、目の前で七海が仁王立ちしていた。

おそろおそろ見上げると、片目を前髪でかくした能面が、黒田を冷たく見下ろしていた。

「私が訪ねていった時の、テンパリ方が尋常じゃなかったですもん。

付いてくるっていうのを、諦めさすのがどれだけ大変だったか」

黒田は、七海の顔から目が離せなかった。

七海から、折に触れ感じていた違和感の正体を、たった今理解した。

そして、状況にも関わらず、どこかほっとしている自分を、発見した。

やっぱり、あった裏の顔。

「さすがは腹黒京都女。あれだけあざとく当て付けられたら……いくら仏の私でも……ね」

ごりごりごり……ぱきっ

七海は、上の犬歯を剥き出した形相で、声を絞り出した。

「あのブラコンがッ！……格と立場と、色気の違いつて奴を、きっちり見せ付けたろうじゃないですか」

……色気？

だが、突っ込む気など、微塵も起きない。

目の前で、七海の拳からパラパラと降ってくるプラスチックの欠片が、黒田にまだ、最悪の状況は加速し続けている事を、教えてくれた。

黒田は向きを変えると、四つんばいのまま逃げ出した。

扉から、辛くも脱出——する寸前、襟首を捉えられる。

「無関係だ！ おれは関係ない！」

悲鳴を上げる黒田は、蛇に飲み込まれる獲物のように、ずるずるとドアに食べられていった。

「そこでね、黒田さん。今朝の動画に、私への告白っぽい部分があるんですよ」

「アーアー、聞こえない聞こえない！」

「それだけでも、インパクト十分なんですけど、その程度では、気がすみません。むこうからケンカを売ってくれたんだし、折角だからデスクリ精神で、ちょちよいと音声加工を……黒田さん、十崎さんに声が似てますよね」

「似てねえよ！？ カスってもいねえだろう！」

「大丈夫……黒田さんは、出来る子」

「離せー！」

完全に黒田を飲み込み、ボタンと閉まったドアの向こうから、七海の確信に満ちた声が聞こえた。

「私、信じてる」

最終章 帰巢する狼たち（後書き）

ここまでお付き合い下さり、本当にありがとうございます。
次回、最終回。最後のクライマックスです。

最終章 帰巢する狼たち2（前書き）

ここまでお付き合い下さりありがとうございます。

最終章 帰巢する狼たち2

物部は壁にもたれ、傾いた陽光が差し込む事務所を眺めた。素っ気無いガラスのテーブルにソファ、スチールデスクの置かれた八畳ほどの空間。

机の上には、安っぽい造花の挿された、花瓶が飾つてある。幸が車を全損させた次の日に置いたもので、あれから二日経っている。背後の壁を隔てて修理工場があり、その前には小学校の第二グラウンドほどの土地が広がっていた。カーキヤリアや、廃車やパーツが雑多に点在しているその奥には、死んだ両親が、趣味で耕していた小さな畑がある。

何故、大して儲かりもせず、気苦労ばかりが多いこの修理工場を、売り払わないのか、自分でも分からない。大原野の田舎とはいえ、これだけの土地を売り払えば、まとまった金になるだろう。それに実際のところ、金には全く困っていない。

中東での盗難車の密輸など、非合法な『車屋』として稼いだ金で、十分に食っていける。

物部は、それについて考えるのをやめた。

一昨年、総理の馬鹿息子が運転する、車の前に死体を投げ込んだ。轢き殺してしまつたと勘違いし、パニックを起こす彼を、あくまで偶然通りかかった物部は宥め、死体と車、一切の処理を引き受けた。現政権が続く限り、このカードは多分、有効だろう。

この自動車工場から、公道までの約五〇メートルは、車が一台通れるほどの私道で繋がっており、その入り口には、物部が経営するアパートがある。そこに住んでいるのは、雑多な国籍の傭兵達だ。京都は外国人だらけなので、学生というには年を食った異国の男たちが、集まって住んでいても、なんら人目を引かない。

依頼の遂行の補助と、公安や警察が雪崩れ込んできた時のために

雇っているのだが、実際のところ当てにはしてない。別に自分は死んだら死んだで、かまわないと思っているが、牢屋暮らしはごめんだ。傭兵たちには、自分と敵が派手に逝く手伝いだけを望んでいる。事務所の入り口に影が差し、物部は思考を中断した。むすつとした顔で、幸が立っている。

麦わら帽子を被って、タオルを首に巻き、軍手を佩いている。その間の抜けた格好も、彼女の愛らしさを、さらに引き立てる小道具にしかならなかった。

幸がここに居ついて以来、すっかり荒れ果てていた畑が蘇った。もともと、そういう事が好きなのだろう。

泥だらけのスニーカーを、ごしごしと泥除けマットにこすり付けながら、幸は物部の言葉を待った。

物部は無言で顎をしゃくった。幸も無言のまま、

事務所内に歩を進め、物部の向かい側にある壁際の、スチールデスクのそばに立った。性分なのか、それほど散らかっていない机の整頓を始める。

物部は、それを眺めながら口を開いた。

「この前言ったな。テストだ」

花瓶を手に取った、幸の手が一瞬止まる。

「これで〇点なら、復讐を諦めて、ここから出て行け」

「テストの内容は？」

机の方を向いたまま問う幸の横顔は、肩までの艶やかな髪に隠れて見えない。

「俺が相手だ。飛び道具以外の武器なら、なんでもいい」

その言葉が終わらないうちに、幸は慣れた所作で、背中 of 皮製ホルダーから催涙スプレーを抜き、二人の中間辺りに投げ捨てた。

彼我の距離は、およそ三メートル。

二人のちょうど真ん中に、テーブルとソファがある。

幸は花瓶を置き、整頓を再開する。表情は見えない。

「で、どこでやるの」

「ここで、今……」

最後まで、言えなかった。

安っぽい紙のファイルが、視界を塞ぐように飛来し、それを払うと、紙に穴を開ける鉄製のパンチが、眼前に迫っていた。目を眇め、前に出る。額を掠めたそれを無視し、一步前へ。

そう意図した物部の顔面へ、水がぶっ掛けられた。

花瓶の水だ。物部は意地悪く笑うと、さらにもう一步、ソファの上に土足で乗った。

花瓶に仕込まれていた、胡椒入りの水は只の水にすり替えておいた。

「仕込が甘いんだよ、クソガキ」

掌を振りかぶる。殺すつもりはないが、ブチのめす。

二度と、荒事に関わりたくなくなるだろう。

その顔面に、何かが吹き付けられた。

タイムラグ無しに、顔面を激痛が襲う。

「ぐっ」

胡椒水を飛ばす安物じゃない、ガス入りの催涙スプレーだ。

もう一本、隠していやがったか。

「読みが甘いんだよ、オッサン」

無表情な声が、物部の耳朵を打つ。

顔を覆い、体勢を崩して、ソファから降りる。

頭部を、容赦ない衝撃が襲った。

恐らく、鞄を被せたままの匕首だ。

立て続けの乱打に、たまらず膝を折る。

背後に気配が回った。尖った先端が延髄に押し付けられたのは、次の瞬間だ。からんからん、と音がした。

投げ捨てられた、鞄だろう。

「私は飛び道具を使わないなんて、条件は飲んでない。町道場のチャンバラじゃないからな」

興奮を抑えるように、幸が肩で息をしながら言った。白い陶磁の

ような右頬に赤い線が浮かんでいる。

「上出来だ」

物部は、眼と鼻を襲う、灼熱の激痛を堪えて言った。先に水を掛けられていなければ、こんなものでは済まなかったろう。

幸の緊張した顔に、笑顔が浮かぶ。

次の瞬間、凍りついた。

「ここからが本番だ。俺を刺せ」

「なっ……」

「手足が一本二五点、ただし使い物にならないようにしたらだ。

そして心臓か首、延髄でもいい。俺を殺せば、一〇〇点やろう」

「し、死んじまったら誰が禿デバラすの、手伝ってくれんだよ！

！」

上擦った幸の声にも、物部は冷静だった。

まるで、以前から用意していたかのように。

「入り口に住んでる傭兵どもだ。いいか、よく聞け」

首に当てられた刃先がガクガク震えて、皮膚が破れ、血が流れ始めたのにも関わらず物部は続ける。全霊を傾け、苦悶の声を押し殺しながら。

「俺を殺したら、すぐにその内線でタクマを呼べ。死体はマスードの所で始末するよう依頼してある。お前を犯そうとし、タイに売り飛ばしたのは、上海エンタープライズの李 昇平だ」

初めて聞く事実に、幸の呼吸が止まり、ガタガタと震えだす。

「どこかの、黒社会に繋がっているんだろうが、ロバート達には、何のプレッシャーにもならない。何か、お気に入りのドラマでも見つける。次の週、その続きを見る頃には、お前の言う禿デブは、廃車の中でミンチになっている。お前が、自分の手で殺ると言い張らなければ、とつくに終わっていた事なんだ。俺が死んだら、弁護士がロバートに報酬を渡す様、段取りしてある」

「あ、あ、あ、う、」

幸が、言葉にならない呻き声をもらす。

物部は、懷から財布を取り出し、床に放った。

「お前は、俺を殺したらここを離れる。俺の後頭部に、四桁の数字が彫りこまれている。近くでよく見れば分かる。髪は剃るなよ、傭兵達に気付かれたら、お前が危ないかもしれん。そこから、俺の誕生日を引け。キャッシュカードの暗証番号だ。三千万はある。施設が嫌なら、それで何とかしろ」

「なんで、そこまでしてくれるんだよ!? ガキが、私が嫌いなんだろう!？」

幸が、金切り声を上げた。

「普通に生きて欲しい。お前の祖母から、一千万で受けた依頼だ」
「なにそれ!? 初めて聞くぞ!？」

「初めて言うからな。車屋の任務遂行率は、一〇〇%だ……殺れ」
幸は、暫く蒼白な顔で震えていたが、涙声でポツリと言った。

「……あんたそればかりだな。利益度外視で、任務任務って。それしかないのかよ?」

物部は、唐突に先ほどの自問自答の答えを手に入れた。

「そうだ。それしかない」

働いていれば考える時間が減る。

自分に殺されなくて済む。

理想に燃えてタイに渡り、現実と自分に心をバラバラに碎かれ、堕ちる所まで堕ちた、血塗れの自分に、向き合わないで済む。

物部が一番恐れているのは、自分自身だった。

遠くで、カラスの鳴き声が聞こえた。

鏡の様な匕首の刀身が、差し込む夕日を反射している。

「……わかった」

幸は、消え入りそうな声で呟いた。

物部は、首筋から圧迫感が消えたのを感じた。

頭から、何かを掛けられた。

水だ。

薄目を開けると、埃だらけの薬缶が横に置かれた。冬、ストーブ

に掛けるものだ。

幸が事前に準備していたのだろう……自分の敵の為に。

頭のあちこちが、ずきずきするのを堪え、物部が立ち上がり振
り向くと、幸は拾った鞘に、ヒ首を収めているところだった。

幸は顔をしきりに擦りながら、奥にあるガラスの引き戸に手を掛
けた。その先は隣接する物部の自宅だ。幸もその内の一部屋を使っ
ている。

「つまりアンタは、私に普通の暮らして奴をさせたいんだな――
仕事として」

「そうだ」

幸が振り向いた。激情に顔を歪めて。

「私が一番そうしたいんだよ！　好きでこんなになったわけじゃね
ー！　ホントは……」

幸は、両手で顔を覆った。

「ホントは……やりたい事がいっぱいある……普通に生きたいから、
あの禿を殺したいんじゃないか」

銀色の雫が、薄汚れたアスファルトに、点々と染みをつくる。

「だけど……曲がりなりにも世話になったアンタを刺したら、私は
あいつら以下だ。とつつあん、思い切り殴ってごめんな」

幸は、唇をへの字にしたまま顔を上げ、深々と頭を下げた。

「私はあいつを殺って、自分を取り戻してみせる……お世話になり
ました」

「お前には無理だ。頭は切れるし、思い切りもいいが甘すぎる。人
間どころか虫だって殺せねえよ」

物部は、薬缶の水で目を洗いながら言った。床は水浸しだ。
「わかってる」

幸は背中を向けて、再び引き戸に手を掛けた。

「ホントは電柱を蹴るのだって、ヤなんだ。でもなんとかする」

「諦めろ。無理なんだよ。この俺を引っくり返したところまでは褒
めてやるが、せいぜい五点しかやれねえな」

幸が振り向き、叫んだ。

「うるせえ、えらっそうに！ やってみなきゃわかんないだろ……
って」

幸の表情が、呆然としたそれに変わった。

「今、五点って言ったか？」

物部は答えず、痛みの残る眼で、壁掛け時計を見上げた。

「とつつあん、確か〇点なら、出てけっていったよな？」

「次のテストだ。もうすぐ五時…… お前が全損させた車の持ち主から、電話が架かってくる。半端なく、うるさい年寄りだ。運よく二日ほど不在で時間を稼げたが、今朝電話をしたら、新しい帽子の上に座られた女みたいに激怒していた——ほら」

電話がチカチカ光り、すぐに電子音を吐き出した。

まだ戸惑っている幸に、物部が宣告する。

「裏の仕事では、お前は大きく役に立たん。が」

幸がはっとした表情になった。

「表ではどうだ？ うまくまとめて見せろ」

「ちょ、突然すぎるだろ！」

そういいながら、じたばたする、幸の顔には赤みが差し、生気が戻っていた。

突然、動きをとめ、幸は自分の前腕にかぶりついて目を閉じる。

「おい」

急かそうとした物部を、もう片方の手で押しとどめた。

眉間に皺をきざみ、集中している間もコール音は、債権者のノックのように響き続ける。

幸は二、三回リズムを取るように頷くと、子機に飛びついた。

「はい、物部オートサービスです……物部オートサービスです。はい」

突然代わった声色に、物部は顔を顰めた。

鈴の鳴るような声とは、このようなものを言うのだろう。

一体どこから出てくるのか、さっきの金切り声とはえらい違いだ。

「物部ですか？ 今作業中ですが、どのような……あつ」

口許を押さえた幸の眼に、見る見る涙が盛り上がる。

「あの可愛らしい軽の……ごめんなさい！ 私が、ごめんなさい、私が余計な事したから」

蹲って子機ごと口許を覆い、ぼろぼろと泣く姿に、物部は軽く呆れた。

「ホントに……ホントにあの緑色のコには、ひどいことしちゃって……私どうしていいかわからない……」

遠い昔、演劇に携わっていた物部だから分かるのだが、うつとうしく感じられない程度の、絶妙な音量で泣き続けた後、幸は涙を拭って続けた。

「ごめんなさい。ここ、叔父一人しかないから……はい、姪の幸といえます。叔父が一人しかないから、お手伝いに来たんです。やめておけって言われたのに、私が大丈夫だからって言い張って……あんまり可愛らしい車だったから、乗ってみたかったのもあって……ギアを入れ間違えて……私……バカ」

さめざめと泣く幸を、物部はジト眼で見ながら思った。

なるほど、演技力には脱帽だ。俺が通話相手でも騙されただろう。だが。

ドアミラーを蹴り折った、あのサイドキックを俺は忘れない。

「ええ……今、叔父が、ほとんど徹夜で直してますが、塗装との兼ね合いもあって」

深刻な声で、送話口に向かって話しながら、机に歩み寄った幸の手がペンを握った。

「はい……はい」

ゆっくりとした口調とは裏腹に、高速で右手を走らすと、メモを物部に向かって突き出した。

「何日いる？ サバなしで」

物部は、慌てて掌に二本指を当てた。

「はい……土日もちろん掛かりつきりで作業するとして……一〇

日位は」

バカヤロウ、欲張り過ぎだ！

物部は叫んだ。口パクで。

難しい顔をしていた、幸の表情がぱあっと明るくなった。

「本当ですか？　ありがとうございます！　はい！　勿論です、代車はお好きな車を選んで下さい！　ガソリン代は、こちらで負担します」

「なんだと！？　」

物部は異を唱えた。だが勿論、幸には聞こえなかった。

鼻をぐずらせ、口許を押さえると、泣き笑いの表情になった。

「ごめんなさい。安心したらまた……優しい方でよかった。私のせいで、禄に眠ってない叔父を見ると、私も眠れなくなつて……うれしい、二週間も頂けるなら、叔父も今日くらいは眠らせてあげられるから。私も今日は眠れそう……いえ、そんな、全部、私が悪いのに……有難うございます。あの、お礼にお伺いしたいんですが、お住まいはどちらの方……わあ、近いんですね。……いいえ、歩いて参ります。いえ、あの私、実は」

幸は赤い顔をして、恥ずかしそうに舌を出した。

「自転車に、乗れないんです」

物部は自宅に、初めて幸を連れて来た時の事を思い出した。

『おお、でつけえ敷地だな！？　金持ちなのかよ、ム力つくぜオイ？　お、このママチャリもーらい……・うおりゃあああああ！　ヒヤッハー、久々に、好きなだけ滑り込みやつてみたかったんだよ、な、ダートとか作るうぜ、絶対楽しいって！』

「……MTBはねえのかよ、幸さまの、華麗な曲乗りを見せて」
にこやかに話し続ける幸が、こちらに向けているメモに気付いた。
『三日にちぢめるか？　あ？』

背筋も凍る脅迫に、物部は音声付の回想を、強制終了した。

「はい、ではお待ちしております」

幸はゆつくりと子機の通話を切り、大きく息を付いた。

完全に引いている物部に向かって、胸を張ると、幸は高らかに言った。

「どうだ！ 私はヤクで死んだバカ女に、歌って踊ってベシヤリができるよう、スパルタ教育されて来たんだ。これぐらいわけねー！」
天逝した有名芸能人の母を持つ、今は幸と呼ばれる少女は、全身で宣言した。

アイム・ヒアと。

暫く静寂が続き……

物部は首を振り振り、事務所の出口へ向かった。

「おい、とつつあん、もち、合格だよな？」

慌てて、不安そうに訊ねる幸に、物部は背を向けたまま言った。

「電話番号としては、俺より遥かに上だな……それは認めてやろう」

「おっさん……」

幸は眉根を寄せ、何かを堪える様に、唇を引き結んだ。

「あんた……客に、何言われても、はいはい言ってるだけで、ネゴ能力、ゼロじゃねえか、声小さすぎるし。褒められても、全然……」

「毎朝、山道を五キロ走らされる、全寮制の学校があつたな……」

「嬉しい気持ちでいっぱいだよ、初めてだしな、合格点もらつたの。とつつあん、負けるが勝ちを、地で行ってるって専らの噂だぜ？」

見習わなきゃな、うん」

表情を変えぬまま、見事な言葉のツイストを踊る幸。

物部はガラス越しの夕焼けに、眼を細めながら言った。

「復讐を、やめろとは言わん……が、しばらくは、事務所で接客してろ」

幸は、雲間から太陽が差し込んできたような笑顔を浮かべ、勢い込んで言った。

「う、うんっ！ じゃなかった……はいっ！」

「で、何時に来るんだ？」

「三〇分後。代車選びに来るって。自転車乗れないなら、助手席に乗せてやる、婆さんが喜ぶから、ご飯を食べに来いってさ。いい人

だな」

物部は、ため息をついた。

「とつつあん……徹夜明けにしちゃ顔色良すぎだ。メイクしてやる
つか？」

「アホか」

至極真剣な、幸の顔に向かい物部は吐き捨てると、事務所を出た。

その数時間後。

九城は、京都駅のホームにいた。

妙に、頭がすつきりしている。

顔の表情はこわばりきつて動かないが、心は穏やかだった。

人気の無い待合室の椅子に腰掛け、何時間か前に使用した、携帯
電話の待ちつけ画面を、ぼんやりと眺めていた。

舌を出して、ピースサインをしている夕佳の笑顔。

京都を発つ前に、夕佳が勝手に設定したものだ。

ちょうど京大で入学式があった日、島根県の教育委員会に就職す
る彼女を、このホームで見送った。

幼馴染で、姉代わりだった彼女に、その日イラクでの事を打ち明
けて、二度と会わないつもりだった。

その勇気が出なかった、自分にキスをしてくれた夕佳。

長く続いた姉と弟ごっこから、初めて一歩踏み出した瞬間だった。
泣き笑いで、電車から手を振る彼女を、見送ったその日からの……

問題の先送りを、今日で終わらした。

列車が滑り込んできた。

電源を切ると、それを畳み……

バッグに放り込んだ。

この携帯に、夕佳から電話がかかってくる事はもうない。

円筒印章を届けに、アメリカに渡る九城の脳裏を、昨日呟いた言
葉がよぎる。

『俺達、死ぬまでこんなんか』

いや、十崎は違う。

十崎をどこまでも追っかけてくるのは、可愛い妹で、俺から離れないのは……

傍らのバックパックに眼を向け、苦笑する。

九城はザックの中の、ホッケーマスクに語りかけた。

コワレは俺一人で十分や。

そうやろ、相棒？

でも、世界で一番大切な人間と、さよなら出来たんや。

お前とも、縁切り出来るわ、きつと。

夜風が、昨日よりずっと暖かい。

九城は立ち上がると、新大阪国際空港行きの、特急に向かって……
新しい季節に向かって歩き出した。

最終章 帰巢する狼たち2（後書き）

エピソードは20時に投稿します。

エピソード（前書き）

ここまでお付き合い下さり本当にありがとうございました！

エピソード

ビニール紐で閉じてある古びた画用紙の薄い束。

お星様を、ゴミ捨て場から見つめる、カップの絵がクレヨンで描かれている。

後年、打消し線が引かれた文章。

朝になり、かつばさんはごみしゅうしゅうしゃに連れて行かれま
した。

ここからが私の好きな物語。ピンチの場面で、救世主が現れるよ
うな胸のすく展開。

私は、画用紙をめくって微笑んだ。

そこにはお母さんと手を繋いだ女の子が、捨てられたカップを見
つめている絵。

それが描かれた画用紙は比較的新しく、絵も文字も、ずっと上手
になっている。

そう、樫田家に引き取られて、暫くしてから、兄が書き足したの
だ。

「お母さん、このカップさん捨てられてるの？」

「そうよ」

「それなら、おうちにもって帰る。私のお友達にする」

「そうしましょう。肩のところで、首のところを、けがしてるわ」

「かわいそう。おかあさん、なおしてあげて」

「はいはい」

かつばさんは、おひとよしの親子に拾われました。

そこに描かれている女の子は、私が小さい頃お気に入りだった、
赤のジャンパースカートをはいっている。髪型は、虫さんの触角みた

いな二つ括り。

今の、私と同じだ。

だから私は子供っぽいやら、炉利殺しなんていう、ありがたくな
い二つ名を付けられても、この髪型を止めない。

兄に、かっぱさんの持ち主を忘れさせない為に。

この続きもあるけれど、私はいつもここで表紙に戻る。

そこにはカッパの絵とタイトル。

『はみ出したかっぱさん 二年三組 ふじさきとうじ』

私は、クレヨンが剥がれない程度に、そっと表紙を撫でた。

兄が中学にあがる頃、かっぱのぬいぐるみといっしょに、ゴミ箱
に突っ込んであったのを、母がそっと回収しておいたのだ。

父が、施設の人から聞いた話では、兄はことのほかぬいぐるみを
大事にしており、痛めつけるなんて、ありえないと言っていた。

実際、今日の前で太平楽な顔をしているぬいぐるみは、古びては
いるものの、全く傷んでいない。

あの晩このぬいぐるみを、織河さんに渡したのは大博打だった。

今まで隠していたそれを見せることで、兄に大きな衝撃をもたら
すのはわかっていたが、その結果がどちらに転ぶかはわからなかつ
た。

兄に、電話が繋がった時、叫んだ言葉。

『お兄ちゃん、かっぱさんを本当にはみ出さす気?』

その後、何を言ったかは無我夢中だったので、よく覚えていない。
ただ、兄から、

『……わかった』

の一言を引つ張り出した後、安堵でへたり込んだ。

兄は私との約束を、破ったことがない。

不器用で優しく、すぐ私に騙される兄。

人生は悲しみに満ちている。

がんばっても、がんばっても、思い通りにいかない事でいっぱい
だ。

だけど私達は、名前も知らない、神様が奏でる運命の輪舞曲に合わせ、せいっぱい踊り続ける。

いつか、ステージを降りるとき、手を繋いでいるのが、愛する人である事を願いつつ。

「ただいま」

リビングの入り口に、買い物袋を提げた新しい居候が現れた。

私はソファから立ち上がり、兄の作品を、子供達の手の届かないところに仕舞った。

「お帰り。二人とも寝てる。ほんまもう一人おったらぜんぜん違うわ」

「よく今まで、一人で持ったものだな」

ウルは笑った。ここで寝泊りするようになって、一週間になる。しばらく、今後の予定はないというので、空いている部屋を使ってもらっている。家事と、子守の手伝いが条件で、ぽんたとむんちゃんは大喜びだ。

「しかし、ずいぶん買い込んだな。鍋でもするのか？」

よいしょと、生協さんのエコバッグを、テーブルの上に載せるウル。

「九ちゃんと、お兄ちゃんがくるからね。今夜は特別」

私は、テーブルの上の、古びたエコバッグを覗き込んだ。中には普段より多い量の食材、そして最近一個増えたプリン。

今日は更に、二個多い。

私は大事な人たちが、自分の懷に帰って来た幸せを噛み締め、初めて会った時より、ずっと優しい目になった同居人に目を戻す。

「九ちゃんの帰国祝いと、失業祝い。会社やめたんやて」

私は、飛びっきりの笑顔で言った。

エピソード（後書き）

ここまでお付き合い下さり、感謝に堪えません。述べるヶ月にわたる物語を無事、完結する事ができました。僕はまだ、一度も読者の方から、ご感想を頂いた事がありません。この物語は、いかがだったでしょうか。コメントをいただけたら本当にうれしいです。それでは、ありがとうございました！

y o u k a n より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2104r/>

スフィンクスゲーム～クルディスタンから来たニート～

2011年3月27日07時18分発行